

魔法少女リリカルなのは ピカチュウ列伝

高町 優希

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

リリカルなのはの世界に迷い込んだピカチュウ。

どんな物語を見せてくれるのだろうか？

目次

2 2話	2 1話	2 0話	1 9話	1 8話	1 7話	1 6話	1 5話	1 4話	1 3話	1 2話	A S 編	第 1 1話	第 1 0話	第 9話	第 8話	第 7話	第 6話	第 5話	第 4話	第 3話	第 2話	第 1話
164	155	140	132	125	121	114	102	94	87	78		71	64	60	50	44	34	29	22	12	6	1

外伝05	外伝04	外伝03	外伝02	外伝01	外伝	39話	38話	37話	36話	35話	アフター	34話	33話	32話	31話	30話	29話	28話	27話	26話	ストライカーズ編	25話	24話	23話
444	431	421	416	408		391	378	367	348	341		331	324	312	302	275	255	244	234	225		195	183	172

第一話	647
アナザー12	
第8話	633
第7話	626
第6話	618
第5話	610
第4話	599
第3話	593
第2話	584
第1話	577
アナザー1	
外伝18	569
外伝17	558
外伝16	550
外伝15	539
外伝14	531
外伝13	523
外伝12	513
外伝As	
外伝11	508
外伝10	496
外伝09	487
外伝08	479
外伝07	467
外伝06	457

第七話	821
第六話	814
第五話	808
第四話	801
第三話	795
第二話	789
第一話	778
アナザー4	
第五話	772
第四話	756
第三話	749
第二話	740
第一話	731
アナザー3	
第十二話	723
第十一話	716
第十話	710
第九話	705
第八話	696
第七話	690
第六話	682
第五話	675
第四話	666
第三話	660
第二話	654

第六話	998	リターンズ2	第九話	836
第五話	990		第八話	828
第四話	982		第七話	920
第三話	977		第六話	914
第二話	970		第五話	901
第一話	962		第四話	895
			第三話	884
			第二話	871
			第一話	864
			リターンズ	
			第十二話	858
			第十一話	851
			第十話	844
			第九話	836
			第八話	828

第八話	第七話	第六話	第五話	第四話	第三話	第二話	第一話	リターンズ4	第九話	第八話	第七話	第六話	第五話	第四話	第三話	第二話	第一話	リターンズ3	第九話	第八話	第七話
1179	1173	1164	1156	1148	1141	1134	1122		1115	1106	1092	1082	1075	1065	1054	1046	1036		1027	1017	1008

第1話

ピカチュウ「ピカ〜!？」

ある日、何処かの廃倉庫で一匹のピカチュウが泣いた。

ピカチュウ「ピカ!?ピカピカチュウ!？」

辺りを見回しているが現状はわからなかった。

ピカチュウ「ピカ!」

とりあえずピカチュウは辺りを探索することにした。

ピカチュウ「ピカ!」ガチャ

ピカチュウはドアに飛び付き開けた。すると…

アリサ「なっ!？」

すずか「な、なに!？」

なのは「ほえ!？」

ピカチュウ「ピ?ピ、ピカチュウ!」

ピカチュウは手を上げて挨拶してみた。

なのは達「可愛い／＼／＼じゃなくて!」

ピカチュウ「ピカ〜?」

ピカチュウは縛られてる女の子達を見て…

ピカチュウ「ピカチュウ!」カリカリ

縛られてるなのは達のロープを噛み始めた。

アリサ「助けてくれるの?」

ピカチュウ「ピカ!」カリカリカリカリ!

ブチ!

ピカチュウ「ピツカ!」

ロープを噛みちぎった。

すずか「あ、ありがとう」

ピカチュウ「ピツピカチュウ!」

なのは「君は…何?」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

なのは達「ピカチュウ?」

ピカチュウ「ピカ♪」

ピカチュウは嬉しそうに頷いた。

アリサ「とにかく逃げましょう」

ピカチュウ「ピカ？」

すずか「えつと…ついて来てくれる？」

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ！」

ピカチュウは頷くとちよこちよこについて来た。

アリサ「まさか誘拐されるとは思わなかったわね」

すずか「でもされなかったのも不思議だよ」

アリサ「それもそうね」

ピカチュウ「ピカ〜？」

アリサ「アンタは気にしなくていいのよ」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

すずか「でもどうやってにげ…」

ガチャ

誘拐犯「な!?!ガキ共がにげるぞ！」

一人の誘拐犯が叫ぶと何人もの誘拐犯が部屋になだれ込んで来た。

アリサ「逃げるわよ！」

なのは達が走り出すとピカチュウも走り出した。

誘拐犯「あの奇妙な生き物も捕まえるんだ！高く売れるぞ！」

アリサ「アンタも早く来なさい！」

ピカチュウ「ピカ？ピツカ！」

ピカチュウは立ち止まり誘拐犯達に向きなおすと…

ピカチュウ「ピカ…チュウ…!!」

誘拐犯達「ぎゃく!!」

電撃を誘拐犯達に浴びせた。

ピカチュウ「ピツピカチュウ！」

ピカチュウは勝利の雄叫び？というより鳴いた。

なのは「凄い…」

アリサ「今のうちよ！」

麻痺してる誘拐犯を見捨ててなのは達は倉庫を逃げ出した。

すずか「アリサちゃん！この子はどうするの!？」

アリサ「そうね…アンタ、人形のふりしなさい」

ピカチュウ「ピカ!?ピカ!」ビシッ

ピカチュウはジツとして人形のふりをして動かなかった。

アリサ「とりあえず近くに交番がないか探すわよ!」

なのは達は人に聞きながら交番を探し保護してもらった。

第2話

鮫島「お嬢様！」

忍「すずか!？」

恭也「なのは！」

しばらくして鮫島が車で忍と恭也を連れてやってきた。

忍「良かった無事で」

なのは達は無事に家族と会えて事情聴取を済ませて帰宅することになった。

忍「所でアリサちゃん?その人形は?」

アリサ「え、えつと…」

忍「可愛いわね」

帰宅途中の車の中で忍がピカチュウの尻尾を触ると…

ピカチュウ「ピカ!?チュウ！」

ピカチュウが暴れ出した。

アリサ「あ、こら!動いちやダメよ！」

アリサはピカチュウを抑え込んだ。

忍「す、すずか!?今動いたわよね!」

すずか「えつと…」

恭也「なのは?」

なのは「その…」

アリサ「実は…」

なのは達は廃倉庫でピカチュウと出逢い、助けられた事と何者かというのはわからない事を伝えた。

忍「とりあえず害は無さそうだけど…どうしましょうか?」

アリサ「アンタはどこから来たの?」

ピカチュウ「ピカ?ピカピカピカチュウ」

すずか「ごめんね、何を言ってるかわからないの」

ピカチュウ「チャ…」

なのは「あ!落ち込まないで!」

ピカチュウの耳が垂れるとなのはが励ました。

忍「とりあえず何て呼んだらいいのかしら?」

なのは達「うん…」

ピカチュウ「ピカチュウ」

なのは「ピカチュウって泣くからピカチュウでいいと思うの」

アリサ「安直すぎない？」

ピカチュウ「ピカ♪ピカチュウ♪」

すずか「でも喜んでるよ」

アリサ「ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ♪」

呼ばれたピカチュウは嬉しそうにしていた。

すずか「こんなに喜んでるし、いいんじゃないかな？」

アリサ「それもそうね」

ピカチュウ「チャ〜♪」

アリサが頭を撫でるとピカチュウは嬉しそうにした。

忍「さて問題は…」

すずか「問題？」

忍「この子をどうするかね」

すずか「はい！家で飼いたい！」

忍「猫がいるでしょ？」

なのは「はい！なのはが飼うの！」

恭也「家は喫茶店だぞ？」

アリサ「ふふん♪なら必然的にアタシの家ね♪」

ピカチュウ「ピカ？」

アリサ「いいかしら？ピカチュウ？ピカチュウは今日からアタシの家で暮らすの。わかった？」

ピカチュウ「ピカ？ピッピカチュウ！」

ピカチュウは頷いてわかったと伝えた。

忍「知能が高いようね。意思の疎通が出来るみたいだし」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

こうしてピカチュウはアリサの家で暮らす事になった。

デビット「…ふむ。飼ってもいいだろう」

アリサ「ありがとう、パパ！」

なのは達を送ったアリサ達は邸に帰るとデビットにピカチュウに助けられた事と家でしか飼えない事を伝えて許可を貰った。

デビット「アリサの恩獣？だな、断る理由もないしな」

アリサ「良かったわねピカチュウ♪」

ピカチュウ「ピカ♪ピカチュウ♪」

ピカチュウは感謝の意を表して手を上げて鳴いた。

デビット「アリサ、ピカチュウは生き物だ。ちゃんと面倒を見てやるんだぞ？」

アリサ「わかってるわ、パパ」

アリサはしっかりと頷いた。

鮫島「さあ、お嬢様。今日はお疲れでしょうお部屋で休んでください」

アリサ「そうね。おやすみなさい、パパ、鮫島」

デビット「ああ、おやすみ」

鮫島「おやすみなさいませ、お嬢様」

アリサはピカチュウを連れて自分の部屋に一度戻り、ピカチュウを待たせてお風呂に入ると部屋に戻った。

ピカチュウ「ピカ♪」

アリサ「いい子にしてた？」

アリサはピカチュウの頭をしゃがんで撫でた。

アリサ「じゃあ寝ましようか」

ピカチュウ「ピカ？ピカピ！」

アリサがベットに入るとピカチュウは近くに置かれた大きいバスケットにくるまり：

アリサ「ピカチュウ、おやすみ」

ピカチュウ「ピカ〜」

お互い眠った。

第3話

アリサ「ん？ん？!!朝…ね？何かしら？」

次の日の朝、アリサが起きると足下に重さを感じた。

ピカチュウ「ピカ〜…ピ〜…」

アリサ「いつのまに…」

ピカチュウはアリサの足下で丸まっており、幸せそうに寝ていた。

アリサ「仕方ないわね。ピカチュウ、起きなさい」

ピカチュウ「ピカ？チャ〜…ピカ！」

ピカチュウは目をさますと伸びをした。

アリサ「おはよう、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ！ピカチュウ♪」

アリサ「着替えるからちよつと待ってなさい」

アリサは制服に着替えると食堂にピカチュウと一緒に向かった。

鮫島「おはようございます、お嬢様」

アリサ「おはよう、鮫島」

ピカチュウ「ピカ！」

鮫島「ピカチュウもおはようございます」

アリサ「いらっしやいピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウはアリサの膝元に乗ってきた。

アリサ「あ、ピカチュウって何を食べるのかしら？」

鮫島「申し訳ありません。そこまで気がまわりませんでした」

アリサ「といって何も食べさせない訳にもいかないし…」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウは手を伸ばし何かを取ろうとしていた。

アリサ「何を…これ？」

アリサがテーブルの真ん中に置かれたリングを取るとピカチュウに近付けた。

ピカチュウ「ピカ♪」

ピカチュウは嬉しそうにしてリングを受け取るとアリサを見上げた。

アリサ「ん？ああ、いいわよ。食べなさい」

ピカチュウ「ピカピ♪」シヤリシヤリ

ピカチュウがリンゴを食べ始めるのを見てからアリスも食事を食べ始めた。

ピカチュウ「ピくかく!!」

アリス「だから!ピカチュウを学校には連れていけないの!」

ピカチュウ「ピカく!!ピカく!!」

ピカチュウはアリスの脚にしがみつき駄々をこねていた。

アリス「ね?いい子だから大人しく待ってて。ね?」

ピカチュウ「ピカく…ピカ!」

ピカチュウはやつと納得するとアリスから離れた。

アリス「すぐに帰ってくるわね?」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

ピカチュウは元気にアリスを見送った。

昼休み

アリス「ってなことがあって遅れたのよ」

なのは「いいなく。可愛かったんだろうなく」

アリサ「萌えるわよ」

すずか「見たかったなく」

アリサ「学校終わったら見にくる?」

なのは、すずか「行く!」

アリサ「なら決まりね」

放課後の集まりが決まった。

アリサ「ただいま」

そして放課後、アリサが邸に戻り挨拶すると…

ピカチュウ「ピカ〜!!」

ピカチュウがアリサの胸に飛び込んで来た。

アリサ「ただいま、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ♪」

アリサ「いい子にしてた?」

ピカチュウ「ピカピカ♪」

鮫島「大人しくしてましたよ」

アリサ「そう♪なら部屋に行くわよ」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

降ろされたピカチュウはアリサの後ろを追いかけた。

ピンポーン

鮫島「はい、いらっしやいませ」

なのは、すずか「こんにちは♪」

鮫島「さあどうぞ。お嬢様がお待ちです」

アリサからなのは達が来ることを伝えられていた鮫島はなのは達をアリサの部屋まで連れて行った。

コンコン

鮫島「お嬢様、お友達がいらっしやいました」

ガチャ

アリサ「いらっしやい」

鮫島「でわ」

鮫島は離れていき…

アリサ「さあ、どうぞ」

アリサはなのは達を部屋に入れた。

なのは「あれ？アリサちゃん？ピカチュウは？」

アリサ「あそこよ。ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ？」

バスケットの中からピカチュウが出てきた。

すずか「可愛い／＼／」

アリサ「ピカチュウ、挨拶は？」

ピカチュウ「ピカ？ピッピカチュウ！」

なのは「スゴイ!?アリサちゃんの言うこと聞いてる！」

アリサ「どういう意味よ」

すずか「おいで♪」

ピカチュウ「チャ♪」

すずか「柔らかくい♪」

ピカチュウ「チャ♪」

ピカチュウはくすぐったそうにしていた。

なのは「すずかちゃんだけズルいの！ピカチュウおいで♪」

ピカチュウ「ピカ？ピカピ！」

ピカチュウはすずかから離れてなのはに抱きついた。

なのは「ハア♪抱き心地いいの♪」

アリサ「ふん！何よ、デレデレしちゃって」

ピカチュウ「ピカ？ピカピ♪」

アリサがふてくされるとピカチュウはなのはから離れてアリサの足にすりよった。

なのは「むく…アリサちゃんに凄いなついてるの…」

アリサ「ふふん！当然よ♪」

さつきまでの不機嫌はどこへやら、一転アリサは自慢気になった。

ピカチュウ「ピカ…」クウ

アリサ「お腹空いたの？」

ピカチュウ「チャ…」

アリサ「ちよつと待ってなさい。…あ、もしも鮫島？悪いんだけど
どリングを幾つか持ってきてもらえる？」

アリサは内線で鮫島に連絡を取りリンゴを持ってきてもらえるように頼んだ。

アリサ「少しだけ待つてなさい」

ピカチュウ「ピカ〜…」

コンコン

鮫島「お嬢様、リンゴをお持ちしました」

ガチャ

アリサ「ありがとうございます」

鮫島「では失礼します」

鮫島が下がるとアリサは籠からリンゴを取りだしピカチュウに差し出した。

ピカチュウ「ピツカ♪」シャリシャリ

ピカチュウはリンゴを貰うと小さな手で持ち美味しそうに食べていた。

ピカチュウ「ピカ♪」

ピカチュウはリンゴを食べきるとご機嫌になった。

すずか「癒されるね…」

なのは「アリサちゃんだけズルいの…」

アリサ「ふふん♪ピカチュウ？美味しかった？」

ピカチュウ「ピツピカチュウ♪」

手を上げて満足度を現した。

アリサ「外に行きましようか。少しピカチュウを外で遊ばせましょ」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

アリサ達は外に行き鬼ごっこや、かくれんぼをしてピカチュウと一緒に楽しんだ。

ピカチュウ「ピカピく♪」

アリサの邸に来て数日、ピカチュウはアリサがお風呂に入っている間夜空を眺めていた。

キラッ!!

ピカチュウ「ピカピ!?!」

夜空に流れ星が幾つも降り注いだ。

ピカチュウ「ピカく♪」

アリサ「ピカチュウ？どうしたの？」

ピカチュウ「ピカ！ピカピカピ！」

身振り手振りですピカチュウはアリサに伝えた。

アリサ「うくん…流れ星が落ちてきた？」

ピカチュウ「ピカ♪」

アリサも慣れてきたのかピカチュウの言いたい事がわかるようになった。

アリサ「さあ寝ましょうか」

ピカチュウ「ピカ♪」

ピカチュウはバスケットに入って…

アリサ「おやすみ」

ピカチュウ「ピカ…」

お互い眠った。

第4話

ピカチュウ「ピカピク」

そして次の日の夜、また流れ星が見れないかと外を眺めているピカチュウだった。すると…

ユーノ『誰か!? 誰か助けてください!』

ピカチュウ「ピカピ!」

急に頭に響いた声に驚きピカチュウは辺りを見回した。

ピカチュウ「ピカ〜?」

ユーノ『危険がせまっています!』

ピカチュウ「ピカ!」

アリサ「ピカチュウ? どうしたのよ、さつきから」

ピカチュウ「ピカ! ピカピカ! ピカチュウ!」

アリサ「何を言いたい…外に行きたいの?」

ピカチュウ「ピカ!」

アリサ「ダメよ! もう外は暗いのよ」

ピカチュウ「ピカ! ピカチュウ!」

アリサに却下されてもピカチュウは食い下がらなかった。

ピカチュウ「ピカ〜…ピカピ！」

アリサ「あ！こら！ピカチュウ！戻りなさい！」

ピカチュウは助けを求めた声に答える為外に走り出した。アリサの声を無視して。

ピカチュウ「ピカピカピカ！」

ピカチュウは自分の勘で声が響いてくる方角を目指した。

ズトン！

ピカチュウ「ピカピ！」

ピカチュウは目の前の壁が崩れ落ちたので急停止した。すると崩れた場所から一匹のフェレットが出てきた。

ピカチュウ「ピカ！」

ユーノ「原生生物!?ここは危ない！逃げるんだ！」

ピカチュウ「ピカ!?ピカピカ！」

ピカチュウは声の主を見つけたと同時にここは危険と判断して…

ピカチュウ「ピカ！」

ユーノ「うわ!?ちよつと！」

ピカチュウはユーノの首根っこをくわえるとその場を逃げ出した。

ピカチュウ「……」

ピカチュウは得体の知れないものからユーノを引き離そうと街を走り抜けた。

ユーノ「助けて…くれてる?」

ピカチュウ「ピカ!?ピカ!」

ドンドンドン!

ピカチュウは化け物から打ち出された攻撃を巧みに避けた。すると…

なのは「キャツ!?えっ!?ピカチュウ!?」

ピカチュウ「ピカピカ!ピカチュウ!」

ピカチュウはなのはにこの場から離れるように伝えようとしたが上手く伝わらなかった。

ユーノ「もしかして僕の声聞いて来てくれたんですか!」

なのは「その声!フェレットが喋った!」

ユーノ「お願いします!貴女の力を貸してください!」

なのは「ふえ!」

ピカチュウ「ピカ!ピカチュウ!」

ピカチュウが鳴くと化け物が迫って来た。

なのは「何あれ!」

ユーノ「いけない!逃げないと!!」

その発言になのはは無意識に走り出しピカチュウもユーノをくわえなおして走り出した。

なのは「フレットさん!どうすればいいの!」

ユーノ「少しだけ時間があれば…」

ピカチュウ「ピカ!?ピカく…ピカ!ピカチュウ!」

ピカチュウは停止するとユーノを下ろした。

ユーノ「どうしたんだい!」

ピカチュウ「ピカ!ピカチュウ!」

ピカチュウは胸を叩き任せろとばかりに鳴いた。

なのは「ピカチュウ!?何をする気なの!」

ユーノ「まさか…時間を稼いでくれる気なのかい!」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

ピカチュウは頷いて答えた。

なのは「そんな!?危ないよ!」

ピカチュウ「ピカチュウ!ピカピカ!」

ピカチュウは首を振り、なのは達に背を向けた。

ユーノ「わかった:すぐに終わらせるから少しだけ頑張つて!」

なのは「フエレットさん!」

ユーノ「今はこうするしかないんです!お願いします!!この子を助ける為にも力を貸してください!」

なのは「:わかったの」

ピカチュウ「ピカ!」

なのはの返事を聞いたピカチュウは化け物に向かっていった。

ピカチュウ「ピカピカピカピカ!ピカチュウ!」

ピカチュウは化け物に近づくと辺りを駆け回り化け物を錯乱させては:

ピカチュウ「チュウ!」バリバリ!

電撃を放ち、時間を稼いでいた。

ピカチュウ「ピカ…ピカ…」

ピカチュウの体力が限界を向かえそうになった所…

なのは「リリカルマジカル！ジュエルシード封印！」

ピカチュウの背後から砲撃が放たれ化け物を封印した。

なのは「ふう…」

ピカチュウ「チャ…」

なのはとピカチュウはその場でへたりこんだ。

ユーノ「大丈夫かい!？」

ピカチュウ「ピカ！」

ピカチュウは大丈夫と言いたげに鳴いた。

なのは「ピカチュウ、アリサちゃんは？」

ピカチュウ「ピカ!？」

ピカチュウはあわただしくなった。

なのは「もしかして抜け出して来たの!？」

ピカチュウ「ピカ…」

ピカチュウは力なく頷いた。

なのは「アリスちゃん、心配してるよ?」

ピカチュウ「ピカ〜!?ピカチュウ〜!!」

ピカチュウは急いで邸に戻りだした。

なのは「行っちゃったの…」

なのはとユーノは置いてきぼりになった。

第5話

ピカチュウ「ピカ〜…」

邸に戻ったピカチュウは門の所で邸の中をうかがった。

ピカチュウ「ピカ〜…」

ピカチュウは玄関に向かいドアを開けて中に入ると…

アリサ「おかえり…ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ!？」

先程の化け物が可愛く見えるほどの怒ってますオーラを出したアリサが待ち受けていた。

アリサ「さて、どこに行ってたのか、何をしてたのかゆっくり聞かせてもらおうよ！」

ピカチュウ「チャ〜…」

こうしてピカチュウの第二の戦いが始まった。

ピカチュウ「ピカピカ!ピカチュウ!ピカピ!ピカチュウ!ピカピカピカピカチュウ！」

アリサの部屋に戻ったピカチュウはありのままの事を身振り手振りで伝えた。

アリサ「フェレットが化け物に襲われててそれを助けて逃げていた
らなのはに会い化け物を相手に戦ってなのはがトドメをさして倒
したと」

ピカチュウ「ピカチュウ!!」

ピカチュウは頷いた。しかしアリサのピカチュウの伝えたい事が
伝わるのが不思議であった。

アリサ「嘘じゃないでしょうね?」

ピカチュウ「ピカ!?ピカチュウく!!」

ピカチュウは信じてとばかりに鳴いた。

アリサ「わかったわ。明日なのはに確認するわよ?いいわね?」

ピカチュウ「ピカ!」

アリサ「それはいいとして。ピカチュウ?お風呂に入るわよ」

ピカチュウ「ピカ?ピカチュウ」

ピカチュウは自分が汚れてるのがわかり素直にアリサの言うこと
を聞いてアリサと一緒に入った。

アリサ「なのは、ちよつといい?」

なのは「アリサちゃん?」

次の日、アリサはなのはに昨日の事を聞くべく、なのはの席にやって来た。

アリサ「ここじゃなんだし外に行きましょう」

なのは「う、うん」

なのははアリサについていった。

アリサ「なのは、単刀直入に聞くわよ？昨日…」

アリサは昨日の夜の事をたずねた。

なのは「な、なんのことかな…わ、わからないな」

アリサ「なのは、嘘が下手ね」

なのは「な、なのは嘘ついてないよ？」

アリサ「そう？ならアタシはピカチュウに嘘をついた事と昨日抜け出したお仕置きをしなければいけないわね…」

なのは「そ、それは…」

アリサ「きつと泣くでしょうね…ピカチュウ」

なのは「うう…アリサちゃん…秘密にしてくれる？」

アリサの遠回しな攻撃になのはは観念して全てを語った。

アリサ「やっぱりピカチュウが正しかったのね。全くなのはも水く

さいわよ！そんな大変そうな事を話さないなんて…ねえ？すずか？」

なのはが「ふえ!？」

すずか「あ！バレちゃった」

アリサ「さつきから髪が見えてたわよ…」

なのは「うう…なのはの秘密が筒抜けなの…」

アリサ「嘘が下手な自分を呪いなさい」

なのは「うう…」

アリサ「とにかく私も手伝うわよ」

すずか「私も手伝うよ」

なのは「でも危ないよ!？」

アリサ「なのはに出来てアタシに出来ない理由はないわ」

なのは「何か酷い言われようなの!」

アリサ「事実でしょ?」

なのは「酷い…」

こうしてなのは達もジュエルシード探しを手伝う事になった。

アリサ「ただいま〜」

ピカチュウ「ピカチュウ〜!!」

アリサが学校を終えて邸に戻るとピカチュウの熱烈な迎えがきた。

アリサ「ただいま、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカピカ？」

アリサ「ん？あゝ大丈夫よ。ピカチュウの言った通りだったわ」

ピカチュウ「チャ〜♪」

ピカチュウは頭を撫でられて喜び、自分の事を信じてもらった事を喜んだ。

アリサ「ピカチュウ、散歩に行く？」

ピカチュウ「ピカ！」

アリサ「ちよつと待ってなさい。着替えてくるから」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウは頷いてアリサを待った。

第6話

ピカチュウ「ピカ♪ピカ♪ピカチュウ♪」

アリサ「ご機嫌ね♪」

アリサは人通りの少ない道を選んで散歩をしていた。

ピリリリ

アリサ「はい、もしもし？すずか？今？ピカチュウと散歩してるけど？」

ピカチュウ「ピカ？」

アリサ「ええ…いいわよ。じゃあ公園で会いましょう」

ピカチュウ「ピカピ？」

アリサ「ん？すずかからよ。公園で会いましょうって」

ピカチュウ「ピカ♪」

ピカチュウは公園に向けて進み始めた。

アリサ「ほら、ゆっくり行くわよ」

アリサとピカチュウはすずかの待つ公園に向かった。

アリサ「すずかは…いたいた。すずか」

すずか「アリサちゃん♪ピカチュウも♪」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

アリサ「それで呼び出してどうしたのよ？」

すずか「ピカチュウと一緒に遊びたかったの♪」

アリサ「

だそうよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

すずか「ほら♪」

すずかは小さなフリスビーを取り出した。

アリサ「犬じゃないんだから」

ピカチュウ「ピカ？」

すずか「いい？これを取ってくるんだよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

すずか「いくよ？それ〜!!」

ピカチュウ「ピカピカ♪」

すずかがフリスビーを投げるとピカチュウは走って取りに向かっ

た。

アリサ「意外と気に入ったみたいね」

ピカチュウ「ピフア〜♪」

ピカチュウはフリスビーをくわえて走って来て、すずかの足下に來ると手でフリスビーを持ち差し出した。

アリサ「今度はアタシよ♪ほら♪」

ピカチュウ「ピカピ♪」

ピカチュウは再び走り出した。

すずか「楽しんでるね♪」

ピカチュウ「ピフア〜♪」

再びピカチュウはフリスビーをくわえて戻って來た。

アリサ「偉い偉い♪よく出來たわね♪」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

すずか「あく!!私も撫でる〜!!」

ピカチュウがアリサに撫でられて喜び、すずかにも撫でられて喜んだ。

ピカチュウ「ピカ♪」

そして別の日ピカチュウが邸を探検していると…

ピカチュウ「ピカ♪？」

ピンクの布に包まれたもの見つけた。

ピカチュウ「ピカ♪…ピカ！」

ピカチュウは結び目をくわえて鮫島のもとに向かった。自分の記憶が確かならこれはアリサの物のはずと。

ピカチュウ「……ピファ？ピファ！」

鮫島「ん？ピカチュウ？どうしました？」

ピカチュウ「ピファ…ピカ！」

ピカチュウはピンクの包みを差し出した。

鮫島「これはお嬢様のお弁当…忘れて行かれてしまったのですね」

ピカチュウ「ピカピ？」

鮫島「困りましたね。私も今は手が離せませんし…」

ピカチュウ「ピカ！ピカピ！」

するとピカチュウは手を上げて何かを伝え始めた。

鮫島「ふむ、ピカチュウが持つていくと？」

ピカチュウ「ピカ！」

鮫島「それはダメです」

ピカチュウ「ピカ!?」

ピカチュウは何故!?と言いたそうだった。

ピカチュウ「ピカ〜…ピカ!ピカチュウー!」

鮫島「あ!ピカチュウ、待ちなさい!!」

ピカチュウはピンクの包みをくわえて外に走り出した。ここにピカチュウ冒険が始まった。

ピカチュウ「ピファ!ピファピファ!」

ピカチュウは犬のようにアリサの匂いをたどって学校を目指した。

ピカチュウ「ピファ〜♪」

そして時間をかけてピカチュウはアリサのいる学校にたどり着いた。

ピカチュウ「ピファ〜…」

ここにきてある問題がおきた。アリサの匂いが辿れなくなってしまった。他の人の匂いが多すぎた。

ピカチュウ「ピファ！」

ピカチュウはドアの隙間から教室を覗きアリスが居るか確認し始めた。

ピカチュウ「ピファ〜」

幾つもの教室を覗きこんだ結果…

ピカチュウ「ピファ！ピファ〜♪」

アリスを見つけると教室に飛び込んだ。

アリス「え!?!ピカチュウ!?!」

なのは、すずか「ピカチュウ!?!」

ピカチュウ「ピファ〜♪」

アリス「何をくわえて…アタシのお弁当!?!」

ピカチュウ「ピカ！」

ピカチュウは頷いて答えた。

アリス「わざわざ持ってきたの!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

アリス「ありがとう♪」

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

先生「バニングスさん…」

アリサ「あ…」

先生「ペットを学校に連れてくるのは関心しませんね」

アリサ「す、すみません」

ピカチュウ「ピカ？ピカ…」

ピカチュウは先生に謝ってるアリサを見て自分のせいで怒られると分かると…

ピカチュウ「ピカ…チュウ」

机の上に乗るピカチュウも頭を下げた。

先生「え!？」

アリサ「この子は頭がいいので自分が悪いことしたって自覚があるみたいなんです」

ピカチュウに頭を下げられた先生が戸惑っているとアリサが補足した。

ピカチュウ「チャ…」

先生「は、反省してるならいいのよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウは頷いて答えた。

先生「さて、この子はどうしましょうか？」

アリサ「ピカチュウ、大人しく出来るわね？」

ピカチュウ「ピカ！」

ピカチュウは教室の端に行くところとちよこんとしていた。

先生「で、では授業を再開します」

ピカチュウは授業が終わるまでじっとしていた。

昼休み

アリサ「はい、あーん」

ピカチュウ「ピカ〜」パクツ

すずか「ほら、ピカチュウ？あーん♪」

ピカチュウ「チャ〜♪」

昼休み、ピカチュウはアリサやすずかにご飯を分けて貰い食べていた。

アリサ「美味しかった？」

ピカチュウ「ピカ♪」

ピカチュウは満足すると…

ピカチュウ「チャ〜…」

アリスの足を枕にして眠った。

なのは「寝ちゃったの」

アリス「しようがないわね♪」

アリスは困った感じではなく嬉しそうな表情だった。

放課後

アリス「見つからないわね」

ピカチュウ「ピカ〜…」

放課後、アリス達は手分けしてジュエルシードを探していた。

ピカチュウ「ピカ？」

アリス「ん？そうね、一度集まりましたよか…」

アリスは携帯を出すとなのはとすずかにメールを送った。

アリス「ピカチュウ、一度なのは達と合流するわよ」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

アリサとピカチュウは近くの公園に向かった。

第7話

なのは「アリスちゃん」

アリス「お待たせ」

ピカチュウ「ピカ♪」

アリスとピカチュウが公園にやって来ると、なのはとすずかが待っていた。

すずか「どうだった?」

アリス「成果なしよ」

ピカチュウ「チャ〜…」

なのは「ありがとう、ピカチュウ。落ち込まないで」

ユーノ「皆さんもありがとうございます」

すずか「今日は遅いし解散しよう?」

アリス「そうね、帰りましょうか」

アリス達は探索を打ち切り、帰る事になった。

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

猫「にゃ〜♪」

すずか「萌えるね…」

アリサ「癒されるわね」

ピカチュウと猫がじゃれてる姿を見た二人は癒されていた。

なのは「可愛いは正義なの」

だんだんとピカチュウ依存症になりつつあった。

ピカチュウ「ピカ？ピカ」

すると一匹の猫が森に入ってしまったので後を追いかけた。

ピカチュウ「ピカ？？」

巨大猫「にゃ〜♪」

森に入って少しすると巨大な猫がいた。

ピカチュウ「ピカ〜…」

巨大猫「にゃ〜？」

ピカチュウ「ピカピカ！」

巨大猫「にゃ？にゃにゃ！」

ピカチュウ「ピカチュウ、ピカ！」

ピカチュウは猫から青い石に触れたらこうなつたと伝えてきたのでなのは知らせようとしたが：

フエイト「ジュエルシード封印！」

黒い服装の少女が現れてジュエルシードを封印した。

フエイト「ジュエルシード…」

パクツ

ピカチュウ「ピファア！」

ピカチュウは少女がジュエルシードを取ろうとした時、目の前をジャンプしてジュエルシードをくわえて猫と一緒に走り出した。

フエイト「あ！待って！」

ピカチュウ「ピファア〜！」

ピカチュウは猫と途中まで並走していたが、少女が自分を狙ってるとうわかれると猫から離れた。

フエイト「お願い！待って！」

ピカチュウ「ピファア〜？」

あまりにも少女が必死なので止まって見ることにした。

フエイト「お願い、それを渡して」

ピカチュウ「ピファ！」

ピカチュウは首を振って拒否した。

フエイト「お願い」

ピカチュウ「ピカ〜…」

ピカチュウは手にジュエルシードを持つと、少女とジュエルシードを交互に見た。

ピカチュウ「ピカチュウ？」

フエイト「渡してくれる？」

ピカチュウ「ピカ〜…ピカ！」

ピカチュウは少女に渡しても平気と勘が訴えたので従うことにして、少女にジュエルシードを渡した。

フエイト「ありがとう」

ピカチュウ「ピカ♪ピカチュウ！」

少女が飛び上がるとピカチュウは手を振って見送り、アリサ達のもとに戻った。

アリサ「一体何をしてたの！」

ピカチュウ「チャ〜…」

そしてアリサの所に戻ったピカチュウは泥だらけになっていたので怒っていた。

ピカチュウ「ピカ！ピカチュウ！ピカピカピ！ピカピカピカチュウ！」

アリサ「ハア!? ジュエルシードを知らない女の子に渡したですって!?」

なのは「何で身振り手振りだけであそこまで伝わるのかな?」

すずか「え?なのはちゃん、わからないの?」

なのは「え?」

ここにもう一人ピカチュウの言葉を理解出来る人物がいた。

ピカチュウ「ピカピカ!ピカチュウ!」

アリサ「あれは危ない物だつて教えたでしょ!」

ピカチュウ「ピカ!ピカピカチュウ!」

しかしピカチュウは少女が必死だったことと渡しても大丈夫と判断した事を伝えるが…

アリサ「あれはユーノの物なのよ!ダメでしょ!」

ピカチュウ「ピカ…」

アリサ「め!」

ピカチュウ「チャ〜…ピカチュウ〜！」

アリサ「あ！こら、ピカチュウ！どこいくの!？」

ピカチュウは怒られてるのに耐えきれず、ついに泣き出してすずかの邸を飛び出してしまった。

第8話

ピカチュウ「チャ〜…」

ピカチュウは泣きながら裏路地を歩いていた。

フエイト「あれ？」

ピカチュウ「ピカ？」

フエイト「えつと…さつきぶり？」

ピカチュウ「ピ、ピカチュウ〜！」

フエイト「きやあ!？」

ピカチュウは泣きながらフエイトに抱きついた。

ピカチュウ「ピカ〜!ピカチュウ〜！」

フエイト「えつと…よしよし。どうしたの？」

ピカチュウ「ピカピカ!ピカチュウ〜!ピカピ!ピカピカピカチュウ、」

フエイト「えつと、ジュエルシードを私に渡したら飼い主に怒られて飛び出してきたと？」

ピカチュウ「ピカ！」

ここにもピカチュウの言語を理解する人物がいた。

フェイト「えつと…これからどうするの?」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

ピカチュウは帰れないと泣いた。

フェイト「えつと…家にくる?」

ピカチュウ「ピカピ!」

ピカチュウはいいの!と鳴いた。

フェイト「じゃあ…行こうか?」

フェイトはピカチュウを抱っこすると自宅に向かった。

フェイト「ただいま、アルフ」

アルフ「おかえり、フェイト?なんだいそいつは?」

ピカチュウ「ピッピカチュウ!」

ピカチュウは手を上げてアルフに挨拶した。

フェイト「えつと、名前は…」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

アルフ「ピカチュウって名前みたいだよ」

フェイト「そうなの？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

フェイト「じゃあピカチュウ？ご飯食べようか？」

ピカチュウ「ピカ♪」

ピカチュウは近くにあったリングゴを受け取ると…

ピカチュウ「ピカ」シャリシャリ

美味しそうに食べた。

フェイト「ご飯も食べたしお風呂に入ろうか？」

ピカチュウ「ピカ？ピカ！」

アルフ「ちゃんと洗わないとね」

泥だらけのピカチュウを見て二人は綺麗にしようと誓った。

ピカチュウ「ピカ♪」

お風呂から出たピカチュウは綺麗にしてもらい、さっぱりした様子だった。

フェイト「じゃあピカチュウ？私達はジュエルシードを探しに…」

アルフ「フェイト、今日は休んでおくれ」

フェイト「アルフ？」

アルフ「今日は一個見つかったんだし休みなよ」

フェイト「でも…」

アルフ「それに…」

アルフの視線をフェイトが追うと…

ピカチュウ「ピカ〜…」

ピカチュウは行っちゃうの？と言いたそうな表情だった。

フェイト「…わかった」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

ピカチュウはフェイトの足にすりよった。

フェイト「じゃあ…寝る？」

ピカチュウ「ピカ♪」

フェイトは着替えるとベットに入りピカチュウを招き入れ抱きしめた。

フエイト「おやすみ」

ピカチュウ「ピカ〜…」

ピカチュウは気持ちよさそうに眠った。

フエイト「だから！私達はジュエルシードを探しに行くの！」

ピカチュウ「ピ〜カ〜！ピカチュウ！ピカピカピカ！」

次の日の朝、ピカチュウはフエイトの足にしがみついて駄々をこねていた。

アルフ「いつそ連れて行ったらどうだい？」

ピカチュウ「ピカ♪」

フエイト「でも…」

アルフ「じゃあどうやって置いてく？」

ピカチュウ「チャ〜」

ピカチュウはついてく気、満々だった。

フエイト「…わかった。連れてくよ…」

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

ピカチュウは嬉しそうに鳴いた。

フエイト「バルデイツシュ、反応は？」

バルデイツシュ「ありません」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

フエイト「地道に探すしかないね」

ピカチュウ「ピツカ！」

フエイト「行こうか？」

ピカチュウ「ピカ」

フエイトとピカチュウは地道にジュエルシードを探すことにした。

フエイト「ピカチュウく？あつた？」

ピカチュウ「ピファ〜！」

次の日、ピカチュウとフエイトは森の中で手分けして探しているとピカチュウがジュエルシードをくわえて戻ってきた。

フエイト「ありがとう♪偉い偉い」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

フエイトに誉められたピカチュウは、頭を撫でられて喜んだ。

フエイト「次を探そうか？」

ピカチュウ「ピツカ！」

そして別のジュエルシードを探すと…

ピカチュウ「ピファ〜！」

再びジュエルシードをくわえて戻ってきた。

フエイト「偉い偉い♪」

ピカチュウ「チャ〜♪」

再び誉められたピカチュウは嬉しそうな表情だった。

フエイト「ピカチュウが来てからジュエルシードがすんなり見つかるね」

ピカチュウ「ピカ〜？」

ピカチュウはどうしたの？と言いたそうだった。

フエイト「一度戻ろう。お腹空いたでしょ？」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

ピカチュウはご飯♪とないて戻っていった。

ピカチュウ「ピカ！」シヤリシヤリ

家に戻るとフェイト達はお弁当、ピカチュウはリンゴを食べていた。

フェイト「じゃあピカチュウ？大人しく留守番しててね？」

ピカチュウ「ピカ！」

フェイトはこれから出掛ける為、ピカチュウは一匹で留守番する事になった。

フェイト「じゃあ行つてきます」

フェイトとアルフは転移して消えた。

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウはすることがなく部屋の中をうろろしている…

ピカチュウ「ピカ！」

名案を思いついた。退屈↓することない↓そうだ！青い石を探そう！↓フェイトに褒められる！の図式が出来上がった。

ピカチュウ「ピカ！ピカチュウ！」

ピカチュウは外に出るとジュエルシードの探索に向かった。

ピカチュウ「ピカ…ピカ…」

ピカチュウは野生の勘であちらこちらを探していた。

ピカチュウ「ピカ〜…ピカ？ピカチュウ！」

すると道脇で光った石があったので近づいて見るとジュエルシードだった。

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

ピカチュウはジュエルシードを持ち上げて嬉しそうに鳴いた。そこに…

なのは「あ！ピカチュウ!？」

ピカチュウ「ピカ!？」

なのはに見つかった。

なのは「ピカチュウ？アリスちゃんが心配してる…よ…」

言っている途中からピカチュウの掲げてる物に目がいき、ジュエルシードとわかると…

なのは「ピカチュウ？それを渡してくれる？」

ピカチュウ「ピカ！ピカピ！」

ピカチュウは首を振って拒否した。

なのは「それはユーノ君のもの。ね？」
ピカチュウ「ピカ〜…ピファ〜！」

ピカチュウはジュエルシードをくわえて逃げ出した。

なのは「あ！待ってなのピカチュウ！」

なのはも追いかけるがピカチュウには勝てなかった。

第9話

ピカチュウ「ピファ〜…ピファ〜…」

あれからピカチュウはなのはを振りきると狭い裏路地を駆け逃げた。すると…

ピカチュウ「ピファ!?!」

もう一つ、ジュエルシードを見つけた。

ピカチュウ「ピツピファフユ!」

ピカチュウは鳴くともう一つのジュエルシードもくわえてフェイトの家に戻っていった。

ピカチュウ「ピファ〜」

アルフ「ピカチュウ!?! フェイト! ピカチュウが戻ってきたよ!」

フェイト「ピカチュウ!?! どこに行ってたの!」

ピカチュウが戻るとフェイトは若干怒っていた。

ピカチュウ「ピファ!」

ピカチュウはジュエルシードを見せた。

フェイト「ジュエルシード!?! 二つも!?!」

ピカチュウ「ピファ…ピカ♪」

ピカチュウはフェイトにジュエルシードを二つとも渡した。

フェイト「ありがとう♪ピカチュウ♪でも！お留守番は？」

ピカチュウ「ピカ!?チャ〜…」

フェイト「クスツ♪いいよ怒ってないから♪」

ピカチュウ「ピカ!?ピカチュウ〜♪」

フェイト「こらくすぐぐったいよ♪」

ピカチュウは嬉しそうにフェイトに抱きついた。

フェイト「よく頑張ったね♪」

ピカチュウ「チャ〜♪」

ピカチュウは頭を撫でられて喜んだ。

フェイト「汚れちやつてるね、お風呂に入ろうか？」

ピカチュウ「ピカ♪」

フェイトとピカチュウはお風呂に入ると一日の疲れを癒し眠った。

フェイト「いい？今日は大人しく留守番しててね？」

ピカチュウ「ピカ〜…」

フエイト「ピカチュウは昨日頑張ったんだから、今日はおやすみ。わかった？」

ピカチュウ「ピカ〜…ピカピ！」

フエイト「いい子だ」

フエイトはピカチュウの頭を撫でると出掛けていった。

ピカチュウ「ピカ〜…ピ…」

ピカチュウは窓際で日向ぼっこしながら眠った。

ピカチュウ「ピカピ!？」

それは直感だった。ピカチュウは眠っていると突然起き出し、フエイトが危険な目にあってる勘が伝えてきたので…

ピカチュウ「ピカ〜！」

家を飛び出した。

ピカチュウ「ピカピカピカピカ！」

ピカチュウは勘を頼りにフエイトを探しまわった。

ピカチュウ「ピカ!?ピカチュウ〜！」

するとピカチュウがフェイトを見つけると黒服の少年にバインドをかけられてるフェイトが映りこんだ。ピカチュウは本能的に敵と判断して電撃を放ち少年に当てた。

クロノ「グアゝ!?!」

フェイト「え?ピカチュウ!」

ピカチュウ「ピカ!ピカピ!」

アルフ「フェイト!撤退するよ!」

フェイト「うん!ピカチュウ!おいで!」

なのは「ピカチュウ!」

ピカチュウ「ピカ!」

ピカチュウはフェイトに抱きつくくと、フェイトとアルフは転移をして離脱した。

なのは「ピカチュウ…」

すれ違うなのはとピカチュウだった。

フェイト「ありがとう、ピカチュウ。助かったよ!」

ピカチュウ「ピッピカチュウ♪」

褒められたピカチュウは耳を揺らした。

第10話

アルフ「フェイト、逃げよう？管理局が動き出したんだし」

フェイト「それは駄目。母さんの為にも残りを集めなきゃ」

アルフ「あんなババアの…」

フェイト「アルフ」

アルフ「うう…」

ピカチュウ「ピカ〜…」

フェイト「あ、違うよ？喧嘩してる訳じゃないよ」

ピカチュウ「ピカピ？」

フェイト「本当だよ」

ピカチュウ「ピツカ♪」

フェイト「ごめんね、心配かけて」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウは気にしないで。と鳴いた。

フェイト「これからは慎重に探そう」

アルフ「わかったよ、フェイト」

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

ピカチュウも元気に返事した。

アルフ「それでフェイト？どうやって今後は探すんだい？」

フェイト「魔法で探すのは危険だし…」

ピカチュウ「ピ？」

フェイト「地道に探すしかないね」

アルフ「あいよ。手当たり次第だね」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

ピカチュウも手伝う気満々だった。

ピカチュウ「ピツカ♪ピツカ♪ピカチュウ〜♪」

フェイト「ふふ♪」

楽しそうなピカチュウを見たフェイトは微笑んでいた。

ピカチュウ「ピ？ピカチュウ〜！」

すると突然ピカチュウは走り出した。

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

フェイト「ジュエルシード!？」

野生の勘、恐るべし。

ピカチュウ「ピツカ！」

ピカチュウはフェイトにジュエルシードを差し出した。

フェイト「よしよし。ありがとう♪」

フェイトはピカチュウからジュエルシードを受け取ると封印してしまっただ。

フェイト「次を探そう？」

ピカチュウ「ピカ！」

ピカチュウは頷くと先を歩き出し遅くまでジュエルシードを探した。

アルフ「フェイト、いいのかい？」

フェイト「うん」

ピカチュウは「ピカ〜…ピ〜…」

数日後、なのはからジュエルシードを賭けた決闘を申し込まれた

フエイトはそれを承諾し、決戦当日フエイトはピカチュウを置いてくことにした。

フエイト「ピカチュウには危険だから」

アルフ「わかったよ…」

フエイトはアルフと一緒に決戦場所に向かった。

ピカチュウ「ピカ〜…ピ〜…ピカ？」

そして数時間後…

ピカチュウ「ピカ〜！」

ピカチュウは伸びをすると辺りを見回してフエイトが居ない事に気づいた。

ピカチュウ「ピカピ」

ピカチュウは寝坊したと思い、置いてかれたと思いこんだ。

ピカチュウ「ピカ」シヤリシヤリ

ピカチュウは置いてあったリンゴを食べるとフエイトが帰って来るのを待ち続けた。

アルフ「ピカチュウ！」

ピカチュウ「ピカピ!？」

ご飯を食べてから少しすると突然アルフが転移で戻ってきて驚いた。

アルフ「ピカチュウ、アタシと来とくれ！」

ピカチュウ「ピカ？ピツカ！」

ピカチュウはフェイトが居ない事からフェイトに何かあったと判断してアルフの肩に乗った。

アルフ「しっかりつかまってるんだよ！」

アルフはピカチュウを連れて何処かに転移していった。

アースラ

ピカチュウ「ピ!？」

アルフ「ついてきておくれ…」

ピカチュウはついてくとある部屋に通された。そこには…

フェイト「……」

茫然自失となったフェイトがいた。

アルフ「ピカチュウ、フェイトのそばに居てくれるかい？アタシは行かなきゃならいからさ…」

ピカチュウ「ピカ！ピツカ！」

ピカチュウはフェイトを一番に思うアルフが頼むと言ってきたので、胸を叩いて引き受けた。

フェイト「……」

ピカチュウ「ピカ〜？ピカチュウ〜♪」

アルフが部屋を出ていってからピカチュウはフェイトの足にすりよつてみたが…

フェイト「……」

フェイトは反応しなかった。

ピカチュウ「ピカ〜…ピカ〜！」

ピカチュウは何度もフェイトの足にすりよつたり、叩いたりを繰り返した。

ピカチュウ「ピ〜カ〜！ピ〜カ〜！」

それでもピカチュウは諦めなかった。すると…

フェイト「……」

ピカチュウ「ピカ？」

フェイトはピカチュウを抱き上げて、強く抱きしめた。

ピカチュウ「ピカ〜？」

フエイト「私は…」

ピカチュウ「ピカ♪」

フエイト「私は…一人じゃないんだよね…こうやって心配してる友達がいる」

ピカチュウ「ピカ!ピカチュウ!」

フエイト「でも今は…行かなきゃ!」

ピカチュウ「ピカ?」

フエイト「ありがとう、ピカチュウ。元気づけてくれて」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

フエイト「待っててね、ピカチュウ。私は…」

ピカチュウ「ピツカ♪ピカチュウ!」

ピカチュウはフエイトに手を振ると、いってらっしやい!と鳴いた。

フエイト「いってきます!」

フエイトは転移して消えた。

第11話

ピカチュウ「ピカ〜…」

フェイトを見送ってから数時間、ピカチュウはフェイトが戻ってこないで不安になってきた。

カシユ

なのは「ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカピ？」

なのは「あのね、フェイトちゃんは別の部屋に移ったの。それでピカチュウはフェイトちゃんの所に行く？」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウが頷くと…

なのは「じゃあ行こう」

なのははフェイトの所にピカチュウを連れて行った。

なのは「ここなの。クロノ君、入っていい？」

クロノ『ああ、こちらも終わった。かまわない』

カシユ

ピカチュウ「ピカピ!?ピカチュウ！」

クロノがいるとピカチュウは攻撃しようとするが…

フェイト「ピカチュウ！ダメ！」

ピカチュウ「ピ!？」

フェイトに注意され止めた。

ピカチュウ「ピカ〜？」

フェイト「大丈夫だよ。ほら、おいで」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

ピカチュウはフェイトに抱きついた。

クロノ「では、僕は失礼する」

クロノが部屋を出ていくと、残ったのはフェイト、なのは、アルフ、ピカチュウだった。

ピカチュウ「ピカ〜♪」

なのは「あのね、フェイトちゃん？ピカチュウを元の飼い主さんに返してほしいの」

フェイト「ごめん。無理だよ、ピカチュウは悪くないのにピカチュウを怒る人に返すなんて」

なのは「でも…」

フェイト「ごめん」

フェイトはピカチュウを手放そうとしなかった。

ピカチュウ「ピカ〜♪」

フェイト「くすぐったいよ♪」

あれから数日、フェイトは部屋から出れないもののアルフとピカチュウが居たので辛くはなかった。

フェイト「もうすぐ、出発かな？」

アルフ「そうだね、不安かい？」

フェイト「少しね」

ピカチュウ「ピカ〜？」

不安そうになったフェイトを見たピカチュウは大丈夫？と声をかけた。

フェイト「大丈夫だよ。いい子いい子」

ピカチュウ「チャ〜♪」

現在フェイトが落ちついていられるのはある意味ピカチュウのおかげかもしれない。

リンデイ『フェイトさん、いいかしら?』

フェイト「はい、どうぞ」

リンデイ「今後についてですけど」

フェイト「はい」

リンデイ「本局に戻ってから裁判…といつても大丈夫ですけどね」

フェイト「はい」

リンデイ「大丈夫そうですね」

フェイト「アルフもいますし、それにこの子もいますから」

ピカチュウ「ピカ〜?」

フェイト「ピカチュウは気にしなくていいよ」

ピカチュウ「ピツカ♪」

リンデイ「仲がいいのね♪」

フェイト「はい♪それとリンデイさん」

リンデイ「何かしら?」

フェイト「行く前にあの子…なのはに会えませんか?」

リンデイ「会いたいのね?わかりました。出発前に会えるようにし

ましょう」

フェイト「ありがとうございます」

リンデイ「なのはさんに連絡しておくわね」

リンデイは退室するとなのはに連絡をとりに行った。

ピカチュウ「ピカ〜」

ピカチュウはなのはとフェイトが話してる姿を一匹で離れて見ていた。

アリサ「ピカチュウ…」

ピカチュウ「ピカピ!？」

ピカチュウが後ろを見ると、アリサとすずかが立っていた。

ピカチュウ「ピカ〜…」

ピカチュウは木の影に隠れるとそつとアリサを見た。

アリサ「ごめんね…傷ついたよね?」

ピカチュウ「ピカ〜?」

アリサ「え?もう怒ってないわよ♪」

ピカチュウ「ピカピ〜♪」

安心するとピカチュウはアリサに抱きついた。

アリサ「ごめんね？本当にごめんね」

すずか「無事でよかったね」

アリサは何度も謝りピカチュウと和解した。

ピカチュウ「ピカッ」

アリサ「ん？行きたいのね。いつてらっしやい。気をつけていくのよ？いつでも帰ってきていいんだからね？」

ピカチュウ「ピカ！ピカチュウ！」

フェイト「ピカチュウ…」

するとなのはとフェイトが近寄ってきた。

アリサ「ピカチュウをお願い」

フェイト「ううん。ピカチュウは連れてて行けないの」

ピカチュウ「ピカピ!？」

フェイト「ピカチュウ…私はね？これから裁判なんだ。ピカチュウとは少しの間一緒に居られないの」

ピカチュウ「ピカッ…」

フエイト「ごめんね、もつとはやく言えば良かったね。でも大丈夫だよ。すぐに帰ってくるから」

ピカチュウ「ピツカ！」

フエイト「ごめんね。ピカチュウをお願いしていい？」

アリサ「ええ。引き受けるわ」

フエイト「じゃあね、ピカチュウ。また会おうね？」

ピカチュウ「ピカ！」

ピカチュウはフエイトに抱きつき、頬擦りすると離れた。

フエイト「ありがとう♪またね♪」

ピカチュウ「ピツピカチュウ！」

ピカチュウは手を上げて見送りフエイトは転移して消えた。

アリサ「ピカチュウ…」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

アリサ「また、よろしくね♪」

ピカチュウ「ピツピカチュウ！」

ピカチュウはまたアリサと一緒に住むことになった。

A S 編

12話

ピカチュウ「ピツカ♪ピツカ♪ピカチュウ♪」

アリサ「こら！先に行かないの！」

ピカチュウ「ピカ〜」

ある日、ピカチュウとアリサは散歩がてら一緒にすずかの家に向かっていった。

ピカチュウ「ピカ！」

ピンポーン

ピカチュウはすずかの家の前に着くと、インターホンに飛びつくと鳴らした。

すずか「いらつしやい、アリサちゃん、ピカチュウ♪」

アリサ「きたわよ♪」

ピカチュウ「ピツピカチュウ♪」

アリサが挨拶するとピカチュウも真似て挨拶した。

すずか「ん〜♪相変わらず抱き心地いいね♪」

ピカチュウ「チャ〜♪」

すずかに頬擦りされるとピカチュウはくすぐったそうにしていた。

すずか「ピカチュウは最近何がお気に入り？」

アリサ「最近絵本に興味をもってるわね。寝る前に読み聞かせをしてるくらいに」

ピカチュウ「ピッピカチュウ♪」

すずか「へえ〜♪ピカチュウは本が好きなんだ？」

ピカチュウ「ピカ！ピッカ！」

すずか「私もね？本が好きなんだ」

ピカチュウ「ピカピ？」

すずか「うん♪一杯あるよ」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

ピカチュウは本が見たいと鳴いた。

すずか「見たいの？いいよ、おいで」

アリサ「私も行くわ」

アリサ達は書庫に向かった。

ピカチュウ「ピカ〜♪」

書庫にたどり着くとピカチュウは目を輝かせていた。

すずか「見ていいよ」

アリサ「ちよつとすずか？」

すずか「ピカチュウなら、大丈夫でしょ？」

アリサ「まあ、丁寧に扱うと思うけど」

ピカチュウ「ピカ〜…」

アリサ「何を読んでののかしら？」

アリサはすずかと一緒に覗きこんで本のタイトルを見た。

小動物でもわかる機械工学。

アリサ「いや、無理でしょ」

すずか「でも、ピカチュウ真剣だよ？」

アリサ「その内諦めるでしょう…」

すずか「ピカチュウ？私達、お茶してるね？」

ピカチュウ「ピツカ♪」

アリサとすずかはお茶にするためすずかの部屋に戻っていった。

ピカチュウ「ピカ…」

ピカチュウはアリサが帰るまで本を読み続けた。

すずかの家に行ってから数日後、自分の邸の中でピカチュウを探していた。

アリサ「ピカチュウ…？ピカチュウ…？」

アリサ「出てこないわね」

ピカチュウ「ピカピ…♪」

すると遅れてピカチュウがやって来た。

アリサ「何かしてたの？」

ピカチュウ「ピカピ？ピカピカピカチュウ」

アリサ「何もしてない？じゃあ何で出てくるの遅かったのよ」

ピカチュウ「ピカ…？」

そんなことないよ。と鳴いた。

アリサ「怪しいわね…」

ピカチュウ「ピカピ!?ピカチュウ！」

アリサ「ピカチュウ？ちよつとアンタの部屋を見せなさい」

ピカチュウ「ピカ!?ピカピ！」

ピカチュウは両手を広げてダメ!と鳴いた。

アリサ「やましい事ないんでしょ?」

ピカチュウ「ピカ！」

アリサ「じゃあ見ていいわね」

ピカチュウ「ピカ〜！」

アリサはピカチュウに与えられた部屋に向かうと、ピカチュウはアリサの足にしがみついて阻止しようとするがアリサはピカチュウを引きずって行った。

アリサ「ほら、着いたわよ。諦めなさい」

ピカチュウ「ピカ〜！」

しかしピカチュウは諦めずドアの前にしがみついた。

アリサ「はいはい。諦めなさい」

ピカチュウを抱き上げたアリサがピカチュウの部屋に入ると…

ごちゃく

何処から拾ってきたのか電気製品のガラクタなどが沢山積まれていた。

アリサ「……」

ピカチュウ「……」

そく…

ガシツ！

アリサ「どっから拾ってきたの！」

ピカチュウ「チャく…」

案の定怒られた。

アリサ「こんなにゴミを拾ってきてどうするの！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

アリサ「何？ゴミじゃない？」

ピカチュウ「ピツカ！」

アリサ「どこがよ？」

ピカチュウ「ピカく」

ガサゴソガサゴソ

ピカチュウは山の中をあさると何かを出してきた。

アリサ「何よそれ？」

ピカチュウ「ピツカ！ピカチュウ！」

ピカチュウは機械のボードに電源を入れると宙に浮き、ピカチュウはそれに乗った。

アリサ「すご!?!どこで拾ってきたの!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ！ピツカ！ピカピカピ！」

ピカチュウは自分で作ったと言った。

アリサ「まさか…」

ピカチュウ「ピカ〜！」

ピカチュウは信じて！と鳴いた。

アリサ「これ…乗れるの？」

ピカチュウ「ピツカ！」

ピカチュウは大丈夫と鳴くと、ボードをアリサの前に浮かべた。

アリサ「先に聞くわよ？これどうやって動くの？」

ピカチュウ「ピカチュウ！ピツカ！ピツカピカ！」

ピカチュウはボードのスイッチを踏むと動くと言った。

アリサ「うん、わかった。外でやりましょう」

アリサはボードを抱えると外に向かいピカチュウもついていった。

アリサ「今度こそやるわよ」

アリサはボードを浮かべると乗った。

アリサ「い、いくわよ?」

ピカチュウ「ピツカ」

アリサがスイッチを踏むとボードは動き始めた。

アリサ「うわ〜♪楽しい〜♪」

アリサは初めてのわりには上手く乗っていた。

アリサ「あく♪楽しかった♪」

ピカチュウ「ピカ!ピツカピ!」

ピカチュウはどう!ガラクタじゃないでしょ!と鳴いた。

アリサ「確かにガラクタじゃないわね」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

でしよう〜♪と鳴くが…

アリサ「でも部屋は片付けなさい」

ピカチュウ「チャ〜…」

誉めて落とされた。

13話

アリサ「ピカチュウ〜?」

ピカチュウ「ピカ〜!」

次の週の日曜日、アリサはすずかの家に行くためピカチュウを呼んだ。

アリサ「ピカチュウ?すずかの家に行くわよ」

ピカチュウ「ピカ!」

アリサ「それとあのボードを持ってきてくれる?」

ピカチュウ「ピカ?ピツカ!」

ピカチュウはボードを取りに戻ると…

ピカチュウ「ピカピ〜♪」

ボードに乗って戻ってきた。

アリサ「じゃあ行くわよ」

ピカチュウ「ピツピカチュウ」

アリサとピカチュウは車ですずかの邸まで向かった。

忍「…凄いわね」

アリサ「危険はないですか？」

忍「出来もいいし問題ないわね。むしろ完成度が高いくらいよ」

アリサはピカチュウが作ったボードを忍に見てもらっていた。万が一を考えて危険がないか確認してもらった。

忍「本当にピカチュウが作ったの？」

アリサ「だと思います」

忍「確かめてみたいわね…」

アリサ「そうですね」

忍「確認して見ましょ。…もしもし、すずか？ピカチュウを連れて来てくれる？」

忍がすずかに連絡をとると…

すずか「お姉ちゃん、お待ちせ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

すぐにすずかはピカチュウとやって来た。

忍「早速で悪いんだけど、ピカチュウ？これはアナタが作ったの？」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウはうん。と頷いた。

忍「あのね、ピカチュウ？この邸にある材料で何か作ってくれない？」

ピカチュウ「ピカピ？」

アリサ「ええ。いいわよ」

ピカチュウはアリサにいいの？と確認した。

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

ガサゴソガサゴソ

キュイーン！

ジジ！

ピカチュウは忍の工作室をあざると、道具を使い何かを作り始めた。

忍「手慣れてるわね」

アリサ「そうなんですか？」

ピカチュウ「ピく♪ピツカく♪」

するとピカチュウはボードも弄り始めた。

アリサ「何をしてるんでしょう？」

忍「わからないわね。でも出来たみたいよ」

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

アリサ「何を作ったの？」

ピカチュウ「ピカ」

ポシユン

ピカチュウがボードの別のスイッチを押すとボードはガシヤポンサイズのボールになった。

アリサ達「ウソ!？」

ピカチュウ「ピカ／／／」

忍「ねえ、アリサちゃん…」

アリサ「何でしょう?！」

忍「家にピカチュウくれない?！」

アリサ「あげません」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「ピカチュウ?どうやって作ったの?！」

ピカチュウ「ピツカ!ピカピ」

アリサ「自分の生まれ故郷の道具を見本にした？」

すずか「なるほど」

アリサ「でも、作れる物？」

忍「現物があるしね」

すずか「ピカチュウ？今は何を作りたい？」

ピカチュウ「ピカピ？ピツカ」

すずか「え？説明が難しい？」

ピカチュウ「ピカ」

カチカチ！

ピカチュウは徐に忍のパソコンを弄り始めた。

ピカチュウ「ピツカ！」

すずか「何々……うえ!？」

アリサ「どうしたのよ？」

アリサと忍もパソコンを覗きこんだ。

アリサ「何よこれ？」

ピカチュウ「ピツカ！ピカピ！」

アリサ「ハア!? レールカノン付きブースター!?!」

すずか「戦争でもするの!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

アリサ「却下よ」

ピカチュウ「チャ〜…」

非常に残念なピカチュウだった。

アリサ「たく、何処から知識を拾ってくるのかし…ら…ピカチュウ?」

ピカチュウ「ピカ?」

アリサ「ピカチュウ? あの画像はどうやって作ったの?」

ピカチュウ「ピカ!?! ピカ〜…」

ピカチュウはさあ〜…。ととぼけた。

アリサ「…最近アタシの部屋のパソコンが電源がつきっぱなしなのよね」

ピカチュウ「ピカピ!?! ピカチュウ…ピカ!?!」

ピカチュウはそんな!?! 消してるよ…と言うが時既に遅かった。

アリサ「やっぱりアタシのパソコンか〜！」

ピカチュウ「チャ〜…」

ピカチュウは自爆して暴露した。

アリサ「全くいつの間に…」

ピカチュウ「ピカ〜／／／」

アリサ「誰も褒めてないわよ」

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「全く、油断も隙もない」

このあとピカチュウは勝手にパソコンを使った事をたっぷりと怒られたが今後は使っていていいと許可をもらえたので得をした気分だった。

14話

ピカチュウ「ピカ〜…ピ〜…」

次の日の平日、ピカチュウはアリサが学校に行っているので、外で日向ぼっこしていた。

ピカチュウ「ピ〜…」

アリサ「ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ〜?…ピカ!?’」

最初は寝ぼけていたがアリサだと分かるとシヤキツとした。

ピカチュウ「ピカピ?’」

アリサ「今日は半日授業なのよ」

ピカチュウ「ピカチュウ!’」

アリサ「ええ。部屋に行きましょう」

アリサとピカチュウは部屋に向かった。

ピカチュウ「ピカ〜♪」

アリサ「全く、甘えん坊ね♪」

すりよってくるピカチュウを嫌がる事なくアリサは受け入れていた。

アリサ「さあ、お昼にしましょう」

ピカチュウ「ピツカ♪」

アリサとピカチュウは食堂に向かった。

ピカチュウ「ピカ」シヤリシヤリ

アリサ「ん、所でピカチュウ？」

ピカチュウ「ピファ？」

アリサ「あとで会わせたい人がいるの」

ピカチュウ「ピカピ？」

アリサ「だから、あとで出掛けるわよ」

ピカチュウ「ピツピカチュウ！」

アリサ「ピカチュウ。行くわよ！」

ピカチュウ「ピカピカピカチュウ！」

呼ばれたピカチュウは駆けてくるとアリサと一緒に車に乗り込み、途中すずかも乗せてとあるマンションに向かった。

ピカチュウ「ピカピ？」

アリサ「ええ。ここよ」

アリサを先頭に、ある部屋に向かった。

ピンポーン

クロノ「やあ、いらっしやい。さあどうぞ」

クロノに通されて中に入ると：

フエイト「ピカチュウ…」

ピカチュウ「ピカピ!?ピカチュウ〜♪」

フエイトが待つており、声をかけるとピカチュウはフエイトに抱きついた。

なのは「再会出来て良かったの♪」

フエイト「ピカチュウ♪」

ピカチュウ「チャ〜♪」

頬擦りされたピカチュウはくすぐったそうにしていた。

フエイト「ありがとう。ピカチュウを預かってくれて」

アリサ「何を言ってるの?今後もみるわよ?」

バチ

フエイト「ピカチュウは【私と】暮らすんだよ?」

アリサ「【私】とよ?」

バチバチバチ

フエイト、アリサ「ピカチュウ!」

ピカチュウ「ピカピ!」

フエイト、アリサ「どっちと暮らしたい!」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

アリサ「私よね!」

フエイト「私だよね!」

ピカチュウ「チャ〜…」

ピカチュウが二人の間でオロオロしていると…

ピカチュウ「ピカ!」

すずか「うえ!」

すずかに抱きついた。

アリサ「すずか? いつの間にピカチュウを手懐けたのかしら?」

すずか「あ、アリサちゃん？お顔がちよつと怖いよ？」

アリサ「そんなことないわよ」

フエイト「ピカチュウ、私よりすずかがいいの？」

ピカチュウ「チャ〜…」

ピカチュウはすずかの後ろに隠れた。

フエイト、アリサ「すずか…」

すずか「ちよつとピカチュウ!?何とかして！」

ピカチュウ「ピカ〜…」

ピカチュウは見捨てるの？と言いたそうな表情ですずかを見た。

すずか「うう…」

間に挟まれたすずかは…

すずか「そうだ！順番で面倒見ようよ！」

アリサ「仕方ないわね」

フエイト「そうだね」

すずか「ホッ」

ピカチュウ「ピツカ〜♪」

すずか「もう！酷いよピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ〜…」

ピカチュウは、いや〜と鳴いた。

なのは「アリサちゃん、すずかちゃん。家にきてお茶にしない？」

アリサ「そうねたまにはいいわね」

すずか「私もいいよ」

ピカチュウ「ピカ〜？」

なのは「ピカチュウもいいよ」

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

アリサ達は翠屋に向かいお茶を楽しんだ。

ピカチュウ「ピカ〜」ジジ…ジジジジ！

ある日、ピカチュウはアリサが学校に行っている間にあるものの開発をしていた。

ジジジジ！

ピカチュウ「チャ〜♪」

ピカチュウは保護面を顔から離すとふく♪と一息ついた。

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ。ピカピ」

ポシユン

ピカチュウは作成を止めると収納して部屋を出た。

ピカチュウ「ピカ〜♪」

ピカチュウは汗で汚れたのでシャワーを浴びて汚れを落とした。

ピカチュウ「ピカ、ピカピ」

ピカチュウはフルフルと水気を飛ばし体を乾かすと、そろそろアリスが帰ってくるので出迎えに向かった。

アリス「ただいま〜」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

玄関に向かって歩いていると、アリスが帰って来たので走って向かった。

アリス「ただいま、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカピ」

アリス「さて、今日からフェイトの家だけど…」

ピカチュウ「ピカ？」

アリサ「嫌な事させられたらすぐに帰って来なさい」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウは大丈夫だよ。と鳴いた。

アリサ「じゃあフェイトの家に行くわよ」

ピカチュウ「ピツカ♪」

アリサは私服に着替えてフェイトの家に向かった。

15話

ピンポーン♪

フェイト「いらっしやい、アリス」

アリス「さつきぶりね。ほら、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピツカ〜♪」

フェイト「ピカチュウ〜♪」

フェイトはピカチュウを抱き上げた。

フェイト「さあ、アリスも入って」

アリス「お邪魔します」

フェイトとアリスはフェイトの部屋に向かった。

アリス「主にピカチュウの好きな食べ物はリンゴとか果物ね」

フェイト「アリスの所でもそうなんだ」

アリス「食べられない訳じゃなさそうだけど」

アリスとフェイトは互いにピカチュウの情報を交換していた。

ピカチュウ「ピカ〜♪」

フエイト「ん？リンゴが食べたいの？」
ピカチュウ「ピツカ♪」

フエイト「ちよつと待ってて。買い置きがあるから」

フエイトはピカチュウの為に買っておいたリンゴを取りに行くと
すぐに戻ってきた。

フエイト「はい、どうぞ」

ピカチュウ「ピカ♪」 シャリシャリ

アリサ「それと…」

フエイト「？」

アリサ「夜はこれを読んであげて」

フエイト「これは？」

アリサ「ピカチュウのお気に入りの絵本よ。フエイトも字の練習に
なるでしょ？」

フエイト「ありがとう、アリサ」

アリサ「後、夜とか寝るのにグズる時があるから気をつけて」

フエイト「グズるの？」

アリサ「最近になってからよ」

フエイト「わかった。気をつけてみるね」

アリサ「じゃあ私はそろそろ帰るわね」

フエイト「気をつけて」

ピカチュウ「ピカ〜！」

アリサはピカチュウとフエイトに見送られて帰っていった。

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

フエイト「ん〜♪」

フエイトはアリサが帰った後、ピカチュウを抱きしめてほころんでいた。

アルフ「お！ピカチュウ、来たのかい」

ピカチュウ「ピツカ♪」

アルフ「ゆったりしてな」

ピカチュウ「ピカピ！」

フエイト「そういえばピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ？」

フエイト「最近は何か作ってるって聞いたよ？」

ピカチュウ「ピカピ？」

ピカチュウは何で知ってるの？と聞いてきた。

フエイト「アリサとすずかに聞いたよ」

ピカチュウ「ピツカ！ピカチュウ！ピツカピカ〜」

フエイト「へえ〜。色々な物を弄って勉強しながら作ってるんだ？」

ピカチュウ「ピツカ♪」

ピカチュウはそうだよ♪と鳴いた。

フエイト「見たいな〜♪」

ピカチュウ「ピカ？ピツカ！」

ガサゴソガサゴソ

ピカチュウはリユック（注意、アリサが特注で頼んで作ったピカチュウ専用リユック）をあさった。

ピカチュウ「ピカ♪」

ピカチュウはあつた♪と鳴いてガシヤポンサイズのボール、Pボール（ピカチュウボール、アリサ命名）を取り出した。

ピカチュウ「ピツピカチュウ！」

ピカチュウがボールを投げると割れて中からボードが出てきた。

フエイト「凄い…ピカチュウが作ったの？」

ピカチュウ「ピカ〜」

ピカチュウはそうだよ。と鳴いた。

フエイト「ピカチュウは天才なの？」

ピカチュウ「ピカ〜？ピカピ」

ガサゴソ

ピカチュウ「ピツカ！」

ピカチュウは一冊の本を取り出した。

小動物でもわかる機械工学。

ピカチュウ「ピカチュウ、ピツカ！」

フエイト「この本で勉強しながら独学で作ったの!？」

ピカチュウ「ピカ♪」

フエイト「凄い凄い♪」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

ピカチュウは頭を撫でられたので気持ちよさそうにしていた。

フエイト「そろそろご飯だと思うから行こうか？」

ピカチュウ「ピカピ〜♪」

フエイトはピカチュウを抱きしめてリビングに向かった。

エイミー「可愛い♪フエイトちゃん！その子が噂のピカチュウ!？」

フエイト「は、はい」

フエイトがリビングに行くときエイミーが居てピカチュウを見たときたん手をワキワキし始めた。

ピカチュウ「ピカ〜…」

ピカチュウは本能的にエイミーが危険と認識してしまった。

フエイト「えっと、エイミー？その手やめてもらっていい？ピカチュウが嫌がつてるから」

エイミー「あ…ごめんごめん」

フエイト「ほら、大丈夫だよピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ〜？」

フエイト「うん、本当だよ。エイミーはいい人だよ」

ピカチュウ「ピカ！ピツピカチュウ！」

フェイトに降ろされたピカチュウはエイミーに向かって挨拶をした。

エイミー「可愛い♪」

ピカチュウ「チャ〜♪」

エイミーは挨拶されるとピカチュウを抱っこして頬擦りしたので、ピカチュウはくすぐったそうにしていた。

リンデイ「あらあら♪人気者ね」

クロノ「もう食事だ。降ろしたらいいんじゃないか」

エイミー「はい」

エイミーが降ろすとピカチュウは椅子に座っているフェイトの膝の上に陣取った。

フェイト「おかえり」

ピカチュウ「ピツカ♪」

リンデイ「さあ、お食事にしましょう♪」

フェイト達「いただきます」

ピカチュウ「ピカピ」

いただきますと挨拶すると各々食事を始めた。

ピカチュウ「ピファ」シヤリシヤリ

エイミイ「そういえばフエイトちゃん？」

フエイト「はい？」

エイミイ「ピカチュウって何て言う動物？」

フエイト「…さあ？気にしたことなかったんでわからないです」

エイミイ「…調べてみよ！」

エイミイは席を立ち上がり調べに向かった。

クロノ「全く…食事中なのに」

フエイト達は気にせず食事を続けているとエイミイが不思議そうに戻ってきた。

エイミイ「おつかしいなく」

リンデイ「あらあら♪食事中よ、エイミイ」

エイミイ「あ、すいません。艦長」

リンデイ「それで何かわかったの？」

リンデイも少し気になっていたらしい。

エイミイ「それが地球のデータベースを見たんですけどピカチュウ

に関して、類似する生き物のデータがないんです」

クロノ「つまり？」

エイミー「憶測だけど地球の生き物じゃないと思う」

クロノ「となると次元漂流…獣？」

ピカチュウ「ピカ〜？」

フェイト「ピカチュウ？ピカチュウは何処から来たの？」

ピカチュウ「ピカピ？ピカチュウ！ピカピカピ！」

エイミー「…フェイトちゃん、通訳お願い」

フェイト「えつとピカチュウの話だとマサラタウンの外れの森で生活していたと」

クロノ「…エイミー」

エイミー「…ううん、地球にマサラタウンなんてないよ」

ピカチュウ「ピカピ！ピカチュウ！」

フェイト「森で寝てて起きたら知らない場所においてアリサ達と出会ったって」

クロノ「そうなる与管理局で保護する必要が出てくるな」

ピカチュウ「ピカピ！」

フェイト「えつとアリサ達と居られなくなりそうだから嫌だつて」

リンデイ「あらあら、賢いのね♪」

ピカチュウ「チャ〜♪」

リンデイに撫でられたのでくすぐったそうだった。

クロノ「とは言っても…」

リンデイ「しばらくは様子を見ましょう」

クロノ「艦長がそう言うのであればいいですけど」

エイミイ「よかったね、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピッピカピ！」

フェイト「でもピカチュウの故郷ってきつと文化がさうとう発達してるんだらうな」

エイミイ「何で？」

フェイト「ピカチュウが発明出来る位だから文化は発達してると…」

フェイト以外「ピカチュウが発明!?!」

ピカチュウ「ピカ〜／／／」

ピカチュウはいやく。と照れた。

エイミー「どんなの!?!」

ピカチュウ「ピカ〜…」

ピカチュウがフェイトの部屋にボールを取りに行くと…

ピカチュウ「ピツカ♪」

ボールを持って戻ってきた。

フェイト「えい」

ポシユン

フェイトがボールを投げるとボールが割れて中からボードが出てきた。

エイミー「スゴツ!」

クロノ「これは何なんだ?」

ピカチュウ「ピカピ!ピカチュウ!」

フェイト「何でも地球のスケボーを改造した物で、乗って遊ぶみたいだよ」

クロノ「…ピカチュウ?少しこれを預かりたい」

ピカチュウ「ピツカ?」

フエイト「ちゃんと返してくれるならいいって」

クロノ「わかった。エイミー」

エイミー「マリーに送っておくね」

ピカチュウの発明は管理局で検査される事になった。

フエイト「ごちそうさま」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウもフエイトの真似をしてごちそうさまをした。

フエイト「ピカチュウ、部屋に行こう」

ピカチュウ「ピツカ♪」

ピカチュウはフエイトについていき部屋で休んだ。

16話

ピカチュウ「ピカ〜」

フエイト「いつてきます」

次の日、フエイトは学校に向かいピカチュウは…

エイミイ「ほら、ピカチュウ〜♪」

エイミイと留守番だった。

ピカチュウ「ピカ〜」

するとピカチュウはエイミイを無視して色々な部屋を覗き始めた。

エイミイ「何してるのかな〜♪」

ピカチュウ「ピカ〜」

結局ピカチュウはフエイトの部屋に戻った。

エイミイ「ピカチュウ？何してるの？」

ガサゴソガサゴソ

ピカチュウは自分のリュックをあさると…

ピカチュウ「ピカ〜」

ポシユン

エイミイ「な、なにこれ!？」

出てきた物は砲身とブースターが一体化したものが出てきた。

ピカチュウ「ピツカ!ピカピ!ピカチュウ!」

エイミイ「ごめん、何を言ってるかさっぱり」

アルフ「多戦兵器だつてさ」

エイミイ「お!アルフ、多戦兵器つて?」

ピカチュウ「ピツカ!ピカチュウ!」

アルフ「多数の相手を同時に相手にする為に作った物だつてさ」

エイミイ「ピカチュウ?そんなの作つてどうするの!」

ピカチュウ「ピカ…」

アルフ「あ…だつてさ」

エイミイ「まさかの未計画!？」

ピカチュウ「ピカく／＼／／」

エイミイ「照れてる!？」

ピカチュウ「ピツカ!」

ジジ！ジジジジ！

しばらく雑談したピカチュウは多戦兵器を完成させるため作業を始めた。

フエイト「ただいま」

ピカチュウ「ピカピく♪」

しばらく作業をしたピカチュウはフエイトが帰って来る前に作業を終えていた。

フエイト「いい子にしてた？」

ピカチュウ「ピカく」

フエイト「そっか。開発してたの」

帰って来たフエイトはピカチュウに留守番してた内容を聞くと雑談して過ごした。

ピカチュウ「ピツカ！」

アリサ達「わく♪」

そして次の週末、ピカチュウは多戦兵器の試運転の為海岸に来ていた。

ピカチュウ「ピツカ！」

ポシユン

ピカチュウは多戦兵器を出すと、背中を預け腰というか体を固定され砲身を持つと…

ピカチュウ「ピツカ！」

シュビン！

飛び立った。

すずか「すごい！」

アリス「本当ね」

フェイト「意外と速いね」

ピカチュウは急旋回、急上昇、急下降、と繰り返していた。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピツピツピツピツ…

ピカチュウは何かをロックすると…

ピカチュウ「ピカ〜！」

四つの手持ち砲身から弾を打ち出した。

カコンカコンカコンカコン！

ピカチュウ「ピツカ♪」

弾は浮かべておいたペットボトルに命中すると弾け飛んだ。

ピカチュウ「ピツカチュウ〜♪」

ピカチュウは海岸に戻っていった。

ピカチュウ「ピカ〜」

フエイト「おかえり」

ピカチュウ「ピツカ♪」

アリサ「出来はよかった？」

ピカチュウ「ピツカ！ピカピカチュウ」

すずか「満足出来たんだ♪」

なのは「…何でみんなわかるの？ピカチュウの言葉」

なのは以外「え？わからないの？」

なのは「なんか、なのはだけがおかしい見たいに聞こえるの！」

賑やかな一幕だった。

ピカチュウ「ピツカ♪ピツカ♪ピカチュウ♪」

試運転を終えたピカチュウは元気に先頭を歩いていた。

フェイト「ピカチュウ。あまり先に行つちやダメだよ」

ピカチュウ「ピツカ」

注意されたピカチュウはフェイトの横についた。

なのは「本当に賢いね」

ピカチュウ「ピカ？」

アリス「なんでもないわよ」

ピカチュウ「ピツカ♪」

ピカチュウはそっか♪と鳴くと気にせず歩いていた。

フェイト「そうだ、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ？」

フェイト「帰りにリンゴ買って行こうね」

ピカチュウ「ピツカ♪」

アリス「なら、今日はここまでにしましょう」

アリス達は各々自宅に帰っていった。余談でリンゴを沢山買って

貰えたピカチュウは終始ご満悦だった。

17話

ピカチュウ「ピフア〜♪」 シャリシャリ

フェイト「ふふ♪可愛い♪」

クロノ「ピカチュウ」

ピカチュウ「ピファ？」 シャリ

ある日の夜、ピカチュウがリビングでリンゴを食べてるとクロノがやって来た。

クロノ「この預かっていたボードを返しに来たのだが」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ポシユン

ピカチュウはクロノからボードを預かるとPボールに戻した。

クロノ「フェイト、少しいいかい？」

フェイト「クロノ？」

少し真剣な表情のクロノにフェイトは緊張してしまった。

クロノ「ピカチュウが作ったボードを調べた結果なんだが地球の技術では再現が難しいそうだ」

フェイト「というと？」

クロノ「ピカチュウの技術は地球を超えてしまっている。下手すると狙われる可能性もある」

フェイト「そんな!?!」

クロノ「安全の為、出来るならピカチュウをフェイトの使い魔として登録しておきたいと思う」

フェイト「アリサと相談していい?」

クロノ「あの子か。今回は仕方ない、頼めるか?」

フェイト「任せて」

フェイトは引き受けるとアリサと相談する為に次の日の放課後、話しあう事になった。

アリサ「なるほどね、ピカチュウが狙われるね…納得出来るわね」

フェイト「うん、それでどうかな?」

アリサ「私の使い魔としては登録出来ないの?」

フェイト「うん、魔導師じゃないと」

アリサ「仕方ないわね」

フェイト「ごめん」

アリサ「フェイトが謝る必要はないでしょ」

フェイト「そうだけど、私だけピカチュウを独占するみたいで…」

アリサ「するの？」

フェイト「しないよ！」

アリサ「なら、問題ないでしょ」

フェイト「ありがとう、アリサ」

こうしてピカチュウはフェイトの使い魔として登録される事になった。

ピカチュウ「ピカ」ジジ！ジジジジ！

エイミー「ピカチュウ〜。お昼だよ〜」

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

ピカチュウはフェイトの部屋でレールカノン付きブースターの不具合箇所を直しているとエイミーにお昼ご飯と呼ばれた。

ピカチュウ「ピカ〜」

アルフ「お、出てきたね。お昼だよ」

ピカチュウ「ピツカ♪」

ピカチュウは椅子に座るとリンゴを受け取り…

ピカチュウ「ピファ」シャリシャリ

食べ始めた。

エイミィ「アルフの小さい姿もいいけど小動物つてのもいいよね」
♪」

アルフ「そうかもね」

ピカチュウ「ピファ？」

ピカチュウはリンゴを食べながらどうしたの？と訪ねた。

アルフ「なんでもないよ。気にしないで食べてな」

ピカチュウ「ピファ♪」シャリシャリ

ピカチュウは気にせずリンゴを食べ続けた。

18話

ピカチュウ「ピツカ〜♪」

フェイト「ただ…きやあ!？」

食事の後、ピカチュウは汗を流しフェイトが帰って来ると同時に抱きついた。

ピカチュウ「ピカ〜♪」

フェイト「も〜♪びつくりするでしょ?」

ピカチュウ「ピカ?」

フェイト「ダメじゃないけど…」

ピカチュウ「ピツカ♪」

フェイト「もう、しょうがないな♪」

すっかりデレデレになってるフェイトだった。

ピカチュウ「ピカピ?」

フェイト「学校?楽しいよ」

ピカチュウ「ピカ〜?」

ピカチュウは僕というよりも?と聞いてきた。

フエイト「そんなことないよ！」

ピカチュウ「ピカ！ピカピ！」

ピカチュウはじゃあ！一緒にいて！と、お願いしてきた。

フエイト「そ、それは…」

ピカチュウ「ピくカく！ピくカく！」

ピカチュウはグズリ始めた。

フエイト「(眠いのかな?)ほら、よしよし。いい子だから泣かないで」

ピカチュウ「ピ…カ…」

ピカチュウはフエイトに抱っこされ、背中をポンポンと叩かれてる間に眠ってしまった。

フエイト「…やっぱり寂しいのかな？」

ちよつと不安が残ったフエイトだった。

フエイト「…ってな事があったの」

アリサ「そう。やっぱり寂しいのかしら？」

フエイトは昨日のピカチュウをアリサに相談していた。

フエイト「どうしようか？」

アリサ「かまってあげる時間を増やしてみよう。様子を見ましょう。もしかしたらグズらなくなるかも知れないし」

フエイト「わかった。アリサもお願い」

アリサ「任せておきなさい」

アリサとフエイトはピカチュウのグズり対策を終えた。

アリサ「ほら、ピカチュウ！」

ピカチュウ「ピカピカピカ！ピファ！」

次の週末、アリサとフエイトは公園にきてピカチュウとフリスビーで遊んでいた。

ピカチュウ「ピファ〜♪」

アリサ「偉い偉い♪」

フエイト「次は私だよ。ほら、ピカチュウ！」

ピカチュウ「ピカピカピカ♪ピファ♪」

再びキャッチするとトコトコと戻ってきた。

ピカチュウ「ピカ〜ピ〜…ピカ〜…ピ〜」

そして夕方。ピカチュウは遊び疲れて眠ってしまった。

アリサ「遊び疲れたみたいね」

フェイト「う、うん。ピカチュウって意外とタフだね」

アリサ「小さな子供みたいだしね」

フェイト「そうだね」

アリサ「さあ、そろそろ帰りましょう」

フェイト「そうだね」

アリサとフェイト各々の家に帰っていった。

ピカチュウ「ピカ♪」

フェイト「ほら、ピカチュウ。行くよ」

ピカチュウ「ピカ！」

ある日、フェイトとピカチュウは使い魔登録するためアースラに来ていた。

フェイト「クロノ、来たよ」

クロノ「ああ。書類は用意しておいた、目を通して記入してくれ」

フエイト「わかった。ピカチュウ？ちょっと大人しく待っててね」

ピカチュウ「ピツカ♪」

フエイトが席につき、書類の確認をしている間ピカチュウは大人しく横で待っていた。

フエイト「…うん。クロノ、終わったよ」

クロノ「どれどれ…うん、問題無しだ。お疲れさま」

ピカチュウ「ピカチュウ！ピツカ！」

フエイト「うえ!？」

クロノ「どうした？」

フエイト「あ、うん。ピカチュウがね？ここに壊れた部品とかパーツはないかって」

クロノ「そんな物どうするんだ？」

ピカチュウ「ピカピ？ピカチュウ」

フエイト「新しい物を作るのに欲しいんだって」

クロノ「ふむ、確か整備室にあったと思う。僕の名前を出して持っていくといい」

ピカチュウ「ピツカ!？」

フエイト「いいの？だって」

クロノ「構わない。ただ、出来たら完成品を見せてくれると助かる」

ピカチュウ「ピカ〜♪ピカチュウ」

フエイト「いいよって。後、ありがとうだって」

クロノ「そうか、所で何処で開発をするんだい？」

ピカチュウ「ピカ…」

クロノ「完成品を見せてくれると約束出来るなら整備室を使える許可を取ろう」

ピカチュウ「ピツカ！ピカピ！」

フエイト「約束するって」

クロノ「わかった。明日には使えるようにしておく。今日は大人しくしてくれるか？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウは頷いて了承した。

ピカチュウ「ピカ〜♪」

ごちや〜ごちや〜…

次の日、ピカチュウはクロノと一緒に整備室にやって来た。

クロノ「ここにある物なら好きに使って構わない。取り扱いには注意してくれよ?。」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

クロノ「それとフエイトが来たらちやんと帰ること。いいな?。」

ピカチュウ「ピツカ!」

クロノ「ふむ、わかってくれたみたいだな。では、好きに使ってくれ」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

クロノが退室するとピカチュウはガラクタの山に向かい…

ガサゴソガサゴソ

ピカチュウ「ピカチュウ…」

使えそうな部品とか漁り始めた。

19話

フエイト「ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ〜？」

ピカチュウが一匹で部品とかの仕分けをしているとフエイトが迎えにきた。

フエイト「今日は帰るよ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウはクロノとの約束通りちゃんと帰ることにした。

ピカチュウ「ピカ〜…」

φ(∴)カキカキ

ピカチュウは戻ってくると何か書き物をしていた。

フエイト「ピカチュウ？何を書いているの？」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

フエイト「えつと…」

ピカチュウの絵は壊滅的で読み取るのが難しかったが…

フエイト「えつと…か、格好いいね！」

ピカチュウ「ピツカ〜♪」

喜んだので当たっていたらしい。

フエイト「ほら、今日はもう遅いから寝るよ」

ピカチュウ「ピツカ!」

フエイトが着替えてベットに入るとピカチュウも一緒に入って眠った。

ピカチュウ「ピツカ…」

ジジ!ジジジジ!

次の日、ピカチュウは部品とかの組み立てなどやっていた。

ガサゴソガサゴソ

キュイーン

ジジ!ジジジジ!

パラパラ!

ピカチュウは自分で仕分けした部品の取り付けや資料などを見ながら組み立てをしていた。

ピカチュウ「ピカ？ピカピ、ピツカ！」

ペラペラ

キュイーン

ジジジジ！

ピカチュウ「ピカ〜…」

ペラペラペラ

またある時は整備室にある資料を読んでは作業を続けた。

ピカチュウ「ピカ〜…」

キュイーン

ジジジジ！

ピカチュウが作業をしていると…

フエイト「ピカチュウ」

ピカチュウ「ピツカ」

迎えがやって来た。

フエイト「帰るよ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウは片付けをしてフェイトと一緒に帰っていった。

フェイト「ピカチュウ？今度は何を作ってるの？」

ピカチュウ「ピカピ？ピツカ」

フェイト「秘密？なんで？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

フェイト「びっくりさせたいから？」

ピカチュウ「ピツカ！」

フェイト「そっか。じゃあ期待してるね」

フェイトは納得してしまった。もしここでピカチュウを問いつめていれば多少は自重していたかもしれない……そして一週間後……

ピカチュウ「ピカチュウ」

クロノ「ん？ピカチュウ？どうした？」

フェイト「ピカチュウがクロノに用があるって」

クロノ「ふむ、なんだい？」

ピカチュウ「ピカチュウ！ピカピ！」

フエイト「えっと、作って物が完成したから教えに来たって」

クロノ「約束を守りに来てくれたのか、すまないな」

ピカチュウ「ピツカ！ピカピ」

フエイト「いい勉強になったしありがたいだつて」

クロノ「ちょうど休憩しようと思つてた所だ。ついでに見させてもらおう」

ピカチュウ「ピカチュウ」

フエイト達は整備室に向かった。

フエイト「ピカチュウ？これ？」

シートがかかった巨大な物が鎮座していた。

ピカチュウ「ピツピカ！チュウ〜！」

バサツとシートを取るとそこには全長四メートル位のロボットが立っていた。

クロノ「……」

フエイト「……」

ピカチュウ「ピカ？」

クロノ「なんでガラクタからこんな物が出来るんだ…」

フエイト「わかんない」

ピカチュウ「ピカピ？」

フエイト「あ、うん驚いてるよ？ただビックリしすぎてるだけ」

クロノ「こんなもどうするんだ？」

ピカチュウ「ピカ！ピッカ、ピカピカピ、ピカチュウ、ピッカ！」

フエイト「えっと、このロボットは治癒及び魔導師の魔力回復をするための機械なんだって」

クロノ「ハア!？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

フエイト「頑張って作ったって」

クロノ「ハア…ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ？」

クロノ「また預けてもらうぞ？安全の為に」

ピカチュウ「ピカ〜？」

フエイト「ちゃんと返してね？だって」

クロノ「安全ならな」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ポシユン

ピカチュウはロボットをPボールにするとクロノに預けた。

クロノ「確かに預かった」

フェイト「じゃあピカチュウ？私達も戻ろう」

ピカチュウ「ピツカ♪」

フェイトとピカチュウは自宅に戻っていった。

ピカチュウ「ピツカ、ピカチュウ」

フェイト「え？明日？ごめんね明日は用事があるんだ」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

フェイト「明日はさすがの友達に会いに行くんだ」

ピカチュウ「ピツカ！」

フェイト「ごめんね、病院の中だからピカチュウは入れないの」

ピカチュウ「ピカ〜…」

フェイト「だから帰ってきたら沢山遊ぼうね」

ピカチュウ「ピツカ♪」

約束をしたフェイトだが守る事は出来なかった。

20話

ピカチュウ「ピカ〜…ピ〜…」

そして次の日、ピカチュウはフェイトが帰ってきたら遊んでもらうため昼寝をして体力を温存していた。すると…

ピカチュウ「ピカピ!?!」

以前にもあつた野生の勘がピカチュウにフェイトが危険と知らせてきた。

ピカチュウ「ピカチュウ!」

ピカチュウはリュックを背負うと中にPボールを二つ入れて病院に向かった。

ピカチュウ「ピカチュウ!」

ピカチュウは走り続けた。間に合えと。すると…

アリサ「ピカチュウ!?!」

すずか「えっ!?!」

ピカチュウ「ピカピ!?!」

アリサ達と遭遇した。

アリサ「ねえピカチュウ、ここに来るまでに人を見かけた?」

ピカチュウ「ピ!?ピカ!」

ピカチュウは見えないと伝えた。

アリサ「やっぱり。とにかくこの辺は危険よ!逃げましょう」

すずか「う、うん」

ピカチュウ「ピカ!」

アリサ「ピカチュウ?」

その時、ピカチュウの勘がフェイトが近付いているのを感知した。

なのは「アリサちゃん!すずかちゃん!」

フェイト「二人ともじつとして!」

フェイトとなのはが降り立つとアリサ達に注意するとシールドをある方向に同時に展開した。

ズドーン!

アリサ、すずか「きやあ!」

フェイト「くっ」

なのは「強力なの!」

二人は何とか耐えしのいでいた。

ピカチュウ「ピカ！」

ガサゴソガサゴソ

ピカチュウ「ピカ！」

ピカチュウはリュックを下ろすと中からPボールを…

ポシユン

割るとレールカノン付きブースターを出した。

ピカチュウ「ピカ！」

ピカチュウはブースターを取り付けると砲撃の下に向かった。

フエイト「ピカチュウ!？」

ごおー

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ！」

ピ、ピ、ピ、ピ！

ピカチュウ「ピカ〜！」

ピカチュウは砲撃を放ってる人物を見つけるとロックしてレールカノンを撃った。

闇の書「クツ！」

当たり前こそしなかったが牽制にはなった。

「ごぉー！」

ピカチュウは通り過ぎると再び反転して戻ってきた。

ピカチュウ「ピカ！」

そして再び闇の書に向けてレールカノンを撃った。

闇の書「小賢しい！」

ピカチュウ「ピカ!？」

ピカチュウは闇の書が放った魔法弾をバレルロールで回避して通りすぎた。

ピカチュウ「ピカチュウ……」

ピカチュウは悟ってしまった……空中戦の経験が無いに等しい自分に不利だと言うことに。

ピカチュウ「ピカ！」

フエイト「ピカチュウ！」

しかしピカチュウが再び向かおうとするとフエイトとなのはがやって来た。

フエイト「ピカチュウは逃げて！」

ピカチュウ「ピカピ！」

ピカチュウは出来ないと鳴いた。

なのは「フェイトちゃん前！」

フェイト「ツ!？」

ピカチュウ「ピカ！」

ズビュン!

闇の書「クツ」

闇の書が接近していたがピカチュウのレールカノンで牽制して近づくのを阻止した。

ピカチュウ「ピカ…チュウ！」

闇の書「グアゝ!？」

更にピカチュウは電撃を放ち闇の書にダメージを与えた。

フェイト「…ピカチュウ？手を貸してくれる？」

なのは「フェイトちゃん!？」

フェイト「なのは、今の私達じゃ火力が足りない。でもピカチュウなら」

なのは「…わかったの。ピカチュウ？後方支援をお願い」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウは任せて！と鳴き、後方支援を始めた。

ピカチュウ「ピカピカピカピカ！」

闇の書「たかが一匹の小動物が加わっただけで戦況が逆転したただと！」

ピカチュウ「ピカ！」

フェイト「ハア！」

闇の書「クツ！」

ピカチュウ「ピッカ…チュウ!!」

ピカチュウは10万ボルトを闇の書に向けて放った。

闇の書「ハアハア…グツ!？」

その時闇の書に異変が起きた。

なのは「どうしたの？急に苦しみだしたの」

闇の書が苦しんでいると念話が聞こえてきた。

はやて『外の方！協力してください！』

なのは「はやてちゃん!?!」

はやて『なのはちゃんなんか!?!話が早い!協力してほしいんよ!』

フェイト「どうすればいいの?」

はやて『フェイトちゃんも居るんか!?!ウチがこの子を抑えてるからその間に防衛プログラムを切り離してほしいんよ!』

なのは「でも、どうやって!?!」

ユーノ『なのは、フェイト。聞こえるかい?』

なのは「ユーノ君!」

ユーノ『今から言うことを聞いて。二人の純粋な魔力攻撃で闇の書を攻撃して!手加減抜きで!』

なのは「流石ユーノ君!」

フェイト「わかりやすい!」

なのはとフェイトはデバイスを構えると…

なのは「ディバイーン…バスター!」

フェイト「サンダー…スマシャー!」

砲撃を放った。

ズドン!

ピカチュウ「ピカ…」

ピカチュウは敵ながらちよつとかawaiiそうに思えた。

なのは「……」

フエイト「……」

砲撃の後、闇の書は黒い球体と白い球体に別れておりなのは達は互いに背中を預けて監視しており、ピカチュウは辺りを飛び回っていた。

ピキピキピキ

すると白い球体がひび割れていき…

パリン!

割れると一人の少女…はやてが現れた。

はやて「おいで、私の騎士達」

はやてが眩くと光の柱が伸びヴォルケンリッターが現れ…

ヴィータ「はやて!」

再会を喜びあっていた。

なのは「よかったね」

フェイト「よかったね、はやて」

はやて「二人ともごめんな？色々…」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

フェイト「わっと♪おかえり、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカピ！」

フェイト「うん、頑張ってたね♪」

ピカチュウ「ピカ！」

ピカチュウの手の先を見るといつの間にか黒い球体は黒い淀みになっ

エイミー『なのはちゃん、フェイトちゃん。クロノ君が着くまで黒い淀みに手を出さないでね。何が起きるかわからないからね』

フェイト「うん。わかった」

なのは「はやてちゃん、あれが何かわかる？」

はやて「アレは闇の書の防衛プログラム。もうじき暴走する」

フェイト「もう少し頑張らないとね」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

はやて「所でフェイトちゃん？」

フエイト「何？」

はやて「その子が噂のピカチュウなん？」

ピカチュウ「ピカ？」

フエイト「そうだよ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

はやて「かわええ♪」

ピカチュウ「ピカ／＼／＼ピカ？ピカピ！」

防衛プログラム「グオーー！」

黒い淀みから巨大な怪物：防衛プログラムが現れた。

フエイト「エイミイ！クロノは！」

クロノ「今、着いた」

なのは「クロノ君どうするの？」

クロノ「強力な氷結魔法で封印するか消滅させるしかないな」

シャマル「封印は難しいと思います。無限に再生するので…消滅させないかぎり」

クロノ「問題は消滅させる方法だな」

ピカチュウ「ピカピカ！ピカチュウ！」

フエイト「うえ!？」

クロノ「どうした？」

フエイト「えつとね？ピカチュウが空に打ち上げてアースラのアルカンシエルでトドメだつて」

クロノ「何でアースラの装備を知ってる？」

ピカチュウ「ピカピ」

フエイト「整備室の端末から覗いたつて」

クロノ「とりあえず説教は後回しだ。今はピカチュウの提案でいこう。反対の者はあるか？」

なのは達「……」

クロノ「では、皆配置についてくれ」

なのは達は作戦を決めると戦闘配置についた。

ピカチュウ「ピカ〜…」

シヤマル「貴方は私といましようね」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウが鳴くと戦闘が始まった。

ザファイラ「縛れ！鋼の軛！」

ザファイラの魔法が防衛プログラムを捕らえると…

ヴィータ「轟天爆碎！ギガントシユラーク！」

なのは「エクセリオン…バスター！」

ヴィータとなのはの攻撃で二つのシールドを破壊して…

シグナム「駆けよ！隼！」

フェイト「撃ち抜け、雷神！」

シグナムとフェイトが二つのシールドを更に破壊した。

クロノ「悠久なる凍土、凍てつく棺のうちにて、永遠の眠りを与えよ！凍てつけ！」

クロノが氷結魔法で凍らせた。

クロノ「なのは、フェイト、はやて！」

なのは「全力全開！スターライト…」

フェイト「雷光一閃！プラズマザンバー…」

はやて「響け終焉の笛！ラグナロク…」

三人がデバイスを防衛プログラムに向けると…

なのは達「ブレイカー！」

砲撃を放った。

シャマル「……捕まえ……た！」

シャマルが砲撃の嵐の中、崩壊してく防衛プログラムのコアを探しあてた。

ユーノ「長距離転送！」

アルフ「目標軌道上！」

ユーノ達「転送！」

コアをアースラの前方に転送した。

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

ピカチュウが空を眺めていると…

チカツ

空で小さな光が光った。

エイミィ『こちらアースラ！目標健在！』

クロノ「アルカンシエルでもダメなのか!?!」

ピカチュウ「ピカ！」

ごお〜！

その時、ピカチュウはレールカノン付きブースターを纏うと空に向かって上がり始めた。

フエイト「ピカチュウ！何処に行くの！」

フエイト達はピカチュウを追いかけて空に向かった。

ピカチュウ「ピ…ピカ…」

ごお〜！

ピカチュウはレールカノン付きブースターで防衛プログラムを遠距離から捉える事が出来たので…

ピカチュウ「ピカ！」

レールカノン付きブースターに乗つかると…

ピカチュウ「ピ…カ…チユウ〜！」

ピカチュウは隠し玉、破壊光線を防衛プログラムに向けて放った。

キラッ！

ドーン！

先の方で光が弾けると…

エイミー『嘘!? 防衛プログラム…消失!』

なのは達「ええ〜!？」

ピカチュウ「ピツピカチュウ！」

ピカチュウは勝利の雄叫び? というか鳴いた。

フエイト「ピカチュウ? 後でおはなしだよ！」

ピカチュウ「ピカ!？」

ピカチュウは何で!?! と鳴いた。

フエイト「無茶した罰です」

ピカチュウ「チャ〜…」

何とも締まらないオチだった。

21話

アリサ「全く！何をしてるの！」

フェイト「危ない事しちゃダメでしょ！」

ピカチュウ「チャ〜…」

事件解決後、ピカチュウはアリサとフェイトにお説教されていた。

アリサ「ピカチュウが戦う必要ないでしょ！」

ピカチュウ「ピカ！ピカピ！」

アリサ「何ですって？フェイトと一緒に戦ってって言ったですって？」

フェイト「……」

アリサ「フェイト、ちよつとそこに座りなさい」

フェイト「はい……」

このあと小一時間、アリサにお説教された一匹と一人だった。

ピカチュウ「ピカチュウ……」

アリサ「久しぶりねこの感触♪」

事件直後、ピカチュウはアリサの家に戻りモフモフされていた……
二時間程。

ピカチュウ「ピカ〜」

アリサ「しようがないわね。はい」

ピカチュウが離してと鳴くとアリサは満足したのか下に降ろした。

ピカチュウ「ピカ〜」

すずか「次は私だね」

ピカチュウ「ピカチュウ!？」

すずか「ん〜♪」

ピカチュウ「ピカ〜…」

ピカチュウは再び二時間程モフモフされた。

ピカチュウ「……」

返事がない、まるでしかば…

ピカチュウ「ピカ〜!」

アリサ「急にどうしたのよ?」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「ハア？叫ばなきゃいけないかった？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「さて、なのは達は忙しいだろうから…」

ピカチュウ「ピカピ？」

アリサ「私達はのんびりしましょう」

ピカチュウ「ピカ♪」

すずか「でも、なのはちゃん達凄いな」

アリサ「そうね、私達は見てるだけしか出来なかったですもの」

すずか「…アリサちゃんは戦いたいの？」

アリサ「戦いたいというより、守りたいね」

アリサとすずかの視線がピカチュウにいった。

ピカチュウ「ピカ？」

アリサ「私にも力があればね…」

ピカチュウ「……」

アリサがピカチュウを見ながら呟くとピカチュウは視線をそらし
た。

アリサ「…ねえピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

アリサ「何で今、視線をそらしたのかしら？」

ピカチュウ「ピ…ピカッ！」

ピカチュウはそ、そんなことないよ！と鳴いた。

アリサ「ねえピカチュウ」

ピカチュウ「ピ…ピカ？」

アリサ「私達の間で隠し事はいけないと思うわよね？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウは、もちろん！と鳴いた。

アリサ「じゃあピカチュウ？【何を】隠しているのかしら？」

ピカチュウ「ピカッ？」

ピカチュウは、なんの事？と鳴いた。

アリサ「ピカチュウ？白状するのと、させられるのとどっちがいい？」

ピカチュウ「ピカピ!？」

アリサは気づいていた。ピカチュウが何かしらの戦う手段を考え

ている事に。

アリサ「ほら、はきなさい」

ピカチュウの前に一個のリンゴが置かれた。

ピカチュウ「ピカ〜…」

アリサ「……」コトン

アリサはもう一つリンゴを置いた。

ピカチュウ「ピ…ピカ〜…」

アリサ「これなら？」コトンコトン

アリサは一気に二個置いた。

ピカチュウ「ピカチュウ？」

ピカチュウはアリサの誘惑に負けて、見せるだけだよ？と鳴いた。

ピカチュウ「ピカ…」カチカチ。ポチポチ

アリサ「パスワードまでかけて…」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウはアリサのパソコンに自分が設計してる物を映した。

アリサ「何これ？」

ピカチュウ「ピカピ！」

すずか「パワードスーツ？」

ピカチュウ「ピカ！」

アリサ「アンタは私達にメタルヒロインにでもなれと？」

ピカチュウ「ピカ？」

ピカチュウは嫌でしょ？と鳴いた。

アリサ「もつと可愛いデザインに出来ないの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウは予算が無いから無理。と鳴いた。

アリサ「現実問題ね」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

せめてアルバイトが出来れば…と鳴いた。

アリサ「ていうかピカチュウに何が出来るの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「データ入力位ならって」

アリサは頭をおさえた。

「さすが「出来る地点で凄いよ」

ピカチュウ「ピカ…」

アリサ「後は？」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「株で儲ける!？」

ピカチュウ「ピカ！」

アリサ「個人情報とかどうするの?」

ピカチュウ「ピカピ！」

アリサ「偽造なんてダメに決まってるでしょ!」

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「まったく…」

ピカチュウ「ピカピ…」

アリサ「何よ?こうなったら?」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

アリサ「大道芸で稼ぐですって?」

ピカチュウ「ピカ！」

アリサ「却下よ」

ピカチュウ「ピカ!？」

ピカチュウが何で!?!と鳴くと…

アリサ「誘拐されたらどうするの!ただでさえピカチュウは珍しいんだから!」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

アリサ「何よ?最後の手段って?」

ピカチュウ「ピカピ、ピカチュウ」

アリサ「壊れた家電製品を直してフリーマーケットで売ってますって?」

すずか「一番安全な気がするよ」

アリサ「そうね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「とりあえずパパに相談しましょう。子供の私達には判断出来ないわ」

すずか「そうだね、私もお姉ちゃんに相談してみるよ」

アリサ「お願い」

こうしてピカチュウのアルバイト探しが始まった。

22話

デビット「ピカチュウのアルバイト？」

アリサ「うん、パパ？いい案ない？」

デビット「ふむ：データ入力はどれくらい出来るのかね？」

ピカチュウ「ピカピ、ピカチュウ」

アリサ「えつと、文字入力なら日本語と英語なら」

ピカチュウ「ピカチュウ！ピカピカ」

アリサ「後、OS？位なら作れるって」

デビット「何？」

アリサ「どうしたの？パパ？」

デビット「ピカチュウ、この紙のデータをパソコンで打ち込んでみてくれないか？」

ピカチュウ「ピカピ！」

デビットがパソコンをピカチュウに向けると…

ポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチ
ポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチ
ポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチ
ポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチ
ポチポチポチポチポチポチポチポチ。

アリサ「はやっ!？」

凄まじい勢いで打ち込んでいた。

デビット「……」

ピカチュウ「ピカく…チュウ!」

ピカチュウはパソコンをデビットに向けた。

デビット「ふむ」

デビットはパソコンを操作してピカチュウの打ち込んだデータを見ている。

デビット「ピカチュウ、次はこれを打ち込んでみてくれないか？」

ピカチュウ「ピカ?ピカチュウ!」

ポチ。

アリサ「パパ?」

ピカチュウ「ピカ!」

ピカチュウは打ち込みが終わるとデビットにデータを見せた。

デビット「ふむ、正確なうえ速いな」

ピカチュウ「ピカ」

デビット「……よし。ピカチュウ、アルバイトとして私のデータ打ち込みを代わりにやるのはどうだい？」

ピカチュウ「ピカピ!？」

アリサ「雇ってくれるの?だって」

デビット「極秘だがな。ピカチュウ、出来るかね？」

ピカチュウ「ピッピカチュウ」

ピカチュウは胸を叩いて出来ると頷いた。

デビット「そうになるとパソコンが必要になるな」

ピカチュウ「ピカ〜…」

デビット「私のお古で良ければ使うか？」

ピカチュウ「ピカピ!」

アリサ「いいの!だって」

デビット「初期化するから明日の朝に渡そう」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

アリサ「ありがとうだって」

デビット「さて、今日はもう遅い。そろそろ寝なさい」

アリサ「うん、パパ。おやすみなさい」

ピカチュウ「ピカ〜」

デビット「ああ、おやすみ」

アリサ達は仲良く一緒に眠りについた。

ピカチュウ「ピカ〜♪」

次の日の朝、約束通りデビットにノートパソコンを貰ったピカチュウはご満悦だった。

ピカチュウ「ピ!?!ピカチュウ」

ポチポチポチポチ

余韻に浸っていたピカチュウは現実に戻ってきて、打ち込みのバイトを始めた。

ピカチュウ「……」

ポチポチポチポチ

ピカチュウはひたすら打ち込んでいた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウは入力が終わるとデビットに送信した。

ピカチュウ「ピカ〜」

ピカチュウは返信が来るまで設計図を書き込んでいた。

ピロリン♪

ピカチュウ「ピカ！」

ピカチュウがメールを読むとデビットからで問題なしと帰ってきた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウは安心すると次の打ち込みを始めた。そんな日常を一週間続けたある日：

はやて「ピカチュウ！プログラミングが出来るんやって！」

はやてがやって来て突然質問してきた。

ピカチュウ「ピカ〜」

はやて「…何を言ってるかわからへん」

アリサ「出来るよですって」

はやて「なら、リインフォースを直してくれへんか!？」

ピカチュウ「ピ!?ピカチュウ!」

アリサ「ちゃんと説明しなさい」

はやて「えつとやね…」

はやてはリインフォースがこのままだと新しい防衛プログラムに支配され暴走すると話した。リインフォースはこのままだと周りや、はやてを巻き込んでしまうと行って自分の破壊を申し出た。だが、はやてはこれを拒否していた。そこでリインフォースを直せる者はいないかとなって、プログラムを作れるものを探していたらピカチュウの名があがった。

はやて「という訳なんや!お願いや!」

もう藁にもすがる思いのはやてだった。

ピカチュウ「ピカチュウ…」

アリサ「見てみないとわからないですって」

はやて「これがデータのコピーや」

ピカチュウ「ピカピ」

ピカチュウは受け取ったデータを見てみた。

ピカチュウ「ピカ…ピカピ」

アリサ「データの損傷が多いですって」

ピカチュウ「ピカピ」

アリサ「新しい更新プログラムを作ってアップデートした方が安全ですって」

はやて「つまり直るんやね!」

ピカチュウ「ピカピ、ピカチュウ」

アリサ「作るのに時間がかかるですって」

はやて「どれくらい?」

ピカチュウ「ピカ〜…ピカチュウ」

アリサ「データを比較しながらだから一週間は最低かかるですって」

はやて「お願い出来るか?」

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ」

アリサ「バイトの合間に作っておくですって」

はやて「ピカチュウ、バイトしてるん!?!」

アリサ「まあね。とりあえず完成したら連絡するわ」

はやて「う、うん!頼むわ」

はやては帰っていった。

ピカチュウ「ピカピ」

アリサ「パワードスーツの設計が遅れる？仕方ないわよ」

ピカチュウ「ピカ〜」

ポチポチポチポチ

ピカチュウは打ち込みをしながらリインフォースの新しいプログラムを頭の中で考えて作業していた。

23話

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

そしてお正月、ピカチュウは封筒を掲げて喜びを露にしていた。

アリサ「何をそんな…ああ、お給料が出たのね」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

アリサ「因みにいくら位？」

ピカチュウ「ピカ〜」

ピカチュウはお札をテーブルに並べた。

アリサ「二十万!? 高っ！」

ピカチュウ「ピカピ〜♪」

アリサ「ピカチュウ…侮れないわね」

ピカチュウの底力を知ったアリサだった。そしてそれと同時に…

ピンポーン

アリサ「はやてが来たのかしら？ 行くわよピカチュウ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウはお札をしまおうとアリサを追いかけた。

はやて「ピカチュウ！出来たんやて！」

ピカチュウ「ピカ！」

ピカチュウはUSBメモリを渡した。

はやて「これでリインフォースを助けられる！」

アリサ「良かったわね」

はやて「ほなら、早速！」

はやては急いで自宅に帰っていった。

ピカチュウ「ピカピ」

アリサ「そうね、私達もゆっくりしましょうか」

アリサ達もゆっくりして過ごした。

ピカチュウ「ピカ」

キュイーン

ジジ！

ペラペラ

ピカチュウ「ピカ〜」

アリサ「ピカチュウ〜」

ピカチュウ「ピカピ?」

アリサ「お正月位ゆつくりしなさいよ」

ピカチュウ「ピ?ピカ〜」

ピカチュウは開発を止めてアリサと一緒に出掛ける事にした。

すずか「アリサちゃん、こっちこっち!」

アリサ「ハイ、すずか」

すずか「こんにちは、アリサちゃん」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

すずか「こんにちは、ピカチュウ♪」

アリサ「それでどうしたの?」

すずか「うん、ピカチュウのアルバイトなんだけど…」

アリサ「あ〜…」

アリサはピカチュウのアルバイトが見つかった事を伝えた。

すずか「そうなんだ…」

ピカチュウ「ピカピ？」

ピカチュウはどんなアルバイトか聞いてきた。

すずか「ん？データ入力のアバイトだよ」

ピカチュウ「ピカ！」

ピカチュウはやる！と鳴いた。

すずか「でも大変だよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

大丈夫！と鳴いた。

すずか「そう？じゃあピカチュウ？アドレスとか教えてくれる？」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウはパソコンのメールアドレスを教えた。その日の夜…

ピカチュウ「ピカ」

ポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチ
ポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチ
ポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチ

ピカチュウは早速、すずかに紹介されたアルバイトをしていた。

アリサ「ピカチュウ？パパから追加のアルバイトが来たわよ」

ピカチュウ「ピカピ！ピカチュウ」

ピカチュウは礼を言うと言った紙の束を机に置いて貰った。

ピカチュウ「ピカ！チュウ！」

ピカチュウはアルバイトを沢山こなしては…

ピカチュウ「ピカチュウ！」

キュイーン♪

ジジ！ジジジ♪

開発を進め、数週間が過ぎた。

ピカチュウ「ピカピく♪」

バタン！

アリサ「きゃあ!？」

ある日、ピカチュウはアリサの部屋に飛び込んで来てアリサが驚いていた。

ピカチュウ「ピカピ！ピカチュウ！ピカチュウ！」

アリサ「ハア？ パワードスーツが完成したですって!？」

ピカチュウ「ピツカ！」

アリサ「ちよつと待つてなさい。もう少しで宿題が終わるから」

ピカチュウ「ピツカ」

アリサは先に宿題を終わらせて：

アリサ「…よし！ 見に行くわよ」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

アリサはピカチュウを連れて庭に向かった。

アリサ「それで庭に来てどうするの？」

ピカチュウ「ピツピカチュウ！」

ピカチュウがPボールを投げると…

ボン

アリサより少し大きい赤いステレス機があった。

アリサ「戦闘機!？」

ピカチュウ「ピカチュウ！ピカピ、ピカチュウ！」

アリサ「戦闘機は仮の姿？ パーツが分解して鎧になるですって？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「ふーん…どうやって？」

ピカチュウ「ピツカ」

アリサ「音声認識ですって？」

ピカチュウ「ピツカ！ピカチュウ」

アリサ「登録すればすぐに使えるのね」

ピカチュウ「ピツカ」

アリサ「なら早速登録しましょう」

ピカチュウ「ピカ!?ピカピ！」

アリサ「何でダメなのよ？」

ピカチュウ「ピツカ！」

アリサ「危ないって私が着けなくて誰がつけるのよ」

ピカチュウ「ピツカ…」

アリサ「さあ、登録しちゃいましょう」

ピカチュウ「ピツカ？」

アリサ「本気に決まってるでしょ」

ピカチュウ「チャ〜…」

ピカチュウは諦めるとアリサの声を登録した。

アリサ「これで私の物になった訳ね」

ピカチュウ「ピカピ!？」

ピカチュウは何を言ってるの!?!と鳴いた。

アリサ「これで私以外使えないでしょ？」

ピカチュウ「ピ!?!ピカチュウ！」

ピカチュウは、は!?!しまった!と鳴いた。

アリサ「ふふ♪」

ピカチュウ「ピカチュウ!?!」

謀られたく!?!と鳴くピカチュウだった。

アリサ「甘いわね♪」

ピカチュウ「ピカ〜…」

アリサ「さあ、気をとりなおしてやるわよ」

ピカチュウ「ピカ〜ピツカ！」

アリサ「OK、着装って叫べばいいのね」
ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「よし！着装！」

ガシヤン

ステレス機の下からパーツがバラバラになるとアリサの体…手足、肩、腰、胸、最後にステレス機自体が背中についた。

アリサ「…私に勇者か岩男になれとでも？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「夢…ね。デザインは悪くないわね」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

満足した？と聞くと…

アリサ「武器は？」

ピカチュウ「ピカピ」

アリサ「制作中ね」

ピカチュウ「ピツカ」

アリサ「これ、どうやって外すの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「OK、スタンバイ！」

ガシヤン

鎧はステレス機に戻った。

ピカチュウ「ピツカ」

ポシユン

ピカチュウはステレス機をPボールに戻してしまった。

アリサ「さて、じゃあ武器のデザインを考えましょう」

ピカチュウ「ピツカ！ピカピ！」

ピカチュウはちよつと！僕の楽しみを！と鳴いた。

アリサ「ピカチュウに任せるとネタに走るでしょ？」

ピカチュウ「ピ、ピカゝ…」

凶星をさされたピカチュウはどもった。

アリサ「ほら、ピカチュウの部屋に行くわよ」

ピカチュウ「ピ、ピカチュウ！」

アリスが歩き出すとピカチュウも後を追いかけた。

24話

ピカチュウ「ピツカ！」

ポチポチポチポチ

明くる日、ピカチュウは打ち込みのバイトをしていた。

コンコン

アリサ「ピカチュウく、入るわよ？」

ピカチュウ「ピカピク」

ピカチュウが、どうぞくと鳴くとアリサとすずかが入ってきた。

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ♪」

すずか「こんにちは、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカピ？」

すずか「うん、ピカチュウにお話しがあつて♪」

ピカチュウ「ピ、ピカ？」

すずかの笑顔が何故か怖いピカチュウだった。

すずか「ピカチュウ、ズルいなく？アリサちゃんだけパスワードスー
ツを貰えるなんて♪」

ピカチュウ「ピカ!?ピカチュウ！」

え!?あげてないよ!と鳴いた。

すずか「アリサちゃんからピカチュウに貰ったって聞いたよ?」

ピカチュウ「ピカピ!」

ピカチュウがアリサを見ると:

アリサ「…えへ?」

アリサはPボールを持って笑っていた。

ピカチュウ「ピカ!ピカ〜!」

それ!僕の〜!と鳴きながらPボールを取り返しにアリサに駆け寄った。

アリサ「いいじゃない。減るもんじゃないし」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

減るよ!と鳴きながらPボールを取り返した。

ピカチュウ「ピカチュウ」

すずか「欲しいなく?」

ピカチュウ「ピ!」

すずか「欲しいなく？」

ピカチュウ「ピカ〜…」

すずか「欲、し、い、な？」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

ガサゴソガサゴソ

ピカチュウ「ピカチュウ」

パワードスーツ二号…：涙目には勝てないピカチュウだった。

すずか「やった！」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウは電卓を出すと数字を打つてすずかに見せた。

すずか「なに？これ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウはパワードスーツの値段と鳴いた。

すずか「お金取るの!？」

ピカチュウ「ピツカ！」

当然！とばかりに鳴いた。

すずか「えつと……えへ？」

ピカチュウ「ピツカ」

ピカチュウはすずかからPボールを奪った。

すずか「子供に払える金額じゃないよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ、ピツカ」

すずか「それは確かに遊び道具じゃないけど……」

アリサ「減るもんじゃ……」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

減るよ！と鳴いた。

アリサ「残念ね」

すずか「本当だね……」

現実問題で打ち切られた。

フエイト「こんにちは〜♪」

ピカチュウ「ピツカ〜♪」

ある日、事件解決したため、やっと手が空いたフェイトがやって来てピカチュウの盛大な出迎えをもらった。

フェイト「う〜ん、ピカチュウ♪」

ピカチュウ「チャ〜♪」

アリサ「いらっしやい、フェイト」

フェイト「こんにちは、アリサ」

アリサ「さあ、いつまでもこんな所にいないで中に入って」

フェイト「お邪魔します」

フェイトはピカチュウの部屋に通された。

フェイト「ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ？」

フェイト「クロノからこれを預かってきたよ」

フェイトはPボールをピカチュウに渡した。

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

アリサ「何それ？」

ピカチュウ「ピツカ、ピツカピカチュウ」

アリサ「支援メカですって？」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「いつ作ったのよ？」

ピカチュウ「ピツカ、ピカチュウ」

アリサ「フェイトの家に居るときに、ね」

フェイト「ん〜♪」

ピカチュウ「ピカ〜…」

「いまだにモフモフしているフェイトにピカチュウは離してと願った。」

フェイト「しょうがないな〜…」

ピカチュウ「ピカ〜」

解放されたピカチュウは伸び〜つとした。

フェイト「それとクロノから伝言」

ピカチュウ「ピカ？」

フェイト「それを譲って貰えないか？だって」

ピカチュウ「ピカ〜」

フェイト「わかった。ダメって伝えておくね」

アリサ「ちなみに支援メカってどんなの？」

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ♪」

アリサ「普通のロボット♪じゃないわよ！何でそんなの作れるのよ！」

ピカチュウ「ピカ…」

アリサ「それは？」

ピカチュウ「ピカ…」

アリサ「ゴクツ…それは？」

ピカチュウ「ピツカ、チュウ♪」

アリサ「わからないなら最初っからそう言いなさい！」

ピカチュウ「チャ〜…」

こっぴどく怒られたピカチュウだった。

ピカチュウ「ピカ？」

ピカチュウは所で？と鳴いた。

アリサ「何？」

ピカチュウ「ピカピ」

アリサ「あつそ、武器が…出来たの!？」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

フエイト「武器？」

アリサ「先に見せなさいよ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ガサゴソガサゴソ

ピカチュウ「ピカピカ、ピツカ！」

アリサ「怒られるわよ！」

ピカチュウ「チャ〜…」

本日二度目のダメ出しだった。

アリサ「それでこの細長い物は何？」

ピカチュウ「ピツカ」

アリサ「手元のスイッチ？」

ポチ

ブン!

アリサ「ビームソード!?!」

ピカチュウ「ピツカ♪」

アリサ「何でも作ってるのよ…」

ピカチュウ「ピカチュウ?ピツカピカチュウ」

ダメなら他のにする?時間がかかるけど。と鳴いた。

アリサ「いえ…アリね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ポチポチポチ

ピカチュウは電卓を打って金額を出した。

アリサ「これもお金取るの!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「…ローンで」

ピカチュウ「ピカピ?」

未成年だよ?と鳴くと…

アリサ「他に買い手がいるの？」

ピカチュウ「ピツカ♪」

フエイトを指した。

フエイト「私!？」

ピカチュウ「ピカチュウ……ピツカピ？」

ピカチュウは安くしとくよ……特別に。と鳴いた。

アリサ「……」

フエイト「えつと……」

アリサからの無言のプレッシャーに……

フエイト「私にはバルデイツシユがあるから」

ピカチュウ「ピツカ……」

アリサ「さあ？どうするの?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「封印するくらいなら頂戴よ!」

ピカチュウ「ピカピ？」

ローンで払ってね?と鳴いた。

アリサ「わかったわよ…」

ビームソードを受け取ると売買の約束が決まった。

アリサ「それでこれで何が出来るの？」

ピカチュウ「ピツカピ。ピカチュウ」

そのビームソードは人とかは斬れないけど麻痺させる事は出来るらしい。

アリサ「ふーん」

ポトン

アリサが置いてあるガラクタを叩くと真つ二つに斬れた。

アリサ「ちよつと!?何で人は斬れないのに物は斬れるのよ!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ご都合主義と鳴いた。

アリサ「本当にあんたは…何なの？」

ピカチュウ「ピ?ピツカピカチュウ」

僕?僕はドクターピカチュウと鳴いた。

アリサ「何時からドクターになったのよ!」

ピカチュウ「ピカチュウ」

今さっき。と鳴いた。

アリサ「もういいわ。ツツコムにも疲れたし」

フェイト「えっと……頑張つて？」

アリサ「その内フェイトも同じ悩みを持つわよ」

そう呟くアリサだった。

25話

ピカチュウ「ピツカ！」

ポチポチポチポチ

ある日、ピカチュウが入力バイトをしていると…

アリサ「ピカチュウ、入るわよ」

ピカチュウ「ピツカ？」

すずか「こんにちは、ピカチュウ♪」

ピカチュウ「ピカ…」

デジャビュを感じたピカチュウだった。

すずか「水くさいなピカチュウ♪ビームソードなんてもの作ったのに教えてくれないなんて♪」

ピカチュウ「ピカ…」

すずか「し・か・も♪ローンで買わせてくれるのを黙ってるなんて♪」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

アリサ「……」

プイ

アリサを恨めしそうに見たら目をそらされた。

ピカチュウ「ピカ〜…」

ガサゴソガサゴソ

ピカチュウ「ピツカ」

ピカチュウはビームソードをすずかに渡した。

すずか「ありがとう♪」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウは入力バイトを再開した。

すずか「パワードスーツは？」

コテン

ピカチュウは椅子から落っこちた。

アリサ「あ、私も欲しい」

ピカチュウ「ピカチュウ!?ピツカピカチュウ！」

アリサ「いいじゃない。売れるんだから」

ピカチュウ「ピカ〜…」

すずか「お願い、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカチュウ？ピツカ」

悪いことに使っちゃダメだよ？と念をおした。

アリサ「当然よ」

ピカチュウ「ピカ〜…ピカチュウ！」

ピカチュウはこの二人に渡して平気と判断すると…

ピカチュウ「ピカ」

Pボールを渡した。

アリサ「これで私達もものは達に負けないわね」

すずか「結局そこなんだね、アリサちゃん」

アリサ「私達だけが何も出来ないなんて悔しいじゃない！」

すずか「それは…」

アリサ「そうと決まれば特訓よ！」

すずか「ええ!？」

アリサ「私達は戦いに関しては初心者よ？特訓しかないじゃない」

すずか「どうやって？」

アリサ「……」

チラリ

ピカチュウ「……」

サツ

アリサからの視線を反らすピカチュウだった。

アリサ「さて、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピ、ピカ？」

アリサ「キリキリ吐きなさい」

最初から確信を持って交渉してきた。

ピカチュウ「ピカ……」

アリサ「…そう。あくまでもシラをきるのね」

ゴトン

アリサはどこから出したのかカゴに乗った沢山のリンゴを出した。

ピカチュウ「ピ、ピカチュウ！」

ピカチュウはゆ、誘惑には負けないよ！と鳴いた。

アリサ「なら、これでどう?」

ゴトン

ピカチュウ「ピカチュウ!」

アリサはカゴに沢山乗った梨を出してきた。

アリサ「どう?美味しいわよ?取り寄せたばかりだからね」

ピカチュウ「チャ〜…」

誘惑に負けるピカチュウだった。

ピカチュウ「ピカチュウ…」

ピカチュウは仮想シミュレーターを取り出した。

アリサ「最初から出しなさいよ」

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ。ピツカピカチュウ」

アリサ「OK、使い方は理解したわ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「早速特訓よ」

すずか「ええ!?待ってよアリサちゃん」

結局、すずかもついていき特訓が始まった。だが…

アリサ「素人相手になんて設定してるのよ！」

すずか「せめて遠距離用の武器があれば…」

ビュンビュンと仮想敵からビームが放たれていて、アリサとすずかは物影に隠れていた。

アリサ「一か八か、突っ込むわよ！」

すずか「アリサちゃん!？」

アリサ「やゝ！」

勢いよく突っ込むが…

ピチュン

アリサ「きやあく!？」

レーザーに撃たれてアリサは下着姿になった。

すずか「アリサちゃ…は!？」

ピチュン

すずか「きやあく!？」

今度はすずかもである。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

パシヤパシヤパシヤパシヤ

アリサ「何撮ってるのよ!？」

すずか「ピカチュウ!？」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

アリサ「ネットに流すなんてやめなさいよ!」

ピカチュウ「ピツカピカチュウ」

アリサ「されなくなかったらクリアしろですって!？」

ピカチュウ「ピツカ♪」

アリサ「すずか!やるわよ!」

すずか「ええ!？」

アリサ「こんな姿!ネットに流されていいの!」

すずか「わ、わかった!」

二人は何とか仮想敵、二機を破壊した。すると…

アリサ「あれ?服が元に戻ってる…」

ピカチュウ「ピカチュウ」

そういう仕様と伝えた。

すずか「うう…服を脱がす意味があるの？」

ピカチュウ「ピカチュウ？ピツカ！」

真剣になるでしょ？と鳴いた。

アリサ「さあ、ピカチュウ。さっきのデジカメのデータを渡しなさい」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウは首を振って答えた。

アリサ「渡しなさい」

ピカチュウ「ピツカピカ」

ピカチュウは一人前になったら返すと鳴いた。

アリサ「いいから返しなさい！」

ピカチュウ「ピツカ？」

ピカチュウは一人前になれないの？と鳴いた。

アリサ「いい度胸ね！やってやろうじゃないの！」

ピツ

ピカチュウ「ピツカ〜♪」

今度はICレコーダーで録音していた。

すずか「アリサちゃん!?!」

アリサ「しまった!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

そのままピカチュウは去っていき、デジカメとICレコーダーを何処かに隠してしまった。

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

本日はとても黒いピカチュウだった。

ピカチュウ「ピツカピカ〜…」

ポチポチポチポチ

ピカチュウは入力バイトをこなして着々とお金を貯めていた。

アリサ「ピカチュウ〜」

ピカチュウ「ピカ?」

ピカチュウの部屋にアリサとすずかがやって来た。

ピカチュウ「ピカピ？」

アリサ「あのね？遠距離用の武器が欲しいんだけど？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

銃刀法違反。

アリサ「そこを何とかするのがピカチュウでしょ？」

ピカチュウ「ピカ〜…」

アリサの無茶ぶりにピカチュウは…

ガサゴソガサゴソ

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「何これ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

レーザー式銃と鳴いた。

アリサ「あるなら最初から出しなさいよ」

ピカチュウ「ピカピ、ピカチュウ。ピツカピカピカチュウ」

すずか「へえ〜。ビームソードと合体するんだ」

ピカチュウ「ピカチュウ、ピツカ。ピカチュウ、ピカピ。」

アリサ「スナイパーモードにパワーモード、そして連射モードね」

すずか「私達…メタルヒロインになるのかな？」

アリサ「…ちよつといいわね…子供達のヒーロー」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ達も子供だけど。と鳴いた。

アリサ「ほつときなさい」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

アリサ「さあ！訓練するわよ！」

すずか「うん！今日こそは！」

勢いこんで挑んでいった…結果は惨敗だったが。

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

ある日ピカチュウが邸の裏に作られた小屋の中で開発していると

…

アリサ「…チュウ〜？ピカチュウ〜？」

ピカチュウ「ピカ？ピツカ！」

アリサの呼ぶ声が聞こえたので開発を中断してアリサの下に向かった。

ピカチュウ「ピカピく？」

アリサ「あ、ピカチュウ。フェイトの所に行くけど、行く？」

ピカチュウ「ピカく…ピツカ！」

ピカチュウは少し悩み、行くと鳴いた。

ピカチュウ「ピツカ♪ピツカ♪ピカチュウ♪」

フェイト「あれ？アリサ？」

アリサ「ちようど良かった。今からフェイトに会いに行こうとしたのよ」

道端でフェイトと会った。

フェイト「何かあった？」

アリサ「ここじゃ何だし人気のないところに行きましょう。そうね、公園がいいわね」

フェイト「？わかった」

ピカチュウ「ピカく」

ピカチュウを先頭に公園に向かった。

フェイト「それでアリサ？」

アリサ「ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウはビームソード改めPソード（ピカチュウソード）を渡した。

フェイト「これは？」

アリサ「私だけ貰うのは不公平でしょ？ 飼主同士、平等じゃないと」

フェイト「アリサ…うん！ありがとうございます♪」

フェイトはアリサの気持ちに感謝して受け取った。

アリサ「それじゃあ少しのんびりしましょ？ 時間ある？」

フェイト「うん、大丈夫」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウもフェイトとアリサの間に入り日向ぼっこして過ごした。

ピカチュウ「ピカ〜♪」

ある日、ピカチュウはフェイトから返して貰ったロボットをメンテナンスしていた。

アリサ「ピカチュウ…ってこれが噂のロボットね」

ピカチュウ「ピカ〜？」

するとアリサがやって来てロボットを見ていたが、ピカチュウが何か用？と鳴いた。

アリサ「ええ。銃の名前を考えようと思って」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

アリサ「何がいかしらね？」

ピカチュウ「ピカピ」

アリサ「ピカチュウシューター？」

ピカチュウ「ピツカ♪」

アリサ「縮めてPシューターね…うん。それにしましょう」

こうしてレーザー式銃の名前もPシューターとなった。

アリサ「それで？このロボットはどうやって動くの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

バッテリー式と鳴いた。

アリサ「まさか変型とかしないでしょうね？」

ピカチュウ「……」

ピカチュウは黙った。

アリサ「また…ネタに走ったわね…」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

変型はロマン！と鳴いた。

アリサ「…納得出来るのが嫌ね」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

格好いいよ♪と鳴いた。

アリサ「何に変型するの？」

ピカチュウ「ピツカ！」

アリサ「へえ、ジェット機ね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「とりあえずPシユーターの名前も決まったし訓練してくるわね」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

ピカチュウは頑張つてね〜♪と見送つた。

ピカチュウ「ピカチュウ？」

クロノ「やあ、ピカチュウ。よく来たな」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

別の日、ピカチュウはクロノに呼ばれてフェイトとやって来た。

フェイト「どうしたの？だつて」

クロノ「ピカチュウに頼みたい事があつてな」

ピカチュウ「ピカ？」

クロノ「実は君が作った夜天の書のアップグレードのプログラムを提供して貰いたい」

ピカチュウ「ピカピ？」

フェイト「何で？だつて」

クロノ「いやな、開発局がな？ロストログアを直したプログラムを見てみたいそうなんだ」

ピカチュウ「ピカ〜…」

ピカチュウがえ〜…と鳴くと…

クロノ「タダとは言わない。ちゃんと見返りもある」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

クロノ「これでどうだ？」

クロノは電卓に数字を打ち込むとピカチュウに見せた。

ピカチュウ「ピカピ!?!ピカ〜…」

ピカチュウは悩み始めた。一般家庭なら一生遊んで暮らせる金額なのだから。

ピカチュウ「ピカチュウ？ピツカ」

フエイト「たかが小動物にこんなにだすの？だって」

クロノ「なに、このプログラムの制作者がピカチュウと明かしてないからな。それに向こうも悪いさ。なんせ人が作ったとは言っていないのに金額を提示してきたのだから」

ピカチュウ「ピカ」

クロノ「どうする？バレる前に決めて欲しいんだが」

ピカチュウ「ピカピ」

フエイト「いいよだって」

クロノ「支払いは現金になる」

ピカチュウ「ピツカ。ピカピ」

フエイト「わかったって。後、データが入ったUSBメモリだって」

クロノ「わかった。確かに預かった、後は任せてくれ。上手くやっ
とく」

ピカチュウ「ピカピ」

ピカチュウはお願いと鳴いた。

フエイト「凄いな。ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

ピカチュウは臨時収入に喜んでいた。

ピカチュウ「ピカピ」

ポチポチポチポチ

アリサ「ねえピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ？」

ピカチュウが入力のコマンドをしているとアリサが話しかけてきた。

アリサ「あんなにお金を貰えたのにコマンドを続けるの？」

ピカチュウ「ピッカ」

ピカチュウは楽しいから続けると鳴いた。

アリサ「そう？ならいいんだけど」

ピカチュウ「ピカチュウ？ピカピ？」

ピカチュウは今日はどうしたの？と訊ねた。

アリサ「シミュレーターがクリア出来ないんだけど？」

ピカチュウ「ピッカ。ピカチュウ」

こればかりは特訓しないと鳴いた。

アリサ「そうよね」

ピカチュウ「ピッカ、ピカピ」

アリサ「設定を変える？」

ピカチュウ「ピカチュウ！ピッカピカ」

アリサ「一緒に成長するシステムに変えるね、お願い」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウは変えとくねと鳴いた。

アリサ「よろしく」

こうしてアリサ達の特訓も本格的に始まった。

ピカチュウ「ピツカ！」

ブン！

パシン♪パシン♪パシン♪

アリサ「なるほど…」

すずか「その手があったね」

ピカチュウはシミュレーターがクリア出来ないアリサ達から相談を受けて見本を見せていた。

アリサ「Pソードでレーザーを切り落とすのは盲点だったわ」

すずか「でも回避に専念しないで効率よく進めるね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「ありがとう、参考になったわ」

すずか「ありがとう」

ピカチュウ「ピツカ♪」

ピカチュウは自分用のPソードをしまった。

アリサ「まさか、ピカチュウに剣の才能まであったなんてね」

ピカチュウ「ピカチュウ／＼／＼」

すずか「ピカチュウは避けられない弾を斬れって伝えたかったんだよね」

ピカチュウ「ピカ」

すずか「うん、頑張ってみるよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウは頑張ってねくと鳴いた。

ピカチュウ「ピカ」

キュイーン！

ジジ!

ピカチュウ「ピツカ♪」

ピカチュウはロボットのメンテナンスを終了したので一息つくことにした。

ピカチュウ「ピカチュウ〜?」

ピカチュウはアリサを捜し始めた。

アリサ「ん?ピカチュウ?小屋から出てきたの?」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

アリサ「わつと。何よ?甘えたいモードになってるの?」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

アリサ「はいはい。よしよし」

アリサはピカチュウを抱いたまま外に向かった。

アリサ「いい天気ね、久しぶりに散歩に行きましょう」

ピカチュウ「ピツカ♪」

一人と一匹は仲良く出掛けた。

ピカチュウ「ピツカ♪ピツカ♪ピカチュウ♪」

アリサ「ご機嫌ね」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

久しぶりの散歩にピカチュウは喜んでいた。

アリサ「ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピツカ？」

アリサ「何でもない♪」

ピカチュウ「ピカ〜!？」

気になる〜!?!と鳴くが…

アリサ「教えてあげな〜い」

ピカチュウ「ピカ!?!ピカチュウ〜」

先を歩くアリサについていき何度も訊ねたが教えてもらえなかったが、アリサは終始、嬉しそうにしていたのでピカチュウも嬉しそうに横を歩いていた。

フエイト「検査を受けたい？」

アリサ「ええ。私達に魔導師としての適正があるか知りたいの」

すずか「どうかな？」

なのは「簡単な検査なら私達でも出来るけど」

アリサ「お願い出来る？」

なのは「わかったの。レイジングハート」

レイジングハート「イエス、マイマスター」

アリサ、すずか「……」

レイジングハート「スキャン完了しました。お二人にリンカーコア確認しました」

アリサ「つまり？」

フェイト「魔導師になれる可能性があるってこと」

アリサ「よし！」

すずか「やった！」

なのは「アリサちゃん達も魔導師になるの？」

アリサ「わからないわ。まだね」

すずか「選択肢の一つかな？」

なのは「そうなんだ…あれ？そう言えばピカチュウは？」

アリサ「何か作ってたからおいてきたのよ」

なのは「何かって…なに？」

アリサ「…さあ？」

なのは達「…」

ちよつと不安がよぎるなのは達だった。

アリサ「という訳なのよ」

ピカチュウ「ピカ」

アリサは魔導師としてのリンカーコアがあり、適正があることをピカチュウに教えた。

アリサ「それはそれとしてピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ？」

アリサ「何を作ってるの？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

ピカチュウは今はPボールしか作ってないと答えた。

アリサ「ふーん、まあいいわ。そろそろ夕食ね、行くわよピカチュ

ウ」

ピカチュウ「ピツカ♪」

ピカチュウは開発を中断してアリサと一緒に夕食に向かった。

ピカチュウ「ピカ〜」

ポチポチポチポチ

アリサ「ピカチュウ〜」

すずか「こんにちは〜」

ピカチュウ「ピカピ？ピツカ！」

ピカチュウが打ち込みのバイトをしてるとアリサとすずかがやって来た。

アリサ「あのね？お願いがあるの」

ピカチュウ「ピカ？」

アリサ「パワードスーツを改良出来ない？」

ピカチュウ「ピカピ？」

すずか「あのね？Pボールから出して着装してると、ね？すぐに着

装出来るように出来ない?」

ピカチュウ「ピカ〜…ピカチュウ」

ピカチュウはわかった。と鳴くとPボールを預り改良することになった。

ピカチュウ「ピカ〜…」

キュイーン

ジジ!

次の日、ピカチュウはさつそくパワードスーツの着装システムを改良していた。

ピカチュウ「ピツカ〜♪」

そして数時間、ピカチュウはパワードスーツの着装システムの改良を終えた。

ピカチュウ「ピカ〜?」

そしてピカチュウは荷物をリュックに積めてアリサを探した。

ピカチュウ「ピカ〜?」

そしてピカチュウがアリサの部屋に入ると…

アリサ「あら?ピカチュウ?」

アリサが読書していた。

ピカチュウ「ピカチュウ！ピカピ！」

アリサ「着装システムの改良が終わったの？」

ピカチュウ「ピツカ♪」

ピカチュウはアリサに赤くて四角い電子手帳を渡した。

アリサ「何これ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「わかったわ。着装！」

カシャン！

アリサ「スゴツ!？」

ピカチュウ「ピツカピカ！ピカチュウ」

アリサ「これなら便利ね、ありがとうピカチュウ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウは紫色の電子手帳を渡した。

アリサ「ええ、すずかには私から渡しておくわね」

ピカチュウ「ピツカ」

アリサ「ん？フェイトの所に行く？気をつけて行きなさい？私も行くのかしら？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

大丈夫！と鳴いた。

アリサ「フェイトによろしくね」

ピカチュウ「ピツカ〜♪」

いつてきます〜♪と鳴いて、ピカチュウはフェイトの家に預かられに向かった。

ピンポーン♪

フェイト『はい？』

ピカチュウ「ピカチュウ！」

フェイト『あ、ピカチュウ？ちよつと待ってて』

少し待つと…

ガチャ

フェイト「いらっしやい、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピツピカチュウ」

ピカチュウは片手を上げて挨拶した。

フエイト「さあ、どうぞ」

ピカチュウ「ピツカ、チュウ」

ピカチュウは空いた隙間から部屋に入った。

エイミイ「やつほく♪ピカチュウ♪」

ピカチュウ「ピツカ」

エイミイに挨拶するとピカチュウはリュックを下ろして伸びくとした。

フエイト「はい、リンゴジュース」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウは美味しく飲みほした。

フエイト「ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ？」

フエイト「楽しく過ごそうね♪」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

ピカチュウは穏やかな日々を過ごしていった。

ストライカーズ編

26話

闇の書事件から数年後…

アリサ「ピカチュウ〜？ピカチュウ〜？」

ピカチュウ「ピ〜カ〜チュ〜ウ〜♪」

アリサが呼ぶと部屋の奥から鳴きながらやって来た。

すずか「ピカチュウ♪」

ピカチュウ「ピカ？」

アリサ「ちゃんとお留守番してた？」

ピカチュウ「ピツカ♪」

すずか「偉い偉い♪」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

ピンポンパンポン♪

アナウンス「バニングス一等空尉、月村一等空尉。お客様がお越しです。至急隊舎ロビーまでお越しください」

アリサ「客？誰かしら約束なんてしてないし…」

すずか「しかも私達だもんね？」

ピカチュウ「ピカピ？」

アリサ「行ってみましょう。会えばわかるわ」

アリサはピカチュウを抱っこするとロビーに向かった。

はやて「お！アリサちゃん、すずかちゃん」

アリサ「何よ、お客様ってはやてだったの？」

はやて「いや、近くまで来たんでな？」

すずか「本当に？」

はやて「いややなく♪ウチを疑うんか？」

アリサ、すずか「ええ（うん）」

ピカチュウ「ピツカ」

はやて「ヒドッ!?しかもピカチュウまで!?!」

アリサ「冗談はさておき、どうしたの？何かあったんでしょう？」

はやて「ごほん、二人に頼みがあるんや」

すずか「捜査依頼か何か？」

はやて「それに近いな。実は新しい部隊を立ち上げるんやけど…」

アリサ「なるほど、補助要員か何かになってほしいわけね？」

はやて「さすがアリサちゃん。話が早くて助かるわ」

すずか「でもいいの？ 私達の扱いはちよつと特殊だよ？」

はやて「かまへんよ。それと…」

ピカチュウ「ピ？」

はやて「ピカチュウの技術も借りたいと思ってるんや」

ピカチュウ「ピツカ」フルフル

はやて「タダとは言わん」ゴトン

はやてはリングゴが沢山乗った籠を出した。

ピカチュウ「ピカ！」フルフル

はやて「なんやて!?!ピカチュウが誘惑に勝った!?!」

アリサ「ちゃんと教育してるからね」

はやて「今回だけは言わせてもらおうわ。余計なことを！」

アリサ「褒めないでよ」

ピカチュウ「ピカ〜」

はやて「主従揃って照れるな！」

アリサ「それで？何でピカチュウの力が必要なの？」

はやて「それだけ事件が強大ってことなんよ」

アリサ「今は特別な捜査依頼はないわね」

すずか「私も」

はやて「なら、お願い出来る？」

アリサ「…いいわ。引き受けるわ」

はやて「助かるわ〜」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

アリサ「そうね。長期になりそうだし一緒に来る？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウは行く！と鳴いた。

ピカチュウ「ピカ〜…」

そして配属当日、ピカチュウは六課の建物を見て呆けていた。

アリサ「ほら、呆けてないで行くわよ」

ピカチュウ「ピカ！」

アリサが歩き出すとピカチュウも後を追いかけた。

ビー

アリサ、すずか「失礼します！」

はやて「いらっ、しゃくい！」

ピカチュウ「ピカチュウ」サツ

三点

と書かれた札をピカチュウは掲げた。

はやて「厳しいな！」

ピカチュウ「ピカピ！」

当然！とばかりにピカチュウは胸をはった。

アリサ「馬鹿やってないで…」

ビシッ！

アリサ「アリサ・バニングス一等空尉！」

すずか「月村すずか一等空尉！」

アリサ、すずか「ただ今着任しました！」

ピカチュウ「ピツカ！」

二人が敬礼しているとピカチュウも真似をしていた。

はやて「ようこそ、機動六課へ。部屋はここやから荷物置いてきてな？」

はやてからメモを受け取るとアリサ達は自分の新しい部屋に向かった。

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」ボスツ

新しい部屋に入るとピカチュウはベットにダイブした。

アリサ「全く…何してるのよ」

アリサはピカチュウをベットから降ろした。

ピカチュウ「ピカ〜」

ピカチュウはアリサの家にいた頃からのお気に入りのお気に入りのバスケットに入った。

アリサ「何？休んでるの？」

ピカチュウ「ピカ？」

アリサ「なのはや、フェイトに挨拶しないと」

ピカチュウ「ピカチュウ」

自分も行くぞと鳴くとバスケットから出てきた。

ピカチュウ「ピカ？ピカピク！」

フェイト「え？キャツ!？」

ピカチュウはフェイトを見つけると一目散に飛び付いた。

フェイト「もう、びっくりしたよ?」

ピカチュウ「ピカ」

いや。と鳴くとすつとぼけた。

アリサ「久しぶりね、フェイト」

フェイト「アリサ？それにすずか？どうしたの?」

すずか「今日から私達も配属になったの」

フェイト「そうなんだ?」

アリサ「今は散歩がてら六課の敷地を把握してる所と言いたいけど、フェイトとなのはに挨拶をと思ってね」

フェイト「じゃあ、なのはの所に行く?」

アリサ「そうね、挨拶くらいはしとかないとね」

フェイト「なら、こっちだよ」

フェイトはピカチュウを抱っこしたまま訓練所まで向かった。

フェイト「なのは」

なのは「フェイトちゃん？それにアリサちゃんにすずかちゃん？どうしたの？」

アリサ「着任の挨拶よ」

なのは「アリサちゃん達も配属になったんだ」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

なのは「あ、ピカチュウも？」

ピカチュウ「ピカピ！」

この数年の付き合いでなのはもピカチュウの言葉を理解出来るようになっていた。

なのは「過剰戦力な気がする」

アリサ「そんな細かいことは集結させたはやてに任せときなさい」

何処かでくしゃみをする音が聞こえた。

アリサ「それで？なのはは新人の訓練？」

なのは「そうだよ」

アリサ「私達も借りていい？最近動いてないから」

すずか「鈍ってはいないと思いたいな？」

ピカチュウ「ピカチュ：」「ゴチン！」ピツカ〜!？」

体重が増え…と囁いた瞬間、物凄いスピードですずかから拳骨を食らったピカチュウだった。

すずか「ピカチュウ？デリカシーがないよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

すいません…と鳴くとピカチュウは頭を擦った。

アリサ「馬鹿やってないで行くわよ」

ピカチュウ「ピカ〜」

アリサ達は訓練所に入って行った。

27話

アリサ「ん！すずか？」

すずか「準備はいいよ！」

二人はPソードを構えると…

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

バチッ！ブン！バチッ！

アリサ「ハッ！」

すずか「えいつ！」

物凄いスピードで互いに斬り合いを始めた。

フェイト「…速いね」

なのは「流石っていいたいね」

二人は更に剣速を早めた。

なのは「フェイトちゃん…どう？」

フェイト「反応速度なら私と同じ位かな…」

シグナム「太刀筋も悪くないな」

なのは「シグナムさん？」

シグナム「かなり努力したのだろう」

ピカチュウ「ピカ：ピカチュウ！」

ピカチュウは終了と鳴いた。

なのは「お疲れ様」

すずか「今日は負けちゃったな」

フェイト「え!?!引き分けじゃないの？」

シグナム「テストタロツサ。彼女達が立って居たところを覚えてみる」

なのは達がアリサ達が立っていた所を見るとアリサの足跡だけ一歩前に出ていた。

なのは「二人とも彼処から一步も動いてなかったの!?!」

すずか「私は踏み込まれちゃったけどね」

フェイト「あれだけの動きをしていたのに…」

アリサ「アタシ達なんてまだまだだよ」

すずか「ピカチュウにまだ一度も勝ててないもの」

なのは、フェイト「うえ!?!」

ピカチュウ「ピカ…ピカピカチュウ」

人は僕を…剣豪ピカチュウと呼ぶと鳴いた。

なのは「剣豪!?何時から!?!」

ピカチュウ「…ピカ?」

…数年前から?と鳴いた。

フエイト「ドクターじゃなかったの?」

ピカチュウ「ピカ!ピッピカチュウ」

副業も必要と鳴いた。

シグナム「ピカチュウ…せい!」

ブン!バチツ!

シグナムが突如デバイスの剣を振り抜くとピカチュウは何処から出したのか自分のPソードで防いだ。

なのは「シグナムさん?」

シグナム「いや、バニングス達の師匠と言うだけの事はあるな。本気で斬りに言ったのだが」

ピカチュウ「ピカ?」

フエイト「納得した?だそうです」

シグナム「ああ。不意打ちしてすまなかつた」

ピカチュウ「ピカピ」

ピカチュウは手を上げて気にしてない。と鳴いた。

はやて「お！皆お揃いやね」

なのは「はやてちゃん？」

フエイト「どうかしたの？」

はやて「そやった。アリサちゃん？引越しの業者何処に頼んだん？トレーラーが一台、入口の前を塞いで困ってるんよ。何か忘れて帰ったみたいでな？」

ピカチュウ「……」

そく…

ダン！

ピカチュウがソツとその場を離れようとしたら綺麗な脚が道を塞いだ。

アリサ「何処に行くのかしら？ちよつと【お話し】があるのだけど？」

ピカチュウ「チャク…」

ピカチュウの耳は垂れ下がりに怒られる覚悟をしていた。

アリサ「で？このトレーラーは何？」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

怒らない？と鳴いた。

アリサ「正直に言えばね」

ピカチュウ「ピカピカ、ピツカ〜。ピカチュウピカチュウ」

ピカチュウは自律走行型トレーラーと鳴いた。

アリサ「…聞くけどアタシに大型車の免許を取らせたのって…」

ピカチュウ「ピカチュウ」

この為。と鳴いた。

アリサ「……」

アリサは頭を抱えた。

フェイト「中身は？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

僕の研究所と鳴いた。

ピカチュウ「ピッピカチュウ」

後、移動基地としても使えると鳴いた。

アリサ「はやて、たしか格納庫が空いてたわよね」

はやて「そこしか入らへんもんな。使ってくれるか？」

すずか「ピカチュウ、しまってきて」

ピカチュウ「ピカピッ」

ピカチュウは運転して格納庫に運んだ。

なのは「……」

はやて「どないしたん？なのはちゃん？」

なのは「いや、どうやって運転してるのかなって…」

アリサ達「……」

ここにピカチュウの不思議さが増えた。

ピカチュウ「ピカッ♪」

するとすぐにピカチュウがリュックを背負って戻って来た。

フエイト「お帰り♪」

ピカチュウ「チャ〜♪」

撫でられたピカチュウは嬉しそうだった。

はやて「えらいパンパンな荷物やな？何が入ってるん？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「新しい発明とか？」

すずか「いつの間に…」

ピカチュウ「ピカ〜／／／」

いや〜／／／と照れていた。

フェイト「中身は？」

ピカチュウ「ピカ〜…」ゴソゴソ

コロソ

ピカチュウが荷物を漁っていると一つの瓶が転がった。

なのは「何これ？」

なのはが拾って瓶のラベルを見ると…

激ヤセ君。と書かれていた。

なのは「……」

フエイト「どうし…」

フエイト達もラベルを見て固まった。

ピカチュウ「ピカピ？」

固まったなのは達を不思議そうに見ているピカチュウだった。

はやて「なあピカチュウ？これは何なん？」

ピカチュウ「ピカ？ピカピカ」

それ？体重が落ちる薬。と鳴いた。

なのは達「頂戴！」

ピカチュウ「ピカ！」

ピカチュウは電卓を出すと金額を打ち込んだ。

なのは達「お金とるの!？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

当然！と鳴いた。

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ」

でも、売らないけど。と鳴いた。

なのは「なんで？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

試作品だから。と鳴いた。

すずか「しようがないなく♪私が実験してあげるよ」

ピカチュウ「ピカチュウ」ゴソゴソ

すずかが瓶を手取る前にピカチュウは瓶をしまった。

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウは自分で試すと鳴いた。

すずか「でも、人に試さないと効くかわからないよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ…ピカ！」

そっか…お願い！と鳴いて瓶をすずかに渡した。

すずか「(よし!)」

内心、勝った!と思ったすずかだが…

アリサ「すずか?ちよつと【お話し】しましうか?」

すずか「あ、アリサちゃん!」

なのは「あ、私も行くよ」

すずか「なのはちゃんまで!？」

ピカチュウ「ピツカ〜」フリフリ

ピカチュウは手を降つてなのは達を見送った。

28話

ピカチュウ「ピカ〜…ピ〜…」

キャラ「あ、ピカチュウ」

ピカチュウが草むらで昼寝しているとFW陣がやって来た。

スバル「キャラ？知ってるの？」

ティアナ「誰かの使い魔？」

エリオ「フェイトさんの使い魔らしいです」

スバル「へえ〜」

ピカチュウ「ピ？ピカ〜！」

ピカチュウは目を覚ますと伸び〜つとした。

ピカチュウ「ピカチュウ？ピカピカピ？」

ティアナ「…何いつてるかわからない」

スバル「キャラ、わかる？」

キャラ「はい、これから訓練？って聞いてます」

エリオ「そうだよ。ピカチュウも来る？」

ピカチュウ「ピカ！」

ピカチュウが訓練所に歩き出すと四人も歩き出した。

なのは「みんな来たね。あれ？ピカチュウどうしたの？」

ピカチュウ「ピカ」

なのは「そっか、見学に来たの」

ピカチュウ「ピカピ」

なのは「じゃあ早速訓練を始めようか！」

FW陣「はい！」

ピカチュウ「ピカピ」

ピカチュウに見送られてFW陣は訓練を始めた。

ピカチュウ「ピファ〜♪」シヤリシヤリ

ティアナ「暢気でいいわね」

ピカチュウ「ピファ？」

ティアナ「なんでもないわ。食べてなさい」

ピカチュウ「ピファ〜♪」シヤリシヤリ

オフィスでなのは達がデスクワークをしているとピカチュウは
ティアナの横でリンゴを食べていた。

ピカチュウ「ピフア…ピカチュウ♪」

なのは「ピカチュウ？みんなの邪魔しちゃ駄目だよ」

ピカチュウ「ピカ！」

ピカチュウは頷くと空いてるアリスの席に座るとパソコンをイジ
リ始めた。

ポチポチポチポチ

スバル「最近の小動物はパソコンも出来るんだ…」

ティアナ「なわけないでしょ。あの子が特別なのよ」

エリオ「何をしてるのでしょう？」

キャラ「ちよつと覗いてくるね」

キャラは仕事の合間を見てピカチュウの作業を盗み見た。

キャラ「……」

スバル「どうだった？」

キャラ「なんか…設計図みたいなのを描いてました」

なのは、キャラ以外「はっ？」

なのは「また、何か作る気なんだ」

スバル「なのはさんは驚かないんですか？」

なのは「今さらだよ？フェイトちゃんなんかピカチュウにデバイス
のメンテナンス任せてるもん」

FW陣「うえ!？」

なのは「言つとくけどアリスちゃん達の武装はピカチュウが作った
物らしいからね？」

ピカチュウ「ピカピ？」

ピカチュウが振り向くと…

なのは「気にしないでいいよ」

ピカチュウ「ピカ」

ポチポチポチポチ

気にしないでいいと言われたので気にしない事にした。

ティアナ「大丈夫なんですか？」

なのは「まあ…時々驚かされるけどね」

ピカチュウ「ピツカチュウ！」

なのは「とか言いながら設計図が出来たみたい」

FW陣「はや!？」

なのは「ピカチュウ、今度は何を作るの？」

ピカチュウ「ピ?ピカ、ピカチュウ」

なのは「レスキュー道具？」

ピカチュウ「ピカ!」

なのは「なるほどね。レリック騒動で民間に被害が出ないとは言えないもんね」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

ピカチュウは作ってくるね♪と鳴いて立ち去った。

なのは「程々にね」

ピカチュウ「ピカ」

ジジジジ

トレーラーに移ったピカチュウは早速試作機を作り始めた。

ピカチュウ「ピカ…」

ジジジジ!

ピカチュウ「ピッピカチュウ♪」

どうやら完成したらしい：作る速度もチート化してきたらしい。

アリサ「ピカチュウ?」

ピカチュウ「ピカ?ピツカ♪」

アリサ「わつと!?!どうしたのよ?急に」

ピカチュウ「ピカ♪」

アリサ「はいはい。甘えたいのね」

ピカチュウはアリサがやって来ると甘え出した。

すずか「私って…」

すずかだけ相手にされなかった。

アリサ「それで?何か新作を作っているって聞いたけど?」

ピカチュウ「ピカピ?」

すずか「そうだね。一応見ところかな」

ピカチュウ「ピカ♪」

ピカチュウは作業台に向かった。

アリサ「これが試作機？」

アリサとすずかは近くにあった椅子に腰かけた：作業台が低い
め。

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

作業台に乗っていたのはドリルとディスクソー、持ち手だった。

アリサ「アタシ達はドラフトにでもなるのかしら」

すずか「こないだDVD見てたよ」

アリサ「影響されたわね」

すずか「確実にね」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウは文句ある！と鳴いた。

アリサ「いつそターボなユニットも作ったら」

ピカチュウ「……」

アリサ「……」

嫌な沈黙がおきた。

「アリサ「さて、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピ、ピカチュウ？」

な、何でしょう？と鳴いた。

アリサ「キリキリ吐きなさい」

ピカチュウ「チャ〜…」

既に交渉すらしてもらえなかった。

アリサ「隠れて幾つ試作機を作ったの？」

ピカチュウ「ピカ…ピカ？」

えつと…えへ？と鳴いた。

アリサ「ハア…全部見せなさい」

ピカチュウ「ピカチュウ」

わかったと鳴き棚に行くと…

ピツポツパツポツ！

パスワードを打ち込むと棚が開いた。

アリサ「ホントにあるし…」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「アクセルユニット…ね」

すずか「でも、地上で活動するなら使えると思うよ?」

アリサ「そうね。ピカチュウ?」

ピカチュウ「ピカ〜」

作つとくねくと鳴いた。

すずか「他に使えるそうな物は…」

すずかが試作機を見ていると…

すずか「あれ?ピカチュウならサイクロン辺りを作つていそうだけ
ど?」

ピカチュウ「ピ!?!ピフユ〜♪」

出来もしない口笛を吹いた。

アリサ、すずか「……」

ピカチュウ「……」ダツ!

バシユ!

ピカチュウは逃げ出したがバインドで拘束された。

ピカチュウ「ピカピ〜!」

魔法は卑怯！と鳴いた。

アリサ「それで？何処に隠してあるの？」

最早交渉のこの字すらなかった。

ピカチュウ「ピカチュウ！ピカピカピカチュウ！」

アリサ「危険ですって？」

すずか「何で？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

アリサ「はあ？威力と制御に問題があるですって？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

すずか「だから量産しなかったの？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

すずか「どんなの作ったの？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

アリサ「リボルノヴァ？」

ピカチュウ「ピカチュウ！ピカピカピカピカチュウ」

すずか「Pソード二本を装填してから放つ最強ツール？」

アリサ「Pソードって一本でも高出力なのにそれを二本ですって!?」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

アリサ「撃った本人に過大な負荷がかかる…ね。確かにそれなら封印ものね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

すずか「量産型は低出力にする予定…仕方ないね」

アリサ「とりあえず、わかったわ。アクセルユニットだけ装備しておいて」

ピカチュウ「ピツカ〜」

ピカチュウは電子手帳を受けとると早速改修を始め、アリサ達は隊舎に戻って行った。

29話

ビー！ビー！ビー！

ピカチュウ「ピカ!?」

トレーラーで整備をしていると六課で警報が鳴り響いた。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウは急いで作戦指令室に向かった。

はやて「現在、聖王教会に向けて輸送中だったレリックが街中でガジェットに襲われて街に被害が出てる。二手に別れて救助と殲滅、レリック回収に尽力を尽くしてや」

なのは「なら、スターズは殲滅、ライトニングは救助に…」

アリサ「アタシ達も行くわ」

はやて「お願いするわ」

アリサ「ピカチュウ！」

ピカチュウ「ピカ！」

アリサ「改修は？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

何時でも行けるよ!と鳴いた。

はやて「なら、機動六課! 出動や!」

なのは達「了解!」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

ピカチュウも敬礼して部屋を飛び出した。

アリサ「ピカチュウ!」

ピカチュウ「ピクカクチュウウ!」

つくいてくきくてく!と鳴いて走り出していた。

アリサ「なのは達は先に行きなさい!」

アリサとすずかはピカチュウを追った。

ガチャ!

ピカチュウ「ピカチュウ!」

ウーーン

ピカチュウがPトレラーの運転席に乗ると運転席が中で変形してピカチュウサイズの運転席に変わった。

ピカチュウ「ピカ!」ポチポチポチ

アリサ「ピカチュウ！」

ピカチュウ「ピカ！」

乗って！と鳴いた。

アリサ「わかった！」

アリサとすがが飛び乗ると運転席のピカチュウ専用シートの後ろに座った。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ウーウーウーウー！！

ピカチュウは運転席の上にランプを出し、サイレンを鳴らすとプロレーラーを発進させた。

すが「ピカチュウ、いつプロレーラーの運転覚えたの？」

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ」

仕事の合間と鳴いた。

ピカチュウ「ピカ〜ピカ〜チュウ〜！」

ピカチュウは現場に向かう途中で無線を開いた。

「…ただいま、ガジェットに襲われてレリックを護衛してるが長くは持たない！至急救援を…ブツ！」

ピカチュウ「ピカ!?ピカチュウ！」

ピカチュウは無線が切れるとアクセルを踏み、現場に急いだ。

すずか「このままじゃ間に合わない！」

アリサ「ピカチュウ!後部ハッチを開けて!アクセルユニットで向かう！」

ピカチュウ「ピツカ！」

アリサ、すずか「着装！」

二人はスーツを着ると…

アリサ、すずか「アクセルユニット！」

ガシャン!ガシャン!ガシャン!

トレーラーの後部ハッチから飛び降り走って向かった…物凄いスピードで。

ピカチュウ「ピカ！」

ピカチュウも後部ハッチを閉めると現場に急いだ。

アリサ「アレね！」

すずか「急ごう！」

アリサ達は襲われてるトレーラーを見つけるとPソードを腰から抜きガジェットに斬りかかった。

すずか「空は…なのはちゃん達に任せて良さそうだね」

すずかが空を見るとなのは達も到着していた。

アリサ「アンタ達！レリックを護衛してその人達を守れる？」

FW陣「はい！」

アリサ「OK！任せたわよ！」

すずか「油断しないでいこう！」

アリサ達はガジェットを返り討ちにしていた。

ウー！！キキ〜！

ピカチュウ「ピカチュウ！」

遅れてピカチュウがやって来た。

アリサ「ピカチュウ！レリックを護送しなさい！」

ピカチュウ「ピカ！ピカチュウ！」

キャラ「えつと…わかった！」

ピカチュウはレリックを持っていたキャラにトレーラーに乗るよ

うに言うとうと…

ウー！ウー！ウー！ウー！

キャロが乗り込んだのを確認すると走り出した。

ピカチュウ「ピカ〜！」

ビュンビュンビュン！

ピカチュウ「ピカピ〜！」

ピカチュウは蛇行しながらガジェットガジェットの攻撃を避けながら走っていたが、何とかして〜！と救援を求めた。

アリサ「チ！数が多い！」

すずか「倒してもきりがない」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

キキ〜！

トレーラーは急停車すると…

ピカチュウ「ピカチュウ…」ガサゴソガサゴソ！

ピカチュウは何かを探し始めた。

ピカチュウ「…ピカ!?ピツカ〜♪」ポイツ！

ピカチュウは何かをアリサに投げた。

アリサ「ちよつと！」ガシヤン！

アリサは投げられた物をキャッチすると…

アリサ「何これ？」

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

ガシヤン

ピカチュウが叫ぶと投げつけた物…Pバスターに変形してアリサの手に収まった。

アリサ「これで何が出来るの!？」

ピカチュウ「ピカ…ピカチュウ！」

ぶいーん

ピカチュウはトレーラーを自動操縦にして現場を離れさせた。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウはPバスターを受け取り構えると…

ピカチュウ「ピカチュウく！」

バスターを撃ちガジェットの群れを纏めて倒した。

ピカチュウ「ピカチュウ…」

アリサ「後は任せなさい」

ピカチュウからPバスターを受け取るとアリサはガジェットの群れを破壊していった。

ピカチュウ「ピカ、チュウ〜！」

ピカチュウはアリサが撃ち漏らしたガジェットに電撃で破壊していった。

アリサ「大体片付いたみたいね」

アリサが辺りを見回すとガジェットの残骸だけだった。

すずか「そうだね」

ピカチュウ「ピ〜」

アリサ「けど、ピカチュウ？こんな便利な物があるなら装備させておきなさいよ」

ピカチュウ「ピカチュウ、ピカピカ」

アリサ「完成したばかりね、まあ今回は助かったからいいけどね」

すずか「取りあえず現場検証する？」

アリサ「任せて大丈夫でしょ？」

アリサ達は他の局員に検証を任せて帰還した。

はやて「レリックは無事に教会に届いたそうや」

現在、なのは達隊長陣が打ち合わせの為に集まっていた。

フエイト「よかった」

アリサ「被害も少なかったみたいだしね」

はやて「所で…」

ピカチュウ「ピカ？」

はやてがアリサに抱かれてるピカチュウを見ると：

はやて「アレがアリサちゃん達の武装か？」

アリサ「そうよ。アンタ達に見せたのは初めてよね」

はやて「そやね。しかし、大分ネタに走つとるね」

すずか「それでも役に立つのは事実だよ」

なのは「質量兵器に該当しないの？」

アリサ「アレは人工魔力を使ってるからデバイス扱いになるのよ」

なのは達「人工魔力？」

「さすが「ピカチュウ」が開発した人工魔力で少ない魔力を補う物だよ」

「はやて「そんなん開発したんか!?!」

アリサ「補充さえすれば長時間活動も可能よ」

「なのは「…私達には使えないの?」

「さすが「使えると思うよ?」

「はやて「ピカチュウ?」

「ピカチュウ」「ピファ〜♪ピカ?」

「はやて「聞いてなかったん?」

「ピカチュウ」「ピツカ!」

「胸を張って答えた。」

「はやて「ハア…取りあえずピカチュウ?技術提供お願いしたいんや」

「ピカチュウ」「ピカ〜…」

「ピカチュウは悩み始めた。」

「なのは「何を悩んでるの?」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

はやて「予算？お金とるん!？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

当然！と鳴いた。

はやて「…友情支援とか？」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ピカチュウは手を振って去ろうとした。

はやて「ちよいと待った〜！」

ピカチュウ「ピカ？」

はやては慌ててピカチュウを引き止めた。

はやて「な？ええやろ？ちよつとだけや？」

ピカチュウ「ピ〜…」

はやて「ええやん、減るもんじゃないし」

ピカチュウ「ピカ！」

減るよ！と鳴いた。

はやて「じゃあアリスちゃん達はどうやって支援してもらってるん

？」

アリサ、すずか「え？お金払って」

はやて「嫌な現実やな！」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

現実は何時も嫌な事が多い…と呟いた。

はやて「新手的引きこもりか！」

アリサ「第一アンタ達にはデバイスがあるでしょ？」

はやて「いや〜♪戦力拡大出来るかと…」

すずか「パワードスーツを着こなすのも大変だよ？」

フェイト「そうなの？」

アリサ「最初の頃は筋肉痛の地獄だったわよ…」

はやて「小さい頃の話やろ？」

アリサ「まあね」

はやて「試しに着ること出来ない？」

アリサ「簡易スーツがあったと思うけど」

はやて「なら、早速試してみよか！」

なのは達は簡易スーツを着てみる事にして訓練所に向かった。

はやて「なら、なのはちゃんお願いや」

なのは「わかった」

なのはは簡易スーツを着ると体を動かして違和感がないか試した。

はやて「どうや?」

なのは「特に違和感はないかな?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

整備してるもん。と鳴いた。

すずか「加速装置も付けたんだ?」

ピカチュウ「ピカ!」

はやて「なら、早速試してみよか」

なのは「アクセルユニット!」

ぶいーん!ガシヤン!ガシヤン!ガシヤン!

なのはは走り出すと訓練所を一周してきた。

ガシヤン!

はやて「おかえり〜」

なのは「……」

はやて「どうしたん？気分でも悪いん？」

なのは「ううん。負担はなかったよ」

ピカチュウ「ピカ！」

当然！と鳴いた。

なのは「ねえ、ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ？」

なのは「この人工魔力？活動時間はどれくらい？」

ピカチュウ「ピカピカピカチュウ」

なのは「フル活動でも十二時間!？」

ピカチュウ「ピカ」

なのは「魔法に転用出来る？」

ピカチュウ「ピカピ！」

勿論！と鳴いた。

なのは「…ピカチュウ？パスワードスーツって幾ら？」

はやて「なのはちゃん!？」

なのは「はやてちゃん、これは間違いなく使えるよ? 教導官としても推薦出来る位…ううん、推薦したい」

ピカチュウ「ピカチュウ」ポチポチポチ

ピカチュウは電卓にパワードスーツの金額を打ち込んだ。

なのは「…安くならない?」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウは首を振って答えた。

なのは「うゝ…」

フェイト「えつと…私も使ってみたいんだけど?」

なのは「あ、うん」

なのははパワードスーツを脱ぐとフェイトに渡し、フェイトはパワードスーツを装備した。

フェイト「じゃあ、行ってくるね」

ぶいーん! ガシャン! ガシャン! ガシャン!

フェイトはアクセルユニットを稼働させると一周して来た。

フエイト「ふう…確かに負担はないね」

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

でしよ〜。と鳴いた。

フエイト「でも速度が不満かな？」

ピカチュウ「ピカピカ」

簡易スーツだからと説明した。

すずか「正規のスーツなら速度は十分だと思うよ？」

フエイト「そうだね」

はやて「ウチも試してくるわ」

フエイトから簡易スーツを受けとると、はやても一周して来た。

はやて「ふう〜…確かに負担はないな。予算があれば尚良かったの
に」チラツ

ピカチュウ「ピフユ〜♪」プイ

練習したのかちよつと口笛が上手くなっているピカチュウだった。

はやて「何処かに優しい小動物はおらへんかな〜♪」

ピカチュウ「ピ…ピフユ〜♪」

はやて「……」

ピカチュウ「……」

しばし見つめあい…

はやて「…仕方ない。これだけは使いたくなかったんやけど…」

ピカチュウ「ピカ？」

はやて「ピカチュウ？ウチが捜査官だったのは知ってるな？」

ピカチュウ「ピカ！」

はやて「ちよっと調べさせてもらったんよ」

ピカチュウ「ピカ？」

何を？と鳴いた。

はやて「なんやピカチュウ？アリサちゃん達に隠れて町外れに倉庫を…」

ピカチュウ「ピカ〜!?!」

ピカチュウははやてに抱き付き口を塞ごうとしたが…

ひよい

アリサ「ピカチュウ？ちよっとお話しようかしら？」

ピカチュウ「チャ〜…」

尋問タイムの始まりだった。

アリサ「さて？何を隠れて作ったのかしら？ドクターピカチュウ？」

嫌味を込めてピカチュウを呼んだ。

ピカチュウ「ピフユ〜♪」

アリサ「正直に言わないと…」

ピカチュウ「ピカ？」

アリサ「去勢するわよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ。ピカピカピカチュウ」

ごめんなさい。言いますのでそれはやめてください。と鳴いた。

すずか「何を隠れて作ったの？」

ピカチュウ「ピカチュウ…」ガサゴソガサゴソ

ピカチュウはリュックからパソコンを取り出した。

ピカチュウ「ピカ〜…」カチカチ

ピカチュウはパソコンを操作すると一枚の画像を見せた。

アリサ「何これ？消防車？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウはPトレナーの写真を比較で出した。

アリサ「はあ!?デカツ!？」

すずか「今度はブレインなんだ…」

アリサ「一体幾ら使ったの!」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

全財産!と鳴いた。

アリサ「モグわよ?」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

ピカチュウは頭を下げてごめんなさいをした。

アリサ「全く…何を考えてるのかしらね」

ピカチュウ「ピカ／／／」

アリサ「褒めてないわよ」

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「とにかく、物を見に行きましょう」

ピカチユウ「ピカチユウ!？」

フエイト「ダメ？」

ピカチユウ「ピカチユウ」

仕方ないなくと鳴いた。

フエイト「車取ってくるね」

行くことが決定された。

30話

アリサ「ここ？」

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

ピカチュウは先頭に立つとアリサ達の案内を始めた。

なのは「やけに下まで行くね？」

倉庫に入った途端、なのは達は階段で下に降りていた。

ピカチュウ「ピカ！」カシヤン！

ピカチュウがブレーカーを上げると倉庫に明かりがついた。

なのは「これは…」

フェイト「大きい…」

巨大消防車、Pビツクファイヤーのお披露目だった。

ピカチュウ「ピカチュウ…」

ピカチュウは出来る事ならこれが使われない事を切に願っていた。

はやて「ネタって現実で見ると頼もしいんやね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

僕もそう思う。と鳴いた。

アリサ「でも使えるわよね」

ピカチュウ「ピカ」

まあね。と鳴いた。

アリサ「問題はこれをどうするかね…」

ピカチュウ「ピカ？」

え？と鳴いた。

アリサ「持って帰るに決まってるでしょ？」

ピカチュウ「ピカ〜!？」

すずか「だって使えるもん」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

やっぱり…と鳴いた。

なのは「でも…」

はやて「でも?？」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

何処に置くの?と鳴いた。

はやて「あく…ピカチュウ?」

ピカチュウ「ピカ?」

はやて「ハンガーとか作れへん?」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

出来るけど…と鳴いた。

はやて「頼むな?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

予算はそっち持ち。と鳴いた。

はやて「なんやて!?!」

ピカチュウ「ピカピカチュウ♪」ポチポチポチポチ

ピカチュウは注文しちやった♪と鳴いた。

はやて「ノオー!?!」

赤字街道まっしぐらだった。

ピカチュウ「ピカ!ピカ!ピカチュウ♪」

Pビックファイヤーを運んでから数日、ピカチュウが六課の敷地内を散歩していると…

ピリリリー♪

ピカチュウ「ピカチュウ？」ガサゴソ

無線機がなったので出てみた。

アリサ『ピカチュウ？ちよつと部隊長室まで来てくれる？』

ピカチュウ「ピツカ！」

ピカチュウは返事をするに部隊長室に向かった。

―部隊長室―

ピカチュウ「ピツカチュウ〜」

はやて「よく来てくれた」

ピカチュウ「ピカピ〜♪」

じゃあね〜♪

はやて「まてまて！来て早々帰るな！」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

フエイト「ピカチュウにお願い事があるの」

ピカチュウ「ピカ？」

アリサ「Pバスターを隊長陣に配備させたいの」

ピカチュウ「ピカピ」

ピカチュウはバツテンを作った。

はやて「予算はある！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

再びバツテンを作った。

はやて「予算やない？」

ピカチュウ「ピカピ。ピカチュウ」

すずか「Pバスターを生身で使うのは危険？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

その通り。と鳴いた。

なのは「そんなに危険なの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

はやて「となるとやっぱりパスワードスーツが必要になるか…」

アリサ「せめてさすがの分だけでも追加する？」

ピカチュウ「ピカピ？」

アリサの分は？と鳴いた。

アリサ「えっ？こないだ貰ったでしょ？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

あげてないよ！と鳴いた。

アリサ「ちよつとくらい…」

ピカチュウ「ピカ！」

ダメ！と鳴いた。

アリサ「わかったわよ。買うわよ」

ピカチュウ「ピカピく♪」

毎度ありく♪と鳴いた。

さすが「所でPバスターって何が元なの？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

リボルノヴァと答えた。

アリサ「まさか…合体なんてしないわよね？」

ピカチュウ「ピ…ピフユ〜♪」

なのは達「……」

ピカチュウ「……」ダツ!

バシユバシユバシユバシユバシユ!

五人からバインドをかけられた。

ピカチュウ「ピカチュウ〜!?!」

アリサ「さあ、キリキリ吐きなさい」

ピカチュウ「ピゲエ」

アリサ「ふん!」ゴチン!

ピカチュウ「ピツカ〜!?!」

ボケたら殴られた。

すずか「それで?どんな合体するの?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

Pソードを差し込む事でパワーアップすると鳴いた。

アリサ「…因みにその手の武器を他にも作ってないでしょうね?」

ピカチュウ「……」

アリサ「……」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

作ってないよ！と鳴くが…

アリサ「ギルティ！」

ピカチュウ「チャ〜…」

騙せなかった。

アリサ「何を作ったのかしら？」

ピカチュウ「ピカチュウ…ピカチュウ…ピカチュウ…ピカチュウ…」

Pカノン、Pシールド、Pブレードと教えた。

アリサ「いい加減止めた方がいいのかしら？」

さすが「役に立つだけに難しいね…」

フェイト「頑張ったね♪」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

沢山作った事を誉められたが…

アリサ「後でチェックね」

ピカチュウ「ピカ〜」

査察が入る事になった。

ーPトレーラー内ー

アリサ「怪しい物は…」ガサゴソガサゴソ

はやて「随分ネタな物ばかりやな」ガサゴソガサゴソ

すずか「でもこれといって危険なのはないよ？」

アリサ「変ね…有ると思ったんだけど？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

「ないよ！と自己主張した。」

なのは「ネタ的には後は何が足りない感じ？」

アリサ「すずか、わかる？」

すずか「う〜ん…あ！」

はやて「なんや？何か思いついたん？」

すずか「武装する時と言えば車じゃない？」

アリサ、はやて「あ〜！」チラッ

ピカチュウ「……」サツ

視線が回避された。

アリサ「さて？何処にあるの？」

ピカチュウ「ピカピ？」

なんの事？と聞き返した。

アリサ「そう…あくまでとぼけるのね」

ピカチュウ「ピカ〜…」

アリサ「あら、こんな所にみずみずしい桃が…」

ピカチュウ「ピカ!？」

アリサ「いただき…」

ピカチュウ「ピカピ〜!？」

ちよつと待つてく!?!とアリサの足に抱きついた。

アリサ「喋る気になった？」

ピカチュウ「ピカ！」

鬼！と鳴いた。

アリサ「みんなで食べようかしら…ピカチュウを除いて」

ピカチュウ「ピカ！ピカピカチュウ！」

言う！言うから頂戴！と鳴いた。

アリサ「……」ニヤリ

アリサ以外「(悪魔だ)」

アリサ「ん？何かアンタ達余計な事を考えて無かった？」

アリサ以外「いえ！何も！」

ピカチュウ「ピファチュウ」モグモグ

アリサ「それで何処にあるの？」

ピカチュウ「ピファ、ピファピファ」

アリサ「Pビツクファイヤーの中ですか？」

ピカチュウ「ゴクン。ピカチュウ！」

アリサ「見に行ってみましょう」

アリサはピカチュウを抱っこするとPハンガーに向かった。

ピカチュウ「ピカピ」

ピカチュウはパスワードを入力するとハンガー内に入り、Pビツクファイヤーに乗った。

すずか「それで？何処にあるの？」

ピカチュウ「ピカチュウ、ピカ」

車両庫に有ると言つて案内を始めた。

アリサ「これね」バサツ

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサがカバーを取ると白いパトカー…Pストライカーが現れた。

すずか「元はセブンだね」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

正解〜♪と鳴いた。

すずか「はい！私が欲しい！」

アリサ「残念ね。これは私の物よ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウはバツテンを作った。

すずか「どうして!？」

アリサ「なんでよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ、ピカピカピカチュウ」

アリサ「はあ!?!これに乗っても私達は着装出来ないですって?」

すずか「何で着装出来ないの?」

ピカチュウ「ピカピカピカチュウ」

アリサ「新型のワードスーツを積んでるですって!?!」

すずか「聞いてないよ!」

ピカチュウ「ピカ」

やく。と両手を前に出した。

アリサ、すずか「ふん!」ゴチンゴチン

ピカチュウ「ピツカ!?!」

なのは「今のはピカチュウが悪いよ」

フエイト「よしよし」

ピカチュウ「ピカ」...

アリサ「それで新型のワードスーツって何?」

ピカチュウ「ピカチュウ。ピカピカチュウ」

アリサ「耐久力30%UPにエネルギー効率を40%改善ね」

すずか「欠点は？」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

活動時間が短くなった。と鳴いた。

アリサ「具体的に」

ピカチュウ「ピカピ」

六時間。と鳴いた。

アリサ「半分…ね」

すずか「性能的には妥当かな。人が耐えられる限界だと思うし」

アリサ「まあ今のが使える以上は不要ね」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

車だけ使う？と聞いてきた。

アリサ「スーパーパトカー…いいわね」

すずか「ここは平等に…」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

ジャンケン？と聞くと…

ブン

アリサ、すずか「実力的に」

ピカチュウ「ピカ〜!？」

平和的に〜!?!と鳴いた。

はやて「意外ともう一台位あるんやないの？」

アリサ、すずか「……」チラッ

ピカチュウ「……」サッ

アリサ、すずか「ピカチュウ♪」

ピカチュウ「ピカ〜…」

ピカチュウは諦めて隣の車両庫に案内した。

すずか「こっちはギャロップが元なんだ」

ピカチュウ「ピカ」

紫色のミニパトが置かれていた。

すずか「かわいい♪アリサちゃん、私こっちにするよ!」

アリサ「じゃあ私は向こうのね」

こうしてPセイバーも戦力として加わった。

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

ジジジジ

ある日ピカチュウがアリサとすずかのPバスターを作っていると

…

ビー！ビー！ビー！ビー！

ピカチュウ「ピカチュウ!？」

慌てて作戦指令室に向かった。

ー作戦指令室ー

はやて「街のデパートから救援要請や。何でも展示してあるロスト
ロギアが暴走して大規模火災が起きたらしい」

フエイト「救助優先だね」

なのは「ガジェットの反応は？」

はやて「ないで。皆、行ってくれるな?。」

なのは達「了解!。」

ピカチュウ「ピツカ!。」

はやて「よし。ならピカチュウ！Pビツクファイヤー出動や！」

ピカチュウ「ピツカ！」

ピカチュウが走り出すとなのは達も追いかけた。

ーPビツクファイヤー内ー

ピカチュウ「ピツカ！」ポチポチポチポチ

すずか「キャプテン、市民の為に大急ぎで」

ネタに走るすずかだった。

ピカチュウ「ピツカ！ピカチュウ！」

ピカチュウは手を前にやりテイクオフ！と鳴いた。

ウーーン！ウーーン！ウーーン！ウーーン！

Pビツクファイヤーは車輪を内側にしまい飛んで行った。

ゴォー！

ピカチュウ「ピカチュウ！」

アリサ「あれが現場ね、近くに降ろして頂戴！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ウーン！ウーン！ウーン！ウーン！

Pビックファイヤーは車輪を出すと着地した。

アリサ「ピカチュウは外から消火作業！私達は内部で人命救助よ！」

ピカチュウ「ピツカ！」

ピカチュウが梯子部分を伸ばすと火元に近付けて備え付けのホースから消火液を噴射した。

ピカチュウ「ピカチュウ」ポチポチ

アリサ『そっちはどう!?』

すずか『ダメ！火の勢いが凄まじいよ！』

なのは『上もダメ！』

フェイト『下も勢いが』

アリサ『何とかしてエレベーターの中の人達を助けないと…』

ピカチュウ「ピカチュウ！」

アリサ『ピカチュウ?』

無線でピカチュウが現場に出ることを伝えた。

ピカチュウ「ピツカ！」バサツ

ピカチュウはジャケットを着ると両腰にPソード、後ろ腰にPシューター、背中のアタッチメントケースには様々な道具を格納して準備万端になった。

ピカチュウ「ピカピカピカピカ！」

ピカチュウはPビツクファイヤーを出るとデパートの途中まで登ってきた。

なのは「ピカチュウ？こちら高町！ピカチュウと合流しました！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ピカチュウはエレベーターを開けようと努力したが無駄だった。

ピカチュウ「ピカ〜…チュウ！」

ピカチュウはPドライバーを出すとディスクソーユニットを取り付け…

キュイーン！

エレベーターの扉に穴を開け始めた。

なのは「ピカチュウ！頑張って！」

ピカチュウ「ピツカ！」

カチャン！

ピカチュウはPドライバーとPシユーターを合体させてパワーアップさせた。

キュイーン!!

ガシャン!

なのは「開いた!」

ピカチュウ「ピツカ!」

エレベーターシャフトの中を覗くと下の方に止まっていた。

ピカチュウ「ピカチュウ?」

なのは「うん、救助しないと!」

ピカチュウ「ピツカ!」

ピカチュウはケーブルに掴まり…

スルスルスル

なのは「器用だね」

エレベーターまで降りた。

パカッ

ピカチュウ「ピカピ!」

ピカチュウが非常口を開けるとなのはと一緒にエレベーターの中に入った。

なのは「大丈夫ですか！しっかり！」

中に入ると母子が倒れていた。

母「私より…子供を…」

ピカチュウ「ピツカ！ピカチュウ」

ピカチュウは子供は気を失っているけど大丈夫となのはに伝えた。

なのは「よし！脱出しよう」

ピカチュウ「ピカピ！」

キュイーン!!

ピカチュウはエレベーターの扉を切断し始めた。

ピカチュウ「ピツカ！」

キュイーン…ガシャン！

フェイト「ピカチュウ！」

扉が開くと待機していたフェイトがいた。

フェイト「よし、脱出しよう」

フェイトは子供を抱き上げ、なのはは母親に肩を貸して歩き始めた。

なのは「天井に穴を開けてそこから脱出しよう！」

ピカチュウ「ピカチュウ!?ピカピ！」

何言ってるの!?崩落するよ!と鳴いた。

なのは「でも…このままじゃ…」

ピカチュウ「ピカ〜…」

ピカチュウが辺りを見回すと…

ピカチュウ「ピカチュウ！」

近くに窓を見つけたのでアタッチメントケースからノズルを出して消火液を噴射して道を作った。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

窓の近くまでやって来ると…

ピカチュウ「ピカピ！」ブン!

なのは「ピカチュウ!?!」

なのはにPソードを向けた。

ピカチュウ「ピカ…ピカチュウ！」

そのままピカチュウはなのはの後ろまで歩いて行くと…

ガシャン！ガシャン！

一体のロボットが現れた。

なのは「ロボット!?!」

フェイト「こちらは機動六課です。貴方の所属は？」

ロボット「……」

フェイト「外まで着いてきて…」

ロボット「……」ガシャン！

ロボットは手を前に向けると手首が折れ砲身が出てきた。

ババババババ！

ピカチュウ「ピカチュウ！」

バチバチバチバチバチバチバチ！

ピカチュウは迫ってきた光弾をPソードで切り捨てた。

ピカチュウ「ピカチュウ？」

なのは「要救助者がいる以上戦えないよ」

ピカチュウ「ピカチュウ！ピカピ！」

時間を稼ぐ！先に行つて！と鳴いた。

フェイト「すぐに戻るから！」

なのはとフェイトは母子を連れて脱出した。

ピカチュウ「ピカ…」

ロボット「……」チツチツチツチツ

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ」

時計のような音がしてピカチュウはPゴーグルを着けた。するとロボットの体内に爆弾が仕掛けられていた。

ピカチュウ「ピカチュウ!？」

ドカーン！

ロボットが爆発すると辺りは炎に包まれ崩落が起きてピカチュウの逃げ道を無くしてしまった。

ピカチュウ「チャ〜…ピ！」バシツ

ピカチュウはジャケットのPバッチを叩いた。

ピカチュウ「ピカチュウ〜…」

ピカチュウは信じて待つしか出来なかった。

「なのは s i d e」

なのは「お願いします！」

フェイト「よし！ピカチュウの応援に…

」

ドカーン！

なのは「爆発!？」

フェイト「ピカチュウのいる階だ！」

アリサ「なのは！フェイト！」

すずか「逃げ遅れた人達は救助したよ」

ピー！ピー！ピー！

アリサ「これってピカチュウからの救助シグナル!？」

すずか「ピカチュウは!？」

フェイト「それが謎のロボットと交戦になってピカチュウが足止めを…」

アリサ「そんなのどうでもいいわ！助けるわよ！すずか！」

すずか「うん！」

なのは「私達も！」

アリサ「行くわよ！」

アリサ達はピカチュウの救出を始めた。

ーピカチュウsideー

ピカチュウ「ピフォ！ピフォ！」

ピカチュウのいる階は煙が充満してきていた。

ピカチュウ「チャ〜…」プシューー！

少しでも助かろうとピカチュウは回りの炎に消火液をかけて時間を稼いでいた。

アリサ「ピカチュウ！」

ピカチュウ「ピカピ!？」

すずか「見つけたよ！」

ピカチュウ「ピカ〜！ピカピカピカチュウ！」

アリサ「よしよし。怖かったのね」

すずか「脱出しよう！」

アリサ、すずか「アクセルユニット！」ぶいーん！ガシャン！ガシヤン！ガシヤン！

アリサはピカチュウを抱っこするとすずかと共に脱出した。

フェイト「ピカチュウ！」

ピカチュウ「ピツカ〜！」

今度はフェイトに抱きつき甘えだした。

フェイト「よしよし。頑張ったね♪」

アリサ「ピカチュウ、帰るわよ。もう私達に出来る事はないでしょうから」

ピカチュウ「ピツカ♪」

ピカチュウとなのは達はPピツクファイヤーで帰還していった。

31話

ピカチュウ「ピカ」

ジジジジ♪

この間の火災から数日、ピカチュウはアリサとすずかの未完成だったPバスターを完成させた。

ピカチュウ「ピカ♪ピカ♪ピカ♪ピカチュウ♪」

そして試し撃ちをするため訓練場に向かっていた。

なのは「あれ？ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピ？ピッピカチュウ！」

なのは「どうしたの？」

ピカチュウ「ピカチュウ。ピカピカピカチュウ」

なのは「Pバスターの試し撃ち？いいけど」

ピカチュウ「ピツカ〜♪」

ありがとー。と言ってピカチュウは的を用意して…

ピカチュウ「ピカチュウ！」ドン

一つ目の的を壊した。

ピカチュウ「ピカチュウ！」ドン

続けて二つ目の的を壊した。

ピカチュウ「ピカチュウ」

問題なし。と鳴いた。

ピカチュウ「ピカ：チュウ！」カシャン！カシャン！

ピカチュウはPバスターを前部を前にスライドさせて砲身を出し、後部を引き伸ばして本体中央に窪みを作った。

ピカチュウ「ピカ！」

そこにPソードを挿し込み：

ピピピピ！

Pバスターにエネルギーが充電された。

ピカチュウ「ピカ！チュウ〜！」ズドン！

砲撃は幾つもの的を壊して撃ち抜いた。

ピカチュウ「ピカ!？」

ズドン！

はやて「きやあく!？」

撃ち抜いた先は部隊長室だった。

トントントン

ピカチュウ「チャ〜…」

はやて「ほら！キリキリ直しや」

部隊長室に穴を開けてしまったので修理させられていた。

アリサ「全く…何してるのよ」

ピカチュウ「チャ〜…」

トントントン

すずか「でもPバスターが完成して良かったよ」

はやて「その代わりウチの部屋がこんなやけどな」

ピカチュウ「ピカ〜／／／」

はやて「誉めとらんから早く直しや」

ピカチュウ「ピカ〜」

はーい。と返事をして直していた。

なのは「所でピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ〜？」

なのは「きつきPバスターを生身で撃つてたよね？」

ピカチュウ「ピフユ〜♪」トントントン

なのは達「……」

ピカチュウ「ピカチュウ！」トントントン！

アリサ「さて、ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ」

なに？忙しいんだけど。と鳴いた。

アリサ「私にそんな態度を取るなんていい度胸してるじゃない！」
グリグリグリグリ！

ピカチュウ「ピ〜カ〜チュ〜ウ〜!？」

やくめ〜て〜!？と鳴いた。

アリサ「喋る気になった？」

ピカチュウ「ピカチュウ！ピカチュウ！」

なったから！離して！と鳴いた。

ピカチュウ「ピカチュウ。ピカピカチュウ」

アリサ「なるほど、威力を抑えて使ったわけね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

かなり落ちるけどね。と鳴いた。

フエイト「どれくらい?」

ピカチュウ「ピカピ」

半分。と鳴いた。

アリサ「この際だから思いっきりネタに走る?」

はやて「例えば?」

アリサ「ストリーマーとか…」

すずか「トルネードとか?」

ピカチュウ「ピカチュウ?」

Pバスターが有るでしょ?と鳴いた。

アリサ「…ちよつと言ってみただけよ」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

本気だったよね!?と鳴いた。

はやて「ピカチュウ?生身で撃つ方法はないんか?」

ピカチュウ「ピカ〜…」

はやて「その感じやとあるんやな？」

ピカチュウ「ピカ」

なのは「教えてくれる？」

ピカチュウ「ピカピ」フルフル

極秘事項。と首を振った。

フェイト「お願い、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ〜…」

はやて「そこまで悩むって事は何か問題があるんやな？」

ピカチュウ「ピカ！」

アリサ「話してみなさい。解決するかもしれないでしょ？」

ピカチュウ「ピカチュウ。ピカピ」

アリサ「扱いが難しいですって？」

すずか「どのくらい？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「なるほどね。パスワードスーツをマニュアルで操作するのは同じね。確かにそれは難しいわね」

はやて「そんなに難しいん？」

すずか「マニュアル制御ではまともに動けないよ」

アリサ「オートには出来ないの？」

ピカチュウ「ピカ〜…」

出来るけど〜…と鳴いた。

アリサ「出来ないの？」

ピカチュウ「ピカ」

そう。と鳴いた。

すずか「なんで？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

予算の都合で。と鳴いた。

はやて「結局そこかい！」

ピカチュウ「ピカピカチュウ！」

予算は大事！と鳴いた。

はやて「確かに…」

なのは「どのくらいの予算が必要なの？」

ピカチュウ「ピカ〜…」ポチポチポチ

ピカチュウは電卓に金額を打ち込んでなのは達に見せた。

フエイト「あれ？随分安いね」

アリサ「何ですって？」

アリサも覗きこみ電卓に目を向けた。

アリサ「桁を間違えてない？」

ピカチュウ「ピカチュウ、ピカピカチュウ」

この特別な装甲は薄い分安いと伝えた。

アリサ「だからって安すぎない？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

装備がないもん。と鳴いた。

アリサ「装備がない!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

だから安いのと鳴いた。

「さすが「じゃあ何が売りなの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

装甲。と鳴いた。

フエイト「特殊な装甲なんだっけ？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ、ピカチュウ」

魔力の込め具合によって強度が変わる。と鳴いた。

なのは「そんなの聞いたことないよ」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

初めて言ったもん。と鳴いた。

アリサ「でもPバスターを撃つには問題ないのよね？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

魔力を込めてれば。と鳴いた。

アリサ「はやて」

「はやて「うん、使えるな。ピカチュウ？量産してくれるか？予算は出す」

ピカチュウ「ピカ〜…ピカチュウ」

決ったが作ることにしたピカチュウだった。

32話

ピカチュウ「ピカ」ジジジジ

あれからピカチュウは新しい装甲をなのは、フェイト、はやての分とPバスターを作っていた。

ピカチュウ「ピカ〜…」ジジジジ

熱中していると…

ビー!ビー!ビー!

警報が鳴った。がしかし…

ピカチュウ「ピカチュウ〜…」ジジジジ

作業に没頭して気付いていないピカチュウだった。結果…

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「全く…警報を聞き逃すなんて」

すずか「まあまあ。反省してるんだし」

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「…わかったわよ。もうこれ以上は言わないわよ」

事件解決後、お説教を頂いた。

ピカチュウ「ピカチュウ？」

アリサ「特に災害は無かったわよ。私達も現場待機だったし」

ピカチュウ「ピカ〜」

ピカチュウはそれを聞いてホツとした。

すずか「それで？ピカチュウの方は？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

もう少しで完成。と鳴いた。

アリサ「なるべく急いで頂戴。何が起きるかわからないから」

ピカチュウ「ピツカ！」

わかった！と手を上げて鳴いた。

ピカチュウ「ピカチュウ！」ジジジジ！

更に数日、Pバスターと新しい装甲、Pテクターが完成した。

ピカチュウ「ピカ〜♪」

ピカチュウは早速はやてに伝えに行こうとすると…

ピリリリ♪

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ？」

アリサ『あ、ピカチュウ？』

無線機がなり出るとアリサだった。

ピカチュウ「ピカピ？」

アリサ『悪いんだけどなのは達の部屋に来てくれる？』

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウはわかったと鳴くとUターンして隊舎に向かった。

ピカチュウ「ピツカ？」

ピカチュウがドアの前で鳴くと…

カシユ！

アリサ「ちようど…」

？「いつちややだ〜！」

ピカチュウ「ピカ〜？」

アリサ「いい所に来たわね」

ピカチュウ「ピカ？」

アリサはピカチュウを抱っこすると中に入った。するとFW陣に隊長陣が勢揃いしていた。

なのは「お願い、ヴィヴィオ？」

ヴィヴィオ「いつちややだ〜！」

なのはの足に抱きついて泣いてる少女、ヴィヴィオがいた。

ピカチュウ「ピカ〜？」

アリサ「泣きついて離れなくなったのよ。これから教会で会議があるのに」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

それでボク？と鳴いた。

アリサ「頼める？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウはアリサの腕から降りると…

ピカチュウ「ピカ！ピッピカチュウ！」

ヴィヴィオ「ふえ？」

ヴィヴィオに向かって挨拶した。

なのは「ヴィヴィオ、この子はピカチュウ。フェイトさんとアリサさんの使い魔だよ」

ピカチュウ「ピカ〜♪」スリスリ

ピカチュウはヴィヴィオに近付いて体を擦り付けた。

なのは「ほら、ピカチュウと一緒に居ようっていつてるよ?」

ヴィヴィオ「う〜:」

なのは「すぐに帰ってくるからピカチュウと一緒に待っていてくれる?」

ヴィヴィオ「:うん」

ヴィヴィオはピカチュウを抱っこすると泣き止み:

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

ヴィヴィオ「待て〜♪」

楽しく遊んだ。

ピカチュウ「ピツカ〜」カシユ

はやて「お?どうしたん?」

ピカチュウ「ピカチュウ、ピカピカチュウ」

ピカチュウは昨日報告出来なかったPバスターとPテクターの完成を教えた。

はやて「そうか！遂に出来たか！」

ピカチュウ「ピカ」

はやて「なら早速、なのはちゃん達に渡して来てくれるか？」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウは部屋を出ていった。

ピカチュウ「ピカ〜？」

ピカチュウがなのは達を探していると…

ヴィヴィオ「みーつーけーたー♪」

ピカチュウ「ピカピ!？」

急に抱き上げられたピカチュウは驚いて振り向くとヴィヴィオが嬉しそうにしていた。

ヴィヴィオ「さあ、行こう♪」

ピカチュウ「ピカピ〜!？」

ちよつと〜!?と鳴くがヴィヴィオには通じなかった。

ヴィヴィオ「ん〜♪」

ピカチュウ「ピカ〜…」

あれ以来、ヴィヴィオはピカチュウがお気に入りになった様子でピカチュウを手放さなかった。すると…

フェイト「あれ?ピカチュウ?ヴィヴィオと遊んでるの?」

ヴィヴィオがピカチュウを抱っこして歩いているとフェイトがやって来た。

ヴィヴィオ「一緒に遊んでるの!」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

捕まったの…と鳴いた。

フェイト「アハハ…」

フェイトも苦笑するしかなかった。

ヴィヴィオ「またね、フェイトママ!」

ピカチュウ「ピカピ〜!」

助けて〜!と鳴くが…

フェイト「……………」

拜むフエイトだった。

ピカチュウ「ピカ！」キョロキョロ

今日こそはなのは達に武装を渡すためピカチュウは慎重に六課内を進んでいた。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

カシユ！

なのは「あれ？ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ！」キョロキョロ！

ピカチュウは念には念を入れて辺りを警戒して…

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

安堵した。

なのは「どうしたの？」

ピカチュウ「ピカチュウ！ピカピカピカピカピカピカピカピカピカピカ
ウ」

ピカチュウはここまで来るのに何度もヴィヴィオに捕まった事を切実に説明した。

なのは「アハハ…ごめんね？」

ピカチュウ「ピカピ」

仕方ない。と鳴いた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

コトン

ピカチュウは背負っていたリュックからPバスターとPテクターの待機状態のブレスレットをなのはに渡した。

なのは「うん、ありがとう♪確かに受け取ったよ」

ピカチュウ「ピカ♪」

ピカチュウが部屋を出ると…

ヴィヴィオ「みつけた〜！」

ピカチュウ「ピカピ〜!？」

ヴィヴィオに連れ去られた。

なのは「アハハ…」

なのはは渴いた笑みで見送った。

ピカチュウ「ピくカく…ピくカく…」

次の日、ピカチュウはフェイトに武装を渡すため六課内を疲れた様子で歩いていた。

フェイト「あれ？ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカピく！」

フェイト「わ!?!どうしたの？」

ピカチュウ「ピカチュウ！ピカピカピカピカピカピカチュウ」

ピカチュウは切実に説明した。ヴィヴィオに連れ去られた事を…

フェイト「アハハ…ありがとうね？」

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ」

ピカチュウはフェイトにPバスターとPテクターの待機状態を渡した。

フェイト「うん、確かに受け取ったよ」

ピカチュウ「ピファチュウ」

疲れたから寝るね。と鳴いた。

ピカチュウはアリサの部屋に戻った。

ピカチュウ「ピく…カく…」

ピカチュウが疲れを癒していると…

ヴィヴィオ「ピカチュウく？」

アリサの部屋にヴィヴィオがやって来たが…

ピカチュウ「ピく…カく…」

ピカチュウは眠っていた。

ヴィヴィオ「寝てるの…」

ヴィヴィオはしばし考えて…

ヴィヴィオ「お休みなさいく」

ピカチュウ「ピカく…」

ピカチュウを抱っこして眠った。そして数時間後…

アリサ「今日も疲れたわね。あら？」

アリサが部屋に戻って来るとヴィヴィオがピカチュウを抱っこして眠っていた。

アリサ「もしもしなのは？私の部屋でヴィヴィオが寝てるのよ…

ええ待ってる」

しばらくしてヴィヴィオを引取りに来たなのはにヴィヴィオを渡してアリサはピカチュウをバスケットに戻した。

33話

ヴィヴィオ「やだ〜!」

なのは「ごめんね?でもお仕事なの。ピカチュウは連れて行かないといけないの」

ヴィヴィオ「や〜だ〜!」

警護任務の為に本局に行くことになったなのは達だがヴィヴィオが駄々をこねだした。

ピカチュウ「ピカ〜…」

なのは「ほら、ヴィヴィオ?わがままばかり言うからピカチュウが困ってるよ?」

フェイト「帰ってきたらいっぱい遊んでもらおう?..ね?」

ヴィヴィオ「うう…うん」

ヴィヴィオもやっと納得してくれて、なのは達は出発した。

ー本局ー

ピカチュウ「ピカピ〜」

アリサ「後はよろしくね」

「さすが「何かあったら無線機で連絡して」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウは中にデバイスを持ち込めない為、アリサとさすがの電子手帳を預かった。

なのは「みんなも気をつけてね」

FW陣「はい！」

なのは達もデバイスを預けると本局に入った。

ピカチュウ「ピカピ？」

ヴィータ「ん？確かに嫌な雰囲気だな」

なのは達が中の警護に向かって数時間後…

オペレーター「周囲にガジェットの反応が多数出現！迎撃してくださいー！」

ヴィータ「やっぱりか！」

ルキノ「ヴィータ副隊長！そちらに所属不明の反応が向かっています！およそ…Sランク！」

ヴィータ「くそ！なのは達にデバイスを渡さなきゃならないのに！」

ピカチュウ「ピカチュウ！ピカピカピカチュウ！」

ヴィータ「あん？わかった！お前ら！ピカチュウになのは達のデバイスを渡せ！そして地上のガジェットはお前らが迎撃しろ！気を抜くなよ！」

FW陣「はい！」

FW陣は返事をする…

スバル「おねがいね？」

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

ピカチュウはアツタチメントケースにデバイスを積めると本局内部に向かった。

ピカチュウ「ピカピカピカピカチュウ〜！」

ピカチュウが正面玄関に辿り着いたが…

ピカチュウ「ピカ〜…」

本局の扉がロックされていた。

ピカチュウ「ピカ！」

…
ピカチュウはすぐさま別の入口を探し始めた。その頃、なのは達は

…
なのは「まさかハッキングされてるなんてね…」

フエイト「外に出ることも中に入る事も出来ない」

アリサ「だからデバイスを預けたくなかったのよ！」

すずか「ここで怒鳴ってもしょうがないよ」

はやて「とはいえ扉も…エレベーターもロックされたのは痛いな」

なのは達が八方塞がりになっていると…

ゴトン！ガタガタ！

なのは「な、なに！」

突如、排気口から物音がなり、なのは達と周囲にいた局員が警戒した。

ガタガタ！ガチャン！

ピカチュウ「ピカ！ピカチュウ〜！」

なのは達「ピカチュウ！」

ストン

ピカチュウ「ピカピ〜！」

ピカチュウは排気口から降りるとアリサの足に抱きついた。

アリサ「ピカチュウ、よく来たわね。アンタの事だからデバイス、

持ってきたんでしょ？」

ピカチュウ「ピカ！」

ピカチュウはアツタチメントケースからなのは達全員のデバイスを出した。

アリサ「よし！これで何とかなる！ピカチュウ！アンタはさすがと一緒にここの人達を逃がしなさい！」

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

ピカチュウは敬礼して鳴いた。

ピカチュウ「ピカ〜！」

キュイーン!!

ピカチュウはアツタチメントケースからPドライバーを出しPシューターと合体させて非常階段の扉を切断していた。

すずか「ピカチュウ、どいて。そんだけ亀裂があれば叩き壊れると思うから」

バキッ！

すずかは亀裂にパンチすると扉を破壊した。

すずか「さあ！次の階だよ！」

ピーピーピー！

ピカチュウ「ピカチュウ？」

ルキノ『こちら機動六課！現在ガジェットに襲撃を…ブツン！』

ピカチュウ「ピカ!?ピカピ！」

通信が切れると繋がらなくなった。

すずか「まさか六課が狙われるなんて…」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

すずか「どうしようって言われても…」

局員「行つてください！ここは私達がなんとかします」

すずか「…わかりました。ピカチュウ、行くよ！」

パリン！

すずかは窓を突き破ると六課に向かった。

ピカチュウ「ピカ…ピカピ！」

ピカチュウはこのままでは間に合わないと思うとアツタチメントケースからPボールを出し、Pブラスターを展開した。

ピカチュウ「ピカチュウ！」ゴオー！

すずか「ちよつと！ピカチュウ！」

ピカチュウはすずかを置いて一匹で先行してしまった。

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ピカチュウは出力を最大にして飛んでいた。するとすぐさま機動六課が見えてきた。

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ！」

先に来ていたライトニングと協力してガジェットを破壊し始めたが、数が多すぎた。

パリン！

ピカチュウ「ピカ？ピカピ！？ピカチュウ！」

すると謎の人型がヴィヴィオを抱えて帰還しようとしていた。ピカチュウはヴィヴィオを助ける為に向かったが…

シャキン！

スレ違い様にエンジンを斬られ墜落していった。

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ピカチュウはヴィヴィオ〜！と鳴くが届かなかった。

34話

ピカチュウ「ピカチュウ…」

なのは「ううん、ピカチュウのせいじゃないよ」

六課襲撃から数日、ピカチュウはヴィヴィオを助けられなかった事を何度もなのはに謝っていた。

アリス「ほら、アンタも疲れてるんでしょ？少し寝てなさい」

ピカチュウ「チャ〜…」

ピカチュウはPブースターを修理すると言ってその場を去った。

アリス「はあ…こんなんじや飼い主失格ね」

アリスのぼやきはピカチュウには届かなかった。

ーアースラー

ジジジジ

そして数日、アースラーに拠点を動かした六課メンバーは最終決戦に備えていた。

ピカチュウ「……」ジジジジ!

そしてピカチュウはPブースターの修理終えた。

ビー! ビー! ビー!

はやて『これよりゆりかごに向けて戦闘要員は出撃してください!』

ピカチュウ「ピカチュウ〜!」

ピカチュウは今度こそヴィヴィオを救うため出撃した。

ズビュン!ズビュン!

ピカチュウ「ピカピカピカピカピカピカピカピカピカピカピカ
ピカピカピカ〜!」

そしてピカチュウは周りのガジェットを玉砕していた。

局員『突入口!開きました!』

ピカチュウ「ピカピ!ピカチュウ〜!」

ピカチュウはなのはとヴィータに続いて突入した。

ピカチュウ「ピカチュウ〜!」

ヴィヴィオ〜!と叫びながら飛んでいると…

なのは「ピカチュウ、落ち着いて」

なのはにたしなめられた。すると…

がちやがちや！がちやがちや！

ガジェットの大軍が押し寄せて来た。

ピカチュウ「ピカチュウ、ピカピ？」

ピカチュウがどうすると鳴くと…

なのは「こんなところで油を売ってる訳には行かないよ」

ピカチュウ「ピカチュウ！ピカチュウ！ピカチュウ！ピカチュウ！」

わかった！ここは引き受けた！先に行つて！

ズビュン!!ズビュン!!ズビュン!!ズビュン!!

ピカチュウは突破口を開いた。

なのは「ピカチュウ！」

ピカチュウ「ピツカ！」

行つて！と鳴き、なのはに背を向けると…

ズビュン!!ズビュン!!

なのはの盾となった。

なのは「ごめん！ピカチュウ！」

ピカチュウ「ピカ：チュウ〜！」

ピカチュウはレールカノン、電撃と巧みに使いガジェットを破壊していった。

ボーン！

そしてどれくらいの間が経過したのだろう…ピカチュウがガジェットを破壊してからとうとうPブースターが火を吹いた。

ピカチュウ「ピカ！ピカチュウ」

ごめん！Pブースターと鳴き、収納すると…

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウは禁断の兵器、リボルノヴァを出した。

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ピカチュウはPソードを二本装填してリボルノヴァを発射した。

ズドドドン！

ピカチュウ「チャ〜！」

溢れていたガジェットは皆消し飛んだが…

ピカチュウ「ピ…カ…チュ…」

ピカチュウは多大なダメージで倒れてしまった。

ピカチュウ「……ピ……カ？」

どれくらいの間が経過したのか、ピカチュウが目を覚ました。だが激痛で動けなかった。

ピカチュウ「ピカチュウ？……ピカ……ピカチュウ」

ピカチュウは僕死ぬのかな？……せめて……アリスにもう一度会いたかったと鳴いた。

アリス「ふざけた……事を……言ってるんじゃないわよ！」

ピカチュウ「ピカ……」

ピカチュウは抱き上げられた。視線を上に向けるとパワードスーツがボロボロになったアリスとすずかがいた。

すずか「私も忘れないで欲しいな？」

ピカチュウ「ピカピ……」

ピカチュウは涙した。こんなにボロボロになって自分の救出に来てくれた二人に。

アリス「さあ、脱出するわよ」

アリスは力強くピカチュウを抱き締めた。必ず助けると。

アリサ「ゆりかごの最後ね」

へりに戻ったアリサ達はモニターでゆりかごの最後を見届けようと集まっていた。

ピカチュウ「……」

そして…

ズドドドン!!

管理局の艦隊のアルカンシエルで砲撃を受けた。が…

はやて「なんやて!」

ボロボロになったゆりかごはまだ上昇していた。

はやて「クロノ君!」

クロノ『駄目だ、再チャージが間に合わない…』

ピカチュウ「……」サツ

誰もが絶望した。折角後一息というところまで来たのに…と。その時…

ウィーン!ウィーン!ウィーン!ウィーン!

すずか「この音は…」

アリサ「Pビツクファイヤー!？」

ヘリの横をPビツクファイヤーが通りすぎた。

アリサ「ピカチュウ?ピカチュウく！」

アリサはピカチュウが居ないことに気付き通信を開いた。

ピカチュウ『ピく…』

アリサ「何をする気なの！」

ピカチュウ『ピカピカチュウ』

ピカチュウはPビツクファイヤーをぶつけてゆりかごを破壊すると鳴いた。

アリサ「やめなさい!そんな事したらアンタが！」

ピカチュウ「ピカピ」

アリサ「何よ…」

ピカチュウ「ピカピカピカチュウ」プツン

最後に会えて良かったと鳴いて通信を切った。

アリサ「ピカチュウ！」

アリサが飛び出そうとしたが…

「さすが「駄目だよアリサちゃん！スーツの限界を超えてる！これ以上使うのは無理だよ！」

アリサ「離して！ピカチュウが！」

はやて「あ！」

はやてが声を上げるとモニターにPビックファイヤーが映った。

アリサ「ピカチュウ！」

アリサがモニター見るがタイミングが悪かった：

ガシャン!!ズドドドン!!

Pビックファイヤーとゆりかごがぶつかり爆発して互いに消えた。

アリサ「いや…そんな…：ピカチュウ！」

アリサの悲しい悲鳴だけが響き渡った。

それから数ヶ月：

アリサ「……」

はやて「どないや？」

「さすが「黙々と仕事をしてる」

はやて「犠牲者はなし…でも大切な仲間を失った」

すずか「今はそつとしておこう」

アリサ「……」

事件から数ヶ月、ピカチュウははやての計らいで行方不明となっていた。これはアリサの心の為でもあった。

アリサ「……」ガタツ

アリサは席を立つと外に向かった。

アリサ「ピカチュウ…」

アリサは海を眺めた。ピカチュウとの思い出を思い出しながら。

アリサ「……」

?「……チュウ〜!」

アリサ「えっ…」

突如鳴き声が出した方を見ると…

ピカチュウ「ピカチュウ〜!」

アリサ「ピカチュウ〜!」

ヒシッ!

一人と一匹は互いに抱き締めあった。

アリサ「アンタ！今まで何処にいたのよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ、ピカチュウ」

アリサ「治癒ロボットの中で怪我を癒していたですって？」

ピカチュウ「ピカピク！」

アリサ「どれだけ心配したと思ってるの！」

ピカチュウ「チャク…」

アリサ「でも…良かった」

アリサは力強く抱き締めた。いついつまでも。

アフター

35話

ピカチュウ「ピカ〜…ピカチュウ」

アリサ「そう…修復は不可能ね」

ピカチュウが帰ってきてから数日、アリサとすずかはパスワードスツが修復出来るか訪ねていた。

すずか「どうする？」

アリサ「幸いなのはローンが払い終わってた事かしら」

すずか「そうだね…」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

作り直す？と聞くと…

アリサ「いえ、新型に乗り換えましょう」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

毎度あり〜♪

アリサ「…ローンって嫌ね」

すずか「そうだね…」

またローン地獄を味わうはめになるとは思わなかった二人だった。

アリサ「でもストライカーとセイバーは無事なの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

無事だよ。

アリサ「…ああ！隠し倉庫に隠したの？」

ピカチュウ「ピカチュウ♪ピカ…」

そうなんだよ♪かくし…

アリサ「やっぱり隠し倉庫がまだあったか！」

ピカチュウ「チャ〜!？」

お説教タイムの始まりだった。

アリサ「アンタは！一体幾つの倉庫を借りたの！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

買ったの！

アリサ「威張るな！」

ピカチュウ「チャ〜!？」

すずか「飼い主は大変だね」

暢気にすずかは眺めていた。

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

アリサ「キッツ！」

すずか「前より負担が大きく感じるよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

そんなはずないよ？と鳴いてパソコンを操作していた。

アリサ「鈍った証拠ね」

すずか「鍛え直さないと駄目かな？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

特訓だね！

―部隊長室―

アリサ「という訳で休みを貰うわ」

はやて「そんなに鈍ったん？」

すずか「うん、弛んだみたい」

ピカチュウ「ピカピ？」

お腹が？ゴチン！

ピカチュウ「ピツカ〜!？」

はやて「どんな特訓するん？」

アリサ「山籠りよ」

はやて「古ッ！」

すずか「意外と効率がいいんだよ？」

はやて「そうなん？」

なのは「シミュレーターじゃ駄目なの？」

アリサ「流石に山道を再現出来ないでしょ」

フェイト「ねえはやて？私達も行ってみない？訓練になると思うし」

はやて「う〜ん、そやね。野外訓練って名目で皆で行こうか」

六課メンバーも訓練に付いていく事になった。

ピカチュウ「ピカチュウ〜！ピツカ！ピツカ！」

アリサ「フウフウ！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！ピツカ！ピツカ！」

すずか「フウフウ！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！ピツカ！ピツカ！」

なのは達「ゼーハー…ゼーハー…」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！ピツ…」

なのは達「ちよっと休ませて！」

ピカチュウ「ピカ〜？」

もう〜？

アリサ「だらしないわね」

なのは「アリサちゃん達がおかしいよ！FW陣なんか…」

FW陣「……」

グツタリしていた。

アリサ「鍛えが足りないわよ」

すずか「事務仕事ばかりし過ぎじゃないかな」

はやて「なんでや…書類仕事はそんなに大差はないはずなのに…」

ピカチュウ「ピツカピカチュウ」

ボクが手伝ってるもん。

なのは達「ズル！」

すずか「ちゃんと仕事だもん。ピカチュウの」

はやて「なあ、ピカチュウ？アリサちゃん達の手伝いやめてこつちを手伝わへん？」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

報酬は？と聞くと…

はやて「何を貰ってるん？」

ピカチュウ「ピカチュウ♪ピツカピカ！」

桃だよ！しかも沢山！と嬉しそうに鳴いた。

はやて「ピカチュウ？他に食べたいものないんか？」

ピカチュウ「ピカ〜」

ないなくと鳴いた。

はやて「くっ」

アリサ「ほら、さっさと再開するわよ」

ピカチュウ「ピカ！ピカ！ピカチュウ〜！ピツカ！ピツカ！」

トレーニングを再開したアリサ達だった。

36話

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウが掛け声をかけるとなのは達は腕立て伏せを開始した。

アリサ「ふっ！ふっ！」

すずか「ふっ！ふっ！」

なのは達「ん〜！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」パシン

気合い入れて！と鳴くと竹刀で地面を叩いた。

はやて「スパルタや…」

ティアナ「くう…」

キャロ「うう…」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

スパート！と鳴くと腕立て伏せを早くやった。

ピカチュウ「…ピカチュウ」

そしてピカチュウは休憩と鳴いた。

アリサ「いい汗かいたわね」

すずか「そうだね」

なのは「ハアハア…」

はやて「化けもんか…」

アリサ「失礼ね。アンタ達と同じうら若き乙女よ」

ピカチュウ「……」

すずか「乙女だよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

そうだね。と鳴くと深くは突っ込まなかった。

ピカチュウ「ピカチュウ♪」混ぜ混ぜ

なのは「何作ってるの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

カレーだよ。

はやて「ピカチュウ？いつ料理を覚えたん？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

暇なとき。

フエイト「いい匂い♪」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

でしよ〜♪と鳴くと味見した。

ピカチュウ「ピッピカチュウ♪」

完成したらしい。

アリサ「さあ頂きましょう」

すずか「はーい♪」

なのは達は順番にカレーをお皿に盛った。

なのは達「うまつ!？」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

なのは「うう…ピカチュウに料理で負けるなんて」

フエイト「真面目に練習しよ…」

若干二名程ダメージを受けていた。

ピカチュウ「ピファ〜♪」
シヤリシヤリ

はやて「ピカチュウはカレーは食わんの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

僕はコツチと鳴くと林檎を見せた。

はやて「相変わらずやね」

スバル「一家に一匹は欲しいですね」

アリサ「あげないわよ？」

スバル「ですよね〜…」

ピカチュウ「ピファ〜♪」シヤリシヤリ

ピカチュウだけはマイペースだった。

ピカチュウ「ピカ〜…チュウ〜…」

アリサ「起きなさい、ピカチュウ。朝よ」

ピカチュウ「ピカ？チャ〜♪」

ピカチュウは伸びくと体を伸ばした。

ピカチュウ「ピッピカチュウ♪」

アリサ「はい、おはよ」

アリサはピカチュウを連れてテントを出た。

アリサ「さて今日の訓練は…魚捕りよ」

なのは達「へっ?」

さすが「柔軟さを鍛える訓練だよ」

アリサの説明にさすがが補足して説明してきた。

アリサ「早速川に行くわよ」

アリサを先頭に川に向かった。

アリサ「先に言っておくわよ。フェイトとエリオは電気を使うのは禁止よ」

フェイト「やっぱり?」

エリオ「わかりました!」

アリサ「ピカチュウもね」

ピカチュウ「ピカピ!?!」

アリサ「アンタこの間の山籠りしたときさすがに感電させたから駄目よ」

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「今日の食事はまさに自給よ。お腹を満たしたかったら頑張りなさい、解散！」

ピカチュウ「ピカ！」

なのは達が川に向かうとピカチュウはテントに戻り…

ピカチュウ「……」ピン！キュキュ！

何かを作りなのは達を追った。

アリサ「ふ！ほ！」

はやて「熊や」

なのは「熊だね」

アリサは泳いでる魚を手で弾いていた。

すずか「……えい！」

すずかはすずかで木の枝を細くして銚子のように使っていた。

フェイト「…これって真剣にやらないとご飯抜き？」

アリサ「当然でしょ？」

なのは「魔法は？」

「さすが「無しだよ」

「はやて「やっぱり？」

「各自頑張る事になった。」

スバル「でやあ！」

ティアナ「この！」

FW陣も頑張るが…

キャラ「うう…捕れない」

ピカチュウ「ピツカ♪ピツカ♪」

そしてピカチュウは竿とクーラーBOXを持ってなのは達より上流に向かった。

ティアナ「釣り…出来るの？」

スバル「さあ…」

ピカチュウの謎がまた一つ増えた。

ピカチュウ「ピカ〜」ポチャン

「暫し待つと…」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

擬似餌に騙された魚を釣り上げた。

ピカチュウ「チャ〜♪」

ピカチュウは繰り返し擬似餌を垂らし魚を何度も釣り上げていった。

なのは「うう…結局獲れなかった…」

はやて「これだけ動いてご飯抜きは辛いで…」

アリサ「諦めなさい…モグモグ」

すずか「ごめんね？モグモグ」

フェイト「二人は良いよね…」

獲れなかったなのは達は恨めしそうにアリサ達を見ていた。

アリサ「アタシだって足りないんだから」

はやて「無しよりはマシやろ？」

アリサ「まあね」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

暫くしてピカチュウが戻って来た。

「さすが「お帰り。遅かったね？」

ピカチュウ「ピカ！ピカチュウ」

アリサ「はあ？今まで釣ってた？」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

ピカチュウは嬉しそうにクーラーBOXを開けた。

なのは達「あ〜！」

沢山の魚が入っていた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

早速ピカチュウは腸を取り串に刺して焼き始めた。

パチパチ

ピカチュウ「ピツカチュウ〜♪」

焼けるのを今か今かと待っていた。

ピカチュウ「ピカチュウ？ピカ〜♪」

焼き上がると早速…

ムシヤムシヤ

食べ始めた。

ピカチュウ「ピカピカチュウ♪」

たまに食べると美味しい。と鳴いた。

なのは達「……」じく

ピカチュウ「ピカチュウ？」

食べたい？と聞くとなのは達は…

なのは達「うん！」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

電卓を出した。

はやて「相変わらずセコいな！」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウはそっぽを向いた。

なのは「わく！拗ねないで！」

フエイト「ほらく！いい子だからね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

さあ買ったく。

チャリン♪

なのは達はピカチュウから魚を買った。

スバル「うう…満たされる♪」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウはどんどん焼き始めた。

キャラ「美味しいです」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「まったく」

すずか「まあまあ♪」

微笑ましそうに見ているアリサとすずかだった。

ピカチュウ「ピカ…チュウ…」

アリサ「さて、今日の訓練は…」

なのは「訓練は？」

すずか「ピカチュウと鬼ごっこだよ」

ピカチュウ「ピカ？」

寝ていたピカチュウが目を覚ました。

はやて「キツくないか？」

アリサ「だから訓練なんですよ？」

はやて「ごもつとも」

アリサ「捕まえないと…」

フェイト「捕まえないと？」

すずか「ご飯が有料になるからね？」

FW陣「頑張ります！」

みんな自腹は嫌らしい。

アリサ「当然だけど魔法は禁止よ」

すずか「じゃあ行くよ？よーい…」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

アリサ達「待て〜！」

ピカチュウの掛け声とともに始まった。

ピカチュウ「ピカピカピカチュウ〜！」スタタタ！

なのは「あく〜！セコイの！」

ピカチュウは川の側を逃げてると近くにあった木に登った。

アリサ「このパターンは最悪ね」

はやて「どういう事なん？」

すずか「木に登ったらその間に逃げられるし、かといってほっとくと時間切れだし」

はやて「セコイ！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ほっといて。と鳴いた。

フェイト「どうする？」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」ポチャン

ピカチュウは何処から出したのか釣りを始めた。

はやて「おちよくつとんのか！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

今日の晩ごはんだ。

アリサ「…地味に捕まえにくい状況ね」

フエイト「どうして？」

すずか「今捕まえると晩ごはんが何もないよ」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

ピカチュウは魚を釣り上げ始めた。

なのは「うう…捕まえたいけど晩ごはん抜きは辛い…でも自腹は嫌だし…」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

まさに入れ食い状態だった。

すずか「邪魔出来ないね」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

二時間程立ち…

ピカチュウ「ピツカチュウ♪」

ピカチュウはクーラーBOXをPボールにしまった。

アリサ「釣りが終わったみたいね」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

アリサ「そうね、そろそろ【真面目】にやりましょうか」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」スタタタ！

なのは「あ！」

ピカチュウがスタタタ！と木を降りると…

なのは達「待て〜！」

真面目に鬼ごっこを始めた。

フェイト「速い！」

なのは達の中で一番速いフェイトでさえ捕まえれずにいた。

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

逆にピカチュウは遊んでもらえてると思っっているのか楽しそうだった。

なのは達「ゼーハー…ゼーハー…」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

今日の訓練はお仕舞いだね。と鳴いた。

アリス「そうね」

すずか「終わりにしようか」

慣れてるのか二人は平気そうだった。

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」シャツシャツ♪

スバル「お〜♪焼きそばだ〜♪」

ピカチュウ「ピカ！」

ティアナ「何でも出来るのね」

ピカチュウ「ピカ〜／／／」

キャロ「いい匂い♪」

エリオ「美味しそうだね」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

雑談しながら焼きそばを作り上げた。

スバル「わーい♪いた〜」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

ピカチュウは電卓を出してきた。

なのは達「え」

ピカチュウ「ピカピカチュウ？」

捕まえられなかったでしょ？

なのは「うう…」

はやて「背に腹は変えられへん」

チャリン♪

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

毎度あり〜♪と鳴くと焼きそばをなのは達に配った。

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」カシャカシャ♪

ピカチュウは余った材料を使って何かを作り始めた。

ピカチュウ「ピカ♪」

ジュー♪

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

はやて「お好み焼きやと！」

ソースが焼ける香ばしい匂いが漂ってきた。

ピカチュウ「ピカピカチュウ♪」

しかも豚たま♪と鳴くと…

ピカチュウ「ピカチュウ♪ハフハフ♪」

美味しそうに食べ始めた。

はやて「旨そうやね？」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

それなりの出来だよ？

はやて「一口くれへん？」

ピカチュウ「ピカカ」

あーんと鳴くとコテに乗せたお好み焼きを差し出した。

はやて「旨！ピカチュウ？ウチにも焼いてくれへん？」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

はやて「モダンで」

ピカチュウ「ピカ〜！」

ジュー♪

ピカチュウ「ピカチュウ！」

へいお待ち！

はやて「ハフハフ♪旨いわ〜♪」

はやて以外「私にも！（僕にも！）」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

ジュー♪ジュー♪ジュー♪

ピカチュウはどんどん焼き始めた。

なのは達「旨い♪」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

魚と焼きそばとお好み焼きを楽しみながら食事を終えた。

37話

スバル「う〜ん♪帰ってきた〜」

そして山籠りを終えたなのは達は機動六課に帰ってきた。

ピカチュウ「ピカチュウ！ピカピカチュウ！」

機動六課よ！僕は帰ってきた！

スパン！

アリサ「バカやってないで入るわよ」

ピカチュウ「ピ〜カ」

はーいと鳴くと自室に戻った。

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」バツ！ガシツ！

アリサ「ベツトにダイブしない」

ピカチュウ「チャ〜…」

残念そうなピカチュウだった。

ピカチュウ「ピカ〜」カチカチ

ピカチュウは早速パソコンを弄り始めた。

アリサ「ピカチュウ？アタシは書類確認してくるけどどうする？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

ちよつとパソコン弄つてる。

アリサ「わかったわ」

アリサは部屋を出ていき…

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウは何やら作業を続けた。

ピカチュウ「ピカチュウ！」キューーン！

そして一月程ピカチュウは開発に専念した。

ピカチュウ「ピカ」カチカチ。ポチポチ。

そして数日間パソコンに向かいばつなしで作業を続けた。

ピコン！

ピカチュウ「ピカチュウ！」

アリサ「うるさい！叫ばないの！」

ピカチュウ「チャ〜…」

部隊室で叫んだら怒られて、ごめんなさい…と鳴いた。

ビー！ビー！ビー！ビー！

アリサ「警報！行くわよ！」

ピカチュウ「ピカ！」

アリサとピカチュウは指令室に向かった。

はやて「市街地で大規模火災が発生した。人手が足りなくて応援要請が六課にも来た」

なのは「火災原因は？」

はやて「これを見てほしい」

モニターにはヴォルテール位の竜が映っていた。

ヴィータ「デカ！」

はやて「コイツが暴れてて手におえない状態や」

フェイト「キャロのヴォルテールと隊長陣で相手してスバル達は救助にまわってもらおうと思う」

シグナム「それがベストだな」

アリサ「アタシ達は救助にまわるわね」

はやて「救助の指揮はアリサちゃんに任せる」

ピカチュウ「ピカピ？」

ボクは？と聞くと…

アリサ「待機してなさい」

ピカチュウ「ピカ！」

了解！

はやて「ウチも出る。機動六課、出撃！」

なのは達「了解！」

なのは達はへりで現場に向かった。

ピカチュウ「ピカ〜」

ピカチュウは端末を操作しながら情報をいち早く集めアリサ達救助班にデータを送っていた。

アリサ『ピカチュウ、次！』

その情報のお陰で救助は順調に進んでいた。

ピカチュウ「ピカ」

しかし救助は順調だが火災は広がる一方だった。

ピカチュウ「ピカチュウく…」

すずか『火災が広がってる？マズイね』

アリサ『消火状況は!?!』

ピカチュウ「ピカピカチュウ！」

戦闘の余波があつて難航していると鳴いた。

アリサ『何とかしないと…』

ピカチュウ「ピカく…ピカチュウ」

アリサ『何？方法がある?』

すずか『どんな?』

ピカチュウ「ピカチュウ?」

怒らない?と聞くと…

アリサ『この際怒らないわ!何とか出来るなら何とかして頂戴!』

ピカチュウ「ピカチュウく!」ポチ!

ピカチュウはボタンを押すと何処かに向かった。

ザパア!

ピカチュウ「ピカチュウ〜!」

ピカチュウは海に現れた巨大な建造物に向かい乗り込んだ。

ピカチュウ「ピカチュウ〜!」

ミニミニピカチュウ「チュウ〜!」

小さなピカチュウのロボットが忙しなく動き始めた。

ピカチュウ「ピカピ!ピカピカチュウ」

ビルドアップ!PBロボ!

建造物は前から起き上がるとロボットになった。

ピカチュウ「ピカピカチュウ!」

ライナースタンバイ!と鳴くと運転席に座った。

ミニミニピカチュウ「チュウ〜!」

ミニミニピカチュウは機関室で石炭型魔石を放り込んでいた。

ピカチュウ「ピカチュウ〜!」

発射〜!

ドキユン!ドキユン!ドキユン!ドキユン!ドキユン!

P Bロボの胸からシリンダーが回転して五両の車両が発射された。

ガシヤン！

空中で連結すると魔力で出来た線路を走っていった。

アリサ「ピカチュウはまだなの!？」

アリサは救助を終えて火災を見つめていると…

シュシュポポ！シュシュポポ！

すずか「あれ！」

すずかが指差した方を見るとS Lが走って来た。

アリサ「あの子は！何処に予算隠してるのよ！」

すずか「怒らないんじゃないの？」

アリサ「マシンには怒らないわよ？」

すずか「うわ…」

キキイー！

ピカチュウ「ピカチュウ！ピカピカチュウ」

発進！Pマシンと鳴くと…

アリサ「レスキューなファイブか！」

消防車、タンク、救急車、パトカー、ホバー機が五両から発進した。

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ピカチュウは運転するミニミニピカチュウに指示を出した。

ジュー！

Pマシンは順調に消火、交通整理などこなした。

アリサ「この様子なら大丈夫そうね」

すずか「アツチも大丈夫そうだね」

なのは「スターライト！ブレイカー！」

ズドン！

なのは達の方も解決したようで…

ピカチュウ「ピカチュウ」

Pマシンも救助などを終えて車両に帰還した。

ピカチュウ「ピカチュウ」

ポー！ シュシュポポ！ シュシュポポ！

ピカチュウもSL型マシンPライナーを発進させて帰艦した。

アリサ「さあ。白状しなさい」

ピカチュウ「ピカチュウ…ピカピカチュウ」

すいません…ボクがやりました。

スパン！

アリサ「誰がボケろと言った？」

ピカチュウ「チャ〜…」

痛みでうずくまっていた。

アリサ「まったく…何処に予算隠してるのよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

教えてあげない。

アリサ「一体いつ作ったのよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

コツコツと。

アリサ「はあ…まあいいわ。役に立ったんだし」

ピカチュウ「ピカピ♪」

尋問が終わるとアリサはピカチュウを連れて隊舎に戻った。

ヴィヴィオ「あ、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピ？ピカチュウ！」

ピカチュウは片手を上げて挨拶した。

アリサ「どうしたの？ピカチュウと遊びたくなったの？」

ヴィヴィオ「うん…」

アリサ「ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「良いわよ。ピカチュウと遊んでなさい」

ヴィヴィオ「ありがとう♪アリサお姉さん♪行こう、ピカチュウ！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ピカチュウはヴィヴィオを追いかけて遊びに向かった。

ヴィヴィオ「ふかふか〜♪」

ピカチュウ「チャ〜♪」

ヴィヴィオはピカチュウと一緒に遊び堪能した。

38話

ピカチュウ「ピカ〜」

ピリリリ

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ？」

アリサ『あ、ピカチュウ？ちよつと部隊長室に来てくれる？』

ピカチュウは無線が鳴ると出て承諾した。

ピカチュウ「ピカ〜」

ピカチュウは部隊長室に向かった。

ピカチュウ「ピツカ〜」ビー

はやて「どうぞ〜」

ピカチュウ「ピツピカチュウ」

挨拶して部隊長室に入った。

はやて「さて、ピカチュウ？あの巨大な建造物はなんや？」

ピカチュウ「ピフュー♪」

アリサ「誤魔化させないわよ？」

ピカチュウ「ピカピカチュウピカ」

あれはピカチュウベース。と鳴いた。

なのは達「ピカチュウベース？」

ピカチュウ「ピカピカピカチュウ！」

今世紀最大の発明！と鳴いた。

すずか「元ネタは？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ター○○ルダー。と鳴いた。

アリサ「それで？中のマシンはレスキューなファイブ？」

ピカチュウ「ピカ♪」

そうだよ♪

はやて「まさに移動要塞やね」

ピカチュウ「ピカく／／／」

ピカチュウは照れていた。

はやて「どうやって管理してるん？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

ミニミニピカチュウが管理してる。

フエイト「ミニミニピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

アシストメカと鳴いた。

はやて「何処からの予算なん？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

自腹だよ。と鳴いた。

はやて「一体幾ら稼いでいるんや？」

ピカチュウ「ピカピ」

秘密と鳴いた。

ピカチュウ「ピカ〜♪ピカチュウ〜♪」

ヴィヴィオ「ふかふか〜♪」

ある日、ピカチュウはヴィヴィオのお守りをしていた。

ヴィヴィオ「ねえ、ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ？」

ヴィヴィオ「あのおつきな建物、ピカチュウが作ったの？」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウは頷いて答えた。

ヴィヴィオ「行ってみたい！」

ピカチュウ「ピカ〜…ピカチュウ！」

ピカチュウは腕を振り、おいでと伝えた。

ヴィヴィオ「わーい♪」

ピカチュウとヴィヴィオはPBベースに向かった。

ミニミニピカチュウ「チュウ〜！」

ヴィヴィオ「ちっちゃいピカチュウがいっぱいいる〜！」

ミニミニピカチュウを見たヴィヴィオはテンションが上がっていた。

ヴィヴィオ「…えい」ポチ

ピカチュウ「ピカ!？」

ズドン!

P Bから砲撃が発射され機動六課のすれすれに着弾した。

ヴィヴィオ「……」

ピカチュウ「……」

はやて『ピカチュウ〜!ちよつと面貸しや〜!』

ピカチュウ「チャ〜…」

お説教コースまっしぐらだった。

アリサ「何してるの!」

ピカチュウ「ピカ!?ピカチュウ〜!」

アリサ「ヴィヴィオが勝手にボタンを押した?」

ピカチュウ「ピカ」

なのは「ヴィヴィオ、そうなの?」

ヴィヴィオ「…知らない」

ピカチュウ「ピカ!」

すずか「本当に?」

ヴィヴィオ「知らないもん！」

アリサ「ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ！ピカチュウ！」

本当！信じてよ！

アリサ「…どうする？」

はやて「そやね…ピカチュウ？監督不行き届きで始末書な？」

ピカチュウ「ピカ!?ピカチュウ！」

うえ!?何でボクが！

はやて「アレの管理はピカチュウやる？」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

そうだけど…

はやて「明日までに…」

ピカチュウ「ピ…ピ…ピカチュウく！」

ピカチュウは泣いて部屋を出ていった。

はやて「ちと言い過ぎたか？」

アリサ「大丈夫でしょ？」

暢気に言っているがこの翌日後悔することになる。

アリサ「おはよ…」

すずか「ふえく…」

翌日、アリサがデスクに辿り着くと書類の山が形成されていた。先に来ていたすずかは泣きべそをかきながらも書類の山と格闘していた。

アリサ「…どういうこと？」

すずか「ピカチュウがストライキを起こしたの！」

アリサ「ストライキ？」

すずか「昨日怒られた事が余程ショックだったみたい」

アリサ「あの子は…」

アリサは頭を抑えた。

すずか「…今日中の書類ばかりだから余計に辛いよ」

アリサ「……」バツ！

アリサも書類の確認をした。

アリサ「ピカチュウは？」

「すずか「音信不通だよ〜」」

アリサ「そこまで拗ねるって事は…ヴィヴィオに昨日の事を再確認した方がいいわね」

アリサは端末でなのはに連絡を取りヴィヴィオの下に向かった。

なのは「ねえ、ヴィヴィオ？昨日の事だけど本当にボタンを押してないの？」

ヴィヴィオ「…知らないもん」

アリサ「ヴィヴィオ？ピカチュウはイジケてるのよ？」

ヴィヴィオ「……」

なのは「ヴィヴィオ、本当の事教えて？」

ヴィヴィオ「…ぐす…ボタン…押したの」

なのは「どうして嘘ついたの？」

ヴィヴィオ「…怒られると思った…の」

なのは「そっか…」

なのはは怒らず…

なのは「ピカチュウに謝ろうか？」

ヴィヴィオ「…許してくれるかな？」

なのは「一生懸命謝ろ？」

ヴィヴィオ「うん…」

なのは「いいかな？アリスちゃん？」

アリス「ええ。問題はピカチュウにどうやって会うかね…」

新たな問題に直面した。

ピカチュウ「…」シャリシャリ！シャリシャリ！

その頃、ピカチュウはやけ食いしていた。

ピリリリ！ピリリリ！ピリリリ！ピリリリ！ピリリリ！ピリリリ！ピリリリ！
！ピリリリ！

無線が鳴るが無視し続けた。

アリス「やっぱり出ないわね」

ヴィヴィオ「うう…」

なのは「端末の方もダメ」

アリサ「仕方ない：乗り込みましょう」

アリサ達はPベースに乗り込んでピカチュウを探し始めた。

アリサ「警報が鳴らないのはまだマシね」

なのは「そうなの？」

アリサ「あの子が本気でイジケたら警報だけじゃ済まないわよ」

なのは「そうなんだ」

ヴィヴィオ「ピカチュウ：怒ってるのかな？」

なのは「大丈夫だよ。ちゃんと謝れば許してくれるよ」

ヴィヴィオは不安なのか、なのはの手を離さずにいた。

アリサ「さてと、あの子のいそうな場所は：」

艦内地図を見てアリサはピカチュウのいる場所に検討をつけた。

なのは「何処に行くの？」

アリサ「食糧庫よ。きつと今頃やけ食いしているはずだから」

なのは「よくわかるね？」

アリサ「どれだけあの子と一緒に居たと思うの？」

なのは達は食糧庫に向かった。

アリサ「ここね」

食糧庫に辿り着くと中に入った。

ピカチュウ「……」シャリシャリ！シャリシャリ！

やけ食いしているピカチュウが居た。

アリサ「ピカチュウ……」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ほっという！と鳴くと林檎を食った。

ヴィヴィオ「ピカチュウ……ごめんなさい！」

ピカチュウ「……」シャリ……

ピカチュウのやけ食いが止まった。

アリサ「ごめんね、ちゃんと信じてあげられなくて。辛い思いしたわよね」

なのは「ヴィヴィオも反省してるの。許してくれないかな？」

ピカチュウ「ピカ〜…」

アリサ「よつと」

アリサはピカチュウを抱っこすると…

アリサ「よしよし。ごめんなさいね」

ピカチュウ「ピカ…ピカチュウ〜！」

ピカチュウはアリサの胸で泣いた。

アリサ「よしよし。いい子いい子」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ピカチュウはスリスリと泣きながら甘えた。

アリサ「…ね、ピカチュウ。ヴィヴィオを許してあげて」

ピカチュウ「ピカ！」

わかった！と鳴くとアリサの腕から降りた。

ヴィヴィオ「ごめんね、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカピ、ピカチュウ」

ピカチュウはヴィヴィオを許した。

アリサ「さあ、行きましょう」

アリスはピカチュウを、なのははヴィヴィオを連れて戻った。

39話

ピカチュウ「ピカチュウ」

ある日、ピカチュウが書類の整理をしていると…

はやて「ピカチュウ〜！」

ピカチュウ「ピカピ？」

分隊長室にはやてが飛び込んできた。

はやて「助けて〜な〜！」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

一体どうしたの？

はやて「書類の山が減らんのや！」

ピカチュウ「…ピカ、ピカチュウ」

…さて、仕事。

はやて「見捨てんといて〜な！」

ピカチュウ「ピカピカピカチュウ」

何でボクの所に来るのさ。

はやて「手伝つて〜！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

忙しい。

はやて「そこをなんとか！」

ピカチュウ「ピカ」

無理。

はやて「ピカチュウ〜！」

ピカチュウ「ピカピ」

粘るね。

はやて「頼む〜！」

ピカチュウ「ピカ」

やだ。

はやて「うちとピカチュウの仲やろ？」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

どんな？

はやて「愛しあつた仲やないか！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

誤解を受ける〜！

はやて「な、な？ピカチュウ？ええやろ？」

ピカチュウ「ピカ〜…ピカチュウ」

はあ〜…わかつたよ。

はやて「ホンマか！ありがとう♪待ってるからなく〜！」

はやては嬉々として立ち去つた。

ピカチュウ「ピカ〜…」

ため息を吐いてピカチュウは仕事を終わらせてはやての待つ部隊
長室に向かつた。

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

お邪魔します〜。と鳴くと…

はやて「邪魔するなら帰って〜」

ピカチュウ「ピカ〜」

じゃあね〜。

はやてがボケたからピカチュウが乗った。

はやて「冗談や！ボケや！帰らんといて！」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

それでどうすればいいの？

はやて「この山を整理してくれへん？」

ピカチュウ「ピ〜…」

え〜…と鳴くと…

はやて「報酬は用意してある！」

はやては桃の入った段ボールを置いた。

ピカチュウ「ピカ〜♪」

はやて「どや？」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

任せて〜！と鳴くと書類を整理し始めた。

ピカチュウ「ピカチュウ」ペラペラペラ。ポチポチポチポチ♪

ピカチュウは書類を整理してデータ化等々をこなした。

はやて「はや!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ〜!」

ピカチュウの底力が発揮された。

ピカチュウ「ピカチュウ」

終わった。

はやて「うそ!?!」

ピカチュウ「ピカピ〜」

またね〜。と鳴くと段ボールを持って部屋を出ていった。

はやて「今日は定時やな♪」

はやてが端末を見ると…

はやて「…うそ!?!」

データ化された書類が増えていた。

はやて「しまった〜!ちよつとずつやつてもらはんやつた〜!」

今日も残業なはやてだった。

ピカチュウ「ピツカチュウ♪」

フエイト「ピカチュウ？任務中だよ？」

ピカチュウ「ピカ」

ある日、ピカチュウとフエイトは違法施設の調査に来ていた。

フエイト「やっぱり違法な施設だったみたいだね…」

ピカチュウ「ピカ」

調査に来たが既に逃げ出した後だった。

フエイト「ん？」

暫く歩いていると…

ピカチュウ「ピカチュウ」

研究室に辿り着いた。

カシユ

フエイト「何か残ってるかな？」

ピカチュウ「ピ…ピカ！」

ピカチュウが辺りを見回すと端末を見つけた。

フエイト「データは…やっぱり消されてるね」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

任せて〜！と鳴くと端末を弄り始めた。

ピカチュウ「ピ〜…ピカ！」ピコン！

ピカチュウは自分の端末と繋げると消えたデータを復活させていた。

フエイト「どう？」

ピカチュウ「ピカチュウ、ピカピカピカチュウ」

楽勝だよ、消し方が雑だね。

ピカチュウ「ピ？ピカチュウ」ポチポチポチポチ♪

フエイト「どうしたの？」

ピカチュウ「ピカピカピカチュウ」

防衛システムが働きかけたけど止めたよ。

フエイト「うん、ありがとう」

ピカチュウ「ピ？ピカチュウ〜♪」ピコリン♪

ピカチュウはデータを抜き終えた。

フエイト「よし、戻ろうか」

ピカチュウ「ピカ！」

フエイトとピカチュウは機動六課に戻った。

フエイト「ピカチュウ？データの調査はどう？」

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ」

ん？終わったよ。

フエイト「ありがとう」

ピカチュウは整理したデータをフエイトに渡した。

ピカチュウ「ピカチュウ？」

フエイト「うん？後は大丈夫だよ」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

また何かあつたら言つて。

フエイト「ふふ♪ありがとう♪」

ピカチュウ「チャ〜♪」

フェイトはピカチュウの頭を撫でると部屋を出ていった。そして月日は流れ…

はやて「みんな、短い間やけどよく頑張ってくれた。機動六課は解散になるけど新しい職場で今までの経験を生かして頑張ってください。では、解散！」

パチパチパチパチ

なのは「とうとう解散だね」

アリサ「そうね」

ピカチュウ「ピ〜カピカ、ピ〜カ〜ピ」

すずか「それは卒業式のだよ？」

ピカチュウ「ピカ」

フェイト「アリサ達はこれからどうするの？」

アリサ「捜査官に戻るわ」

フェイト「そっか」

ピカチュウ「ピカ〜…」

所で〜…

すずか「どうしたの？」

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ？」

今日、解散だよね？

すずか「そうだよ」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

新しい住みかは？

なのは達「あ…」

アリサ「…ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ？」

アリサ「私達が住める家を探しなさい」

ピカチュウ「ピツカチュウ！」

無茶ぶりだよ！

アリサ「それを何とかするのがピカチュウでしょ」

ピカチュウ「チャ…」

ピカチュウは諦めて端末を弄り始めた。

そして次の日…

ピカチュウ「ピカピカ、ピツカ〜」

アリサ「本当に見付けてきた…」

すずか「冗談だったの？」

なのは「ピカチュウ…恐るべし」

ピカチュウは二軒の家の前で胸を張っていた。

フエイト「よく借りられたね？」

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ」

え？買ったんだよ。

なのは達「はあ!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「何処にそんな予算があるのよ！」

ピカチュウ「ピ・カ・チュウ♪」

ひ・み・つ♪

フエイト「もう驚かないよ」

「なのは「取り合えず中に入ろう？」」

アリサ「そうね」

アリサとすずかは左の家に、なのはとフェイトは右の家に入った。

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

取り合えずピカチュウはアリサ達についていった。

アリサ「良い家ね」

すずか「ちよつと広いかもね」

ピカチュウ「チャ〜♪」

すずか「偉い偉い♪」

アリサ「何でも言ってみるものね」

アリサが感心していると…

ピンポン♪

アリサ「なのは達かしら？」

アリサはピカチュウを抱っこすると玄関に向かった。

フェイト「あ、アリサ？どう？」

アリサ「取り合えず中に入りなさい」

フェイトとなのはは中に入った。

アリサ「それで?どうしたの?」

なのは「うん、こっちは満足だよ」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

すずか「こっちもだよ」

ピカチュウ「ピカピカ〜…」

それじゃ…

アリサ「何よ?」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

家賃の話をしよう♪

なのは達「え」

乙女らしからぬ声を出した。

なのは「家賃取るの!?!」

ピカチュウ「ピカピカ」

当然でしょ。

すずか「普通そこは養つてくれる所でしょ！」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

ボクはペットだよ…

アリサ「確かに…ペットに養つて貰うのはアレよね」

ピカチュウ「ピカ〜」

でしょ〜。

すずか「それで？いくら？」

ピカチュウ「ピカ〜…」

電卓を出すと金額を打ち込んだ。

アリサ「まあ、妥当ね」

すずか「半々だね」

ピカチュウ「ピ？ピカチュウ」

え？一人分だよ。と鳴いた。

なのは達「高い！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

一軒家だもん。

アリサ「相変わらずセコイわね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

獣聞きの悪い。

すずか「仕方ないね」

なのは達は渋々納得した。

ミニミニピカチュウ「チュウ〜！」

家賃の支払いも決まり、引っ越し作業に追われていた。

アリサ「ピカチュウは？」

すずか「そういえば見かけないね？」

ピカチュウ「ピカピカ〜♪」

噂をしているとピカチュウとミニミニピカチュウが何やら持ってきた。

アリサ「何それ？」

ピカチュウ「ピツカチュウ♪」

お蕎麦とお寿司♪

すずか「どうしたの？それ」

ピカチュウ「ピカピカピカチュウ♪」

ボクからの引っ越し祝い♪

アリサ「へえ、気前がいいじゃない」

ピカチュウ「ピカチュウピカピ」

ボクをケチみたいに言わないで。

すずか「なのはちゃん達を呼んでくるね」

ピカチュウ「ピカピ」

ミニミニピカチュウ「チュウ〜！」

ミニミニピカチュウはテーブルにお蕎麦とお寿司を並べた。

ヴィヴィオ「ピカチュウ〜♪」

ピカチュウ「ピ？」

並べているとヴィヴィオがやって来た。

なのは「ヴィヴィオ？お邪魔しますは？」

ヴィヴィオ「うう、お邪魔します」

アリサ「よく出来たわね♪」

フェイト「進み具合はどう?」

アリサ「ミニミニピカチュウが頑張ってくれてるから順調よ」

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ」

さあ、ご飯にしよう。

ピカチュウ「ピカ♪」パクパク

ヴィヴィオ「あゝ!それヴィヴィオの狙ってたマグロだよ!」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

速い者勝ちだよ♪

ヴィヴィオ「む〜!」

アリサ「ほら、喧嘩しないの」

フェイト「沢山あるからね」

楽しく過ごした。

外伝

外伝01

ピカチュウ「…ピカ？」

神様「久しぶりですね、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカピ？ピカチュウ？」

その声は？神様？

神様「ええ、そうです」

ピカチュウ「ピカチュウピカ？」

僕は死んだよね？

神様「ええ、百寿を迎えると同時に」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

何でここにいるの？

神様「…ピカチュウ、お願いがあります」

ピカチュウ「ピカ？」

神様「また別の世界を救ってくれませんか？」

ピカチュウ「ピカ!？」

神様「お願い出来ませんか？」

ピカチュウ「ピカ！ピカチュウ！」

うん！任せてよ！

神様「ありがとう、ピカチュウ。正直貴方以外にあてになるものが居ないので困っていたのです」

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ？」

一つ、ワガママをいってもいい？

神様「何ですか？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

欲しいものがあるの。

神様「私で用意出来るものなら、用意しましょう」

ピカチュウ「ピカピカピカチュウ」

仮面ライダーWの星の本棚が欲しいんだ。

神様「星の本棚…ちよつと待ってください」

暫しの間沈黙が訪れて…

神様「…問題ありません。転生したらすぐに使えるようにしておき

ます。それと少しパワーアップしておきます」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

パワーアップ？

神様「他の次元でも使えるようにしておきます」

ピカチュウ「ピカ！ピカチュウ」

うん！ありがとう。

神様「さあ、そろそろ時間ですね」

ピカチュウ「ピカピカ〜♪」

いってきまーす♪

ピカチュウは新たな世界に旅たった。

ピカチュウ「ピカ？チャ〜♪」

ピカチュウは無事に転生すると辺りを見回した。

ピカチュウ「ピカ」

どうやら何処かの工場跡らしい。

ピカチュウ「ピカチュウ」かちや

早速ピカチュウは旅立とうとすると…

アリサ、すずか「え？」

縛られたアリサとすずかに出会った。

ピカチュウ「ピカ!?ピツカチュウ！」

取り合えず挨拶してみた。

アリサ、すずか「可愛い♪じゃなくて！」

ピカチュウ「ピカチュウ」カリカリカリカリ…ブチツ!

ピカチュウは縛られているアリサ達のロープを噛みきった。

すずか「助けてくれたの？」

ピカチュウ「チャ〜♪」

アリサ「取り合えず助かったわ。すずか、逃げましょう」

すずか「この子はどうする?」

ピカチュウ「チャ〜…」

置いてくの…

アリサ「助けてもらったしね。付いてきなさい」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

アリサ達は早速工場跡から逃げ出し始めた。

アリサ「手薄なのはラッキーね」

幸い夜だったので誘拐犯達は逃げ出すとは思ってなくて皆寝ていた。

すずか「急ごう」

ピカチュウ「ピカ」

アリサを先頭に工場を抜け出し近くの交番に駆け込んだ。すぐに保護してもらい、誘拐犯達は捕まった。

忍「すずか！」

鮫島「お嬢様！」

すずか「お姉ちゃん！」

アリサ「鮫島！」

鮫島「ご無事で何よりです！」

忍「怪我はしてない？」

すずか「大丈夫だよ」

再会を喜びあっていた。

ピカチュウ「……」

ピカチュウはソツと立ち去ろうしたが…

アリサ「待ちなさい。何処に行くの？」

ピカチュウ「ピカ？」

忍「すずか？この可愛い動物何？見たこと無いんだけど？」

すずか「この子は私達が縛られている時に出会ったの。この子が
ロープを切ってくれたおかげで逃げ出せたの」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウは手を振ってバイバイの合図をした。

アリサ「バイバイの合図？アンタ行く宛先があるの？」

ピカチュウ「チャ〜…」

無いけど…

アリサ「その様子だと無さそうね。なら家に来なさい」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

いいの〜♪

と鳴くがここですずかが待ったをかけた。

すずか「アリサちゃん！ズルい！私も飼いたい！」

アリサ「言い出したのはアタシよ？」

すずか「そんなのないよ！じゃあこの子を選んで貰おう！」

アリサ「いいわよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜…」

どうしよう〜…

ピカチュウは二人の間を行ったり来たりして困り果てていた。そして…

ピカチュウ「チャ〜！」

決められず泣き出した。

すずか「わわ!?泣かないで!？」

アリサ「私達が悪かったわ」

ピカチュウ「ピカ〜…」

アリサ「なら、こうしましょう。1週間置きに飼うのを交代しましょう」

すずか「それなら平等だね」

アリサ「先にどっちが飼うかはジャンケンで決めましょ」

すずか「いいよ」

アリサ、すずか「ジャンケン、ポン！」

勝負の結果…

アリサ「私の勝ちね」

すずか「負けちゃった」

アリサ「じゃあいい？最初は私の家で暮らすのよ？わかる？」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

忍「意志の疎通は出来るみたいね」

こうしてピカチュウは、最初はアリサの家で飼われる事になった。

外伝02

ピカチュウ「ピカチュウ♪」ポフッ♪

ピカチュウはアリサの部屋に着くと早速ベットにダイブした。

アリサ「遊ばないの」

アリサは優しく抱っこすると…

アリサ「シャワーを浴びましょう」

シャワーを浴びて綺麗にもらった。

アリサ「さあ、寝ましょう」

ピカチュウ「チャッ♪」

嫌な事を忘れるためにアリサ達は眠りについた。そして深夜…

ピカチュウ「……」ムクリ

ピカチュウは起きると早速…

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ」

さあ、検索を始めよう。

星の本棚に入った。

ピカチュウ「ピカッ♪」

「辺り一面本棚に囲まれていた。」

ピカチュウ「ピカチュウ。ピカ。ピカチュウ」

早速検索を始め、勉強を始めた。そして翌朝：

アリサ「ピカチュウ？ピカチュウ。起きなさい」

ピカチュウ「ピ？チャ〜…」

ピカチュウは目を覚ますと伸び〜つとした。

ピカチュウ「ピッピカチュウ」

アリサ「おはよう。さあ、朝ごはんにしましょう」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

ピカチュウとアリサは食堂に向かった。

ピカチュウ「ピファ〜♪」シヤリシヤリ♪

アリサ「それでピカチュウ？私は学校に行くけど大人しく留守番してるのよ？」

ピカチュウ「ゴクツ…ピカ！」

片手を上げてわかった！の合図をした。

アリサ「わかってくれたみたいね。じゃあ行ってくるわね」

ピカチュウ「ピカピク」

いってらっしゃーい。

ピカチュウはアリサを見送った。

ピカチュウ「ピカチュウ」

そしてピカチュウは邸を抜け出し散歩もとい道具と材料の調達に向かった。

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

ピカチュウは記憶を頼りにガラクタ置場にやって来て…

ピカチュウ「…」ガサゴソガサゴソ

ガラクタの山を漁った。

ピカチュウ「ピツ…カ…チュウ！」

そして風呂敷に必要な物を集めた物を包み、よいしょ！と担ぎ邸に戻った。

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウは邸の使われていない物置小屋に道具を置き、修理を始めた。

ジリリリリ！

ピカチュウ「ピカ」

そして時計がアリサの帰宅時間を報せたので…

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

玄関に出迎えに行った。

キキイ！ガチャ

ピカチュウ「ピカ♪」

ピカチュウは尻尾を振って待っていた。

アリサ「ただい…」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

アリサ「わつと♪盛大なお出迎えね」

ピカチュウ「ピカ〜♪」スリスリ

アリサ「いい子にした？」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「後ですすが来るわよ。後もう一人も来るわよ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「まずは着替えてからね」

アリサは部屋に着替えに向かった。

外伝03

ピンポーン

アリサ「来たみたいね。行くわよ」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

アリサとピカチュウは玄関に向かった。

すずか、なのは「こんにちは〜♪」

アリサ「いらっしやい」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

すずか「わっと♪元気にしてた？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

アリサ「ピカチュウ、ちゃんと挨拶しなさい」

ピカチュウ「ピツピカチュウ！」

すずか、なのは「ピカチュウ？」

アリサ「ピカチュウって鳴くからピカチュウ」

なのは「安直なの…」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

アリサ「この子は気に入ってるわよ？」

すずか「ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ」

すずか「可愛い♪」

なのは「本当に可愛いのだ！」

アリサ「ピカチュウ、この子はなのは。私の友達よ」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウはなのはに向けて挨拶した。

なのは「賢いのだ！」

アリサ「さあ、お茶にしましょう。ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

なのはにピカチュウの紹介を終えてお茶を楽しんで過ごした。

ピカチュウ「ピ〜」ジジジジ

そしてピカチュウは三日間、隠れて開発を進めた。そして四日目の夜…

『助けてくださいー!』

ピカチュウ「ピカ!？」

ピカチュウは自分の予想通りユーノの念話を受け取った。

ピカチュウ「ピカ〜！」

アリサ「ピカチュウ!？」

ピカチュウが邸の外に向かったのを見たアリサは後を追いかけた。

ピカチュウ「ピカピカピカピカ〜！」

アリサ「ハアハアハア…」

アリサは見失わないように追いかけていた。

ドカン!

ピカチュウ「ピ!？」

ユーノ「原生物!?! いけない! 逃げる…」

ピカチュウ「ピファア!」

ピカチュウはユーノの首根っこをくわえると来た道に戻り始めた

が…

アリサ「ピカチュウ！」

ピカチュウ「ピフア！ピフアチュウ！」

危ない！走って！

アリサ「わかったわ！」

アリサも走って逃げ出した……しかもピカチュウの言語を理解して。

なのは「アリサちゃん!？」

アリサ「なのは!?!走りなさい！」

なのは「ふえ!?!」

訳がわからなくてもなのはは走り出した。

アリサ「ハアハアハア……ここまでくれば……」

ユーノ「お二人とも僕の声聞いて来てくれたんですか!?!」

なのは「うん！」

アリサ「声？私はピカチュウを追ってきたのよ」

ピカチュウ「ピカピ!?!」

ユーノ「そうになると……貴方の力を貸してください！」

なのは「ふえ!？」

ユーノは魔法について説明した。

アリサ「なるほど、リンカーコアのない私は役に立たない訳ね」

ユーノ「すいません」

アリサ「謝る必要はないわよ。無い物ねだりだしね」

なのは「アリサちゃん……わかったの。手伝うの」

ユーノ「では契約を始めます」

なのは「わかったの！」

なのははレイジングハートを起動させるためユーノに教わっていた。

ピカチュウ「ピく……ピカ！」

するとなのはの魔力の高まりを感じとり魔物がやって来た。

ピカチュウ「ピカ……チュウ……！」

ピカチュウは電撃を放ち時間を稼いだが……

魔物「ギャギャ！」

三対一では歯が立たなかったが…

なのは「ピカチュウ、どいて！」

なのはがレイジングハートを起動してやって来た。

魔物「ギャギャー！」

なのは「きやあ!？」

しかしなのはは戦いの初心者にも満たない者……それを三対一では余計に歯が立たなかった。

ユーノ「せめて魔力が戻っていれば…」

アリサ「無い物ねだりしてもしょうがないでしょ！」

ピカチュウ「……」

なのは「デイベインシューター！」

何とか反撃しているのはだが…

魔物「ギャギャー！」

段々と不利になってきた。

ピカチュウ「ピカチュウ…」

仕方ない…

ピカチュウはアリサを見ると…

ピカチュウ「ピカピ、ピカピカチュウ？」

アリサ、悪魔と相乗りする勇気はある？

アリサ「何よこんなときに？」

ポシユン

ピカチュウはPボールを出すとアタツシユケースを出して中を見せた。

アリサ「これって…Wドライバー!？」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

どうする？

アリサ「…いいわ。乗ってあげる！」

ピカチュウ「ピカピ！」

着けて！

アリサ「相棒は？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

僕がやる。

アリサ「いくわよ！」カシヤン！

アリサが腰にWドライバーを着けるとピカチュウにも装着された。

ピカチュウ「ピカ！」コテン

《サイクロン》

《ジョーカー》

アリサ「変身！」

音楽が流れると背が伸びて右半分が緑、左半分が黒の仮面ライダーになった。

アリサ「凄い…」

ピカチュウ『ピカチュウ？』

戦い方は魔法で頭に入った？

アリサ「戦い方？わかるわ。何で？」

ピカチュウ『ピカピカチュウ！』

魔法技術で戦いの知識を転写したの！

アリサ「これなら戦える！」

アリサは魔物に向かって行った。

なのは「新手!？」

アリサ「なのは! 私よ!」

なのは「アリサちゃん!? 何で仮面ライダーになってるの!？」

アリサ「そんなの後にしなさい! 今はコイツらを倒しましょう!」

なのは「わかったの!」

なのは達は魔物に向かって行った。

アリサ「ふっ! ハア!」ビシッ! バキッ!

なのは「デイベインシューター!」

アリサ「一気に決めるわよ!」

《ジョーカー! マキシマムドライブ!》

アリサ「ジョーカーエクストリーム!」

なのは「デイベインバスター!」

アリサとなのはは必殺技を放ち魔物を纏めて倒した。

アリサ、なのは「た、倒せた〜:」

ピカチュウ『ピカピ?』

大丈夫?

アリサ「ええ」カシヤン

アリサは変身を解くと元の姿に戻り、なのはも元の私服に戻った。

なのは「疲れたの」

アリサ「詳しい話は明日にしましょう」

ユーノ「そうですね」

なのははユーノを、アリサはピカチュウを連れて帰った。

外伝04

ーアリサ邸ー

ユーノ「……と言う訳です」

アリサ「なるほど、そんな事故があつたのね」

次の日、ユーノはアリサ達に事情を説明しており…

なのは「わかつたの、手伝うの」

アリサ「手伝うのはいいけど私も聞かないといけないのよね、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピ？」

ユーノ「昨日のアリサさんの変身した道具の事だけ…」

アリサ「呼び捨てでいいわよ」

ユーノ「わかりました。話を戻すけどあれは魔法の技術かい？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

デバイスみたいなもの。

アリサ「で？何で実在するの？」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

作ったの♪

アリサ「いつのまに…」

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウ！」

こんな事があるのかと！

アリサ「で？ネタ的に他にも作ったのでしょ？」

ピカチュウ「ピフユ〜♪」

アリサ「誤魔化すって事は作ってるのね」

ピカチュウ「ピフユ〜♪」

アリサ「ギリギリ吐きなさい」

ピカチュウ「チャ〜…」

どうやらこの世界でも権力はアリサの方が上である。

ピカチュウ「ピカチュウ」

ついて来て。

アリサ達はピカチュウの後を歩いていき物置小屋に向かった。

アリサ「全く…いつのまに…」

ピカチュウ「ピカ〜」

いや〜。

アリサ「それで何処にあるの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ちよつと待ってて。

ガサゴソガサゴソ

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

あつたよ♪

アリサ「どれどれ」

スタックフォン、スパイダーショック、バットシヨット、フロッグ
ポッド、デンデンセンサーを出した。

なのは「ネタなの」

アリサ「で？使えるの、これ等は？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

使えるよ。

アリサ「ふーん」

アリサはスタックフォンを持って眺めていた。

アリサ「……」サツ

そしてポケットにしまった。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

何してるの！

アリサ「いいじゃない。飼い主にサービスと思えば」

ピカチュウ「ピカチュウ……」

理不尽だ……

と呟きながら何かを思いついた。

ピカチュウ「ピカピ、ピカチュウ」

アリサ、お願いがあるの。

アリサ「何よ？言ってみなさい」

ピカチュウ「ピカチュウピカピカチュウ」

ジャケットを作るから生地が欲しい。

アリサ「いいわ。後で鮫島に頼んであげる」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

ありがとう♪

なのは「いいなく、アリサちゃん」

アリサ「これってメモリ入れると変形するのよね？」

ピカチュウ「ピカ」

するよ。

アリサ「ん」

アリサは手を差し出した。

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウはスタツグメモリを渡した。

アリサ「スタツグだけ？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

後は有料です。

アリサ「ケチ臭いわね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

作るのにお金かかっているからね。

アリサ「納得できたわ」

アリサは納得すると…

アリサ「全部でいくら？」

ピカチュウ「ピカ〜」コテン

買い占めに出た。

アリサ「全部買ってあげるわよ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

これだから金持ちは。

アリサ「文句ある？」

ピカチュウ「ピカピ」ポチポチポチポチ

ないです。

ピカチュウは電卓に金額を打ち込んだ。

アリサ「現金でいいわね」

ピカチュウ「ピカ」

なのは「凄いやり取りを目撃してるの」

とても庶民には出来ない纏め買いであった。

ピカチュウ「ピカ…」チクチクチクチク

次の日、早速ピカチュウはジャケットを縫っていた。

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

そして縫い終わると早速着てみた。

アリサ「ピカチュウ…?」

ピカチュウ「ピカピ?」

アリサ「そろそろすずかの家に行くわよ」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

ピカチュウは物置小屋から出るとアリサと一緒にすずかの屋敷に向かった。

すずか「ピカチュウ♪久し振り〜♪」

ピカチュウ「ピカ♪ピカチュウ♪」

すずかが抱き上げて頬擦りするとピカチュウはくすぐったそうにしていた。

すずか「やっと私の番だよ」

アリサ 「ふふん♪私とピカチュウの絆を抜けるかしら？」

すずか 「ピカチュウ？何を食べたい？好きなもの食べさせてあげる」

ピカチュウ 「ピカ♪」

すずか 「……」

アリサ 「桃が食べたいそうよ」

すずか 「アリサちゃん!?!ピカチュウの言葉わかるの!?!」

アリサ 「絆の差ね」

すずか 「むむ……」

すずかはどうやってピカチュウとの距離を縮めるか考えた。

アリサ 「ピカチュウ」

ピカチュウ 「ピカ？」

アリサ 「すずかにアレ見せていい?..」

ピカチュウ 「ピカチュウ」

いいよ。

すずか 「アレ？」

アリサ「これよ」

アリサはスタックフォンを見せた。

すずか「こ、これは！スタックフォン！どうしたのこれ！オモチャじゃないよ！」

アリサ「ピカチュウが作ったのよ」

すずか「ピカチュウが!?!」

ピカチュウ「ピカ／／／／」

いや／／／／

すずか「いいな…アリサちゃんだけ」

ピカチュウ「ピカ!?!」

すずか「いいな…」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

仕方ないな…

ピカチュウはジャケットのポケットを漁ると…

ピカチュウ「ピカチュウ」

ビートルフォンを取り出した。

すずか「わく♪ビートルフォンだ！」

ピカチュウ「ピカピ」

ピカチュウはビートルメモリも渡した。

すずか「早速機種変しないと！」

アリサ「楽しみは後にしなさい。今はお茶にしましょう」

すずか「はい♪」

アリサ達はお茶を楽しんだ。

すずか「ほら、ピカチュウ♪」

ピカチュウ「ピカ♪」

その日の夜、約束通り桃を食べさせて貰っていた。

忍「しかしコレをねえ…この子が作ったの？」

夕飯時、忍はすずかからビートルフォンを見せて貰っていた。

すずか「アリサちゃんの話ではね」

忍「頭の中を見てみたいわね」

ピカチュウ「ピカ!?!」サツ

ピカチュウはすずかの後に隠れた。

忍「冗談よ」

ピカチュウ「ピカく…」

ちよつと不安なピカチュウだった。

忍「でも冗談抜きにいい出来ね」

ピカチュウ「ピカチュウく♪」

忍「私も欲しいくらいね」

ピカチュウ「…ピフユく♪」

ピカチュウは口笛で誤魔化した。

すずか「他にはないの?」

ピカチュウ「…」

すずか「…」

ピカチュウ「ピカピ!」

無いよ!

すずか「流石に嘘ってわかるよ」

ピカチュウ「チャ〜…」ゴソゴソ

ピカチュウはバットショットとデンデンセンサーを出した。

すずか「うわ〜♪」

機械好きの少女にはたまらない一品だった。

ピカチュウ「ピカ」

《バット》

カシヤン

ピカチュウがバットショットにメモリを入れると変形して飛び回った。

すずか「…欲しい！」

ピカチュウ「ピカチュウ」サツ

ピカチュウは電卓に金額を打ち込んだ。

すずか「…お姉ちゃん！買って！」

忍「幾らなの？」

忍も電卓を見た。

ピカチュウ「ピカ〜」

忍「普通に高いわね」

すずか「ねえ！いいでしょ？」

忍「暫くお小遣い減らすからね？」

すずか「ええ〜！」

忍「じゃあ諦める？」

すずか「やだ！」

忍「決まりね」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

毎度あり〜♪

ピカチュウはすずかにガジェットを渡した。

すずか「わーい♪」

ピカチュウ「ピファチュウ♪」

すずかはガジェットを手に入れて喜び、ピカチュウは桃を食べさせて貰って喜んでいた。

外伝05

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」ボフ

すずか「ピカチュウ？ベツトで跳ねちゃ駄目だよ？」

ピカチュウ「ピカ〜」

いや〜。

すずか「ほら、おいで〜♪」

ピカチュウ「ピカ♪」

ピカチュウはすずかに抱っこされてモフモフされた。

すずか「ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ？」

すずか「モフモフ〜♪」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

すずか「あ〜あ、私もピカチュウとお話ししたいな」

ピカチュウ「ピカチュウ」

出来るよ！

すずか「あれ？」

ピカチュウ「ピ？」

すずか「今、出来るよ！って言ってた」

ピカチュウ「ピカチュウ」

そうだよ。

すずか「やった！ピカチュウの言葉がわかる！」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

ピカチュウも嬉しそうにしていた。

すずか「それでピカチュウ？聞いたかった事があるの」

ピカチュウ「ピ？」

すずか「何で仮面ライダーWなの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

好きだから。

すずか「そうなんだ」

すずかは納得するとあることに気付いた。

すずか「ピカチュウ？リボルギヤリーは？」

ピカチュウ「ピ、ピフユ〜」

すずか「……………」じ〜

ピカチュウ「ピフユ〜！」

すずか「……………」じ〜！

ピカチュウ「ピ、ピカチュウ」

つ、作つたの。

すずか「何処にあるの？」

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウ」

ある場所に隠してあるの。

すずか「大丈夫なの？」

ピカチュウ「ピカ」

多分。

すずか「よし！リボルギャリーを家に持ってこよう」

ピカチュウ「ピカ!?」

すずか「そうと決まったら早速！」

すずかは何処かに連絡をとった。

アリサ「全く…いつのまに作ったのよ」

なのは「本物なの」

すずか「うわく♪」

アリサ「早速運びましょう」

すずか「ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ達はリボルギャリーに乗り込み…

ピカチュウ「ピカ」ピポパポ

スタツグフォンを操作してリボルギャリーを発進させてすずかの屋敷に向かった。途中写真を撮られたりしたが。

すずか「私、絶対バイクの免許取る」

アリサ「駄目よ。コレは私の物よ」

すずか「譲れないよ！」

アリサ「私には資格があるのよ」

アリサはWドライバーを見せた。

すずか「そ、それは！Wドライバー!？」

アリサ「ふふん♪」

すずか「はい！相棒やりたい！」

アリサ「残念ね、相棒は決まってるのよ」

すずか「まさか…」

すずかはなのはを見るが…

ピカチュウ「ピカ」

《サイクロン》

ピカチュウがサイクロンメモリを起動した。

すずか「まさかのピカチュウ!？」

ピカチュウ「ピカ／／／」

すずか「ズルイズルイ！」

アリサ「速い者勝ちよ」

すずか「ピカチュウ〜！」

ピカチュウ「ピカ？」

すずか「変身したいよ〜！」

ピカチュウ「ピカ」

無理。

すずか「…ピカエモ〜ン！」

ピカチュウ「ピカピカ、ピツカ〜！ピカピカチュウ…」

アクセルドライバー…サツ

ピカチュウは思わず隠していたアクセルドライバーを出してしまった。

すずか「…ピカチュウ〜♪」

ピカチュウ「ピカ」

ダメ。

すずか「アリサちゃんだけズルイズルイ！」

アリサ「しょうがないでしょ。必要になったんだから」

なのは「あ、アリサちゃん！」

すずか「必要になった？どう言うこと？」

アリサ「…なのは、説明」

なのは「丸投げなの!？」

なのはは魔法に関わる事を説明した。

すずか「ふえく…そんな事があつたんだ」

アリサ「だから遊び心では変身出来ないの」

すずか「うう…そんな」

ピカチュウ「ピカチュウ!？」ポチ。キキイ〜!

アリサ「きやあ!?!どうしたのよ!」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

ジュエルシードが!

なのは「え、うん。わかったの!」

アリサ「なのは?」

なのは「ユーノ君から連絡なの!街中でジュエルシードが発動したって」

アリサ「ピカチュウ!」

ピカチュウ「ピカ!」ピポパポ

ピカチュウは結界内に入るとジュエルシールドに向かって行った。

キキイ〜！

なのは「あそこなの！」

ピカチュウ達が辿り着くと魔物が暴れていた。

なのは「行ってくるの！」

アリサ「ピカチュウ！」

アリサはリボルギャリーから降りるとWドライバーを着けた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

《サイクロン》コテン

《ジョーカー》

アリサ「変身！」

《サイクロン！ジョーカー！》

音楽が流れて変身した。

すずか「みんな…」

アリサ「ふっ！ハア！」

なのは「デイベインシューター！」

なのはとアリサが連携して戦うが…

魔物「があゝ！」

アリサ「きゃあ!？」

なのは「アリサちゃん!?大丈夫!？」

アリサ「ええ。ピカチュウ！メモリチェンジは出来ないの!？」

ピカチュウ『ピカピカチュウ』

まだメモリの調整が終わってないの。

アリサ「せめてヒートかメタルがあれば」

ピカチュウ『ピカチュウ…』

苦戦していた。

すずか「……」ギョツ

すずかは苦戦しているなのは達を見つめていた。そして何かを決心すると…

ゴソゴソ

ピカチュウのジャケットを漁った。

すずか「あつた!」

アクセルドライバーとアクセルメモリを取り出した。

すずか「ピカチュウ〜!」

アリサ「すずか?」

ピカチュウ『ピ?ピカ!』

すずか「ごめんね〜!変、身!」

《アクセル》

エンジン音が響くとすずかの身長が伸び変身した。

すずか「剣は…」

すずかは再びピカチュウのジャケットを漁った。

すずか「あつた!」

エンジンブレードを取り出した。

アリサ「あの子は無茶苦茶するわね」

ピカチュウ『ピカ』

すずか「やあ！」ガシイン！

魔物「ぎやあ!?!」

すずか「えい！」ガシイン！

魔物「ぐぎやあ!?!」

トントン

魔物「があ？」

アリサ「でいやあ！」ゲシ！

魔物「ぐえ」

アリサは魔物の肩を叩くと振り向いた瞬間、顔面にハイキックをかました。

すずか「今！」

《アクセル！マキシマムドライブ！》

すずか「絶望が貴方のゴールです」ゲシ！

すずかは魔物を蹴り振り返ると決め台詞を言って…

魔物「ぎやあく…」ドカン！

勝利した。

アリサ「ふう」

すずか「はあ♪」

二人は変身を解くと元の姿に戻った。

なのは「なのは、出番なかったの…」

アリサ「全く…無茶するわね、すずか」

すずか「えへへ」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

すずか「あ、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ！ピカチュウ〜！」

すずか「ごめんね？でも皆が危険だと思ったから…」

ピカチュウ「ピカピ」

仕方ないな。

アリサ「取り合えず解決したしすずかの屋敷に向かいましょう」

ピカチュウ「ピカピ、ピカピカピカチュウ〜」

すずか、罰としてエンジンブレードをリボルギャリーまで運んでね
〜。

すずか「え」

アリサ「さあ、リボルギヤリーに行くわよ」

アリサを先頭にリボルギヤリーに戻った：時間はかかったが：一名ほど。

外伝06

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」ジジジジ

次の日、ピカチュウはヒート、ルナ、メタル、トリガー、エンジンのメモリを急いで完成させた。

ピカチュウ「ピカ〜♪」

すずか「ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ♪」

すずか「わつと♪」

ピカチュウ「ピカチュウ」

メモリ、完成したよ。

すずか「ホント？」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウはエンジンメモリをすずかに渡した。

ピカチュウ「ピカピ〜…」

残りは…

《バット》

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウのバットショット（黄色）はメタルメモリとトリガーマモリを持ってアリサの下に向かった。

ピカチュウ「ピカチュウ」

お腹減った。

すずか「おやつにしようか」

すずかはピカチュウを連れて自室に向かった。

ピカチュウ「ピファ〜♪」シャリシャリ♪

ピリリリ

すずか「はい？もしもし？あ、アリサちゃん♪うん、うん。伝えておくね」

ピカチュウ「ピファ？」

すずか「アリサちゃんからだよ。メモリを受け取ったって」

ピカチュウ「ピファ〜♪」シャリシャリ♪

ピカチュウは納得すると林檎を食べ続けた。

すずか「あくあ。これで星の本棚があれば完璧なのに」

ピカチュウ「ピフオ！ピフオ！」

すずか「……」

ピカチュウ「……」

すずか「……」

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウ」

食後の散歩に行ってきたーす。

すずか「ちよつと待ってね？」ガシッ

ピカチュウ「ピ、ピカ？」

すずか「ピカチュウ？星の本棚、持ってるの？」

ピカチュウ「ピフユ〜♪」

すずか「誤魔化しても駄目だよ」

ピカチュウ「ピカ…ピカチュウ」

はい…持ってるの

すずか「いいなく」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

見たい？

すずか「見れるの!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ボクと手を繋いでいれば。

すずか「行きたい！」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウはすずかと手を繋いで…

ピカチュウ「ピカ、ピカピカチュウ」

さあ、検索を始めよう。

星の本棚に入った。

ピカチュウ「ピカチュウ」

すずか「…うわ〜♪」

すずかが目を開けると辺り一面本棚だらけだった。

すずか「ピカチュウ、検索してみて」

ピカチュウ「ピカチュウ、ピカチュウ、ピカチュウ」

ピカチュウはキーワードを言うと本棚が減り何か一冊の本を手にとった。

すずか「何それ？」

ピカチュウ「ピカチュウ、ピカピカピカピカピカチュウ…」

月村すずか、小学校四年生、最後におねしよしたのは…

すずか「きやあく!?何を調べてるの！」

大目玉をくらったピカチュウだった。

ピカチュウ「チャ〜…」

すずか「全く…デリカシーがないよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

すいません…

すずか「星の本棚、ある意味恐怖の存在だね」

ピカチュウ「ピカピ」

そうだね。

ピカチュウとすずかは星の本棚を出た。

ピカチュウ「ピカ〜♪」

すずか「よしよし♪」

アリサ「かなり仲良くなったみたいね」

なのは「そうだね」

なのは達はすずかの家でお茶会を楽しんでいた。

ピカチュウ「ピカ〜。ピカチュウ〜♪」

アリサ「わつと♪今度は私?」

ピカチュウ「チャ〜♪」

ピカチュウはすずかで満足するとアリサに飛びついた。

アリサ「こら♪くすぐったいわよ♪」

ピカチュウ「チャ〜♪」

アリサに飛びついたピカチュウだが…

ピカチュウ「ピカ!?!」

アリサ「どうしたのよ?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ジュエルシードが!

ユーノ「この気配は！ジュエルシード！」

なのは「行ってくるの！」

アリサ「私達も行くわよ」

なのは「大丈夫なの」

アリサ「そう？なら頑張りなさい。ヤバくなったら呼ぶのよ？」

なのは「うん、ありがとうなの」

なのははユーノと一緒に向かった。

アリサ「…ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ」

《バット》

ピカチュウはバットショットをなのはの後を追いかけてきた。

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウはスタックフォンを開くと送られてくる画像を逐一見ている。

ピカチュウ「ピカ…」

歴史的にフェイトが来るはずなので一応警戒していた。

ピカチュウ「ピカッ…ピッ！」

すると送られてくる画像にフェイトが映りなのはがやられた。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

なのはがやられた！

アリサ「すずか！」

すずか「うん！」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

相手は撤退したよ…

アリサ「そう…取り合えずなのはを回収しましょう」

すずか「うん」

なのははすずかの屋敷に運ばれ安静にしてから帰った。

ピカチュウ「チャッ…」

アリサ「どうしたのよ？」

次の週、ピカチュウを預かるのがアリサの番になったがピカチュウは元気なかった。

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「この間の子？」

ピカチュウはスタッグフォンにフェイトの写真を映した。

アリサ「敵なら容赦しないわ」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

ピカチュウは、戦いたくないと呟いた。

アリサ「ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカピカピカチュウ」

あの子が悪い子には見えない。

アリサ「…わかったわ。なるべく戦わない方向で考えるわ」

ピカチュウ「ピカピ!？」

いいの!?

アリサ「ピカチュウの勘を信じるわ」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

ありがとう♪

アリサ「こら♪くすぐったいわよ♪」

ピカチュウはアリサに抱きつくとスリスリした。

ピカチュウ「ピカチュウ？」

ジュエルシード探す？

アリサ「そうね、今日は習い事はないし行きましょ」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

お散歩だ♪

アリサ「はいはい♪行くわよ」

アリサ達は散歩に出掛け、無事にジュエルシードを一つ見つけてなのはに渡した。

外伝07

アリサ「この辺なの？」

ユーノ「はい、この辺にあるはずです」

アリサ「なら、手分けして探しましょう」

なのは達は手分けして探した。

ピカチュウ「ピカ〜…」

ピカチュウが辺りを探していると…

ピカチュウ「ピ!?!ピカチュウ〜♪」

ジュエルシードを見つけた。

ピカチュウ「ピファ〜♪」

ジュエルシードをくわえてアリサ達の下に向かった。

フェイト「待って」

ピカチュウ「ピファ!?!」

向かったがフェイトが立ち塞がった。

フェイト「そのくわえてる物を渡して」

ピカチュウ「ピファ！」フルフル

ピカチュウは拒否するが…

フエイト「なら奪います」

ピカチュウ「ピファ〜！」

ピカチュウは走って逃げ出した。

フエイト「待って！」

ピカチュウ「ピファチュウ〜！」

フエイト「フォトンランサー！」

ピカチュウ「ピファ!?!」ドン！

フエイトはピカチュウの足下に魔力弾を当てるとピカチュウは転がって転んだ。

フエイト「さあ、渡して」

ピカチュウ「ピ…」

フエイト「？」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

飲んじやった…

フエイト「…ええ!？」

何故か最初からピカチュウの言葉を理解してるフエイトだった。

アリサ「ピカチュウ！」

ピカチュウ「ピ!?ピカチュウ〜！」

なのは「この間の子！」

ピカチュウがアリサに向かうとフエイトも追いかけ、なのはも走り出し互いの真ん中の距離でぶつかった。が…

ダン!

クロノ「ここでの戦闘は危険すぎる。互いに大人しくしてもらおう。こちらは時空管理局執務官、クロノ・ハラオウン」

フエイト「管理局！」

アルフ「フエイト!撤退するよ！」

魔力弾を放ったアルフはフエイトを撤退させて転移して逃げた。

クロノ「エイミイ、追跡は？」

エイミイ『駄目、多重転移で追跡出来ない』

クロノ「わかった。さて、君達にも話を聞きたいのだが？」

なのは達「……」

なのは達はクロノの足下を見ていた。

クロノ「何を…」

ピカチュウ「……」(怒)

クロノが足下を見るとピカチュウの尻尾を踏んでいて…

ピカチュウ「ピカ！チュウ〜！」

クロノ「グア〜!?!」

電撃をまともにくらった。

ピカチュウ「ピカ！」

ふん！

アリサ「いらっしやい、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ」

クロノ「…さて、改めて君達にも話を聞きたいのだが」

アリサ「どうする？」

ユーノ「行ったほうがいいと思います」

アリサ「わかったわ」

アリサ達はクロノについて行きアースラに向かった。

アリサ「それで？何処まで行くのよ？」

クロノ「艦長室までだ」

暫くの間歩くと艦長室に辿り着いた。

クロノ「艦長、失礼します」

クロノを先頭にアリサ達は艦長室に入った。

リンデイ「いらつしやい。さあ、どうぞ。座って下さい」

アリサ達は座ると…

リンデイ「さて、貴女達がジュエルシードを集めてた理由を聞かせてもらえますか？」

アリサ「私達は…」

アリサはジュエルシードを集めてた理由を話した。

リンデイ「…そう。立派だわ」

クロノ「だが、無謀でもある」

リンデイ「この件は管理局が預かります」

「

なのは「そんな!」

リンデイ「と言つても混乱するわよね。一度ゆっくり考え…」

ピカチュウ「ピカチュウ」

帰ろう。

アリサ「ピカチュウ?」

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウ」

後は管理局に任せてみよ。集めれるかどうか。

すずか「でも…」

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウ」

手伝うならボクは力を貸さないよ。ドライバーもね。

アリサ「…わかったわ。私達は手を引きましょう」

なのは「……」

ピカチュウ「ピカチュウ」

帰ろう。

アリサ達は手を引くことになったが、なのはだけは手伝う事になっ

た。

アリサ「ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ？」

アリサ「どうして管理局の手伝いをしなかったの？」

次の日、アリサはピカチュウに断った事を訪ねた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

態度が気に入らなかった。

アリサ「それだけ？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

後は手伝うって言わせようとしてたのがムカついた。

アリサ「なるほどね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

散歩に行きたい。

アリサ「そんな時間ね♪行くわよ♪」

ピカチュウ「ピカ♪」

アリサとピカチュウは散歩に出掛けた。

ピカチュウ「ピカ〜チュウ〜」

すずか「ピカチュウ…しっかり！」

アリサ「駄目ね…熱が下がらない」

ピカチュウ「チャ〜」

すずか「病気なのかな!？」

アリサ「落ち着きなさい! 私達がしっかりしないでどうするの!」

すずか「そ、そうだね」

アリサ「でも、何とかしないと…」

ピカチュウ「ピ…ピカ」

ピカチュウが手を伸ばすとアリサとすずかが繋いだ。

ピカチュウ「ピ…ピカ、ピカチュウ」

さ…さあ、検索を始めよう

アリサ達は星の本棚に入った。

アリサ「これは…」

すずか「ピカチュウ！無理しないで」

ピカチュウ「ピ…ピカチュウ…ピカチュウ…ピカチュウ」

ピカチュウが検索をすると一冊の本が残った。

すずか「これは…ピカチュウの本？」

アリサ「なるほど！今の状態がわかるのね！」

早速アリサ達は本を読みピカチュウの状態を調べた。

アリサ「…なるほど。ピカチュウの体調不良の原因は飲んじやった
ジュエルシードがピカチュウの体に溶け込んでいるせいなのね」

すずか「読んだ感じ看病してれば大丈夫みたいだね」

アリサ「そうね、ピカチュウ。ありがとう、出ましょう」

ピカチュウ「ピカ…」

アリサ達は星の本棚から出てきた。

アリサ「取り合えず看病を続けましょう」

すずか「うん」

アリサ達はピカチュウの看病を続けた。

ピカチュウ「チャ〜♪」

次の日、ピカチュウは元気になっていた。

アリサ「よかった。体調が治って」

ピカチュウ「ピツピカチュウ！」

アリサ「そうね、すずかに連絡しておくわ」

アリサはすずかに連絡を取り、ピカチュウが元気になった事を伝えた。

アリサ「さて、元気になったし散歩に行くわよ」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

ピカチュウは元気に散歩に向かった。

ピカチュウ「ピカ♪ピカ♪ピカチュウ〜♪」

アリサ「ご機嫌ね♪」

ピカチュウ「ピカ？」キラリン

地面で何か光ったので近付いて見ると…

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

ジュエルシードを拾った。

アリサ「なのはに渡す？」

フェイト「その石を渡して下さい」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「アンタはこの間の…」

フェイト「その石を渡して下さい」

アリサ「アンタ、この石が何かわかってる？」

フェイト「知ってます。ですが母さんの為にも集めなければいけないんです」

ピカチュウ「ピカチュウ」

するとピカチュウがフェイトに近付いて…

ピカチュウ「ピカ」

ジュエルシードを差し出した。

フェイト「え？」

ピカチュウ「ピカピ」

あげる。

フエイト「…いいの？」

アリサ「構わないわよ。私達はもう関係ないからあげるわよ」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

悪いことに使っちゃダメだよ。

フエイト「ありがとう」

ピカチュウ「ピカピ」

フエイトが去ると…

アリサ「ピカチュウ、帰るわよ」

ピカチュウ「ピカ！」

アリサとピカチュウは帰っていた。

外伝08

ピカチュウ「ピカチュウ！」

なのは「渡してなの！」

ピカチュウ「ピカ！」

やだ！

ある日、ピカチュウが散歩に出掛けているとジュエルシードを見つけ、持ち帰ると偶々なのはがおりジュエルシードを渡してと頼まれるが拒否していた。

なのは「渡してなの！」

ピカチュウ「ピッ！」プイ！

なのは「アリスちゃんからも言っつてよ」

アリス「それはピカチュウが見付けた物、私に何かを言う権利はないわ」

なのは「むゝ」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウは、散歩に行く！と鳴いて部屋を出ていった。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

もう全く！

フエイト「あ」

ピカチュウが歩いているとフエイトに出会った。

フエイト「えっと、久しぶり？」

ピカチュウ「ピツピカチュウ！」

やあフエイト。

フエイト「もしかしてジュエルシード持ってる？」

ピカチュウ「ピカ」

フエイト「くれないかな？」

ピカチュウ「ピく…ピカ！」

フエイト「な、なに？」

ピカチュウ「ピカピ！」

遊んで！

フエイト「えっと…今度でもいい？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

約束だよ。

フェイト「うん」

ピカチュウ「ピカ」

フェイト「ありがとう♪」

ピカチュウはフェイトにジュエルシードを渡すと…

フェイト「またね」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

手を振って見送った。

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ある日ピカチュウはアリサが学校に行ってる間にある場所に向かった。

ピンポーン！

フェイト「はい？」ガチャ

ピカチュウ「ピカ！」

フエイト「この間の子？」

ピカチュウ「ピカピ〜」

ピカチュウはすたころと中に入った。

フエイト「はい、林檎ジュース」

アルフ「フエイト？なんだい？このちっこいのは？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

フエイト「ピカチュウって言うみたい。何回かジュエルシードを渡して貰ってるの」

ピカチュウ「ピカピ、ピカチュウ」

その事で、話があるの。

フエイト「ジュエルシード持ってるの!？」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウは首を振った。

フエイト「そっか…」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

でもある場所は知ってるよ。

フエイト「本当!？」

ピカチュウ「ピカ」

フエイト「教えてくれる？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

交換条件。

フエイト「私に出来る事なら何でも」

ピカチュウ「ピカピカチュウ！」

沢山遊んで！

フエイト「え？それだけでいいの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

フエイト「約束するよ！」

ピカチュウ「ピカ。ピカチュウ？」

うん。いつ取りに行く？

フエイト「あの子が見つける前にだからすぐにでも」

ピカチュウ「ピカ…チュウ」チュウ

ピカチュウは林檎ジュースを一気に飲むと…

ピカチュウ「ピカピ」

行こう。と手を振った。

フエイト「アルフ、行くよ」

アルフ「あいよ」

ピカチュウを先頭にフエイト達はジュエルシードを探しに向かった。

ざばーん

フエイト「どこ?」

ピカチュウ「ピカ。ピカチュウピカチュウ」

そう。海の中に7つあるよ

フエイト「7つも!」

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウピカチュウ」

ボクが発動させるから暴走する前に封印してくれる?

フエイト「出来るの?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

任せてよ。

フェイト「じゃあお願いするね」

フェイトとアルフが海の上で待機してるのを確認して…

ピカチュウ「ピカ〜…ピ〜。ピカ〜！ピカチュウ〜！」ピシヤン！

ピカチュウが両手を上げ下げすると落雷が幾つも落ちた。すると7つのジュエルシードが発動した。

フェイト「バルデイシユ！」

フェイトは計画通り何とか封印した。しかしぎりぎりだったのか少し疲労の色が見えた。

アルフ「やったねフェイト！」

フェイト「うん♪」

クロノ「管理局だ！抵抗せずに投降して貰おう」

フェイト「管理局…」チラッ

…
フェイトは今の状態では戦えないと判断して逃げることにしたが

ピカチュウ「ピ〜…」

ピカチュウがぐったりして動かなかった。

フエイト『アルフ、ピカチュウを回収して撤退』

アルフ『あいよ。時間を稼ぐからピカチュウを回収しておくれ』

フエイト『ありがとう』

アルフ「でや！」

アルフが魔力弾で弾幕を張ると同時にフエイトは飛び出しピカチュウを回収した。

フエイト「アルフ！」

フエイトの掛け声と共に二人は多重転移して逃げた。

クロノ「しまった！」

逃げられたことにクロノは苦虫を噛んだ表情をしていた。

外伝09

フエイト「ピカチュウ？大丈夫？」

ピカチュウ「ピカ〜…」

多重転移して逃げたフエイト達は自宅に戻って来ていた。

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウ」

あの技は体力をかなり消耗するんだ。

フエイト「ごめんね、私達の為に」

ピカチュウ「ピカチュウ」

気にしないで。

アルフ「ありがとうよ。アンタのおかげで一気に集まったよ」

ピカチュウ「ピカ〜…」

アルフ「ほら、飲みな」

アルフはピカチュウに林檎ジュースを飲ませてあげた。

フエイト「お家まで送ってあげる」

アルフ「そうだね、アンタのおかげで集まったんだしね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ありがとう。

フエイトとアルフはピカチュウを連れてアリサの邸に向かった。

フエイト「これで残りはあの子が持つてるジュエルシードだけだ」

フエイトの邸に向かつてる途中でフエイトは残りをどうするか考えていた。

ピカチュウ「ピく…ピカ！ピカチュウ！」

あゝ…あれ！隠れて！

ピカチュウが叫ぶと咄嗟に二人は電柱の影に隠れた。

フエイト「どうしたの？」

ピカチュウ「ピカく…」

ピカチュウはデندنセンサーでアリサの邸の門を見た。すると管理局のサーチャーが隠れて見ていた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

見えて。

フエイト「えっと、あれ！サーチャー!?!管理局の！」

「アルフ「何だって！」

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウ」

ボクが手伝ったのを見て見張ってるみたい。

フエイト「どうする？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

帰れない。

フエイト「暫くの間、家にいる？」

ピカチュウ「ピカピ？」

いいの？

フエイト「うん、いいよ」

フエイト達は自宅に戻っていった。

ピカチュウ「ピカピ、ピカチュウ。ピカピカチュウ」

アリサ、気をつけてね。管理局が見張ってるから。

アリサ『わかったわ。ピカチュウも気をつけてね』

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウはスタックフォンを閉じて電話を切った。

アルフ「フェイト、これからどうする？」

フェイト「うん」

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウ」

一つだけ手に入れる方法がある。

フェイト「ほんと!？」

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウピカチュウピカチュウ」

フェイトがなのはとジュエルシードを賭けて勝負するの。

フェイト「確かにそれなら一気に手に入る…」

ピカチュウ「ピカチュウピカピ」

でも負けたらオジャン。

フェイト「…やるよ!」

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウ」

わかった。ボクが伝えてくる。

アルフ「いいのかい？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

体の調子も戻ったしね。

フエイト「じゃあ場所と時間を…」

フエイトは勝負する時間と場所を伝えた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

任せてよ。

フエイト「気をつけてね」

ピカチュウ「ピカピク！」

ピカチュウはフエイト宅を後にしてなのはの下に向かった。が…

ピカチュウ「チャク…」

なのはの家を知らなかった。

ピカチュウ「ピク…ピカ！」ポチポチポチ

アリサ『もしもし？』

ピカチュウ「ピカピカピカチュウ」

なのはの家を知ってる？

アリサ『わかるわよ。待ってなさい住所を送るから』

ピカチュウ「ピカピ〜」

ピカチュウが電話を切った後すぐにメールで届いた。

ピカチュウ「ピカチュウ〜…」

ピカチュウは住所を確認して向かった。

ピカチュウ「チャ〜…ピ?ピカ♪」

ピンポーン

なのは「はいなの」

ピカチュウ「ピッピカチュウ!」

なのは「ピカチュウ!?!どうしたの?」

ピカチュウ「ピカ〜…」

ピカチュウはフェイトからの伝言を伝えた。

なのは「…わかったの!最後の決勝、やるの!」

ピカチュウ「ピカチュウ〜!」

伝えたからね〜!

ピカチュウはアリサの邸に戻っていった。

ピカチュウ「……」ジジジジ

決闘前日、ピカチュウはあるメモリを完成させた。

フアング「ギャーオ」

フアングメモリの完成である。

ピカチュウ「ピカチュウ」

そしてピカチュウは物置小屋を出てアリサの下に向かった。

アリサ「平和ね」

すずか「そうだね♪」

ピカチュウ「ピカピ〜!」

アリサ「ピカチュウ? どうしたのよ?」

ピカチュウ「ピカピ、ピカチュウ!」

アリサ、変身だよ!

アリサ「…はあ? 急ね、まあいいわ」カシヤ

アリサがベルトを着けると…

《フアング》

《ジョーカー》

アリサ「ちよつと!?メモリが…」コテン

《フアング・ジョーカー》

ピカチュウ「……」

ピカチュウの体が光りに包まれて大人の人型になると右半身が白、左半身が黒の仮面ライダーW、フアング・ジョーカーの誕生である。

すずか「お〜!」

アリサ『びつくりするじゃない!先に説明しなさい』

ピカチュウ「ピカ〜…ピカチュウ」

ごめん〜…動いてみて。

アリサ『ん……問題ないわね、動けるわ』

ピカチュウ「ピカ」

問題ない事を確認してピカチュウは変身を解いた。

アリサ「貴重な体験ね。他の体に入るのって」

すずか「ねえねえピカチュウ！トライアルはまだ!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

まだ無理。

すずか「残念」

アリサ「ゆつくり待ちましょう。ピカチュウ、林檎ジュースよ」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

ピカチュウはアリサの膝の上に乗り一緒にお茶会を楽しんだ。

外伝10

フエイト「賭けるジュエルシードは持つてる全て。異存はない？」

なのは「うん。ないよ」

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウ」

ジュエルシードはボクが預かるよ。

なのは、フエイト「うん」

二人はピカチュウに全てのジュエルシードを預け、二十個が揃った。

なのは「……」

フエイト「……」

ピカチュウ「ピカ…ピカチュウ！」

では…始め！

ピカチュウの合図と共に勝負が始まった。が…

ピシヤーン!!

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウに落雷が落ちてジュエルシードが転移して消えた。

ピカチュウ「チャ〜！」

しかしピカチュウには効いておらずジュエルシードだけを持って
かれた。

なのは「どういう事！」

フエイト「知らない！本当に私達は何も知らない！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

嘘はついてないよ。

アルフ「あのババア！」

クロノ「ジュエルシードを全て持ってかれたな」

エイミィ『捕捉出来てるよ』

ピカチュウ「ピカチュウ」

取り返してくる。

なのは「なのはも行くの！」

フエイト「私も！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

転移よろしく。

フェイト「うん。アルフ！」

フェイト達は転移してフェイトの母が待つ時の庭園に向かった。

ビービービー！

フェイト「そんな!?なんで警報装置が起動してるの!?!」

クロノ「どうやら、僕達は侵入者扱いのようだな」

アルフ「ババアめ！」

ピカチュウ「ピカピ！ピカチュウ！」

アリサ！変身だよ！

《ファング》

《ファング・ジョーカー》

なのは「ファングジョーカーなの！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

みんな行くよ。

Wを先頭にプレシアの待つ玉座に向かった。

アリサ『どきなさい!』カシヤンカシヤン

《シヨルダーファング》

アリサ『でいやく!』

肩から生えたブーメランを投げて迫りくるロボットを破壊して進むWだった。

アリサ『まだまだく!』カシヤン

《アームフアング》

今度は腕にブーメランの半分を生やして敵に突っ込んで行った。

なのは「にやははは…アリサちゃん、ノリノリなの」

クロノ「温存出来るから助かるな」

フェイト「母さん…」

ピカチュウ「ピカチュウく!」

Wは扉を見付けると蹴破って乗り込んだ。

プレシア「随分礼儀知らずな客ね」

アリサ『はん!人様の物を盗んで高みの見物してるおばさんに言われたくないわね』

フェイト「母さん!どうして!」

プレシア「どうして?これは全てアリシアを蘇らせるためよ」

フェイト「アリシア？」

プレシア「そう。お人形の貴女とは違う私の娘よ」

フェイト「何を言ってるの母さん…？」

プレシア「私がジュエルシードを集めた理由…それは娘のアリシアを蘇らせるためよ！本当はアルハザードに行くつもりだったけどこれだけのジュエルシードがあれば！」

クロノ「不可能だ！」

プレシア「理論上は可能よばーや」

フェイト「人形…私は…人形？」

膝について覇気のない状態にフェイトはなってしまった。

アリサ『この〜！』

《シヨルダーファング》

ガキイン！

アリサ『ピカチュウ！突っ込むわよ！』

ピカチュウ「ピカピカ〜！」

いけいけ〜！

《アームファング》

ガキイン！

シオルダーフアングが弾かれてアームフアングに切り替えたWはプレシアに突っ込んで行った。

アリサ『人形だろうとなんだろうと！フェイトは生きてるのよ！』

プレシア「だからなに？今更愛せとでも？」

アリサ『アンタはあの子の母親なのよ！』

プレシア「人形の母親になった覚えはないわ！」ガキイン！

アリサ『チツ！』

プレシア「茶番はお仕舞いにしましょう。ジュエルシードよ！アリシアを生き返らせて！」

アリサが距離を取ったの機会にプレシアはジュエルシード二十個を同時に発動させた。

ガガガガガガガ！

クロノ「無茶だ！」

ユーノ「暴走してる！」

プレシア「何故!?理論上は完璧なのに！」

なのは「止めないと！」

クロノ「不可能だ！」

ユーノ「封印出来る人間が少なすぎる上にジュエルシードの出力が高い」

アリサ『ピカチュウ！何とか出来ないの!?!』

ピカチュウ「……」

アリサ『ピカチュウ?』

ピカチュウ「ピカピ…ピカチュウ」

一つ…方法がある。

アリサ『それは?』

ピカチュウ「ピカピカピカチュウ」

ツインマキシマムなら。

アリサ『ツインマキシマム!?!』

ピカチュウ「ピカピカピカチュウ」

使ったら最後どうなるかわからない。

ゴゴゴゴ!

クロノ「何だ!?!この揺れは!?!」

エイミー『クロノ君！ジュエルシードの暴走の影響で次元炉が暴走してる！脱出して！』

クロノ「しかし！このままでは次元震が起きてしまう！」

なのは「次元震？」

ユーノ「地球にある地震が次元で起きるようなものだよ。しかも最悪な規模での」

なのは「どうかしないと！」

なのは達が悩んでいると…

アリサ『…やりましょう、ピカチュウ。なのは達を死なせる訳にはいかないわ』

ピカチュウ「ピカチュウ？」

どんな影響が出るかわからないよ？

アリサ『覚悟の上よ』

ピカチュウ「ピカチュウ」

わかった。

Wは発動しているジュエルシードを見ると…

アリサ『いくわよ！』カシャンカシャンカシャン

《ファング、マキシマムドライブ》

《ジョーカー、マキシマムドライブ》

アリサ『ハア〜!』

Wの右足にブーメランが生えると更に白かったブーメランが黒く染まった。

アリサ『ファングストライザー! マキシマム!』

ガガガガガガガ!!

ツインマキシマムの威力とジュエルシードの出力がぶつかり激しく揺れた。

ゴゴゴゴ!!

なのは「アリサちゃん! ツインマキシマムは無謀なの!」

ユーノ「なのは! ツインマキシマムって!」

なのは「えっと、自爆技に近いの!」

クロノ「この威力だと本人が耐えられないぞ!」

ガガガガガガガ!!

ピカチュウ「ピカチュウ〜!」

アリサ『ハア〜!』

パキイン!

マキシマムセイバーとジュエルシードが同時に砕けた。

ドサツ

カシャン! ヒュー…

ピカチュウの変身が解けた。

なのは「ピカチュウ! しっかり!」

クロノ「今がチャンスだ! 脱出するぞ!」

クロノの掛け声に、アルフはフェイトを、ユーノはアリシアを、クロノはプレシアを、そしてなのははピカチュウを連れて脱出した。その後直ぐに時の庭園は崩壊した。

クロノ「さ、流石に駄目かと思った」

ユーノ「ぼ、ボクも」

アルフ「フェイト、大丈夫かい?」

フェイト「うん…」

なのは「ピカチュウ…」

ピリリリリ

なのは「もしもし？アリサちゃん!?大丈夫なの!?うん、私達は大丈夫だよ。ピカチュウ？ピカチュウ、アリサちゃんだよ」

ピカチュウ「……」

なのは「ピカチュウ？」

ピカチュウ「……」

ピカチュウの手はぶらっと垂れていた。

なのは「嘘だよ…ね？寝てるだけだよね？ピカチュウ？ピカチュウ
！」

なのはが何度も揺するがピカチュウはピクリとも動かなかった。

なのは「ピカチュウ！ピカチュウ！」

ユーノ「なのは……」

ユーノはなのはの肩に手を置き首を振った。

なのは「寝てるだけなの！ピカチュウ！起きてよ！」

ユーノ「なのは……」

なのは「こんなのって…こんなのって……」

その場はまるで通夜のような空気になってしまった。

サツ

なのは「ヒツク…?」

なのはが泣いていると何か動いた気配がしたのでそちらを見た。
すると：

ピカチュウ「ピカ」

てっててー!

ドツキリ大成功!と木札を掲げたピカチュウがいた。

なのは達「……」

ピカチュウ「ピカ?」

あれ?

なのは「全然シヤレになってないの〜!」

ピカチュウ「チャ〜…」

それはもう盛大に怒られた。

外伝11

ピカチュウ「ピカチュウ…」

筋肉痛だよ…

アリサ「私も頭痛いわ」

一人と一匹は次の日、ツインマキシマムの影響を受けていた。

アリサ「正直これだけで済んでよかったわ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

そうだね。

ピリリリリ

アリサ「もしもし？…なのは？…どうしたのよ？…そんなに慌てて？ピカチュウ？筋肉痛で動けないわよ。え？…連れてきて？……わかった。直ぐに行くわ」

ピカチュウ「ピカ？」

アリサ「なんか非常事態みたい。行くわよ」

ピカチュウ「ピカ」

アリサはピカチュウを抱っこするとなのはの家に向かい、なのはに

会うとすぐさまアースラに連れて行かれた。

クロノ「やあ、よく来てくれた」

アリサ「それで？私達に用事って？」

クロノ「これを見てくれ」

モニターにはプレシアとアリシアが映っていた。

クロノ「非常に信じがたいが…アリシア・テスタロッサが生き返った」

アリサ「…はあ!？」

クロノ「それでこちらでも検査しているがどうしてもわからない。そこでピカチュウ？君ならわかるんじゃないかとなのはがいつてるのだが？」

なのは「にやははは…」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

アリサ「予想でいい？かって」

クロノ「構わない。今は少しでも情報が欲しい」

ピカチュウ「ピカ、ピカピカピカチュウ、ピカチュウ」

アリサ「多分、最後に私達が使った必殺技がジュエルシードの余計なエネルギーを無くしたせいでジュエルシードが暴走を止めた瞬間、

正しく発動したんだと思うですって」

クロノ「つまり、ジュエルシードが奇跡的に正しく発動したと？」

ピカチュウ「ピカ」

クロノ「すまない。参考に…いや、その可能性が高いか。因みにピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ？」

クロノ「もう一度起こそうと思えば起きるか？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「無理ですって」

クロノ「わかった。すまないな、時間を取らせて」

クロノが去った後、アリサ達はフェイトに少し会ってから帰っていった。

すずか「ツインマキシム見たかったよ〜！」

アリサ「勘弁してよ。二度とやらないわよ」

「さすが「残念」

ピカチュウ「ピカチュウピカピカ？」

そろそろフェイトを見送る時間だよ？

フェイト「そうね。行くわよ、さすが」

「さすが「待つてよ〜！」

アリス達はフェイトが待つ公園に向かった。

なのは「フェイトちゃん、またね」

フェイト「なのは達も元気で」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

フェイト「ピカチュウ、色々ありがとう♪」

ピカチュウ「ピカチュウ」

気にしないで。

クロノ「では行こうか」

フェイトはこれから裁判を受ける為に時空管理局に向かうことになった。

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

元気でね〜！

ピカチュウは手を振り見送った。

アリサ「さあ、私達も帰りましょう」

すずか「うん♪」

なのは「行こう♪」

こうしてジュエルシード事件は幕を閉じた。

外伝 A S

外伝 1 2

アリサ「はあ？知らない女の子に襲われたですって？」

なのは「そうなの」

ある日のお茶会、なのはは見知らぬ女の子に襲われた事を話した。

アリサ「アンタ、知らないうちに怨みでも買ったの？」

なのは「してないもん！」

アリサ「冗談よ」

すずか「アリサちゃんたら♪」

ピカチュウ「ピフア〜…ピカ〜！」

アリサ「起きたの？」

ピカチュウ「ピカ♪」

すずか「あ、もうこんな時間！帰らなきゃ！ピカチュウ、行こう」

どうやら今週はすずかの番らしい。

アリサ「気をつけて帰りなさい」

すずか「はい、またね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

いってきます。

ピカチュウもすずかの後を追いかけた。

すずか「ピカチュウ、ちよつと寄り道するけどいい？」

ピカチュウ「ピカ」

すずかは図書館に本を返すため、図書館に向かった。

すずか「なんか新しい本があるといいな♪」

ピカチュウ「ピカチュウ」

活字中毒者。

すずか「本が好きと言ってほしいな？」

ピカチュウ「ピカ」

すずか「つと着いちやった。ピカチュウ、ちよつと待っててね？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

すずかは本を返しに中に入って行った。

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウは植え込みの中に隠れてすずかが出てくるのを待った。

ピカチュウ「ピく…ピカ！」

待つこと十分、すずかが出てくるのが見えたので今か今かと待った。

すずか「あれ？いないな？」

はやて「すずかちゃんのペットいなくなっただん？」

すずか「遠くには行ってないと思うんだけど。ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

すずか「わっ！隠れてたの？もう！」

ピカチュウ「ピカ♪」

はやて「……」

すずか「はやてちゃん、この子が言ってたピカチュウだよ」

はやて「か、かわええ♪」

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

すずかは抱き抱えるとはやてと一緒に帰り始めた。

すずか「はやてちゃんはよく図書館にくるの？」

はやて「週一で来とるよ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ボクは毎日。

はやて「なんて言ってるん？」

すずか「あははく…」

すずかは笑って誤魔化した。

はやて「あ、ウチこっちやから」

すずか「うん、またね」

はやて「またな」

すずか達ははやてと別れ帰路についた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

すずか「ん？どうしたの？」

すずかが本を読んでいるとピカチュウがやって来た。

ピカチュウ「チャク…」

すずか「わつと、お昼寝？」

ピカチュウ「チャ〜…」

すずかの膝の上に陣取るとピカチュウは眠りについた。

すずか「ふふ♪」

すずかは微笑んでピカチュウを撫でながら読書続けた。

ピカチュウ「チュウ〜…ピカ!?」キーン!

すると突然結界に一人と一匹は取り込まれた。

ピカチュウ「ピカ！」

シグナム「……」

すずか「どちら様ですか？」

シグナム「急な来訪失礼する。そちらの黄色い獣に用がある」

すずか「ピカチュウに?どんな用件でしょうか?人様に迷惑をかけた覚えはないですけど?」

シグナム「確かに。だがそちらの黄色い獣に宿ってる魔力を頂きたい」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

ボクに魔力が!?

すずか「ピカチュウ? 魔力なんてあるの?」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

知らないよ!

すずか「あの…何かの間違いじゃ? 本人? は魔力はないと言ってますけど?」

シグナム「いや、確かに感じる」

ピカチュウ「ピカ」

うくん。

シグナム「余り時間がないのでな。渡して貰えぬなら…」

シグナムは剣を抜いた。

すずか「仕方ないか」カシャ

すずかは本をテーブルに置くとアクセルドライバーを着けた。

《アクセル》

すずか「変、身!」

《アクセル》

エンジン音が響きすずかは変身した。

ピカチュウ「ピ、カ、チュウ！」

すずか「ありがとう」パシッ

ピカチュウはすずかにエンジンブレードを渡した。

すずか「……」

シグナム「……」

ガキイン！

互いの剣がぶつかりあった。

すずか「はあ！」

シグナム「クッ！」

アクセルはその場で左右に回転しながら連続で切りつけていた。

シグナム「これしきで！」

すずか「クッ」

今度はシグナムが攻め始めた。

ピカチュウ「ピく……」

シグナム「こんな心踊る戦いは久しぶりだ」

すずか「ハアハア、ありがとうございます」

体力に差があるためシグナムが有利になっていた。

シグナム「さて、そろそろ？ん？なに？わかった。邪魔が入ったよ
うだ、ここで失礼する」

シグナムは口早に撤退していった。

フェイト「ピカチュウ！」

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ♪」

すずか「ふう」カシャン

すずかも安全と確認すると変身を解いた。

フェイト「大丈夫だった？」

すずか「いいタイミングだったよ♪」

ピカチュウ「ピカピ」

フェイト「何があったの？」

すずか「実は…」

先程の話をした。

フェイト「ピカチュウに魔力が？」

ピカチュウ「ピカチュウ〜？」

何でだろう〜？

すずか「星の本棚で調べてみたら？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

そうするね。

ピカチュウは星の本棚に入った。

すずか「……」

ピカチュウ「ピカチュウ」

検索が終わったよ。

すずか「どうだった？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

ボクが飲み込んだジュエルシードがリンカーコアの代わりになつて
るみたい。

フェイト「ジュエルシードが？一度検査する？」

ピカチュウ「ピカピ」

しない。

フエイト「大丈夫なの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

問題ないよ。

フエイト「わかった。じゃあ私も戻るね」

すずか「うん、またね」

フエイト「うん」

フエイトは帰艦してすずかは読書、ピカチュウはお昼寝を続けた。

外伝13

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ」

さあ、検索を始めよう。

さすがが学校にいつてる間、相手の事を調べた。

ピカチュウ「ピカチュウ、ピカチュウ、ピカチュウ」

八神はやて、ヴォルケンリッター、魔力収集

記憶を頼りに調べた。すると一冊の本が残った。

ピカチュウ「ピカチュウ」

魔力収集の意味は。

調べると闇の書完成の為だった。はやてへの呪いが着々と進みこのままでは死に至ると。そうさせないためにシグナム達、ヴォルケンリッターは独断で闇の書の完成を目指していた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

そうだったんだ。

ピカチュウは闇の書を直した経験があるが収集の意味までは知らなかった。

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

直そうにも防衛プログラムを切り離さないといけないし。

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ」

まあ、なのは達が何とかするだろう。

と、決めてピカチュウはすずかの帰りを待った。

ピカチュウ「ピカ♪ピカ♪ピカチュウ♪」

すずか「ほら、あぶないよ♪」

図書館に行きながら散歩を楽しんでいるピカチュウだった。

はやて「お、すずかちゃん」

すずか「え？ここに…ちは、はやてちゃん」

はやての車椅子を押していたのはなんとシグナムだった。

ピカチュウ「ピカチュウ」ぼそぼそ

初対面のふりをして。

すずか「わかった」ぼそぼそ

ピカチュウはすぐさますすずかの肩にもたれかかると、すすずに耳打ちした。

はやて「紹介するな、ウチの家族でシグナム言うんよ」

すすか「初めまして」

シグナム「…初めまして」

はやて「すすかちゃん図書館に行くん？一緒に行かへん？」

すすか「うん、いいよ」

すすか達は揃って図書館に向かった。

ピカチュウ「ピカチュウ」

すすか「はやてちゃん、ゴメンね？先に入ってて。ピカチュウを説得してから行くから」

はやて「そうか？なら、先に行つとるな」

シグナム「主ははやて、私はここで」

はやて「わかった、待っててな」

はやては一人図書館に入ってしまった。

ピカチュウ「…ピカ」

はやてが図書館に入るの見届けたピカチュウはすずかの足から離れ…

ピカチュウ「ピカピ、ピカチュウ」

すずか、通訳お願い。

すずか「え、うん」

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウ？」

すずか「収集ははやてちゃんの為ですか？」

シグナム「…そうだ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

すずか「はやてちゃんはこの事を知らないんですね？」

シグナム「ご存じない」

ピカチュウ「ピカチュウ、ピカチュウ」

すずか「わかりました、私達も秘密にします」

シグナム「かたじけない」

すずか「じゃあ私も本を返しに行ってくるね」

すずかも図書館に入っていた。

ピカチュウ「チャ〜」

シグナム「お前は不思議な奴だな。襲ってきた相手を庇うなど」

ピカチュウ「ピカ？」

シグナム「いや、ただの一人言だ」

はやて「お待ちせ〜」

すずか「お待ちせ〜」

ピカチュウ「ピカ♪」

二人が戻って来るとそのまま途中まで一緒に帰り、別れた。

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

アリサ「わつと。元気にしてた？」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

そして翌週、ピカチュウの預かり当番がアリサになった。

すずか「元気いっぱいだよ♪」

アリサ「そうみたいね」

なのは達が闇の書事件に追われる中アリサ達はまったりしていた。

すずか「でも、いいのかな？なのはちゃん達を手伝わなくて」

アリサ「私達が出ていってもしょうがないでしょ。部外者なんだし」

すずか「そうだけど…」

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「煮え切らないわね？何か気になるの？」

すずか「ちよつとね」

アリサ「話せるようになったら話なさい。聞いてあげるから」

すずか「うん、ありがとう♪」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「で？アンタはさつきから何してるの？」

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ」

ボク？プログラム組んでるの。

すずか「何の？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ボク特製、バイクシミュレーター。

アリサ「何それ」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

簡単に言うとバイクのシミュレーションゲーム。

アリサ「何それ！超やりたい！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

物置小屋にセットしてあるよ。

アリサ「早速やりましょう」

ピカチュウ「ピカチュウ」

止めといた方がいいよ。

すずか「何で？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

ハードボイルダーの設定になってるから。

アリサ、すずか「尚更やりたい！」

ピカチュウ「ピカピカ」

ですよね。

二人は嬉々として物置小屋に向かった。が…

アリサ、すずか「足が届かない…」

身長が足りなかった。

外伝14

ピカチュウ「ピカピク…」

アリサ「どうしたの？悩んでるみたいだけど？」

ピカチュウ「ピカ…」

実は…

ピカチュウは悩んでいた。今日のオヤツは林檎か梨か。

アリサ「心配して損した」

ピカチュウ「ピカチュウ…ピカピカチュウ」

冗談だよ…ちゃんと言うよ。

アリサ「それで？何を悩んでいるの？」

ピカチュウ「ピカピ」コトン

これを見て。

アリサ「これはロストドライバー!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ」

念のために作ったの。

ピッ

アリサ「もしもしすずか？すぐ来なさい。ロストドライバーがあるわよ」

ピカチュウ「ピカピク!?」

ちよつと〜!?

アリサ「当然貰っていいのよね？」

ピカチュウ「ピカ」

ダメ。

アリサ「何でよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

まだ調整中。

アリサ「さっさと…」

ピンポーン

アリサ「すずかが来たわね」

ピカチュウ「ピカピ！」

速いよ！

アリス「まあお茶会しながら話しましょう」

ピカチュウ「ピ〜カ〜」

あ〜れ〜。

ピカチュウは逃げられないように抱っこされて連れていかれた。

すずか「……」にこにこ♪

ピカチュウ「……」

すずか「……」にこにこ♪

ピカチュウ「ピカ……」

はい……。

ピカチュウはロストドライバーを出した。

すずか「ありがとう♪」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

あげないよ！

すずか「え〜!?!何のために来たの!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

知らないよ！

アリサ「全く…すずか？これは私のよ？」

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

もつと違うよ！

アリサ「何ケチ臭い事を言ってるの。アンタと私の仲じゃない」

すずか「そうだよ！私達の仲じゃない！」

ピカチュウ「…ピカピ？」

…本音は？

アリサ、すずか「欲しい」

ピカチュウ「ピカ〜…」

はあく…

アリサ「幸せが逃げるわよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

調整したら渡す…

アリサ、すずか「やった〜！むっ！」

二人が喜ぶが…

アリサ「これは私によ？」

すずか「私も譲れないから」

バチ！バチバチバチバチ！

ピカチュウ「ピカチュウ…」

林檎ジュースが旨い…

アリサ「私によ！」

すずか「私の！」

睨みあうこと数分…

アリサ「喧嘩はやめましょう」

すずか「そうだね。残る手段は一つ」

睨みあいをやめてピカチュウをみた。

アリサ、すずか「ピカチュウ、もう一つ作って」

ピカチュウ「ピカ…」コテン

椅子から落ちるピカチュウだった。

アリサ「どうしたの？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

何で作ることになったの！

アリサ「その方が喧嘩しなくて済むでしょ？それとも何？アンタは私達を喧嘩させたいの？」

ピカチュウ「ピカチュウ…ピカピ」

わかったよ…作るよ。

アリサ「最初からそう言えばいいのよ」

ピカチュウ「ピカ…ピカチュウ」

はあ…また問題が増えた。

すずか「問題が増えた？」

ピカチュウ「…ピフユ♪」

アリサ「怪しい」

ピカチュウ「ピ、ピカチュウ」

そ、そんなことないよ。

すずか「……」じー

ピカチュウ「ピ、ピカ…」

すずか「……」じー！

ピカチュウ「ピカチュウ…ピカピカピカチュウ」

言います…だからその視線やめて。

すずか「そう♪で？何に悩んでるの？」

ピカチュウ「ピカ〜…」ゴソゴソ。ドン

ピカチュウは小さなアタツシユケースを出した。

アリサ「そのジャケットは四次元か」

パカッ

アリサ、すずか「あ〜！メモリ!？」

アリサ達が持つてる以外のメモリがあった。

ピカチュウ「ピカチュウ」

中身は空だけ。

アリサ「何で？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

能力を考えてないの。

すずか「よし！考えよう！」

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ」

ダメ、これはボクの仕事。

すずか「え〜!?一本位いいでしょ?」

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ」

ダメ、これは譲れない。

すずか「ケチ〜」

アリサ「諦めなさい。ピカチュウにも考えがあるみたいだし」

すずか「…そうだね」

メモリ作成は諦め、ロストドライバーは作ることになったピカチュウだった。

外伝15

ピカチュウ「ピカ〜…」ジジジジ

アリサ「ピカチュウ〜?」

ピカチュウ「ピカ?」

アリサ「進み具合はどう?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

後は起動テストだけだよ。

アリサ「なら、早速やりましょう」

ピカチュウ「ピカ…ピカチュウ」

もう…突っ込まないよ。

アリサ「じゃあ早速」カシヤン

《ジョーカー》

アリサ「変身!」

《ジョーカー》

音楽が流れアリサの身長が伸び変身した。

アリサ「…問題ないわね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

変身解いてみて。

アリサ「ええ」カシヤン。ヒュー

アリサが変身を解くと元に戻った。

ピカチュウ「ピカチュウ」

大丈夫だね。

アリサ「じゃあこれは貰ってくわね」

ピカチュウ「ピカ」

次の日…

すずか「ずるいよ！アリサちゃんだけ先に貰うなんて！」

ピカチュウ「チャ〜…」

ピカチュウはすずかに何故か怒られていた。

すずか「私の分は？」

ピカチュウ「ピカ」

すずか「ありがとう♪」

すずかは控えてるアリサを見ると…

すずか「アリサちゃん、ジョーカーメモリア貸して」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ちよつと待った。

すずか「どうしたの？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

これを試してみて。

すずか「こ、これは！スカルメモリ！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

すずか「じゃあ早速、変身！」

《スカル》

すずかは掛け声と共に変身した。

すずか「スカルだ〜♪」

鏡を見てうっとりした声を出していた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

変身を解いて。

すずか「はい♪」

すずかが変身を解くと元に戻った。

ピカチュウ「ピカチュウ」

スカルメモリはオマケだよ。

すずか「ありがとう♪」

アリサ「よかったわね。ん？」

アリサがテーブルを見るとロストドライバーがもう一つあった。

アリサ「ピカチュウ？これは？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

それはボクの。

《エターナル》

アリサ、すずか「あく!?エターナルメモリ！」

ピカチュウ「ピ、ピ、ピ！ピカチュウ！」

ふ、ふ、ふ！こんなこともあるのかと！

アリサ「ちようだい！」

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ」

ダメ、これはボクの。

すずか「他のメモリは？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

製作中。

すずか「楽しみだなく♪どんなメモリかな？」

期待を膨らませてるすずかだった。

ピカチュウ「ピカ♪ピカ♪ピカチュウ♪」

ある日、ピカチュウは散歩に出掛けていた。

フェイト「あれ？ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ？ピッピカチュウ！」

声をかけられたのでそちらを見るとフェイトが買い物袋をぶら下げている。

ピカチュウ「ピカチュウ？」

お買い物？

フェイト「そうだよ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ついてくる。

フェイト「元気にしてた？」

ピカチュウ「ピカ」

フェイト「最近見かけないから心配してたんだ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

引きこもってた。

フェイト「ダメだよ？ちゃんと外に出ないと」

ピカチュウ「ピカ」

フェイト「つと、着いちゃった。寄ってく？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

寄ってくる。

フェイト「じゃあおいで」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウはフエイトの家にあがりこんだ。

エイミー「お帰りフエイト…何その子!?!可愛い♪」

ピカチュウ「ピッピカチュウ!」

ピカチュウはエイミーに向けて手を上げた。

フエイト「食材しまつてくるね」

ピカチュウ「ピカピ〜」

ピカチュウが中に入っていくと…

クロノ「やはり簡単にはいかないか…」

ユーノ「流石に未整理の状態じゃ無理があるよ」

フエイト「どうしたの?」

クロノ「いや、無限書庫で調べものを頼んだんだが未整理の為に捜索が難航してるんだ」

ピカチュウ「ピカチュウ?」

調べもの?

ユーノ「…フエイト、通訳お願い」

フエイト「調べもの？って聞いてるよ」

クロノ「そうだ」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

フエイト「手伝ってあげようか？だって」

ユーノ「流石にピカチュウにも無理だよ」

ピカチュウ「ピカチュウ！ピカチュウ！」

フエイト「その言葉！後悔しないでね！だって」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

フエイト「え？うん、わかった。ユーノ、クロノ。手を繋いで、クロノは私とも」

クロノ「何をするつもりだ？」

取り合えず言われるがままにした。

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ」

さあ、検索を始めよう。

ピカチュウはフエイトと繋いで三人と一匹が繋がった。

ピカチュウ「ピカチュウ」

目を開けて。

クロノ「な、何だこれは!？」

ユーノ「本だらけだ」

フェイト「ピカチュウ!?ここは一体!？」

ピカチュウ「ピクカ、ピカチュウ」

うくん、ボクのレアスキルの中。

フェイト「レアスキル!？」

クロノ「それで?僕達にこれを見せてどうするんだ?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

フェイト「え?わかった。キーワード、闇の書」

サツサツサツ

ユーノ「本棚が減った!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

フェイト「えく!？」

クロノ「どうした?」

フエイト「今、見える範囲の本棚が闇の書に関係する本だって」

クロノ「な!?!こんなにあるのか!?!」

ピカチュウ「ピカチュウピカピ」

フエイト「キーワードを追加すれば更に絞り込み出来るって」

クロノ「なるほど、では協力してくれるのだな?」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウは電卓をどこからともなく出してきた。

フエイト「有料だって」

クロノ「…艦長と相談させてくれ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

じゃあ出よう。

ピカチュウ達は星の本棚から出てきた。

ピカチュウ「チャッ」

ピカチュウは伸びくつとすると…

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

取り合えずまたね。

ピカチュウは取り合えず帰宅した。

外伝16

ピカチュウ「ピく…：チュウく…」

ある日、ピカチュウが日向ぼっこしてると…

アリサ、すずか「ピカチュウ」

ピカチュウ「ピ？ピカく！」

起きて伸びくつとするとアリサ達がいた。

アリサ「メモリの方はどう？」

ピカチュウ「ピカピカ」

ボチボチ。

すずか「出来てるのってないの？」

ピカチュウ「ピカ」

ない。

すずか「残念」

ピカチュウ「ピカチュウ？ピカピカピカチュウ」

言つとくけど？出来てもあげないよ。

アリサ、すずか「え〜!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

当たり前でしょ。

アリサ「いいじゃない!一つ位」

ピカチュウ「ピカ」

ダメ。

アリサ「ケチ〜」

ピカチュウ「ピカチュウ?」

ドライバー没収するよ?

アリサ「嫌よ!これはもう私の物よ!」

ピカチュウ「チャ〜…」

ピカチュウは呆れていた。

アリサ「まあそれはそれとして、お茶会にしましょう」

すずか「うん」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ達は中庭に移った。

アリサ「それですずか？悩みは解決したの？」

すずか「それが…友達が入院しちゃったの」

アリサ「それは心配ね」

すずか「うん、しかもその子ね足が不自由で学校に行けなくて友達
がないの」

アリサ「なるほどね」

すずか「どうしたらいいと思う？」

アリサ「そうね、取り合えず一度お見舞いに行ったら？私もついて
いってあげる」

すずか「いいの？」

アリサ「なんか気になるしね」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ボクも行くよ！

すずか「病院だからピカチュウは入れないよ」

ピカチュウ「ピカピ。ピカチュウ」

いいもん。忍び込むもん。

アリサ 「なのは達も呼ぶ?」

すずか 「色々あつて呼びにくいんだ」

アリサ 「その辺も訳ありみたいね。わかったわ」

すずか 「ありがとう」

アリサ 「いつにする?」

すずか 「そうだね…」

アリサ達はお見舞いに行く日取りを決めた。

すずか 「じゃあピカチュウ?この辺で待っててね」

ピカチュウ 「ピカ」

そしてお見舞い当日、アリサとすずかは病院に入っていった。そしてピカチュウは…

ピカチュウ 「ピカ!」

雨どいを登り、事前に調べておいたはやての病室に向かった。

ひよこ

ピカチュウ「ピカ」トントン

病室に辿り着くと中ではやて達とアリサ達が話してるのが見えたので窓をノックした。

ヴィータ「あん？」

ピカチュウ「ピッピカチュウ」

窓が開くとすたこらサツサツと中に入った。

はやて「お、ピカチュウや♪」

アリサ「駄目でしょ？病室に入ってきちや」

はやて「まあまあ固いこと言わんと」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

はやて「元気そうやね、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ」

何故か普通に会話していた。

すずか「あ、もうこんな時間。ゴメンね、長居しすぎて」

はやて「ええよ♪また来てくれるとうれしいな」

アリサ「構わないわよ。またね」

はやて「シャマル、お客さんを送ったげて」

シャマル「はい」

シグナム「私達も玄関まで」

ヴィータ「ああ」

アリサ達は病院の外に向かった。と思わせて屋上に向かった。

アリサ「すずか？こんな所に来てどうするのよ？」

すずか「ゴメンねアリサちゃん。ちよつと待ってて」

ピカチュウ「ピカチュウ」

すずか「お久し振りですね」

シグナム「ああ」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

すずか「収集の方はどうですか？」

シグナム「難航している」

ヴィータ「おい！シグナム！」

シグナム「安心しろ。この方はご存じで主はやてにも黙ってくれて
いる」

シヤマル「そうだったんですか」

ピカチュウ「ピカチュウ」

すずか「え？一気に収集する方法がある？」

シグナム「まことか！」

ヴィータ「教えて！」

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウピカチュウ」

すずか「ボクの中にあるジュエルシードの魔力を抜けば完成までい
くと思うってそれはピカチュウが大丈夫なの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウは頷いて答えた。

ピカチュウ「ピカ。ピカチュウ？」

よつと。痛くしないでね？

すずか「痛くしないでね？だそうです」

シグナム「すまない、感謝する。闇の書」

ピカチュウ「ピカ〜…」

シグナムは早速ピカチュウから収集を始めた。ちよつと苦しそう

だがピカチュウは耐えていた。

ヴィータ「すげえ！どンドン埋まってく」

シヤマル「これなら完成までいけるわ！」

闇の書「…コンプリート。防衛プログラム起動します」

シヤマル「え!?!これは一体!?!」

ピカチュウ「ピカ！ピカ！ピカチュウ！」

すずか「え！わかった。シグナムさん、戦闘の用意を！早く！」

シグナム「っ！シヤマル、ヴィータ！」

シグナム達は戦闘の体勢に入った。

はやて「……」

すると気を失ったはやてが転移してきた。

ヴィータ「はやて！」

そして闇の書とはやてが融合すると…

闇の意思「また…目覚めてしまった」

闇の意思が現れた。

外伝17

シグナム「あれは一体？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

すずか「闇の書の防衛プログラム？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

すずか「闇の書のバグ!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

すずか「呪いの正体？」

ヴィータ「っ! つて事はこいつが原因ではやては歩けなかったんだな!」

シグナム「なら、切り捨てる!」

ピカチュウ「ピカチュウ」

すずか「わかった。シグナムさん! はやてちゃんに呼び掛けて下さい! そうすれば分離出来るそうです!」

シグナム「心得た!」

アリサ「何だかわからないけど私達も協力するわ! ピカチュウ!」

カシヤン

ピカチュウ「ピカ」

《サイクロン》コテン

《ジョーカー》

アリサ「変身！」

《サイクロン・ジョーカー》

音楽が流れて変身した。

すずか「私も、変、身！」

《アクセル》

エンジン音が響いて変身した。

アリサ「すいません、この子の体お願いします」

シャマル「え？わかりました」

シグナム「来るぞ！」

闇の意思「ブラッティダガー」

アリサ「ちっ！」

《ルナ・トリガー》

音楽が流れると右半身が黄色、左半身が青くなり、手には銃を持っていた。

アリサ「この！」

アリサはブラッティダガーを相殺していた。

アリサ「はやて！目を覚まさない！」

すずか「はやてちゃん！」

ヴィータ「はやて！目を覚まして！」

シグナム「主はやて！」

闇の意思「無駄だ。我が主は深い眠りにつかれてる」

ヴィータ「ふぎけんな！」ガキイン

ヴィータはハンマーで闇の意思を叩きに行くが防がれた。

アリサ「ピカチュウ！何か手はないの？」

ピカチュウ『ピカチュウ！』

キツイのを一発打ち込んで！

《ヒート・トリガー》

メモリを変えると右半身が赤くなった。

カシヤン

《トリガーマキシマムドライブ》

アリサ「トリガー・エクスプロージョン」

アリサは火の砲撃を放ち…

ズドン!!

当てた。

すずか「…はやてちゃん生きてるかな？」

ピカチュウ『ピカチュウ!』

あれを見て!

煙が晴れると闇の意思は苦しみ出した。

はやて『イタタタタ…何やの人が気持ちよく眠つとるのに』

ヴィータ「はやての声だ!」

アリサ「ピカチュウ!後はどうすればいいの!」

ピカチュウ『ピカピカチュウ!』

もう一発キツイのを当てれば分離出来る!

アリサ「一発！誰でもいい！キツいのをかまして！」

アリサの張り上げた声に…

ヴィータ「よっしゃ！ラケーテン・ハンマー！」

ズドン！！

ヴィータがここぞとばかりに打ち込んでいった。

アリサ「今ならもれなくもう一発！」

《トリガーマキシマムドライブ》

アリサ「トリガー・エクスプロージョン」

ズドン！！

すずか「…オーバーキルだね？」

アリサ「気のせいよ」

はやて「お、落ちる〜！」

アリサ「シグナムさん！」

シグナム「主はやて！ご無事ですか!？」

はやて「ちよつと頭いたい」

ピカチュウ『ピカチュウ！』

闇の意思は吹き飛び闇の書だけが残っていた。

ピカチュウ『ピカピカチュウ!』

防衛プログラム、撃破!

すずか「私…出番なかった」

はやて「一体何の騒ぎなん?」

シグナム「これは…」

シグナムは事の顛末を話した。

はやて「そっか。ごめんな、みんな。迷惑かけたみたいで」

アリサ「気にしなくていいわよ」カシヤン

すずか「そうだよ」カシヤン

アリサ達が変身を解くとシグナム達も私服に戻った。

はやて「色々聞きたいことがあるけど今はええわ」

アリサ「今はゆつくり休みなさい」

はやて「そうさせて貰うわ」

はやては病室に戻り、アリサ達も帰宅した。

はやて「で！この間の仮面ライダーは何なん？」

二日後、アリサとすずかがお見舞いに来るとこの間の事を訪ねられた。

アリサ「私達の武器よ」

はやて「ええなく」

アリサ「こんなものもあるわよ」

《スタック》

アリサがスタックフォンにメモリを挿すとクワガタになった。

はやて「おお！本物や！」

すずか「他にもあるけどね」

はやて「誰が作ったん？」

アリサ、すずか「ピカチュウ」

はやて「またまた」

アリサ、すずか「……」

はやて「…マジなん？」

アリサ、すずか「うん」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」ガラツ

するとピカチュウが病室の窓から入ってきた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

はやて「これは闇の書？」

ピカチュウ「ピカピ、ピカチュウ」

「違うよ、夜天の書だよ。」

はやて「夜天の書？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

「闇の書の本当の名前。」

はやて「そっか。ゴメンな、ちゃんと呼んであげなくて」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

バグは直したからもう安全だよ。

はやて「おおきに」

ピカチュウ「ピカチュウ」

管制人格にも名前をあげて。

はやて「そやね、名前は……祝福の風、リインフォース」カッ

はやてが名付けると夜天の書が光り管制人格が現れた。

シグナム「っ！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

大丈夫だよ。

リイン「お初目になります。我が主」

はやて「ゴメンな、苦しい思いさせて」

リイン「いえ、素敵な名前をありがとうございます」

はやて「今日からウチの家族や！」

リイン「そんな、恐れ多い……」

はやて「駄目や！シヤマル、シグナム、ヴィータ。色々教えてあげてな」

シヤマル「はい♪」

シグナム「わかりました」

ヴィータ「うん」

はやて「所でピカチュウ？ガジェット、ウチも欲しいな？」

ピカチュウ「ピカ」サツ

伝家の宝刀、電卓を出した。

はやて「幾らなん？」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

何が欲しい？

はやて「ビートルとバットかな」

ピカチュウ「ピカチュウ」ポチポチ

はやて「高い！もう少し安くならへん？」

ピカチュウ「チャ〜…」

はやて「……………」キラキラ

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

シグナムとヴィータにお願い。

はやて「シグナムとヴィータに？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

アリサ達に訓練をつけて。

はやて「訓練を？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

自分の身を守る位に。

シグナム「主はやての為になら」

ヴィータ「アタシもいいよ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウはビートルフォンとバットショットをはやてに渡した。

すずか「これでお揃いだね」

はやて「おおきに♪」

ガジェットを貰いはやては喜びアリサ達と楽しく過ごした。

外伝18

アリサ「いやよ」

すずか「私も」

なのは「そこを何とか…」

ある日、なのはとフェイトがやって来ると突然ガジェットとドライブを解析させてくれと頼んできた。

フェイト「どうしても?」

アリサ「渡す理由がないわ」

なのは「ちよつと調べたいだけなの」

すずか「返してくれる保障がないもん」

なのは「それは…」

ロストログアに認定されかけてるだけに否定出来なかった。

ピカチュウ「ピカチュウ?」

貸してあげたら?

アリサ「ピカチュウ?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

二日以内に返すって条件付きで。

アリサ「ピカチュウがそう言うなら、二日以内返しなさいよ?」

なのは「う、うん」

アリサとすずかはドライバーを預けた。が…

アリサ「四日目ね。返す気なさそうね」

すずか「どうする?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

取り返しに行く。

アリサ「どうやって?」

ピカチュウ「ピカ」カシヤン

《エターナル》

ピカチュウ「ピカピ!」

変身!

《エターナル》

ピカチュウはエターナルに変身した。

すずか「エターナルだ〜♪」

アリサ「感激するのは後にしなさい。で？どうやって取り返しに行くの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

《ワープ》

Wのメモリ、ワープをマキシマムスロットに入れると…

《ワープマキシマムドライブ》シユン

アリサ達は転移して消えた。

ーアースラー

ピカチュウ「ピカチュウ」

着いたよ。

アリサ「そうみたいね。どうやって探す？」

ピカチュウ「ピカピ、ピカチュウ」

反応がある、ついてきて。

ピカチュウを先頭にドライバーを探しに向かった。

局員「な！しんにゅ…」トン

ピカチュウは騒がれる前に気絶させた。

ピカチュウ「ピカ」

こっち。

暫く歩いていると…

ビー！ビー！ビー！

警報が鳴った。

アリサ「気付かれたみたいね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

急ごう。

アリサ達は走って向かった。途中何人かの武装局員を倒しながら。

ピカチュウ「ピカチュウ」

ここだよ。

ドカツ！

ドアを蹴破ると机の上にWドライバーとアクセルドライバー、ロス
トドライバーがあった。

アリサ「無事のようなね」

すずか「そうだね」

クロノ「動くな！不法侵入及び局員襲撃の容疑で逮捕する！」

アリサ「何言ってるのよ！アンタ達がドライバーを返さないのが悪いんでしょ」

クロノ「それとこれとは話が別だ！」

すずか「先にルールを破ったのはそっちですよ？」

クロノ「うっ…」

アリサ「やるなら相手になるわよ？」

アリサとすずかはロストドライバーを持って何時でも変身出来るようにした。

リンデイ「クロノ執務官」

クロノ「艦長」

リンデイ「お願いします。もう少し調べさせてもらえませんか？」

アリサ「約束破っておいてよく言えますね」

リンデイ「それは謝罪します」

すずか「ですがお断りします。信用出来ません」

リンデイ「どうしてもですか？」

アリサ「ええ」

リンデイ「仕方ありません」

リンデイが呟くとクロノ達武装局員が前に出た。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

《エターナルマキシマムドライブ》

ピカチュウはエターナルエッジにエターナルメモリを差し込むとマキシマムドライブを発動させた。

バチバチバチバチ！

クロノ「な、何だ!？」

するとクロノ達のデバイスが停止してバリアジャケットが解除された。

リンデイ「…何をしたんですか?」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

アリサ「デバイスを無効化しました」

クロノ「やはりそれはロストログアだ！」

すずか「自分達が扱えないからロストログアですか？」

クロノ「グツ…」

ピカチュウ「ピカチュウ」

行こう。

《ワープマキシマムドライブ》

ピカチュウ達はワープして消えた。

アリサ「何しに来たの？」

なのは「アリサちゃん、怒ってる?」

アリサ「アンタが【時空管理局の人】として来てるならね」

なのは「うう…」

アリサ「なのは、管理局の魔導師として続けるなら私達は友達では
いられないわよ?」

なのは「そんな!」

フエイト「どうして!」

「さすが「ピカチユウ」が発見してくれたけど何回か侵入及び盗撮の現行犯を捕まえてるの」

フエイト「そんな…」

アリサ「だから選びなさい。友か魔導師か」

なのは「そんな…」

アリサ「一週間、時間をあげる。その間に決めなさい」

なのは、フエイト「……」

一週間後、二人は悩んだ末友を選んだ。そしてアリサ達は管理局とは交流を持たず拒絶し続けた。数年後、ユーノが単身で地球を訪れたとき聞かされた……時空管理局が崩壊したことを。

アナザー 第1話

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ…」

あれ？もしかして…

神「久し振りですねピカチュウ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

やっぱり神様。

神「もうお気付きかもしれませんが…」

ピカチュウ「ピカチュウ」

任せてよ。

神「…断ることも出来るのですよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

それは出来ない。

神「なぜ？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

他の世界のアリサ達をほっとけない。

神「貴方が心優しきもので私は嬉しく思います。ですので…」

ズン

ピカチュウ「ピカ!?ピカチュウピカチュウ!」

ピカチュウベース!?

神「後はこれも」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

Wドライブー各種!?

神「持っていていきなさい。必要になるはずですから」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ありがとう、神様。

神「さあ、お願いしますね」

ピカチュウ「ピカピ〜!」

行つてきまーす!

ピカチュウは新しい世界に旅たった。

ピカチュウ「チャ〜…ピカ！」

目を開けるとそこは何処かの森だった。神様の厚意が四次元ジャケットもあった。

ピカチュウ「ピカ」

ジャケットを着るとピカチュウは森を進んだ。

アリサ「森林浴もたまにはいいわね」

すずか「良いところだね♪」

なのは「遠足日和なの」

ガサガサ

アリサ「なに？」

ピカチュウ「ピカ？ピカ〜♪」

茂みの中からピカチュウが現れるとアリサ達に近寄った。

アリサ「何この子!?可愛い♪」

すずか「おいで〜♪」

ピカチュウ「ピカ〜♪」スリスリ

アリサ「ほら、林檎食べる?」

ピカチュウ「ピフア〜♪」シャリシャリ

暫くの間、アリサ達はピカチュウと戯れた。

先生「みなさーん!そろそろ帰りますよ〜!」

アリサ「もうそんな時間?行きましょう」

アリサ達が帰り支度して集合場所に向かうと…

ピカチュウ「…」

ピカチュウも後を追いかけた。

アリサ「ほら、アンタは森に帰りなさい」

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサに森に帰るように言われるがピカチュウは後を追いかけてきた。

アリサ「…行くわよ」

アリサは心を鬼にして突き放しバスに乗り込んだ。

ブーン

ピカチュウ「ピカピ〜!」

それでもピカチュウはバスを追いかけた。

「さすが「アリサちゃん…追いかけてくるよ?」

アリサ「…」

ピカチュウ「チャ〜!ピカ!」コテン

なのは「転んだの!」

アリサ「ツ!先生!バスを止めてください!」キキイ!

バスが止まるとアリサはピカチュウに駆け寄った。

アリサ「大丈夫?」

ピカチュウ「チャ〜…ピカ!」

ピカチュウはアリサに泣き付いた。

アリサ「一緒に来たいの?」

ピカチュウ「ピカ!」

アリサ「…わかったわ。一緒に来なさい」

先生「バニングスさん、森に返しなさい」

アリサ「連れて帰ります」

先生「バスに乗せれませんよ」

アリサ「なら置いていつて下さい！」

すずか「私も残ります」

なのは「なのはも」

先生「わがままを言っではいけません！」

プツプツ

バスの運転士がクラクションを鳴らしてきた。

先生「わかりました。なら勝手にしなさい！」

ブーン

バスはアリサ達を置いて発進してしまった。

アリサ「もしもし鮫島？悪いんだけど遠足先まで迎えにきてくれる？そう、今から」

アリサは鮫島に頼んで迎えに来てもらった。

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「アンタは気にしなくていいのよ。私が決めた事なんだから」

一時間後、鮫島が車で迎えに来てなのは達を乗せて帰った。後日、バニングス家から生徒を置いて帰るのは何事かと抗議が校長に行き、

担任は解雇された。

第2話

アリサ「さて、アンタの名前を決めないとね」

すずか、なのは「わく♪」

アリサ「何にしようかしら?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「安直だけどピカチュウにしましょう」

ピカチュウ「ピカく♪」スリスリ

アリサ「こら♪くすぐったいわよ」

膝の上でアリサの体にスリ寄っていた。

なのは「でも、この子なんでジャケット着てるのかな?」

すずか「似合ってるしいいんじゃない?」

アリサ「何か入ってるのかしら?」

ピカチュウ「ピカ」コトン

ピカチュウはテーブルにロストドライバーを置いた。

アリサ達「ロストドライバー!」

ピカチュウ「ピカ」

すずか「うわ〜♪本物っぽい♪」

アリサ「良くできたオモチャね」

ピカチュウ「ピ？ピカチュウ」カシヤン

ピカチュウはアリサの膝の上から降りるとロストドライバーを着けて…

《エターナル》

ピカチュウ「ピカ！」

変身！

《エターナル》

エターナルに変身した。

アリサ達「へ、変身した!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」カシヤン

変身を解くとまた膝の上に戻った。

アリサ「本物だったのね…」

アリサ達は暫く見つめると…

バツ！

三人同時に奪いにいった。

アリサ「勝った！」

どうやらアリサが勝ち取ったようだ。

アリサ「ピカチュウ、これ頂戴」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウは頷いて答えた。

アリサ「やった！」

すずか、なのは「くやしー」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウが何かを差し出した。

アリサ「これは！ジョーカーメモリ！くれるの？」

ピカチュウ「ピカ！」

すずか「アリサちゃん、試してみてよ」

アリサ「よし」カシヤン

《ジョーカー》

アリサ「変身！」

《ジョーカー》

音楽が流れるとアリサの身長が伸びて変身した。

アリサ「いい…凄くいい」

大切なので二回言った。

アリサ「いいわね〜♪」カシヤン

変身を解くと席に戻った。

すずか「いいな〜」

ピカチュウ「……」

すずか「?じー」

ピカチュウ「ピ、ピフユ〜♪」

すずか「じー!」

声に出して言った。

ピカチュウ「ピカチュウ」コトン

もう一つロストドライバーを出した。

すずか「貰った〜！」

キャラ崩壊するほどの速さで取りに行った。

なのは「にゃ〜！速いの!？」

すずか「メモリは？」

ピカチュウ「ピカチュウ…」ガサゴソ

ピカチュウはスカルメモリを出した。

すずか「では早速…」カシヤン

《スカル》

すずか「変身！」

音楽が流れるとすずかの身長が伸びて変身した。

すずか「お〜♪」

どうやら満足したようだ。

すずか「はあく♪」カシヤン

すずかは変身を解くと席に戻った。

なのは「いいなく」チラツ

ピカチュウ「チュー」

なのは「なのはだけ無視なの!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

林檎が食べたい。

アリサ「林檎が食べたいの?待ってなさい」

アリサは鮫島に連絡を取ると林檎を持ってきて貰った。

ピカチュウ「ピフア〜♪」

美味しい〜♪

すずか「美味しいんだ♪」

なのは「二人とも普通にピカチュウの言葉を理解してるの!」

アリサ、すずか「え?出来ないの?」

なのは「なのはが変みたいに聞こえるの!」

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「眠いの?寝てなさい」

ピカチュウはそのままアリサの膝の上で眠った。

ピカチュウ「ピフア〜」

アリサが学校に言ってる間、ピカチュウは日向ぼっこして過ごしていた。

ピカチュウ「チャ〜…」

スヤスヤと眠っていると…

アリサ「ただいま〜」

ピカチュウ「ピカ！チュウ〜！」

アリサの声が聞こえてきたので、走って向かった。

ピカチュウ「ピ〜カ〜チュ〜ウ〜」

ボフ

アリサ「いい子にしてた？」

ピカチュウ「チャ〜♪」

アリサ「後ですずかも来るわよ」

ピカチュウ「ピカピ？」

アリサ「それまで待ちましょう」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

すずかが来るまで遊んでもらい、すずかが来るとお茶会になった。

アリサ「さて、ピカチュウに聞きたい事があるのよね」

ピカチュウ「ピカ？」

すずか「あのね、頭の中に戦い方がいつの間にか入ってるの」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

ロストドライバーから戦い方の知識を転写したの。

アリサ「なるほどね、護身用って所かしら？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

そんなところ。

アリサ「まあ、あつて損じゃないわね」

すずか「護身術は役に立つしね」

ピカチュウ「ピカピ」

アリサ「ん？なにかしら？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

携帯番号教えて。

アリサ「携帯の？いいけど」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「番号なんてどうするの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

これに登録しておくの。

アリサ「スタックフォン!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

いつでも呼んでね。

アリサ「わかった」

後日、かけてみるとちゃんと繋がった。

第3話

アリサ「ねえピカチュウ？電話って何処と契約してるの？」

ピカチュウ「ピカチュウ、ピカチュウ」

してないよ、独自の電話回線を使ってるの。

アリサ「ブツ！」

アリサはお茶を噴いた。

ピカチュウ「ピカチュウ？」

どうしたの？

アリサ「アンタは何でもありね」

ピカチュウ「ピカ／＼／＼」

いや／＼／＼

アリサ「それで…」

すずか「アリサちゃん♪」

鮫島「お嬢様、お友達をお連れしました」

アリサ「ありがとう。いらっしやい、すずか」

鮫島が下がると二人と一匹はお茶会を始めた。

ピカチュウ「チュー」

ピカチュウは林檎ジュースを飲むとご機嫌になった。

アリサ「話を戻すけどピカチュウ？」

ピカチュウ「チュー…ピカ？」

アリサ「いつスタッグフォンくれるの？」

コテン

ピカチュウは椅子から落っこちた。

すずか「あ、私も欲しい」

コテン

ピカチュウが椅子に戻ると間髪いれずにすずかも頼んできた。

ピカチュウ「ピカチュウ？」

高いよ？

アリサ「タダじゃないの!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

作るのにお金がかかっています。

アリサ「ロストドライバーはタダじゃないの」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

それは護身用だから。

すずか「因みにスタッグフォンは幾ら？」

ピカチュウ「ピカ〜…」ポチポチポチ

ピカチュウは電卓でスタッグフォンの値段を出した。

アリサ「普通に高いわね」

すずか「じゃあ…」

少しの間をおいて…

アリサ、すずか「現金で」

ピカチュウ「ピカ〜…」コテン

再び落ちた。

ピカチュウ「ピカチュウ…」

これだから金持ちは…

アリサ「で？返答は？」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウはスタックフォンとビートルフォンを出した。

すずか「ビートルフォンだ！」

アリサ「すずかはどっちがいいの？」

すずか「私はビートルフォンかな」

アリサ「なら私はスタックフォンにするわ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

SIMフリーだから契約出来るよ。

アリサ「わかったわ」

すずか「そう言えばビートルメモリは？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウはスタックメモリとビートルメモリを出した。

アリサ「ありがとう」

後日、アリサ達は機種変更をした。

ピカチュウ「ピカチュウ」

ある日、ピカチュウはピカチュウベースを捜索していた。

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウはスパイダーショックに映し出される発信器の跡を辿っていた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

すると海に出た。

ピカチュウ「ピカ」

反応も海の中を示していた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

場所がわかったのでピカチュウは帰宅した。

ピカチュウ「ピカ♪」

ピカチュウが帰宅していると…

なのは「ピカチュウ？」

なのはに出会った。

ピカチュウ「ピ？ピッピカチュウ！」

なのは「お散歩？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウは頷いて答えた。

なのは「遅くならないように帰るんだよ？」

ピカチュウ「ピカ！ピカピク！」

ピカチュウは手を振って帰った。

ピカチュウ「ピツカ〜♪」

アリサ「ピカチュウ？散歩に行ってたの？」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「ちゃんと汚れを落とすのよ」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウはシャワーを浴びると眠って過ごした。

第4話

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「ふっ！」

すずか「はっ！」

ある日、アリサとすずかは体に護身術を染み込ませる為に組み手をやっていた。

ピカチュウ「ピカチュウ」パシャパシャパシャ

その光景をバットショットで撮っていた。

アリサ「ふう…こんなものかしら？」

すずか「そうだね。余りやり過ぎて動けなくならないようにしないと」

アリサ「お茶にしましょう」

すずか「うん」

アリサ達は汗を拭くとお茶会に変えた。

ピカチュウ「ピカピ？ピカチュウ？」

今日は何してたの？帰りが遅かったけど？

アリサ「え？ああ、さつきね。なのはがフレットを拾ったのよ」

ピカチュウ「ピカ〜」

へえ〜。

アリサ「それで動物病院に預けてたんで遅くなったのよ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウはまもなくジュエルシード事件が始まるので対策を練り出した。

『助けてくださいー！』

ピカチュウ「ピカ」

そしてその日の夜、ピカチュウはユーノの念話を受け取った。

ピカチュウ「……」

そしてこっさりアリサの邸を抜け出した。

ピカチュウ「ピカチュウ……」

ピカチュウは隠れて事件を見ていた。手を貸すのは簡単だがなのはを成長させるためにあえて手を出さなかった。

ピカチュウ「ピカチュウ」

そして騒ぎが静まるとなのは達は騒ぎになる前に逃げ出した。

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウもなのは達が逃げ出したのを見届けると邸に帰った。

次の日：

ピカチュウ「ピカ」パシヤパシヤパシヤ

動物病院に人だかりが出来ており惨状をバットショットで撮っていた。

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウは帰ると撮った画像をプリントアウトした。そしてなのはを加えた本日のお茶会。

ピカチュウ「ピカチュウ」

さあ、楽になっちゃいな。

なのは「な、なに？」

ピカチュウが何を言ってるのかわからないのでなのはは混乱していた。

アリサ「楽になっちゃいな？」

なのは「何の事なの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「ネタはあがってる？」

なのは「何も悪いことしてないの！」

ピカチュウ「ピカ」パサツ

ピカチュウはプリントアウトした写真を見せた。

なのは「こ、これは!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「それにユーノ？」

なのは「にや!？」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

アリサ「まだとぼける？」

なのは「な、何の事なの？」

ピカチュウ「ピカピ」

アリサ「魔法？」

なのは「……」

遂に黙りこんだ。

アリサ「なのは?」

すずか「なのはちゃん?」

なのは「うう…」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「楽になっちゃいなさい」

なのは「実は…」

なのはは魔法に出会ったことを話した。

アリサ「何隠してるのよ。水くさい」

すずか「そうだよ」

ピカチュウ「ピカッ」

ふいっ。

ピカチュウはハツカパイポをくわえて満足した。

ピカチュウ「ピカチュウ」

次の日、ピカチュウは海にやって来ていた。

ピカチュウ「ピカ」

《エターナル》

ピカチュウ「ピカ！」

変身！

《エターナル》

ピカチュウは変身すると海に飛び込んだ。一時間後…

ザパア

カシヤン

海から上がってくると変身を解いた。

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウが袋の中を確認するとジュエルシールドが七つ入っていた。

ピカチュウ「ピカ」

ジャケツトにしまうとピカチュウはアリサが帰ってくる前に邸に帰った。

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「ただいま」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

ピカチュウが帰ってきてから少ししてアリサが帰ってきた。

アリサ「ただいま、ピカチュウ。ん？アンタも散歩に行ってたの？」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「あまり遠くに行っちゃ駄目よ」

ピカチュウ「ピカ！」

アリサ「私はジュエルシード探しの手伝いに行くけど、どうする？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ボクも行くよ。

アリサとピカチュウはなのはとすずかが待つ集合場所に向かった。

ピカチュウ「ピカ♪」

アリサ「無いわね」

散歩気分のピカチュウに対しアリサはジュエルシードが見つからないのでつまらなそうだった。

アリサ「ピカチュウ？やけに楽しそうね」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

アリサとお出掛けだもん！

アリサ「ふふ、ありがとう♪」

ピカチュウ「ピく♪ピカ！」

すると突如ピカチュウは走り出した。

アリサ「ピカチュウ!?待ちなさい！」

アリサも慌てて追いかけた。

魔物「グルル」

アリサ「何あれ…」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ジュエルシードが何かに憑依した。

ピカチュウがロストドライバーを出す…

アリサ「私がやるわ」

ピカチュウ「ピカピ？」

大丈夫？

アリサ「何時かは通る道よ」カシャン

《ジョーカー》

アリサ「変身！」

《ジョーカー》

音楽が流れるとアリサの身長が伸びて変身した。

アリサ「さあ、アンタの罪を数えなさい」

魔物「グルル」

ピカチュウ「ピカ〜…」

アリサが魔物に向かってる間、ピカチュウは自分の罪を数えていた。

アリサ「ふっ！ほっ！」

魔物「グエツ！」

アリサ「せい！やあ！」

魔物「グルル…」

アリサ「これでお仕舞いよ」

《ジョーカーマキシマムドライブ》

アリサ「ライダーキック！」

魔物「ぎゃあ〜…」

アリサはマキシマムドライブで魔物を倒すとメモリの力でジュエルシードを封印した。

アリサ「ふう〜♪」カシヤン

アリサは変身を解くとピカチュウの所に戻った。

ピカチュウ「ピカ〜…」

アリサ「何数えてるのよ」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

自分の罪を…

アリサ「アンタが数えてどうするのよ」

ピカチュウ「ピカ」

そうだね。

アリサ「さあ、なのはに渡しに行くわよ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサとピカチュウはなのはの下に向かった。

すずか「あ、アリサちゃん？」

アリサ「すずかじゃない。どうしたの、こんな所で？」

すずか「ジュエルシードを見付けたからなのはちゃんに渡しに行く所。アリサちゃんは？」

アリサ「私もよ」

すずか「じゃあ一緒に行こう♪」

アリサ「ええ」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

出発♪

ピカチュウを先頭に向かった。

なのは「うう…なのはダメダメなの…」

二人がジュエルシードを見付けてきたのに自分は一個も見つけられず落ち込んだのはだった。

第5話

アリサ「私よ!」

すずか「私だよ!」

ピカチュウ「チャ〜…」

ある日、アリサとすずかが揉めていた。話は三十分前に戻る。

アリサ「いい天気ね」

すずか「そうだね♪」

ピカチュウ「ピフア〜♪」

アリサ「ねえピカチュウ?前から気になってたんだけど…」

ピカチュウ「ピカ?」

アリサ「Wドライバーはないの?」

ピカチュウ「ピ、ピカチュウ」

な、ないよ。

すずか「本当に?」

ピカチュウ「ピカ!」

アリサ、すずか「ギルテイ」

ピカチュウ「ピカ!?」

なぜ!?

アリサ「この間アンタが整備してるのを見たわ」

ピカチュウ「ピカピ!ピカチュウ…」

そんなはずないよ!アリサの邸ではメンテ:

アリサ「やっぱり持つてるじゃない」

ピカチュウ「ピ、ピカチュウ〜!」

し、しまった〜!

アリサ「さあ、さつさと渡しなさい」

すずか「ちよつと待って!私も変身したいよ!」

アリサ「残念ね。私はジョーカーメモリを持つてるのよ?」

すずか「じゃあスカルと交換しようよ!」

アリサ「駄目よ」

すずか「ズルいよ!」

そして冒頭に戻る。

アリサ「変身するのは私よ！」

すずか「いいもん。ピカチュウ、サイクロンメモリ頂戴」

ピカチュウ「ピカピ！」

ピカチュウはバツテンを作った。

すずか「何で!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

星の本棚持っていないでしょ。

すずか「ピカチュウは持ってるの？」

ピカチュウ「ピカチュウ…ピカ！」

もちろん…あっ！

すずか「ズルいよピカチュウまで！」

矛先が変わった。

ピカチュウ「ピカチュウ」

あきらめて。

すずか「やだやだやだく！」

駄々をコネだした。そこですずかの閃きが働いた。

すずか「ピカエモン！ アクセルに変身したいよ〜！」

ピカチュウ「ピカピカ、ピツカ〜！ ピカチュウ…」

アクセルドライバー…

すずか「貰った〜！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜!?!」

ピカチュウはアクセルドライバーを奪われた。

ピカチュウ「ピカ〜!?!」

返してよ〜!?!

すずか「買い取ります」

ピカチュウ「ピカ〜!?!」

何言ってるの〜!?!

すずか「はい」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

その手は何？

すずか「アクセルメモリ頂戴」

ピカチュウ「ピカピカ〜！」

勝手だよ〜！

すずか「こんど桃あげるから」

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

仕方ないな〜。

餌に釣られるピカチュウだった。

ピカチュウ「ピカチュウ〜!?!」

すずか「さあ、ピカチュウ？キリキリ吐いて」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

やだよ〜！

すずか「吐けば楽になれるよ？モグモグ」

ピカチュウ「ピカピ〜！」

鬼〜！

現在ピカチュウは椅子に縄でくくりつけられていた。

すずか「美味しいよ？この桃は」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

すずか「言わないと全部食べちゃうよ？」

ピカチュウ「ピ〜…ピカチュウ！」

う〜…言うよ！

すずか「最初から素直に言えばいいのに。で？リボルギヤリーは何処に隠してるの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

秘密基地に隠してあるの。

アリサ、すずか「秘密基地！」

初めてアリサも言葉を発した。

アリサ「何で黙ってるのよ！ヒロインに秘密基地は付き物でしょ〜！」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

こうなるから言わなかったの。

すずか「で？何処にあるの？秘密基地は？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

人目につかないところ。

すずか「見たいなく♪」

ピカチュウ「ピカチュウ」

まだ時期じゃない。

アリサ「それは時期が来たら見せてくれるって事？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「なら待ちましょう」

すずか「アリサちゃん？」

アリサ「ピカチュウの都合も考えましょう」

すずか「わかったよ」

すずかは縄をほどいた。

ピカチュウ「ピカチュウ…」

ボクの桃が…

すずか「ほら、新しいのあげるから」

ピカチュウはすずかから桃を貰い食べた。

第6話

ピカチュウ「ピカ〜…チュウ〜…」

アリサ「集まり具合はどうなの？」

ユーノ「二人にも手伝ってもらえてるので順調です」

ある日、すずかの屋敷でお茶会がてら報告会をしていた。

なのは「四つも集まったの！」

アリサ「全部だとまだまだだけどね」

ピカチュウ「ピフア〜♪」

ピカチュウは暢気にアクビをしていた。

キイン

ユーノ「ジュエルシード!？」

なのは「えっ！」

ユーノはいち早くジュエルシードの発動に気付いた。

アリサ「行くわよ」

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

いってらっしやい。

すずか「うん」

アリサ達はジュエルシードが発動した場所に向かった。

ピカチュウ「ピカ〜…」

ピカチュウはお昼寝の続きに入った。

アリサ「悔しい〜！」

ピカチュウ「ピカ？」

暫くしてアリサ達が戻って来た。

ピカチュウ「ピカチュウ？」

どうしたの？

すずか「あのね、知らない女の子にジュエルシードを奪われちゃったの」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「何処の誰よ全く」

アリサのご機嫌がナナメなのでピカチュウは近付かなかった。

すずか「ほら、アリサちゃん？ピカチュウが怯えてるよ」

アリサ「あ、ごめんね」

ピカチュウ「チャ〜♪」

頭を撫でられた。

アリサ「取り合えず次回から気をつけましょう。また邪魔されるかもしれないし」

ピカチュウ「……」

ピカチュウはこの時フェイトとどう接触するか考えていた。

ピカチュウ「ピカ♪ピカ♪ピカチュウ〜♪」

後日、ピカチュウはアリサが学校に行っているので一匹で散歩していた。

ピカチュウ「ピカ♪ピカ♪ピカ？」キラリ

ピカチュウは道端で何か光ったので近付いて見てみた。

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

正体を確認するとジュエルシードだったので獲得の雄叫び？をあげた。

ピカチュウ「ピフア〜♪」

ピカチュウはくわえると散歩道に戻っていった。すると…

フエイト「え?」

アルフ「おっと」

アルフとぶつかりそうになった。

フエイト「アルフ、大丈夫?」

アルフ「アタシは大丈夫だよ。ちっこいの? 気をつけな?」

ピカチュウ「ピフアチュウ!」

フエイト、アルフ「…あく!」

ピカチュウがわかったと手を上げるとフエイトとアルフはピカチュウがくわえてる物、ジュエルシードに気付いた。

フエイト「ねえ? そのくわえてるの渡して?」

ピカチュウ「ピフア」フルフル

アルフ「いい子だから寄越しな?」

ピカチュウ「ピフア!」

フエイト「お願い」

ピカチュウ「ピフア〜…」

ピカチュウは暫く悩むとあるものに気付いた。

ピカチュウ「ピフア！」ガサゴソ

アルフ「あ！こちら！」

ピカチュウがフェイトの買い物袋を漁ると林檎を取り出した。

ピカチュウ「ピフア〜♪」

フェイト「これが欲しいの？」

ピカチュウ「ピフア！」

フェイト「じゃあそのくわえてるのと交換しよ？」

ピカチュウ「ピカ！」

ピカチュウはジュエルシードを差し出した。

フェイト「はい」

フェイトはジュエルシードと林檎を交換した。

アルフ「よかったね、フェイト」

フェイト「うん、またね」

フエイトが立ち去るとピカチュウは…

トコトコ

後についていった。

フエイト「どうしようアルフ。まだついてくるよ?」

アルフ「餌付けしたのがまずかったかもね」

結局マンションの部屋の前までついてきた。

フエイト「ほら、そろそろ帰りな?」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

ピカチュウは手を振って帰っていった。

ピカチュウ「ピカ♪ピカ♪ピカチュウ♪」

次の日、ピカチュウはまた別の道で散歩に出掛けていた。

ピカチュウ「ピカ?ピカ♪」

そしてまたもやジュエルシードを見付けた。

ピカチュウ「ピファ♪」

ピカチュウはジュエルシードをくわえるとフエイトの家に向かった。

ピカチュウ「ピファ！」ピンポーン

インターホンに飛びついて押すと…

フエイト「はい？」ガチャ

ピカチュウ「ピファ♪」スタコラサツサ

フエイト「あ、こちら！」

ピカチュウはスタコラサツサと室内に入った。

フエイト「もう！駄目だよ？勝手に入っちゃ」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウはジュエルシードを差し出した。

フエイト「ジュエルシード!? 持ってきてくれたの？」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウは頷いて答えた。

アルフ「ちっこいの、やるじゃないか」

ピカチュウ「ピカ♪／／／」

いや／／／

フェイト「これで三つだね」

アルフ「そうだね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

また見つけたら持ってくる？

フェイト「あ、うん♪」

ピカチュウの言語を理解してるフェイトだった。

フェイト「そうだ、私はフェイト。あなたは？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

フェイト「そう、ピカチュウって言うんだ」

ピカチュウ「ピカピ」

またくるね。

フェイト「気をつけて帰るんだよ」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウは嬉々として帰っていった。

第7話

ユーノ「この辺のはずなんですけど…」

アリサ「手分けして探しましょう」

すずか、なのは「うん」

ピカチュウ「ピカ」

数日後、アリサ達はユーノがジュエルシードの反応を捕らえたのでコンテナ置場にやって来ていた。

ピカチュウ「ピカ〜…」キョロキョロ

ピカチュウが懸命に探していると…

キラリ

ピカチュウ「ピカ♪ピカチュウ〜！」

見付けたジュエルシードを掲げて鳴いた。

なのは、フェイト「ピカチュウ？あ！」

ピカチュウの鳴き声になのは達とフェイト達がやって来た。

なのは、フェイト「ピカチュウ渡して！む！」

ピカチュウ「ピカ〜…」オロオロ

ピカチュウは途中で迷っていた。

フェイト「ピカチュウ！林檎あげるよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

ピカチュウはフェイトに向かって走り出した。

なのは「にや〜！卑怯なの！」

アリサ「任せなさい！ピカチュウ！帰ったら桃があるわよ！」

ピカチュウ「ピファ！」キキイ！

あと一歩というところでピカチュウは引き返した。

フェイト「ピカチュウ！」

ピカチュウ「ピファ〜♪」コテン

だが途中で転び、運が悪いことに…

コロコロ

ポケットにしまっておいた袋が飛び出し中からジュエルシードが散らばった。

ピカチュウ「ピカ!?ピカチュウ！」

ピカチュウは慌てて八つのジュエルシードをしまおうが…

なのは達、フェイト達「何でそんなに持つてるの!」

ピカチュウ「チャ〜…」

両陣にバレてしまった。

フェイト「ツ!」

なのは「む!」

なのはとフェイトは同時にデバイスを起動するとピカチュウ目掛けて進んだ。

ドン!

クロノ「そこまでだ!」

フェイトとなのはが交差する寸前、クロノが現れた。

クロノ「こちらは時空管理局、クロノ・ハラオウンだ!武装を解除して大人しくして…」

クロノはここで気付いた。二人の視線が自分の足下にいつてる事に。

クロノ「何を…」

ピカチュウ「(怒)ピカ!チュウ〜!」

クロノ「ぐあく！」

ピカチュウの尻尾を踏んだクロノはピカチュウから電撃をまともにくらった。

アルフ「今だ！フェイト！撤退するよ！」ダダダダダダダ！

アルフは魔力弾の弾幕を張るとフェイトが撤退する時間を稼いだ。

なのは「きゃあ!？」

フェイト「ピカチュウ！」

ピカチュウ「ピくかく」

あくれく。

フェイトは離脱する際にピカチュウを抱っこしてアルフと共に多重転移で逃げた。

アリサ「ピカチュウ！」

アリサが声をかけるが一足遅かった。

フェイト「ふう…」

アルフ「フエイトく…管理局が動いたんだ。もうやめようよ」

フエイト「母さんの為にもそれは出来ない」

フエイト達は自宅に戻ると今後について話していた。

アルフ「あんなババアの…」

フエイト「アルフ？」

アルフ「…わかったよ」

フエイト「さて、ピカチュウ？」

そして今度はピカチュウに矛先が変わった。

フエイト「ジュエルシード、全部出してくれる？」

ピカチュウ「ピ、ピカチュウ？」

な、なんのこと？

フエイト「誤魔化しても駄目だよ？ちゃんと見たんだから。ジュエルシード、八つ持ってるよね」

ピカチュウ「チャク…」

あの一瞬で数まで把握されていた。

フエイト「さあ、出して？」

ピカチュウ「ピカ！」フルフル

フエイト「お願い。私にはジュエルシードが必要なの」

ピカチュウ「チャ〜…」

フエイト「ピカチュウ…」

ピカチュウ「ピカ〜…ピカ！」ガサゴソ

悩んだ末ピカチュウはジュエルシードをフエイトに渡した。

フエイト「ありがとう。このお礼は必ずするから」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

帰ってもいい？

フエイト「うん、一匹で大丈夫？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウはアリサの邸に帰っていった。

アリサ「全く…ジュエルシードを全部渡すなんて」

ピカチュウ「チャ〜…」

次の日、ピカチュウはジュエルシールドを渡した事を注意された。

アリサ「まあ、いいわ。奪われたなら奪い返すまでよ」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

平和的に〜！

アリサ「やけに肩を持つわね？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

あの子は悪い子じゃないよ！

アリサ「…わかったわ。ピカチュウがそこまで言うなら信じるわ」

ピカチュウはホッと胸を撫で下ろした。

アリサ「それとピカチュウ、アンタは暫く外出禁止ね」

ピカチュウ「ピカ!？」

なぜ!?

アリサ「また誘拐されたら心配だから」

ピカチュウ「ピカ〜…」

されただけに強く返せず素直に従う事にした。

第8話

ピカチュウ「ピカ〜」

ピカチュウは外出禁止をくらってから星の本棚で勉強を続けていた。そんなある日、アリサは朝早くから出掛けていた。

ピカチュウ「ピカ〜?」

それを知らないピカチュウはアチコチ探していた。

ピリリリリ

ピカチュウ「ピカピカ?」

アリサ『ピカチュウ! 外出禁止撤回! すぐに海辺の公園に來なさい!』

ピカチュウ「ピカチュウ!」

スタツグフォンが鳴ったので出るとアリサからの緊急の呼び出しであった。

ピカチュウ「ピカピカピカピカ!」

ピカチュウは急いで公園に向かった。

アリサ「こつちよピカチュウ!」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

どうしたの？

アリサ「なのは」

なのは「エイミーさん！」

エイミー『はいはい』

ピカチュウ「ピカ!?」

アリサ達はアースラに転移した。

ピカチュウ「ピカピカ？」

一体どうしたの？

すずか「あのね…」

すずかはジュエルシードがプレシア・テスタロッサに奪われた事を話した。その後通信でフェイトの事を蔑ろにしてジュエルシードを発動させたことを話した。

ピカチュウ「ピカチュウ？」

フェイトは？

すずか「シヨックで寝てるよ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

まずはジュエルシードの暴走を止めないとね。

すずか「何で？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

このままだと次元震に発展するよ。

アリサ達「次元震？」

ユーノ「次元震ってのは…」

ユーノは次元震の危険性を説明した。

アリサ達「止めないと！」

クロノ「協力してもらえるか？」

アリサ達「うん！」

アリサ達は転移して時の庭園に向かった。

ガチャガチャガチャガチャ！

時の庭園に辿り着くと機械兵が集まって来た。

アリサ、すずか「変身！」

ピカチュウ「ピカ！」

変身！

アリス達が変身すると…

クロノ「ユーノとなのはは次元炉を封印してくれ。残りは僕と一緒にプレシア・テスタロッサの逮捕に」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

一点突破！

二手に別れて進んだ。

ピカチュウ「ピカ〜！」

ザシユ！

アリス「でやあ！」

バキツ！

すずか「ハツ！」

ダンダンダン！

ピカチュウはナイフ、アリスは素手と蹴り、すずかは銃で応戦しながら進んでいた。

ピカチュウ「ピカ！ピカチュウ〜！」

ゲシツ！

ピカチュウはドアを見つけると蹴破って入った。

プレシア「随分マナーの悪い客ね」

クロノ「管理局だ。素直に投降して貰おうか」

プレシア「無理ね。私はアルハザードに行くのよ！」

クロノ「あれは幻の世界だ！」

プレシア「いいえ！あるのよ！次元の狭間に！」

クロノ「そんなことの為にジュエルシードを暴走させたのか！」

プレシア「全てはアリシアのためよ！」

クロノ「止めるんだ！」

プレシア「もう遅いわ！誰にも止められないわ！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

させないよ！

《エターナルマキシマムドライブ》

ピカチュウはマキシマムスロットにエターナルメモリを差し込むとマキシマムドライブを発動させてジュエルシードを無効化した。

プレシア「な、何をしたの!?!」

ジュエルシードが止まった事にプレシアは動揺していた。

ピシッピシッピシッ!

だが一足遅かった。時の庭園が崩壊を始めアチコチに虚数空間が現れていた。

プレシア「おしまいよ! なにもかも! アハハハ!」

クロノ「クツ!」

プレシアとの間にも虚数空間の亀裂が入り逮捕は困難…救出も不可能で自分達の事すら危うかった。

クロノ「撤退するぞ!」

クロノ達は転移ポイントに向かった。

ピカチュウ「……」

アリサ「ピカチュウ! 何してるの! 早く来なさい!」

ダッ

ピカチュウも後を追いかけた。

なのは「クロノ君!」

途中でなのは達と合流すると転移ポイントで転移した。そしてアリサ達が転移してすぐに時の庭園は崩壊した。

リンデイ「皆さんお疲れ様でした。結果は残念でしたが無事に次元震を抑える事に成功しました」

アリサ、すずか「ふう」カシヤン

ピカチュウ「ピカ」カシヤン

二人と一匹は変身を解いてなのは達も私服に戻った。

ピカチュウ「ピカチュウ」

クロノ「おっと、これは？ジュエルシード!？」

ピカチュウはクロノにジュエルシードが入った袋を渡した。

アリサ「遅いと思ったら回収してたのね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

すずか「七つは貰うよ」

クロノ「全て渡して…」

リンデイ「いえ、七つは虚数空間に落ちた。そうですね？クロノ執務官」

クロノ「…わかりました」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「ありがとうございます」

ピカチュウは報酬としてジュエルシードを手に入れた。

なのは「フエイトちゃんは？」

エイミー「まだ横になってる。それに…」

これから母の死を伝えねばならぬのだから辺りは空気が重くなつた。

アリサ「信じましょう。フエイトが立ち直るのを」

すずか「そうだね」

取り合えずアリサ達は事件解決のため家に帰された。

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「平和ね」

すずか「事件解決したからね」

ピカチュウ「ピファ〜♪」

ピカチュウはアリサの膝の上でアクビをしていた。

なのは「みんな♪連れてきたよ♪」

フェイト「こ、こんにちは」

あれからフェイトは母の死を説明され更に落ち込んだ。そこでリ
ンディの計らいで少しでもフェイトの心を救うため外出許可を出し
ていた。

アリサ「いらつしやい。まあ座って」

なのは達も席に着くと何気ない話で盛り上がり談笑した。

ピカチュウ「ピカ〜：チャ〜！」

ピカチュウは起き上がると林檎を食べ始めた。

フェイト「おはよう、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」ピカン！

ピカチュウは挨拶すると何か閃いた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「ちよつと出掛けてくる？何処に行くのよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

秘密基地。

アリサ「…私達も行くわ」

ピカチュウ「ピカ〜…ピカチュウ！」

う〜ん…いいよ！

ピカチュウも時期的にいいと判断して向かうことにした。

ザパーン

アリサ「それで？海まで来てどうするの？」

ピカチュウ「ピカ！」カシヤン

《エターナル》

変身！

《エターナル》

《ワープマキシマムドライブ》

ピカチュウ達は転移した。

シユタ

ピカチュウ「ピカチュウ」カシヤン

変身を解いた。

すずか「ここがピカチュウの秘密基地？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「何があるのよ？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

ここで暮らせる程度には大体な物があるよ。

ピカチュウ「ピカピ？ピカチュウ？」

僕は研究室に行くけど？アリサ達はどうする？

アリサ「何か面白い物ないの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ゲームセンターならあるよ。

アリサ「タダで出来るの？」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「ならそこに行ってみるわ」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ミニミニピカチュウ「チュウ〜！」

ピカチュウが叫ぶと一匹のミニミニピカチュウがやって来た。

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

案内はこの子にさせるからついていって。

アリサ「わかったわ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

僕もすぐに行くから。

アリサ「待ってるわ」

ピカチュウはアリサ達と別れると研究室に向かった。

ピカチュウ「ピカ」

研究室に着いたピカチュウを早速何かの設計図を書いていた。

ピカチュウ「ピカ…ピカチュウ！」

「満足いくものが書けたらしく、ピカチュウはアリサ達が待つ娯楽室に向かった。」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

アリサ「早かったわね。なら帰りましょう」

アリサ達はピカチュウベースを後にした。

フエイト「じゃあ元気でね」

アリサ「メール送るわ」

すずか「私も」

なのは「なのはも」

フエイト「ありがとう」

フエイトは裁判のために時空管理局に行くことになりアリサ達が見送りに来ていた。

フエイト「ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ？」

フエイト「君には沢山お世話になったのにお礼も出来なくてゴメンね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

気にしなくていいよ。

フエイト「ありがとう」

ピカチュウ「ピカ」

またね。

フェイト「うん！」

そしてフェイトは旅立った。

アリサ「さあ、私達も行きましょう」

フェイトが無事に旅たつのを見届けたアリサ達も日常に戻って
いった。

アナザー2

第一話

アリサ「ふうふう」

すずか「はあはあ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

休憩く。

アリサ「ふう。だいぶ体力がついたわね」

すずか「そうだね」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

もう少ししたらWドライバーとアクセルドライバーがつけられるよ。

平和になって穏やかな日常に戻ったアリサ達だがドライバーを着けたくて日々トレーニングをしていた。

アリサ「よし！」

すずか「目指せ、変身の日を！」

乙女の執念、恐るべし。

アリサ「さあ、お茶にしましょう」

汗を拭きながら席に着くと何気ない話で盛り上がり続けた。

アリサ「そう言えばピカチュウ？気になってたんだけど、ピカチュウベースに転移した時メモリを使ってたわよね？」

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ」

あれ？オリジナルメモリだよ。

すずか「はい！作りたい！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

却下します。

すずか「何で！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ボクの楽しみだから。

すずか「ぶーぶー！」

ピカチュウ「ピカ」

ダメ。

アリサ「まあ、いいわ。管理には気をつけなさい」

ピカチュウ「ピカ」

「さすが「一本だけ」…」

諦めの悪いはずだった。

ピカチュウ「ピカ♪ピカ♪ピカチュウ♪」

ある日、ピカチュウが散歩をしていると…

はやて「困ったな…」

前方にはやてがいた。どうやら車イスの車輪が溝にはまったよう
だ。

ピカチュウ「ピカチュウ？」

はやて「ん？かわええ♪なんやのこの子!？」

車輪の事を一時的に忘れるはやてだった。

ピカチュウ「ピカ!ピカチュウ！」

ピカチュウは車イスの後ろに回ると車イスを力一杯押した。

ポコッ

はやて「抜けた！」

ピカチュウ「ピカ〜…」

はやて「ありがとうな？お名前はなんて言うん？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

はやて「ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ」

はやて「ありがとうな、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ〜／／／」

いや〜／／／

くう〜…

ピカチュウ「ピカ〜…」

はやて「お腹減ったん？」

ピカチュウ「ピカ」

はやて「ウチの家が近くやから来るか？」

ピカチュウ「ピカピ？」

いいの？

はやて「かまへんよ」

はやてはピカチュウを連れて自宅に戻った。

「はやて「何食べさせよう…」」

ピカチュウ「ピカ〜」

はやてが何を食べさせるか悩んでいるとピカチュウはテーブルの上にあった林檎を取ろうとしていた。

はやて「これか？」

ピカチュウ「ピカ♪」シヤリシヤリ

ピカチュウは林檎を貰うと食べ始めた。

はやて「かわええな♪ピカチュウは誰かのペットなん？」

ピカチュウ「ピファ」

うん。

はやて「残念や」

ピカチュウ「ピファ〜♪」

はやて「そんなにお腹減ってたん？もう一個食べるか？」

ピカチュウ「ピカ♪」シヤリシヤリ

ピカチュウはもう一つ林檎を貰い食べた。

ピカチュウ「ピカ…チャ…」

ピョン

はやて「おっと、どないしたん？」

ピカチュウ「チャ…」

ピカチュウははやての膝の上で丸くなると…

ピカチュウ「…」

眠った。

はやて「ありやりや？眠ってもうた」

仕方ないのではやては本を読んでピカチュウが起きるの待った。

はやて「…」

はやてが読書を続けること一時間…

ピカチュウ「ピカ？チャ…」

はやて「お？起きたか」

ピカチュウ「ピカチュウ」

おはよう。

はやて「もう夕方やで」

ピカチュウ「ピカチュウ」

そろそろ帰るね。

はやて「そうか…気をつけて帰るんやで」

ピカチュウ「ピカチュウ」

また来るね。

はやて「うん！待ってるで〜！」

ピカチュウはアリスの邸に帰っていった。

第二話

ピカチュウ「ピカチュウ」

ある日、ピカチュウはピカチュウベースに来ていた。

ピカチュウ「ピカ〜…」

ピカチュウは各ロストドライバーのメンテをしていた。

ピカチュウ「ピ〜…」

しかしアリサとすずかのロストドライバーは消耗が激しく簡単にはいかなかった。

ピカチュウ「ピカチュウ」

仕方がない。

そう思うとピカチュウはアリサの邸に戻った。

アリサ、すずか「遂にきたー!」

ピカチュウがロストドライバーが使えないのでWドライバーとアクセルドライバーに切り換える事を伝えると大いに喜んだ。

ピカチュウ「ピカピカチュウ?」

出力が高くなるから注意してね。

アリサ「わかったわ」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

じゃあボクは出掛けるね。

アリサ「何処に行くのよ？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

新しい友達の家。

アリサ「大丈夫なの？」

ピカチュウ「ピカピカ？」

心配なら一緒に来る？

アリサ「どうする？」

すずか「行ってみようか」

ピカチュウ「ピカピク！」

行くよ〜！

ピカチュウははやての家に向かった。

ピンポーン

はやて『はい？』

ピカチュウ「ピカチュウ」

はやて『お！ピカチュウやね。待ってて、今開けるから』

ガチャ

はやて「いらっしやい。ピカチュウ…？えっと、どちら様？」

アリサ「初めまして、ピカチュウの飼い主です」

すずか「その友達です」

ピカチュウ「ピカチュウ」

そのペットです。

はやて「は、初めまして。八神はやてといいます」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

迷惑だった？

はやて「そんなことあらへんよ！紹介したくて連れてきてくれたんやろ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

はやて「良かったらどうぞ」

アリサ「じゃあ…」

すずか「お邪魔しまーす」

はやてはアリサ達を迎え入れた。

ピカチュウ「ピフア〜♪」シヤリシヤリ

ピカチュウは林檎を貰い、アリサ達はアリサ達で談笑していた。

はやて「へえ〜。ピカチュウは森で拾われたんか」

アリサ「そう言えばこの子…何科なのかしら？」

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ」

ボク？ネズミだよ。

アリサ「そうなんだ」

すずか「大きなネズミだね♪」

アリサ達はまた談笑を続けた。

アリサ「所でピカチュウ？最近ピカチュウベースによく行ってるみたいだけど？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ちよつと設計図とか書いてる。

アリサ「何か作るの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

まだ決めてない。

アリサ「そ。あんまり無茶しないようにね」

ピカチュウ「ピカッ」

そして月日は流れて…

アリサ「知らない女の子に襲われた？」

なのは「そうなの」

すずか「なのはちゃん、恨みを…」

なのは「してないもん！」

被せて否定した。

アリサ「それで私達の所に教えに来たのは？」

なのは「力を貸して貰いたくて」

すずか「いいけど…」

アリサ「あくまでもなのは個人に、よ？」

なのは「わかったの」

アリサ「ピカチュウはどうする?」

ピカチュウ「ピカチュウ?」

貸さないとアリサが戦えないよ?

アリサ「決定ね」

アリサ達はなのはに力を貸すことにした。

第三話

ピンポーン

はやて『はい?』

ピカチュウ「ピカチュウ」

はやて『お!ピカチュウや、入っておいで』

ピカチュウは庭の方に回ると窓から室内に入った。

はやて「いらっしやい。ピカチュウ」

ヴィータ「よう、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピツピカチュウ」

はやて「今日も元気やね♪」

ピカチュウ「ピカ♪」

ピカチュウははやての家に遊びに来てるついでに闇の書の気配を伺っていた。

はやて「それでな?」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウはここ最近楽しそうなはやてを見ておりやはり管理局には報告しない事になっていた。

はやて「つと、もうこんな時間や。ピカチュウ、帰らなくて平気か？」

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ」

うん、また来るね。

ピカチュウは窓から出ていき、アリサの邸に戻った。

アリサ「ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピくかくチュウウ！」

ある日、アリサはピカチュウを探していた。

アリサ「あ、ピカチュウ。今暇？」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「なのはから聞いたんだけど、フエイトがこっちに引っ越して来るの。挨拶に行くけどどうする？」

ピカチュウ「ピカピ！」

行くよ！

アリサ「なら、すずかと一緒に行きましょう」

アリサは車ですずかを迎えに行き、フェイトの家に向かった。

ピカチュウ「ピカチュウ♪」ポフツ

フェイト「久し振り、ピカチュウ」

アリサ「久し振りね」

フェイト「うん」

すずか「元気にしてたって言うのも変かな？」

アリサ達は頻繁にビデオレターのやり取りをしていた。

フェイト「中に入って」

アリサ「ええ」

アリサ達はフェイト宅に入ると再会した喜びからか楽しく話していた。

ピカチュウ「ピ！ピカチュウ」

アリサ「どうしたの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウベースに行ってくる。

アリサ「どうしたのよ急に」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ちよつと気になる事がある。

ピカチュウはピカチュウベースに向かって調べてものをした。

シグナム「来たか」

ヴィータ「遅くなった」

シャマル「急ぎましょう」

ザフィーラ「今はどのくらいだ？」

シャマル「半分ね」

ヴィータ「よし後ちよつとだ」

カタン

シグナム「誰だ！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ヴィータ「ピカチュウ？何してるんだこんな所で」

ピカチュウ「ピカチュウ」

手伝いに来た。

ヴィータ「手伝いに？」

シグナム「どういう事だ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

魔力を一気に集める方法がある。

ヴィータ「何だって！」

シャマル「何て言ってるの？」

ヴィータ「一気に集める方法があるって言ってる」

ザフィーラ「まことか？」

ピカチュウ「ピカ」

ヴィータ「教えてろ！」

ピカチュウ「ピカチュウ」ガサゴソ

ピカチュウはポケットからジュエルシードを一つ取り出した。

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

これから魔力を抜けば残りのページは埋まるよ。

シヤマル「凄い魔力だわ」

ヴィータ「寄越せ！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

今はダメ。

ヴィータ「何でだよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

明日の昼、海辺の公園に皆で来て。

ヴィータ「…わかった」

ピカチュウは用件を伝えると帰っていった。

第四話

ピカチュウ「……」

ヴィータ「来たぞ」

次の日、ヴィータ達は揃ってやって来た。

ピカチュウ「ピカチュウ」

先に言っておく事がある。

ヴィータ「何だよ」

ピカチュウ「ピカ……」

ピカチュウは闇の書を完成させると防衛プログラムが暴走するこ
とを伝えた。そしてはやてを助けるにはその防衛プログラムを倒さ
ないといけない事も伝え、ヴィータは通訳しながら伝えた。

ヴィータ「ようはそのプログラムをぶっ叩いて壊せばいいんだろ
？」

ピカチュウ「ピカ」

シグナム「なら、やることは一つだ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウはジュエルシードをシャマルに差し出した。

シャマル「収集開始」

シャマルがジュエルシードから魔力を収集するとどんどんページが埋まって行き…

闇の書「コンプリート。闇の書起動します」

はやて「……」

するとはやてが転移してきて闇の書と同化した。

闇の意思「また、目覚めてしまった」

ピカチュウ「ピカチュウ！」ピリリリ

アリサ『もしもし？』

ピカチュウ「ピカピ、ピカチュウ」

アリサ、Wに変身するよ。

アリサ『何かあったのね。わかったわ』

カシヤン

ピカチュウ「ピカ！」

フアング「ギャオ」

カシヤン

《ファング》

ピカチュウ「ピカ！」

変身！

《ファング・ジョーカー》

ピカチュウのシルエットが人型になるとW、ファング・ジョーカーになった。

アリサ『どういう状況？』

ピカチュウ「ピカ…」

ピカチュウは手短に話した。

アリサ『OK、ようはアイツを倒せばいいのね』

ピカチュウ「ピカ」

ヴィータ「来るぞ！」

ピカチュウ「ピカ」ガチャン

《アームファング》

ピカチュウはアームファングを出すと斬りかかった。

闇の意思「ブラッティダガー」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウは迫り来る魔力弾をアームフングで切り払った。

ヴィータ「うおー！」

シグナム「ハア！」

ザフィーラ「おお！」

シグナム達が三人がかりで向かうが…

闇の意思「……」

それでも互角に渡り合っていた。

ピカチュウ「ピカ」

ガチャンガチャン

《シヨルダーフアング》

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウはブーメランを投げて…

闇の意思「くっ」

ヴィータ「逃がすか！」ドカン！

ヴィータが隙をついてぶっ叩いていた。

ピカチュウ「ピカチュウ」ガチャンガチャンガチャン

『フアングマキシマムドライブ』

アリサ『フアングストライザー』

ピカチュウ達は飛び蹴りをかました。

はやて『あたたた…なんやの?』

するとはやての意識が戻った。

ピカチュウ「ピカチュウ!」

ヴィータ「あん? わかった! 誰でもいい! アイツにキツいのを一撃入れてくれ!」

ピカチュウ「ピカ」ガチャンガチャン

《シヨルダーフアング》

闇の意思「ぐっ」

ピカチュウが闇の意思の行動を封じると…

ヴィータ「ラケーテン! ハンマー!」ズドン!

ヴィータの一撃が決まった。

ヴィータ「どうだ!」

はやて「お、落ちる〜！」

煙が晴れるとはやてが落ちてきた。

シャマル「はやてちゃん！」

シャマルは慌ててはやてをキャッチした。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

切り離し成功！

ヴィータ「よっしゃ！」

シグナム「あれはどうするのだ？」

闇の意思「ギャオー!!」

防衛プログラムが切り離され暴走していた。

ピカチュウ「ピカ…」

クロノ「時空管理局だ！」

ピカチュウが説明しようとする则クロノ達がやって来た。

なのは「ピカチュウ、どうなってるの？」

ピカチュウ「ピカ…」

ピカチュウは事の顛末を話した。

クロノ「あれが闇の書のバグ…」

フエイト「でもどうやって倒す？あんな巨大な相手」

ピカチュウ「ピカチュウ」カシヤン

ピカチュウは変身を解いた。

フエイト「ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

デカブツにはデカブツを。

ポチ

ピカチュウがスタックフォンを操作すると…

ザパア！

ピカチュウベースが海の中から出てきた。

ピカチュウ「ピカピ」

ウイーン

するとピカチュウベースは変型してPBロボになると…

ドキュンドキュンドキュンドキュンドキュン！

「Pライナーを発進させた。」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウはPライナーに乗り込むとPマシンに乗って出てきた。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

電撃合体！

Pマシンが合体すると…

ピカチュウ「ピカピカチュウ！」

メガピカチュウ！

ガシャン！

巨大なロボットになった。

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

一気に決めるよ〜！

メガピカチュウは電気を纏うと…

ピカチュウ「ピカピ！ピカチュウ！」

必殺！サンダーナックル！

メガピカチュウは暴走プログラムを殴った。

闇の意思「ギャオー…」

闇の意思はコアを破壊され消滅した。

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

ピカチュウは勝利の雄叫びをあげた。

第五話

アリサ、すずか「何で呼んでくれないの!」

ピカチュウ「チャ〜…」

次の日、ピカチュウが巨大なロボットを出したとなのはから聞いたアリサ達はピカチュウに怒っていた。

アリサ「当然運転出来るのよね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

免許をとれば。

アリサ「どこでとるのよ…」

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウ」

ピカチュウベースのゲーセンで。

アリサ、すずか「すぐに行こう」

ピカチュウ「ピ〜カ〜!」

あ〜れ〜!

ピカチュウは連れ去られるとピカチュウベースに向かった。途中でなのは、フエイト、はやて達と合流して。

アリサ「このっ!」

「さすが「えいつ！」

なのは「にやははは…アリサちゃん達必死なの」

アリサ達はピカチュウベースに着くとすぐにゲーセンに向かい操作シミュレーターで練習していた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

乙女の執念だね。

なのは「違うと思うの」

ピカチュウ「ピカチュウ」

合ってると思う。

はやて「それにして大きなロボットやね」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

作るのに結構かかったからね。

はやて「それは時間？費用？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

両方。

フエイト「何で作ったの？」

ピカチュウ「ピカ」

趣味。

なのは達「趣味!？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

それはそうと夜天の書は大丈夫？

はやて「大丈夫やで、な？リインフォース」

リイン「はい、我が主」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

これで厄介事は解決だね。

なのは「クロノ君達に説明しなくていいの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

後は任せた。

なのは「丸投げなの！」

フェイト「任せて」

なのは「引き受けちゃったの!？」

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウ」

気にしない気にしない。

今日もマイペースなピカチュウだった。

ピカチュウ「ピフア〜…」

アリサ「この！」

すずか「えい！」

今日も今日とてロボットシミュレーターで訓練するアリサ達だった。

フェイト「頑張るね」

はやて「意地になつとるんやろな」

なのは「ピカチュウ？そんなに難しいの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

本物だからね。

アリサ「きく！悔しい！」

すずか「後ちよつとなのに！」

アリサ達は休憩の為にシミュレーターから出てきた。

なのは「何がそんなに難しいの？」

すずか「各マシンを操るのは楽なんだけど合体する時が難しいの」

はやて「そこまで再現するんか!？」

ピカチュウ「ピカ」

当然。

フェイト「面白そう」

アリサ「フェイトもやってみたら？面白いわよ」

フェイト「ちよつとやってくる」

ピカチュウ「ピカピク」

頑張ってく。

皆に見送られてフェイトが挑戦しにいった。

アリサ「巨大ロボットを操る…ロマンよね♪」

なのは「乙女から離れて…」スパン!

アリサ「私は汚れなき乙女よ?」

なのは「暴力反対!」

なのは達が騒いでいると…

パンパカパーン♪

アリサ「何よこのファンファーレは？」

フェイト「アハハ…」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

おめでとう〜！

アリサ「まさか…」

フェイト「ごめん、クリアしちゃった」

ピシヤーン！

アリサ「すずか！」

すずか「負けてられないよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

パイロット候補だね。

アリサ「待ってなさい！すぐに追いつくから！」

すずか「待っててよ！」

はやて「アハハ…火がついた」

ピカチュウ「ピカピカチュウ…」

寧ろガソリンぶつこんだ感じだよ…

はやて「否定できへん」

二人は必死の形相だったと後にピカチュウは語った。

第六話

ピカチュウ「ピカ〜…チュウ〜…」

ある日、ピカチュウがお昼寝していると…

アリサ、すずか「ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ？チャ〜…」

アリサとすずかがやって来た。

ピカチュウ「ピカチュウ？」

どうしたの？

アリサ、すずか「ピカチュウベースに行こう！」

ピカチュウ「ピカ〜？ピカチュウ？」

また〜？諦めない？

アリサ「諦める訳ないでしょ」

すずか「ロマンを前にして！」

ピカチュウ「チャ〜…」

あれからアリサとすずかはピカチュウベースに入り浸っていた。

アリサ「ほら！行くわよ！」

ピカチュウ「チャ〜…」

寝かせて〜…」

すずか「ピカチュウベースで寝ればいいよ♪」

ピカチュウ「ピカピ…」

鬼だ：

すずか「ん？何か言った？」

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ」

いえ、何も。

アリサ達はピカチュウベースに向かった。なのは達も巻き込んで。

なのは「ピカチュウ、いつそのこと免許証あげたら？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

無免許運転は危険です。

はやて「全くもってその通りやね」

フェイト「でもクリア出来ないと毎日来ることになるよ？」

ピカチュウ「ピカ…」

あ…

はやて「頑張れピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ〜…」

パンパカパン♪

と、その時ファンファーレになった。

アリス「やった〜！」

ピカチュウ「ピッピカピ〜！」

パンパカパン♪

すずか「やった！」

アリスとすずかが同時にクリアした。

なのは「やったなの！これで解放されるの！」

アリス「さあ、ピカチュウ。免許証を寄越しなさい」

ピカチュウ「ピカピ」

ピカチュウはバツテンを作った。

すずか「何で!？」

ピカチュウ「ピカピピカチュウ」

だって第一テストだもん。

アリサ達「…はあ!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

テストは3つあります。

すずか「聞いてないよ！」

ピカチュウ「ピ〜」

やあ〜。

スパン!

アリサ「誰がボケろと言ったかしら？」

ピカチュウ「チャ〜…」

ピカチュウは頭をおさえてしやがんだ。

アリサ「それで？第二テストは？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

戦闘テストだよ。

アリサ「寧ろ本番ね」

「さすが「頑張るよ！」

アリサとすずかはシミュレータに戻った。

なのは「解放されなかったの…」

はやて「暫くは続きそうやね」

こうして第二テストに挑む事になったアリサ達だった。

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

アリサ「ほら！行くわよ！」

ピカチュウ「ピカ〜！ピカチュウ〜！」

やだ〜！ここで寝るの〜！

すずか「ピカチュウがいないとピカチュウベースに入れられないの！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

今日は寝るの〜！

今日も今日とてロボットシミュレータに付き合わされることになるピカチュウは必死の抵抗をしていた。

アリサ「私達のロマンに協力しなさい！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

あんまりだ〜！

こうしてピカチュウは連行された。途中でなのは達を巻き込んで。

なのは「ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ボクだけ犠牲はやだ。

なのは「ワガママなの！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

あつちはずっとワガママだよ。

ピカチュウはシミュレータを見た。

アリサ「あゝ…難しい」

すずか「難易度が上がったよ」

はやて「そうなん？」

フェイト「じゃあ私もチャレンジしてくる」

アリサ達と交代でフェイトがシミュレータに向かった。

ピカチュウ「ピカチュウ？」

諦めよう？

アリサ、すずか「嫌！」

ピカチュウ「チャ〜…」

ピカチュウが落ち込んでいると…

パンパカパーン♪

アリサ、すずか「まさか!？」

フェイト「アハハ…ごめん」

ピカチュウ「ピカチュウ」

免許証まで後一步。

またもやフェイトがクリアを先にした。

アリサ「すずか！」

すずか「アリサちゃん！」

二人は危機感覚え必死になってきた。

ピカチュウ「チャ〜…」

はやて「また暫く続きそうやね」

また暫く通い詰めになった。

第七話

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「この！」

すずか「えい！」

今日も今日とてロボットシミュレータに挑むアリサとすずかだつた。

はやて「今日で何日目やったっけ？」

なのは「数えたくないの…」

フェイト「ピカチュウ、大丈夫？」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

庭で寝たい…

フェイト「よしよし…ん？ピカチュウ、あれは何？」

フェイトはアリサ達が使ってるシミュレータとは別のシミュレータを指差した。

ピカチュウ「ピカ？ピカピカチュウ」

あれ？第一テストから第三テストを纏めて受けるシミュレータ。

フェイト「ふーん、じゃあ私ちよつとやってくるね」

フエイトは難易度が高いシミュレータに向かった。

なのは「なんだろう…不安とデシヤビュを感じるの」

はやて「奇遇やね、ウチもや」

アリサ「悔しい」

すずか「敵が強いよ」

するとアリサとすずかが戻ってきた。

なのは「お帰りなの」

はやて「頑張ってるな」

「そんな暢気な事を言っていると…」

パンパカパーン♪パンパカパーン♪パンパカパーン♪

アリサ「ちよっと！」

ピカチュウ「ピッピカピッ！」

ピカチュウは紙吹雪を散らした。

フエイト「クリアしちゃった」

ピカチュウ「ピカ♪」パシヤ

バットショットでピカチュウはフェイトの写真を撮ると…

ピカチュウ「ピくかくピカ、ピカチュウ」

免許証を発行した。

アリサ「フェイト…」

すずか「フェイトちゃん…」

フェイト「アハハ…ごめん」

フェイトは免許証を貰った。

アリサ「負けてられないわ!」

すずか「うん!」

二人がシミュレータに挑みに向かうが…

アリサ「ちよつとピカチュウ!動かないわよ!」

ピカチュウ「ピカチュウ」

免許は先着一名様です。

アリサ「なんですって!」

すずか「じゃあ…」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

二人は乗れません。

ピシヤーン！

アリサ「…冗談？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

本気と書いてマジです。

ピシヤーン！！

アリサ、すずか「そ、そんな…」ガクツ

二人は膝をついて落胆した。

はやて「どうするん？フエイトちゃん」

フエイト「アハハ…本当にごめん」

なのは「可哀想なの」

暫く塞ぎこむ二人だった。

ピカチュウ「ピカ〜…チャ〜…」

ピカチュウは久し振りの日向ぼっこを満喫していた。

アリサ、すずか「ピカチュウ〜！」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

今度は何？

アリサ「補欠パイロットが必要だと思うの！」

ピカチュウ「……ピカ〜……」

ピカチュウは寝直した。

すずか「寝直さないで！」

ピカチュウ「ピカピ？」

本音は？

アリサ、すずか「パイロットになりたい！」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

ボクとフェイトで十分。

アリサ「いいじゃない！増えて損じゃないでしょ！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

そうだけど。

すずか「いいでしょ？」

ピカチュウ「ピカ」

ダメ。

アリサ、すずか「何で!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

動機が不純です。

アリサ「ほら、桃を取り寄せたわよ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

仕方がないな。

餌に釣られたピカチュウだった。

第八話

ピカチュウ「ピファ〜」

アリサ「この！」

すずか「えい！」

今日も諦めずロボットシミュレータに挑むアリサとすずかだった。

ピカチュウ「ピファ〜…」

ピリリリ

ピカチュウがお昼寝しているとスタッグフォンが鳴った。

ピカチュウ「ピカピカ？」

フェイト『あ、ピカチュウ？今平気？』

ピカチュウ「ピカ」

フェイト『ちよつと調べて欲しいの』

ピカチュウ「ピカチュウ？」

調べもの？

フェイト『捜査関係なんだけど…』

フェイトは捜査関係の事を話、ピカチュウは星の本棚で調べものを

してフェイトに情報を提供した。

フェイト『ありがとう♪今度林檎を持ってくね♪』

ピカチュウ「チャ〜♪」

フェイト『またね♪』

電話を切るとアリサ達がシミュレータから出てきた。

アリサ「後少しなのよね」

すずか「ねえ」

ピカチュウ「ピカピカ、ピツカ〜！」

アリサ「何よ？急に…」

ピカチュウ「ピカピカチュウ！」

攻略本！著者ピカチュウ。

アリサ、すずか「買った！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

一冊しかありません。

アリサ「じゃあ仲良く二人で…」

ピカチュウ「ピカチュウ♪ピカピカピカチュウ」

素敵仕様♪認証付き本です。

アリサ、すずか「いらない機能をつけるな！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

じゃあしまうね。

アリサ「すずか、悪いわね。私が買うわ」

すずか「そんなのないよ！私が買うよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

1000から！

アリサ「2000！」

すずか「2500！」

アリサ「3000！」

すずか「4000！」

値段はつり上がっていき…

アリサ「一万五千！」

すずか「うう…二万！」

アリサ「クツ…二万千!」

すずか「さ、三万!」

アリサ「ちよつ!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

さあ、あとはないか!

アリサ「クツ…よ、四万!」

すずか「ええ!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

あとはないか!

すずか「うう…」

ピカチュウ「ピカチュウ!」カンカン!

アリサが落札!

アリサ「よし!」

すずか「うう…」ガクツ

すずかは落胆して膝をついて落ち込んだ。

アリサ「じゃあ早速…」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウは手を差し出した。

アリサ「何よ？その手は？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

支払いです。

アリサ「わかったわよ」

チャリン♪

アリサはカードで支払いを済ませた。

アリサ「それじゃあ早速…」

アリサは認証を済ませると本を読み始めた。

アリサ「なるほど…」

すずか「ピカチュウ…」

ピカチュウ「ピカ？」

すずか「攻略本、もう一冊ないの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ないよ。

すずか「うう…」

諦めの悪いすずかだった。

パンパカパーン♪

アリサ「よし！」

すずか「……」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

どうしたの？

すずか「よし！」

すずかはアリサのプレイを見て今度は自分のプレイを始めた。

アリサ「ふう♪」

アリサが達成感を満喫していると…

パンパカパーン♪

アリサ「うそ!!？」

すずか「やったね♪」

ピカチュウ「ピカチュウ」

考えたね。

アリサ「どういうこと？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

すずかはアリサのプレイを真似したんだよ。

アリサ「な!? 卑怯よすずか!」

すずか「作戦勝ちだよ♪」

アリサ「ぐぬぬぬ…次のテストよ!」

すずか「負けないよ!」

アリサとすずかは第三テスト、格納を始めた。

パンパカパン×2

ピカチュウ「ピカ!」

うそ!?

アリサ、すずか「やった〜!」

一発合格したアリサとすずかだった。

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「さあピカチュウ？」

すずか「免許証を」

アリサ、すずか「頂戴♪」

ピカチュウ「ピ〜カ〜ピカ、ピカチュウ」

ピカチュウはアリサとすずかに免許証を発行した。

アリサ「早速運転よ！」

ピカチュウ「ピカ〜！」

ダメ〜！

アリサ「何でよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

非常事態じゃないから。

すずか「ちよつと位…」

ピカチュウ「ピカ〜」

ダメ〜。

アリサ「仕方ないわね」

すずか「残念」

ピカチュウ「ピカチュウ」

更新を忘れないでね。

アリサ「一月後ね」

すずか「忘れないようにしないと」

二人は免許証を嬉しそうに抱えた。

第九話

ピカチュウ「ピカ〜」キュイーン!

ある日、ピカチュウがPマシンの整備をしていると…

ピリリリ!ピリリリ!

ピカチュウ「ピカピカ?」

フエイト『もしもし!?ピカチュウ!』

ピカチュウ「ピカチュウ?」

どうしたの?

フエイト『Pマシン出せる!』

ピカチュウ「ピカチュウ」

出せるけど。

フエイト『座標を送るから直ぐに来て!』

ピカチュウ「ピカチュウ!」

わかった!

ピカチュウは急いでPマシンをPライナーに格納した。

ピカチュウ「ピカピ!ピカチュウ!」

ビルドアップ！PBロボ！

ピカチュウベースを変型させると…

ピカチュウ「ピカピカ！」

発進！

ドキュン！ドキュン！ドキュン！ドキュン！ドキュン！

Pライナーを射出すると連結して次元を越え始めた。

シュシュポポ！シュシュポポ！

ピカチュウ「ピカ〜」ポチポチポチ

ピカチュウは座標を確認しながら急いで向かった。

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ〜！」

ピカチュウは別の次元世界に辿り着くとそのまま降り立った。

フエイト「来た！」

クロノ「本当に来たのか!？」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

フエイト「わっと！」

Pライナーから飛び降りた。ピカチュウはフェイトにキャッチされた。

ピカチュウ「ピカピ〜♪」

来たよ〜♪

フェイト「早速だけどアレを何とかしてくれる?」

フェイトが指差した方を見ると魔獣が暴れて街を破壊していた。

ピカチュウ「ピカチュウ〜!」

ピカチュウはPライナーを停止させるとフェイトと一緒にPマシンに乗り込んだ。

フェイト「えつと、電撃合体!」

消防車をボディに四機のマシンが手足になって合体した。

ピカチュウ「ピカピ!」

完成!

フェイト「メガピカチュウ!」

魔獣「ぎやお〜!」

フェイト「街から引き離さないと!」

フェイトは魔獣と組み合うと戦う場所を街の外に変えた。

フエイト「この！」

ガシヤン！ガシヤン！

一進一退の攻防を繰り返していた。

フエイト「ピカチュウ！何か武器はないの！」

ピカチュウ「ピカ！」ポチ

ピカチュウがボタンを押すと剣が現れた。

フエイト「よし！」

フエイトは武器を手に入れて果敢に挑んだ。

ピカチュウ「ピカ！」

行け！

フエイト「えい！」

魔獣「ぎやおく…」

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

フエイト「勝てたく…」

ピカチュウが勝利の雄叫びを上げるとフエイトは安堵した。

ピカチュウ「ピカチュウ」

フェイト「あ、うん。外に出ようか」

フェイトはピカチュウを抱えるとメガピカチュウの肩に降り立った。

クロノ「よくやってくれた」

フェイト「ピカチュウのおかげだよ。Pマシンがなかったら無理だったよ」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

フェイトはピカチュウの頭を撫でながら褒めた。

クロノ「だがフェイトの機転がなければもっと被害は拡大していた」

フェイト「ありがとう、クロノ」

ピカチュウ「ピカピ？」

帰る？

フェイト「うん、帰ろうか」

クロノ「後は任せてもらおう」

フェイトはピカチュウと一緒に帰艦した。

第十話

アリサ、すずか「何で声をかけてくれないの！」

フェイト「いや、その、緊急事態だったし…」

次の日、フェイトはアリサとすずかに実際にメガピカチュウを動かした事を知られ問い詰められていた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

その辺にしたらく。

アリサ「わかったわよ…」

ピカチュウの掛け声に渋々納得したアリサとすずかだった。

フェイト「助かった…」

ピカチュウ「ピカ…」

さてと…

アリサ「どうしたのよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

たまにはあの子の様子も見ないと。

アリサ達「あの子？」

ピカチュウ「…チャ〜♪」

アリサ「誤魔化してもダメよ。ちゃんと聞いたから」

ピカチュウ「…ピカ？」

…えへ？

すずか「可愛く言ってもダメだよ？何を隠してるのかな？」

ピカチュウ「ピフユ〜♪」

フエイト「わざとらしい」

アリサ「ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピ？」

アリサ「拷問と自白、どっちにする？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

罪人じゃないよ！

すずか「じゃあ言えるよね？」

ピカチュウ「チャ〜…」

フエイト「何で隠したいの？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

アリサとすずかが暴走するから。

アリサ「人を暴れ馬みたいに」

すずか「心外だよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

本当に暴走しない？

アリサ「ええ」

すずか「淑女だもん」

ピカチュウ「ピカ〜…ピカチュウ」

はあく…わかったよ。

ピカチュウは椅子から降りると…

ピカチュウ「ピカチュウ」

ついてきて。

ピカチュウはピカチュウベースの格納庫にアリサ達を案内した。

ピカチュウ「ピカ」カシャ！

アリサ「新幹線？」

すずか「まさか…」

ピカチュウ「ピカチュウ」

2号ロボット。

アリサ、すずか「きた〜！」

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ」

ほら、暴走した。

アリサ、すずか「はい！パイロットやりたい！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ダメです。

アリサ「何だよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

免許がありません。

アリサ、すずか「また!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

当然だよ。

アリサ「なら、免許を取ればいいのよね？」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

またやるの？

アリサ、すずか「当然！」

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ？」

これ、専用機だから一人だけだよ？

アリサ「すずか、譲りなさい」

すずか「やだよ！私だって乗りたい！」

フェイト「いつそ二体あるんだから二人で分けたら？」

アリサ、すずか「それだ！」

ピカチュウ「ピカ！ピカチュウ！」

ちよつと！勝手に進めないでよ！

アリサ「何よ？文句あるの？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ！」

獣の持ち物を勝手に分配しないで！

アリサ「いいじゃない！減るもんじゃないし」

ピカチュウ「ピカピ！」

減るよ！

すずか「ほら、ピカチュウ？桃だよ」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

釣られないよ！

アリス、すずか「ピカチュウが誘惑に勝った!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

全く。

アリス「じゃあ私はメガピカチュウね」

すずか「じゃあ私は…ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

マキシマムライナーだよ。

すずか「じゃあ私はマキシマムライナーにするよ」

ピカチュウ「ピカ…ピカチュウ」

もう…勝手にして。

諦めるピカチュウだった。

第十一話

ピカチュウ「ピカ〜…チュウ〜…」

ある日、ピカチュウが日向ぼっこをしていると…

アリサ「ピカチュウ」

ピカチュウ「チャ？ピカ〜！」

アリサが声をかけてきた。

アリサ「すずかの家に行くけどどうする？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

行くよ。

アリサ「なら、いらつしやい」

ピカチュウはアリサと一緒にすずかの屋敷に向かった。

すずか「いらつしやい、アリサちゃん」

ピカチュウ「ピッピカチュウ」

すずか「ピカチュウも♪」

アリサ「なのは達は？」

すずか「もう来ると思うよ」

暫し待つと…

なのは「アリサちゃん、すずかちゃん」

フエイト「こんにちは」

はやて「お、ピカチュウも居る」

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

ピカチュウはなのは達に挨拶した。

アリサ「よしよし」

ピカチュウ「チャ〜♪」

ちゃんと挨拶が出来た為、アリサに頭を撫でて貰った。

アリサ「久しぶりね。こうやってお茶を楽しむのも」

はやて「それは誰かさん達がシミュレータに夢中になってたせいや
ないの？」

アリサ「ん？何か言った？」

はやて「いえ、何も」

アリサの笑顔にはやては呆気なく沈黙した。

フエイト「アハハ…そう言えば免許は取れたの？」

すずか「バツチリ！」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

大変だったよ…

はやて「ご愁傷さま」

なのは「巨大ロボットかく…ロボット同士合体しないの？」

アリサ、すずか「…ハッ！」

アリサとすずかは一斉にピカチュウを見た。

ピカチュウ「ピフユ〜♪」

アリサ「ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピ、ピカ？」

アリサ「吐け」

ピカチュウ「ピカチュウ!？」

命令系!？」

すずか「大人しく吐いた方が身のためだよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ!？」

しかも脅迫付き!?

アリサ「さあどうやって合体するの?」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

更に確定系!?

すずか「ピカチュウがネタに走らない筈がないもん」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

決めつけられてる!?

アリサ「するの?しないの?」

ピカチュウ「…ピカピ」

…します。

アリサ「やはりね…名前は?」

ピカチュウ「ピカピピカチュウ」

メガピカチュウマキシマム。

アリサ「まんまね。まあいいわ。それで合体のシミュレータは?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

製作中です。

アリサ「ちやちやつと完成させなさい」

ピカチュウ「ピカチュウ」

頑張ります。

すずか「出来たら呼んでね？ぜつつつたいたいだよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

今、他の事で忙しい。

アリサ「何してるのよ？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

3号ロボットの製作で忙しい。

ドテツ！

はやて「懲りずにまた作ったんか！」

ピカチュウ「ピカ／＼／＼」

いや／＼／＼

なのは「ピカチュウ…後ろ」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

なのはに言われ後ろを振り向いたピカチュウが目にしたのは…

アリサ「ピカチュウ♪」

すずか「当然、シミュレータあるよね？」

ピカチュウ「ピカピ」

ないよ。

アリサ「作りなさいよ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

無理です。

すずか「何でかな？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ボクの専用機だから。

アリサ、すずか「ずるい！」

ピカチュウ「ピカピピカチュウ！」

自分達だって専用機持つてるでしょ！

アリサ、すずか「うっ…」

ピカチュウ「ピカピ…」

全く…

アリサ「どんなロボットなのよ？それくらいは教えなさいよ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

Pライナーが変型するの。

アリサ「レスキューなファイブか！」

ピカチュウ「ピカピカチュウ？」

文句があるならロボット、没収するよ？

アリサ「アレは私の物よ！」

ピカチュウ「ピカチュウ!？」

貸してるだけだよ!?

アリサ「細かい事はいいのよ」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

もうやだ…

ピカチュウは呆れ果てていた。

第十二話

ある日、それは起きた。

ピカチュウ「ピカ〜…」

アリサ「どう？諦める気になった？」

すずか「諦めないよ！」

ピカチュウ「ピ…」オロオロ

ピカチュウは二人の間でオロオロしていた。

アリサ「この増胸薬は私のものよ」

すずか「そんなのダメだよ！私も見つけたんだよ！」

アリサ「こうなったら…」

すずか「仕方ないね…」

《ジョーカー》

《スカル》

アリサ、すずか「変…」

ピカチュウ「ピカ〜！」

平和的に〜！

アリサ「ピカチュウ？これは戦争なのよ…」

すずか「お互いの未来の為に…」

ピカチュウ「ピカチュウ！」ガシャン！

だったらこうする！

ピカチュウは増胸薬の瓶を割った。

アリサ、すずか「あゝ！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

これで争いは起きない。

アリサ「何で割っちゃうのよ！」

すずか「勿体ない！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

喧嘩するのが悪い。

アリサ「乙女の夢が…」

すずか「未来の夢が…」

ピカチュウ「ピカチュウ」

諦めてね。

アリサ、すずか「うう…」

諦めきれない二人だった。

ピカチュウ「ピカチュウ…」ポチポチポチポチ

アリサ「……」カリカリ

後日、アリサが宿題をしていると、ピカチュウもパソコンで何やら作業をしていた。

アリサ「ん〜！終わった」

ピカチュウ「……」ポチポチポチ

アリサ「ピカチュウ？何してるのよ？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

合体シミュレータの調整。

アリサ「出来たの!？」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「もしもし？すずか？合体シミュレータが出来たわよ」ピッ

ピカチュウ「ピカ!？」

アリサ「公平にしないと」

ピカチュウ「ピカ〜」

はあく。

ピンポーン♪

アリサ「来たみたいね」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

速すぎるよ!

すずか「こんにちはは♪アリサちゃん♪」

アリサ「速かったわね」

すずか「走ってきたから♪」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

人間やめてるよ…

すずか「ん?何か言った?」

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ」

いえ、何も。

アリサ「さあ、早くやりましょう」

ピカチュウ「ピカ〜？」

今から〜？

すずか「当然」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

でも大変だよ？

アリサ「そんなに難しいの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ほとんどオートだよ。

すずか「なら簡単なの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

比較的に。

アリサ「なら早くマスター出来るわね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

インストールが大変なの。

アリサ「ピカチュウなら簡単でしょ？」

ピカチュウ「ピカ〜…」

アリサ「何？そんなに大変なの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

更新だから大変なの。

アリサ「頑張りなさい。私の為に」

ピカチュウ「チャ〜…」

すずか「頑張つて！」

ピカチュウ「ピカ〜…」

ピカチュウは泣く泣く頑張つて更新した。

ピカチュウ「ピカ〜…チュウ〜…」

久しぶりにピカチュウはお昼寝を邪魔されずに過ごしていた。

ピカチュウ「ピカ〜…チャ〜…」

そして半日程寝ていると…

アリサ「いたいた…なんだ寝てるのね」

ピカチュウ「チャ〜?」

寝惚けながらピカチュウは反応した。

アリサ「あ、起きた?」

ピカチュウ「ピカ〜…ピカ〜!」

あ〜…よく寝た〜!

アリサ「よく寝れた?」

ピカチュウ「ピカ♪」

アリサ「そう、それはよかったわね」

ピカチュウ「ピカチュウ?」

どうかしたの?

アリサ「様子を見にきただけよ」

ピカチュウ「ピツカ〜」

アリサ「ピカチュウ…」

ピカチュウ「ピカ?」

アリサ「ずっと一緒に居てくれる？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

もちろん！

アリサ「ありがとう♪」

アリサとピカチュウは仲良く過ごしていった。

アナザー3

第一話

ピカチュウ「ピカ〜…」

アリサ「ピカチュウ？何を作ってるの？」

ピカチュウ「ピカ？ピカピカ、ピツカ〜♪」

アリサ「そのくだり好きね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

新作のグミ。

アリサ「グミ？」

ピカチュウ「ピカ」

アリサは一粒持つと…

アリサ「普通のグミじゃないでしょ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

勿論。

アリサ「効能は？」

ピカチュウ「ピカチュウ!？」

読まれてる!?

アリサ「アンタが味だけにこだわるとは思えないわ」

ピカチュウ「ピカ〜…」

つまらなそうなピカチュウだった。

アリサ「落ち込んでないで早く言いなさい」

ピカチュウ「ピカ。ピカチュウ、ピカチュウ、ピカチュウピカチュウ」

はい。このグミは疲労回復、魔力回復、怪我の回復の三拍子が揃ったグミです。

アリサ「随分気前のいいグミね」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

頑張ってみた！

アリサ「で？食べてみたの？」

ピカチュウ「……」じ〜

アリサ「…嫌よ」

ピカチュウ「ピ〜…」

ピカチュウの耳が垂れた。

アリサ「う…」

ピカチュウ「ピカチュウ？ピカピカピカチュウ？」

本当にダメ？今なら合体後の操縦権あげるよ？

アリサ「OK。食べるわ」

アリサは操縦権に釣られた。

アリサ「いただきます…：枝豆味？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

そうだよ。

アリサ「それなりに旨いわね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

次は疲労回復テストだね

アリサ「あ、何か嫌な予感…」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

ランニングテスト♪

アリサ「やっぱり…」

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ」

さあ、行くよ。

アリサ「はいはい」

アリサとピカチュウはテストに出掛けた。

ピカチュウ「ピカチュウ〜！ピツカ！ピツカ！」

アリサ「ちよつと…待ちなさい…」

ピカチュウ「ピカ〜？」

アリサ「流石に…全力疾走は…続かないわよ…」

ピカチュウ「ピカチュウ」

はい、グミ。

アリサ「これで効かなかったらお説教よ」

アリサはグミを食べた。

ピカチュウ「ピカ？」

どう？

アリサ「嘘…疲れがとれた」

ピカチュウ「ピカチュウ」

成功。

アリサ「…じゃあピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ？」

アリサ「ロボットの操縦権はよろしくね？」

ピカチュウ「ピカ」

うん。

後日、ピカチュウは約束通り操縦権をメガピカチュウに固定した。

すずか「ずるいよ！卑怯だよ！セコイよ！抜け駆けだよ！」

アリサ「ふふん♪飼い主の特権よ♪」

ロボットの操縦権を盗られたすずかは駄々っ子になっていた。

すずか「うゝ！納得いかないよ！」

ピカチュウ「ピカゝ…ピゝ」

そしてピカチュウはアリサの膝の上で暢気に寝ていた。

すずか「ピカチュウ！」

ピカチュウ「ピカ!？」

アリサ「ちよつと?せつかく寝てるのに起こさないでよ」

すずか「4号機作ってよ！」

ピカチュウ「ピカ？」

何の話？

アリサ「ロボットの操縦権の話よ」

ピカチュウ「ピカ〜」

それだけの説明で納得したらしい。

すずか「4号機作って！」

ピカチュウ「…ピカ」

…無理。

アリサ「ん?アンタ何か隠してない？」

ピカチュウ「ピ!ピカチュウ」

あ!用事を思い出した。

アリサ「ちよつと待ちなさい」

ピカチュウ「ピ、ピカ？」

アリサ「さあ、白状しなさい」

ピカチュウ「ピカピ？」

何の事？

アリサ「そう…あくまでも惚けるのね」

ピカチュウ「ピ、ピカチュウ？」

か、顔が怖いよ？

アリサ「桃禁止ね」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

何でも聞いて！

餌の禁止には逆らえなかった。

アリサ「で？何を隠してるの？」

ピカチュウ「ピカ…」

実は…

アリサ「実は？」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

作っちゃったの…

アリサ「何を？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

新しいマシン。

すずか「ピカチュウ♪」

アリサ「どんなマシンかしら？」

ピカチュウ「ピカチュウ、ピカチュウ、ピカチュウ」

シヨベルカー、ミキサー、ダンプ。

アリサ「今度は重機なのね」

すずか「合体するよね？」

ピカチュウ「ピカピ、ピカピカチュウ」

するよ、メガピカチュウに。

すずか「……」

ピカチュウ「……」

すずか「鼻肩だ！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

仕方ないの。

すずか「何が？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ノリで作ってるから。

すずか「おもっいつきり！ピカチュウが原因だよね！」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

やっちゃまった♪

アリサ「残念だったわね、すずか」

すずか「うう…」

心底残念そうなすずかだった。

第二話

ピカチュウ「ピカ〜…」ポチポチポチポチ

アリサ「何してるの？」

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウ」

換装のテストシミレーションを見てるの。

アリサ「どうなの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

特に問題はないよ。

アリサ「そう」

ピンポン♪

アリサ「なのは達ね」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

お茶会？

アリサ「そうよ。来る？」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「じゃあ行くわよ」

アリサとピカチュウはなのは達を迎え中庭に移った。

ピカチュウ「ぐびぐび♪」

アリサ「飲みすぎないようにね」

ピカチュウ「ピカ♪」

はやて「しかし、ピカチュウの予算は何処から出てるんやろ。マシン何機目や？」

なのは「不思議だね…」

フェイト「なのは、大丈夫？ 疲れてるみたいだけど…」

なのは「大丈夫だよ。フェイトちゃん」

ピカチュウ「…」

お茶会から一週間後、なのはは墜ちた。

ピカチュウ「…」ジジジジ

ある日、ピカチュウがPマシンの整備をしていると…

ピリリリ♪

ピカチュウ「ピカピカ？」

スタツグフォンが鳴った。

アリサ『あ、ピカチュウ？悪いけどすぐに帰って来て』

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ」

ピカチュウは整備を終えるとアリサの邸に戻った。

フェイト「ピカチュウ！グミを渡して！」

ピカチュウ「ピカく!?」ガクガク！

帰ってくるなりフェイトに抱き上げられて揺すられた。

アリサ「落ち着きなさい、フェイト」

フェイト「落ち着いて…」

アリサ「なら、ピカチュウを放しなさい。苦しんでるわよ」

フェイト「あ、ごめん」

ピカチュウ「ピカく…」

ピカチュウは目を回していた。

アリサ「しっかりしなさい」

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「ほら」

ピカチュウは抱っこされた。

フェイト「ピカチュウ、グミを渡して！」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

何でフェイトが知ってるの？

フェイト「アリサに聞いたの！」

ピカチュウ「ピカピ〜」

アリサ「悪かったわよ」

フェイト「それよりピカチュウ！グミを頂戴！」

ピカチュウ「ピカピ？」

何で？

フェイト「なのはに食べさせるの！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ダメです。

フェイト「どうして！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

試作版だから。

フェイト「なら！完成させて！」

アリサ「無茶苦茶よ、フェイト」

フェイト「でも！」

アリサ「ピカチュウ？どれくらい完成してるの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

九割って所かな。

フェイト「なら！」

ピカチュウ「ピカ！ピカチュウ」

ダメ！まだ実験してない。

フェイト「何の？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

怪我の治療に使えるかどうかの。

フェイト「なら！私が！」

ピカチュウ「…ピカチュウ？」

人体実験だよ？

フエイト「構わない！」

ピカチュウ「チャ〜…」

しかしピカチュウは渋った。

フエイト「ピカチュウ！」

ピカチュウ「ピカ〜…」

フエイト「ピカチュウ！」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

ピカチュウはグミを一粒出した。

フエイト「…えい！」ザクツ

フエイトは腕を少し切った。

ピカチュウ「ピカチュウ」

フエイト「う、うん」

フエイトがグミを食べると怪我が治った。

ピカチュウ「…ピカチュウ」

…成功だね。

フエイト「本当に!？」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウはフエイトの腕を念入りに調べた。

ピカチュウ「ピ?ピカ!？」

ん?これは!？」

アリサ「どうしたの!？」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

結婚線がない…

スパン!!

アリサ「誰がボケろと言った?」

ピカチュウ「チャ〜…」

フエイト「結婚線?」

アリサ「とりあえずその話はいいから」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

なら、なのはの所に行こうか。

アリサ「私は？」

フェイト「ピカチュウ位なら黙認されるけど…」

アリサ「そう。わかったわ、なら行つてきなさい」

ピカチュウ「ピカピク」

フェイト「転移するよ」

フェイトはアースラに転移した。

ピカチュウ「ピカチュウ？」

フェイト「うん、ここから更に転移装置で行くよ」

ピカチュウ「ピカ」

フェイトはピカチュウを連れて本局医療施設に転移した。

フェイト「なのはの病室は…ここだ」

フェイトはノックすると病室にピカチュウと一緒に入った。

なのは「フェ…イト…ト…ちゃん？」

身体中包帯だらけなのはだった。

フェイト「なのは、これを食べるよ」

フエイトがなのはの口にグミを持ってくとなのはは口を開けてグミを食べた。

なのは「……!?!」ガバツ!

グミを食べ終わるとなのはは突如起き上がった。

なのは「どういう事?」

フエイト「ピカチュウの新アイテムだよ」

ピカチュウ「ピカ」

なのは「ありがとう、フエイトちゃん。ピカチュウ」

この後、なのはは回復を疑問視され精密検査を何度か受けるはめになった。

第三話

ピカチュウ「ピカ〜…」

ある日、ピカチュウが昼寝していると…

シュン!

急に転移して消えた。

神様「ピカチュウ。ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ〜…?」

神様「起きてください」

ピカチュウ「ピカ?ピカチュウ!」

うん?ここは!?

神様「久しぶりですね」

ピカチュウ「ピカチュウ?」

神様?

神様「はい、そうです。緊急事態なので直接呼び寄せました」

ピカチュウ「ピカチュウ?」

何かあったの?

神様「実は天界で隔離されていた魔物が逃げ出し下界に向かってしまいました」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

ようはそいつを倒せばいいの？

神様「お願いできますか？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

頑張ってみるよ！

神様「お詫びにこれを用意しました。受け取ってください」

ポトツ

ピカチュウ「ピカチュウ!？」

デイケイドライバー!？」

神様「ただのデイケイドライバーではありません」

ピカチュウ「ピカ？」

神様「そのデイケイドライバーは他のライダーになるのは勿論、召喚も出来ません。更に各ライダーのパワーアップ姿にもなれます」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

チート武装だ！

神様「後、白紙のカードを用意しました。何か登録したい物が出来たら使いなさい」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ありがとう！

神様「さあ、戻りなさい」

ピカチュウ「ピカピク」

ピカチュウは神様の力で戻っていった。

アリサ「民間協力者になってですって？」

すずか「突然だね」

なのは「えつと…」

フェイト「装備が一級品だから」

はやて「ダメやろうか？」

なのは達は勧誘理由を話した。

アリサ「うくん…」

アリサとすずかが悩んでいると…

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

ピカチュウが部屋に入って来た。

アリサ「お腹減ったの？」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「はい、林檎よ」

ピカチュウ「ピファ〜♪」 シャリシャリ

はやて「な、ええやろ？」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

何の話？

アリサ「民間協力者になって欲しいんですって」

ピカチュウ「ピカ〜」

へえ〜。

アリサ「……本当の目的は？」

なのは達「ギクツ」

すずか「ピカチュウの科学力かな？」

なのは達「ギクツギクツ」

アリサ「わかりやすいわね」

すずか「そうだね」

なのは「ダメかな？」

アリサ「ピカチュウ、どうする？」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

お給金は幾ら？

なのは達「お金取るの!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

働くなら当然だよ。

アリサ「確かにそうね」

なのは「えつと…えへ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

食後の散歩に行つてきます。

なのは「待ってよ！」

ピカチュウは去ろうとしたがなのは達に引き止められた。

ピカチュウ「ピカ？」

フエイト「ね？お願い」

はやて「ええやろ？」

ピカチュウ「ピカ！」

ダメ！

なのは「どうしたら協力してくれる？」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウは電卓を出した。

フエイト「やっぱりそれ？」

ピカチュウ「ピカ」

はやて「ご希望額は？」

ピカチュウ「ピカく…」ポチポチポチポチ

はやて「地味に高いな！」

フエイト「まからない？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

最低でもこれくらい貰わないと。

なのは「ピカチュウ、お願い」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

アリサ「アンタ達、あまり無理に勧誘しないでよね」

はやて「だから一緒にアリサちゃんも」

アリサ「つて言われてもね…」

すずか「フリーターはちよつと…」

はやて「…わかった！リンデイさんに相談してみる！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

三人？分でこれくらいね。

はやて「…わかった」

ピカチュウははやてに電卓を見せた。

アリサ「さあ、気分を変えてお茶会にしましょう」

アリサ達は気分を変えてお茶会を楽しんだ。

第四話

ピカチュウ「ピカ♪ピカ♪ピ〜♪」

アリサ「どうしたのよ？」

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ」

アリサ「三号機が完成したの？」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「良かったわね」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

ありがとう〜♪

ピリリリ！

ピカチュウ「ピカピカ？」

フエイト『ピカチュウ!?外を見て！』

ピカチュウ「ピカ〜？」

魔物「がお〜！」

外を見ると魔物が暴れていた。

ピカチュウ「ピカ!？」

アリサ「何よあれ！」

フエイト『何とか結界に閉じ込めるから何とかして！』

ピカチュウ「ピカチュウ！」

わかった！

ピカチュウは電話を切ると…

ピカチュウ「ピカチュウ！」

行ってくるよ！

アリサ「待ちなさい」

ピカチュウ「ピカ？」

アリサ「ふふ…遂に出番が来たわね！」

ピカチュウ「ピカ〜…」

アリサ「さあ、行くわよ！」

ピカチュウとアリサはピカチュウベースに向かった。

ミニミニピカチュウ「チュウ〜！」

ピカチュウ「ピカピ！ピカチュウ！」

ビルドアップ！PBロボ！

ピカチュウベースが変形すると…

ドキュン！ドキュン！ドキュン！ドキュン！ドキュン！

Pライナーが発射された。

ピカチュウ「ピカ〜！ピカチュウ〜！」

キキイ！

ピカチュウ「ピカピ！」

アリサ！

アリサ『出るわよ！』

アリサはPマシンで出撃した。

アリサ『電撃合体！』

ガシヤン！

アリサ『メガピカチュウ！』

ピカチュウ「ピカ〜…」

ピカチュウは不安そうに戦闘を見ていた。

ピリリリ！

ピカチュウ「ピカピカ？」

すずか『もしもし!?ピカチュウ!?私の出番は!?!』

ピカチュウ「……」チラッ

ピカチュウが戦闘を見ると若干アリサが不利だった。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

すずかも出撃だね！

すずか『お願い!』

ピカチュウ「ピカチュウ！」

マキシマムライナー発射!

ドキュン!

ピカチュウがスタッグフォンを操作するとマキシマムライナーが発射された。

すずか「ピカチュウ！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

もうすぐマキシマムライナーが来るよ!

フアーン!

ピカチュウ「ピカ！」

来た！

すずか「よし！ライナーチェンジ！」

マキシマムライナーが変形するとファイターモードになった。

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

頑張つてね〜！

すずかも乗り込み戦闘に加わった。

ピカチュウ「ピカチュウ〜…」

神様『ピカチュウ』

ピカチュウ「ピカ!?!」

すると突然神様から念話が届いた。

神様『私です。わかりますか?』

ピカチュウ「ピカピ?」

神様?

神様『そうです。簡潔に話します。今、ピカチュウの目の前にいるのが脱走した魔物です』

ピカチュウ「ピカ!?ピカチュウ？」

うえ!?倒せばいいの？

神様『ええ、ですが強敵です。気を付けてください』

ピカチュウ「ピカチュウ！」

わかった！

ピカチュウ「ピカ〜」

アリサ『こうなったら…：すずか！合体よ！』

ピカチュウ「ピカチュウ!?ピカピカチュウ！」

何いつてるの!?まだ実戦テストしてないよ！

アリサ『本番はいつもぶつつけよ！』

すずか『ピカチュウ！』

ピカチュウ「ピカチュウ！ピカチュウ！」

わかった！アリサ達を信じるよ！

アリサ『いくわよ！マキシマムフォーメーション！』

マキシマムファイターが分解するとメガピカチュウの手足と胴体をカバーするように纏った。

アリサ『完成！メガピカチュウマキシマム！』

魔物「ギャオー！」

アリサ『いくわよ！』

今度のメガピカチュウマキシマムはパワーもスピードも格段に上がり魔物を追い込んでいた。

アリサ『粉碎よ！』

魔物「ギャオー!!」

アリサ『消えなさい！マキシマムバースト！』

メガピカチュウマキシマムの胸から光線が出て魔物をぶっ飛ばした。

アリサ『どう!?!』

ピカチュウ「……」

魔物「……」

アリサ『なっ!?!』

煙が晴れるとそこには人間サイズになった魔物がいた。

なのは「今度は私達に任せて！」

なのは達は魔物が小さくなったので自分達が戦えると判断して立ち向かった。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

気を付けて！

アリサ「ピカチュウ！」

アリサとすずかがメガピカチュウマキシムから降りてやって来た。

すずか「戦況は!？」

ピカチュウ「ピカ…」

今…

なのは達「きやあ〜！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜…」

やられてる〜…

アリサ「今度はこっちよ！」

アリサはWドライバーを、すずかはアクセルドライバーを出した。

アリサ「ピカチュウ！」

ピカチュウ「ピカ！」

《サイクロン》コテン

《ジョーカー》

《アクセル》

アリサ「変身！」

すずか「変、身！」

アリサとすずかは仮面ライダーになると魔物に立ち向かった。

アリサ「一気にいくわよ！」

《ヒート》

《メタル》

アリサはヒートメタルになると魔物に立ち向かったが：

ガキイン！ガキイン！ガキイン！

全て受け止められていた。

すずか「パワーで駄目ならスピードはどうか！」

ガキイン！ガキイン！

すずか「うそ!？」

すずかの高速の攻撃も防がれていた。

なのは「これならどう！デイバイン…バスター！」

ゼロ距離からのなのはの砲撃が決まった。

ピカチュウ『…………』

魔物「…………」

なのは「うそ……」

魔物「ぐぎゃ〜！」

なのは達「きやあ〜！」

カシヤン…

なのは達はバリアジャケットが解けてアリサとすずかは変身が解けてしまった。

はやて「悪い…夢やね」

フエイト「くっ…」

魔物「ぐぎゃ〜！」

魔物がなのは達にトドメを刺そうとした時…

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ボルテツカ〜!

ズドン!

ピカチュウが電撃を纏って体当たりした。

アリサ「ピカチュウ!逃げなさい!」

ピカチュウ「……」

ピカチュウはアリサ達を守るように立ちはだかった。

魔物「ぐるるる」

ピカチュウ「ピカチュウ……」

出来る事なら使いたく無かった……

アリサ「ピカチュウ?」

ピカチュウ「ピカピ……ピカチュウ」

アリサ……巻き込んでごめん。

アリサ「何いってるの?」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

ここからはボクの戦いだ!

《カメンライド》

ピカチュウ「ピカ！」

変身！

《《ディケイド》》

ピカチュウのシルエットが大人の姿になるとマゼンダ色の仮面ライダーになった。

ピカチュウ「ピカピ！」

いくよ！

ガキイン！ガキイン！ガキイン！

魔物「ぐるあ！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウはライトブツカーのソードモードで一進一退の戦いを繰り返していた。

すずか「凄い…：互角に戦ってる…」

ピカチュウ「ピカ！」

《《アタックライド》》

ピカチュウ「ピカチュウ！」

釣はいらないよ！

《ブラスト》

ドドドン！

魔物「ぐぎや!？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

こいつはおまけだ！

《ファイナルアタックライド》

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

《デイ、デイ、デイ、デイケイド》

ピカチュウはジャンプするとカードのシルエットを通り魔物に蹴りをかました。

魔物「ぐ、ぐ、ぐ…ぐぎや〜！」

ズドン！

魔物は爆発すると消滅した。

ピカチュウ「ピカ…」

勝った…

アリサ「ピカチュウ…」

ピカチュウ「ピカチュウ」カシヤン

ピカチュウは変身を解くと…

ピカチュウ「ピカピ」

アリサ達にグミを配った。

フエイト「ふう」

アリサ「ピカチュウ…」

ピカチュウ「ピ…」

アリサ「何でデイケイドになってるのよ!」

ピカチュウ「ピカピ!?!」

怒る所そこ!?!

アリサ「あんな魔物なんて些細な事よ!デイケイドになってる方がムカつくわよ!」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

遂に話す時が来てしまった…

アリサ「ピカチュウ?」

ピカチュウ「ピカピ。ピカチュウピカチュウ」

ボクはね。普通のネズミじゃないんだ。神様に頼まれてこの世界にやって来たの。

アリサ「神様？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

でもボクの使命は終わったみたい。

ピカチュウはアリサに近付くと：

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウ」

アリサ、今日から君が仮面ライダーだ。

ピカチュウはジャケットからロストドライバーを出すとアリサに渡した。

ピカチュウ「ピカチュウ」

元気でね。

ピカチュウは背を向けて立ち去ると：

アリサ「一匹で勝手に盛り上がるな！」

スカン！

ピカチュウ「ピツカ〜！」

アリサはロストドライバーを投げるとピカチュウの頭に当てた。

ピカチュウ「ピカピ!？」

何するの!?

アリサ「アンタが変な事を言うからでしょ! アンタが神様の使いで
も何でも! もうアンタは私のパートナーなの!
」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

でも、ボクの使命に巻き込んだんだよ!

アリサ「あれくらい何だって言うの!」

ピカチュウ「ピ…」

アリサ「アンタはもう私のパートナーなの! わかった! 返事は!」

ピカチュウ「ピカ! ピカチュウ!」

はい! わかりました!

こうしてピカチュウはアリサの下でまた暮らす事になった。

第五話

ピカチュウ「ピカ〜…」ジジジジ

魔物との戦闘から数日、ピカチュウはPマシンの整備をしていた。

ピカチュウ「ピカチュウ」ジジジジ!

終わった。

どうやら整備を終えたらしい。

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

お家に帰ろう〜♪

ピカチュウはアリサの邸に戻った。

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

アリサ「わっと!お帰り」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

すずか「Pマシンはどうだった?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

特に問題はないよ。

アリサ「なら、よかったわ」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

そう言えば進路は決まった？

アリサ「ええ。私とすずかは高校に行くことにしたわ」

すずか「なのはちゃん達は管理局に入るって」

ピカチュウ「ピツカ」

そっか。

アリサ「さて、後は…」

ピカチュウ「ピカ？」

アリサ「高校に入ったら即バイクの免許を取らないとね」

すずか「私も」

ピカチュウ「ピカチュウ」

頑張ってね。

そして歳月が立ち、アリサ達が高校に入学してから数ヶ月…

アリサ「ピカチュウ〜！」

ピカチュウ「ピ〜カ〜チュ〜ウ〜！」

アリサが邸でピカチュウを呼ぶとピカチュウが走ってきた。

ピカチュウ「ピカピカ？」

アリサ「見なさい！免許が取れたわよ！」

ピカチュウ「ピッピカピく♪」

ピカチュウは紙吹雪を散らした。

アリサ「さあ、私にハードボイルダーを頂戴」

ピカチュウ「ピ？」

アリサ「リボルギャリーが有るんだからハードボイルダーもあるでしよ？」

ピカチュウ「…ピカチュウ」

…わかった。

ピカチュウはアリサにハードボイルダーを渡すことにした。

アリサ「早速、ツーリングよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウベースに行こう。

アリサ「わかったわ」

アリサとピカチュウは途中でずかど合流してピカチュウベースに向かった。

アリサ「遂にこの時が来たのね」

ずか「いいな」

ピカチュウ「ピカ」

スタックフォンでリボルギヤリーを展開した。すると…

アリサ「ハードボイルダー！…ともう一台？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

PSI。

アリサ「それで？こんな作ってどうするの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

これはずかの分だよ。

ずか「私の!?わーい♪」

アリサ「なら、早速ツーリングに行くわよ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサとずかはバイクに乗ると、ピカチュウはアリサの後ろに乗り一緒にツーリングに出掛けた。

ピカチュウ「ピッ！カ！ピ！ピッ！カ！ピ！ピッカピッカピッカピ
！」

今日はアリスとすずかの高校の体育祭でピカチュウは応援席で学
ランを着て応援をしていた。

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ピカチュウの応援が効いたのかアリスは徒競走で一位を取った。

アリス「ふう」

すずか「ピカチュウ〜♪可愛かったよ♪」

どうやら学ラン姿はすずかのツボにハマったようだ。

アリス「しかし何処から調達したの？この学ラン」

ピカチュウ「ピカチュウ」

作ったの。

アリス「もはや、何でもありね」

ピカチュウの凄さを改めて知ったアリスとすずかだった。

すずか「さあ、お弁当にしよう」

ピカチュウ「ピカ♪」

アリサとすずかはピカチュウを混ぜて一緒にお昼を楽しんだ。

ピカチュウ「ピカ〜…ピク〜…」

何気ない日常をピカチュウは穏やかに過ごしていた。

アリサ「何気ない日常っていいわね」

すずか「ちよつと前までは殺伐としてたからね」

ピカチュウ「ピク〜…」

アリサ「ふふ♪」

アリサとすずかはピカチュウと一緒に穏やかに高校生活を過ごした。

アナザー4

第一話

ピカチュウ「ピく…」フリフリ

アリサ「ただい…」

ピカチュウ「ピカチュウく！」

アリサ「まつと。相変わらぬ出迎えね」

ピカチュウ「チャく♪」

ピカチュウはアリサが帰ってくるのと派手に出迎えた。

アリサ「さあ、着替えましょう。今日ははやてが来るからね」

ピカチュウ「ピカ？」

アリサ「すぐかも呼ばれてるらしいから。十中八九厄介事よ」

ピカチュウ「ピカチュウく」

お出掛けしてきまーす。

アリサ「アンタも参加よ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

やっぱり。

アリサ「行くわよ」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

アリサは着替えると庭でお茶をしながらすずかとはやてを待った。

アリサ「…で？用件は？」

はやて「簡単に言うと協力をお願いしたいんや」

すずか「協力？」

はやて「そうなんよ。もうすぐとてつもない事件が起きようとする。それを防ぐには人が足らんのだ」

アリサ「って言われても」

すずか「今、卒業前だし」

はやて「卒業してからでええんや。頼めへん？」

アリサ「普通ならプロに頼みなさいよ」

はやて「色々あってプロも足らんのだ」

すずか「色々な意味で駄目だね」

はやて「全くもって申し訳ない」

アリサ「ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ？」

アリサ「どうする？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

引っ越しが大変だね。

すずか「引っ越しが？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

主に引っ越し費用が。

はやて「そのくらいは持つよ」

ピカチュウ「ピカピ？」

本当に？

はやて「ホンマや」

ピカチュウ「ピカ」ニヤリ

カチャ

はやて「何やそれ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ICレコーダー。

はやて「何か嫌な予感…」

ピカチュウ「ピカッ！ピカチュウピカチュウ」

いやッ！助かるよ。ピカチュウベースの引越し費用はお金がかかるから。

はやて「ちよつと待った！」

ピカチュウ「ピカ？」

はやて「幾らするん？」

ピカチュウ「…ピカ」ポチポチポチ

はやて「高っ！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

費用ヨロシクね。

アリサ「無事解決ね」

はやて「ノオッ…」

はやては見事にピカチュウに嵌められた。

アリサ「こんなもんかしら」

そして月日が流れ卒業したアリサとすずかは引越しの為に荷物を纏めていた。

ピカチュウ「ピカチュウ？」

それで全部？

アリサ「ええ。そうよ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ミニミニピカチュウ「チュウ〜！」

ピカチュウが荷物を確認するとミニミニピカチュウが荷物を運んだ。

アリサ「さあ、明日に備えて寝ましょ」

ピカチュウ「ピカ。チャ〜…」

ピカチュウはベットの隅で眠った。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

発進！

翌日、早朝からピカチュウとアリサとすずかを乗せたピカチュウベースが次元を越える為に発進した。

ピカチュウ「ピく…」ポチポチ

アリサ「どれくらいで着くの？」

ピカチュウ「ピカく…」

えつとねく…

ズズン

すると突然ピカチュウベースが揺れた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

着いたよ。

すずか「速いよ！」

ピカチュウ「ピカチュウく♪」

やっちまったく♪

スパン！

アリサ「自重しなさい」

ピカチュウ「ピく…」

はーい…

アリサはピカチュウを抱っこするとすずかと一緒に外に出た。

はやて「ようこそ。機動六課へ」

アリサ「来たわよ」

すずか「よろしくね」

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

フェイト「久しぶり二人とも」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

フェイト「わっと。ピカチュウも元気だった？」

ピカチュウはアリサの腕からフェイトに飛び移った。

ピカチュウ「ピカ！」

フェイト「よかった」

アリサ「私達はどうすればいいの？」

はやて「そやね…」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

シミュレーターでガジェットと戦ったら。

フェイト「そうだね。今のうちに慣れてもらつた方がいいと思う」

アリサ「着いて早々に訓練？」

はやて「あく…それもそうやね」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

なら、見学？

はやて「それが無難やね」

アリサ「決まりね」

はやて「なら、案内するわ」

はやてを先頭に各施設を案内した。

アリサ「何て言うか…」

すずか「質素だね」

はやて「ピカチュウベースと比べとんといて」

アリサ「…慣れて嫌ね」

すずか「そうだね」

はやて「まあ、一通り見たな」

アリサ「訓練施設は？」

はやて「ああ！忘れとった」

はやては訓練施設の方に足を進めた。

アリサ「アレが敵の戦力？」

アリサ達はFW陣の訓練を見ていた。

はやて「せや。ガジェットと呼んどる」

すずか「うくん…アレで私達の戦力が必要？」

はやて「……」

アリサ「はやて？何か隠してるわね？」

はやて「ちよつとだけ待ってくれへん？話せる時になったら話すから」

アリサ「訳ありみたいね」

すずか「うん、待つよ」

はやて「おおきに」

ピカチュウ「ピカ」

さて。

はやて「どうしたん？」

ピカチュウ「ピカ」

はやて「何や？その手は？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

引っ越し費用頂戴。

はやて「あ、急用思い出した」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

逃げないで！

はやて「チツ」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

さあ、払って！

はやて「えへ？」

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウ」

アリサ、すずか。地球に帰るよ。

はやて「わく！待った！払うから！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

全く。

はやて「がめついやから」

ピカチュウ「ピカピ？」

何か言った？

はやて「いえ、何も」

はやては六課の予算から支払いを済ませた。

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

まいど〜♪

一気に懐が膨れた。ピカチュウだった。

第二話

ピカチュウ「ピカ〜…ピ〜…」

六課の芝生の上で暢気にお昼寝をしているピカチュウだった。

キャラ「あ〜！ピカチュウだ〜♪」

ティアナ「知ってるの？その生き物」

キャラ「はい。フェイトさんのお友達のペットらしいです」

スバル「へえ〜。可愛いね」

ピカチュウ「ピ〜…？チャ〜♪」

エリオ「あ、起きた」

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ？」

うん？どうしたの？

エリオ「何を言ってるかわからない」

キャラ「えつとね、お昼寝をしているの見付けただけなの」

ピカチュウ「ピツカ〜」

そっか〜。

スバル「キャラ、何を言ってるかわかるの？」

キャラ「はい」

ティアナ「ほら、訓練の時間よ。行きましょ」

キャラ「またね、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

ピカチュウは手を振って見送った。

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウがFW陣を見送ってから少しすると…

ビー！ビー！

ピカチュウ「ピカ!？」

ピカチュウは作戦指令室に向かった。

はやて『教会本部から出動要請や。レリックを運んでいたリニア
レールがガジエットに襲われとる。最初からキツイ出動や、皆行ける
か?』

FW陣「はい！」

なのは「私達も大丈夫だよ」

はやて『なら、機動六課！出動や!』

なのは達「了解！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

いってらっしゃーい！

なのははF W陣とアリサ達を連れて出動した。

ピカチュウ「ピカチュウ〜…」

ピカチュウは指令室で戦況を見ていた。

なのは『こちらスターズ1、ガジェット殲滅確認』

ルキノ「了解、残像反応…！増援反応確認！これは…：巨大な反応が向かってます！」

なのは『…目視で確認！これは…』

モニターが切り替わると巨大なガジェットが確認された。

アリサ『ピカチュウ！すぐに来なさい！』

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

ピカチュウはピカチュウベースに入ると…

ドキュン！ドキュン！ドキュン！ドキュン！ドキュン！

Pライナーに乗って出動した。

ピカチュウ「ピカ〜！ピカピ〜！」

アリサ side

アリサ「でかいわね」

なのは「私達が時間を稼ぐよ！」

フエイト「はあ〜！」

なのはとフエイトが巨大ガジェットに立ち向かった。

アリサ「ピカチュウはまだなの！」

すずか「そんなにすぐには来れないよ」

アリサ「そうは…なのは！」

なのは「ッ!？」

巨大ガジェットがなのはに照準を合わせてレーザーを発射しようとしたとき…

シュシュポポ！シュシュポポ！ドカン！

Pライナーが駆けつけ体当りした。

アリサ「無茶するわね」

ピカチュウ『ピカチュウ〜！』

アリサ「電撃合体！」

ピカチュウがPマシンを発進させるとアリサは乗り込みすぐに合体させた。

アリサ「行くわよ！」

アリサはメガピカチュウで立ち向かった。

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

すずか「わっと！」

すずかは飛び降りてきたピカチュウをキャッチした。

すずか「アリサちゃんだけで大丈夫そうだね」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ『とどめよ！サンダーナックル！』

バチン！

アリサは巨大ガジェットのコアを破壊した。

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

アリサの勝利にピカチュウは雄叫び？をあげた。

アリサ『帰還するわよ』

アリサがPマシンを戻すとなのは達と一緒に帰還した。

第三話

はやて「お疲れさまや」

ティアナ「あのく…」

作戦指令室では事件解決の報告会が行われていた。

なのは「どうしたの？」

ティアナ「あの、巨大なロボットは何ですか？」

はやて「うちの切り札や」

スバル「切り札ですか？」

フェイト「正確には後一機あるけどね」

エリオ「管理局にあんなものがあつたんですね」

はやて「ちやうで。あれは…」

アリサ「アレは私だよ」

キャロ「個人の持ち物なんですか!？」

すずか「私も持つてるよ」

はやて「けど用意しておいて正解やったね」

フェイト「メガピカチュウがなかったら危なかったよ」

はやて「問題は次の手やね」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

分析結果だけど。

はやて「どやった？」

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウ」

簡単な作りだから生産が速いと思う。

はやて「となると数でこられたら不利やね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

質なら負けないよ。

はやて「最大で何体同時に相手出来る？」

アリサ「よくて二、三体ね」

すずか「私も」

はやて「少なくとも四体が限界やね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

そうだね。

はやて「これからは気を付けんとな。よし、皆解散や。鋭気を養つてや」

なのは達は解散すると各自部屋に戻った。

ピカチュウ「ピカ〜…」

フェイト「どう？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

大体解析出来てるよ。

フェイト「何か手掛かりはあった？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

作者の名前が掘ってあった。

フェイト「作者の？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

余程の自信家だね。

フェイト「名前は？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

スカルエツテイって掘ってあった。

フエイト「次元犯罪者にいたよ。そんな名前の人物」

ピカチュウ「ピカチュウ」

多分同一人物だね。

フエイト「根拠は？」

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウ」

ボクが調べた時も次元犯罪者だったから。

フエイト「なら、确实だね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

資料に纏めとくね。

フエイト「お願い」

ピカチュウ「ピカ〜…」

でも〜…

フエイト「何かある？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

実はね。

フエイト「教えてくれる？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

実はこないだの戦闘に巨大ガジェットを投入する意味がわからない。

フエイト「どういうこと？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ボクなら巨大ガジェットは隠しとくね。

フエイト「まさか…こちらの戦力を把握された？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

その可能性が高い。

フエイト「問題は何？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

一応解析出来ないようにしてはあるから。

フエイト「なら、安心かな」

ピカチュウ「ピカチュウ」

油断しないでね。

フエイト「うん」

ピカチュウ「ピカチュウ」

Pマシン整備してくるね。

フエイト「うん。ピカチュウも適度に休むんだよ」

ピカチュウ「ピカピク」

またねく。

ピカチュウはPマシンの整備に向かった。

第四話

ピカチュウ「ピカチュウく…」

アリサ「どうしたの？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

ちよつとね。最近出勤が多い気がする。

アリサ「そうね。確かに…」

ビー！ビー！

ピカチュウ「ピカ!？」

アリサ「言ってるそばから」

アリサはピカチュウを連れて作戦指令室に向かった。

はやて「街中に巨大ガジェットが現れた。近くでロストログアの展覧会が行われていることからコレに引き寄せられた可能性が高い」

ピカチュウ「ピカチュウ」

それはないかな。

はやて「違うやて？」

ピカチュウ「ピカチュウ？ピカチュウ」

アレだけ巨大な物が積んでるセンサーだよ？そんな間違い犯すかな？

アリサ「確かに…」

はやて「何はともあれ出動するしか選択はないっちゆうことや」

ピカチュウ「ピカチュウ」

悔しいけどね。

アルト「八神部隊長！増援反応です！」

アリサ達がモニターを見ると巨大ガジェットが増えていた。

はやて「早速増やしてきたな」

ピカチュウ「ピカチュウ」

そうだね。

アリサ「とにかく出るわ」

すずか「私も」

はやて「お願いや。スターズとライトニングはヘリで出動や」

なのは達「了解！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ピカチュウはPライナーを発進させるとマキシマムライナーも発進させた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

まもなく現場に到着だよ。

アリサ『了解』

ピカチュウ「ピカ〜…ピカチュウ！」

キキイー！

ピカチュウはPライナーを停止させるとハッチを開けた。

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

頑張つてね〜！

ピカチュウはアリサを見送るとへりに向かって…

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

飛び移った。

フェイト「わあ!?驚かせないで！」

ピカチュウ「ピカ〜」

いや〜。

なのは「順調だね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

油断出来ない。

なのは達が戦いを見ていると…

ガシッ！

巨大ガジェットがケーブルを伸ばしてメガピカチュウとマキシマムファイターを縛った。

アリサ『なあ!?!振りほどけない!』

ピカチュウ「ピカチュウ！」

やっぱり強化されてる！

ズズン！

すると三体目が現れた。

フエイト「三体目!?!」

三体目巨大ガジェットはメガピカチュウとマキシマムファイターにレーザーの嵐を繰り出した。

すずか『きやあく!?!』

アリサ『ピカチュウく!何とかしなさい!』

フエイト「ピカチュウ！何とか出来ない!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ〜!」

いつてきまーす!

ピカチュウはPライナーに戻ると…

シュシュポポ!シュシュポポ!

Pライナーを発進させた。

ピカチュウ「ピカピカチュウ!」

ライナーフォーメーション!

Pライナーが分離して再びくつつくと…

ピカチュウ「ピカピ!ピカピピカチュウ!」

完成!バトルピカチュウ!

キキイー!

バトルピカチュウが着地するとそのまま…

ドカン!

三体目の巨大ガジェットを殴り飛ばした。

ピカチュウ「ピカ！」

バトルピカチュウはメガピカチュウとマキシマムファイターを縛ったケーブルを引きちぎった。

すずか『おつきいね』

ピカチュウ「ピカチュウ」

流石にね。

ピカチュウが返事をしてる間に相手も体勢を立て直した。

ピカチュウ「ピカピ！」

行くよ！

ピカチュウの掛け声と共にアリサ達も向かった。

ピカチュウ「ピカピ！ピカチュウ！」

くらえ！電撃の嵐を！

バトルピカチュウが両手を前に突き出すと：

ライトニングストーム！

電撃の嵐を三体のガジェットにくらわせた。

巨大ガジェットはショートすると機能を停止させた。

ピカチュウ「ピッピカチュウ〜！」

アリサ『美味しい所を！』

このあと理不尽にもアリサに説教された。

第五話

ピカチュウ「ピカチュウく…」

なのは「ピカチュウ？どうしたの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

作戦指令室でピカチュウは今までの戦闘を見ていた。

なのは「戦闘映像？」

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウ」

ちよつと気になる事があるから調べてたら嫌な事がわかったの。

なのは「何か？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

あの巨大ガジェット、学習してる。

なのは「学習してる？」

ピカチュウ「ピカ。ピカチュウ」

うん。AIを育ててるみたい。

なのは「それって私達の事を勉強してるってこと？」

ピカチュウ「ピカ」

なのは「対策は？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリス達には手加減して戦ってって言うてある。

なのは「それしかないよね」

ビー！ビー！

なのは「警報!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

出現頻度も増える。

なのはとピカチュウは作戦指令室で皆が集まるのを待った。

はやて「また、巨大ガジェットや」

ピカチュウ「ピカピ…」

これは…

ピカチュウ「ピカチュウ」

潰しにかかってきてるね。

はやて「と言うて出勤しない訳にはいかへんやろ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

行くしかない。

はやて「頼むわ」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウはPライナーを発進させた。

ピカチュウ「ピ…」ポチポチ

ピカチュウがハッチを開けるとアリスが出勤していき…

すずか「ライナーチェンジ！」

すずかも出勤していた。

ピカチュウ「ピカチュウ…」

ピカチュウが戦いを見守っていると…

アリス『これで！おしまいよ！』

アリスがとどめを刺そうとした時…

ガシッ！

すずか『うえ!?!』

ピ…ピ…ピ…

ズドン！

巨大ガジェットはメガピカチュウとマキシマムファイターをケールで抱き寄せて自爆した。

アリサ『きやあく!?!』

すずか『あれ！動かない！』

ピカチュウ「ピカチュウ！」

やられた！

ズズン！

すると三体目がまた現れた。

ピカチュウ「ピカピ！」

まずい！

ピカチュウは急いでバトルピカチュウに変形させた。

ピカチュウ「……」

ピ…ピ…

ピカチュウ「ピカチュウ!?!」

ピカチュウは三体目にも時限爆弾が設置されてるのに気付いた。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

仕方ない！

バトルピカチュウはガジェットに覆い被さると…

ズドン！

爆発を一手に引き受けた。

シュー…

ピカチュウ「ピカチュウ…」

バトルピカチュウもダメージが大きすぎて動けなくなってしまった。

はやて「迂闊やった…まさかこんなに早く潰しにくるとわ」

なのは「メガピカチュウは？」

ピカチュウ side

ミニミニピカチュウ「チュウ〜！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

アリサ side

アリサ「今、ピカチュウが突貫で修理してるわ」

はやて「どのくらいかかりそうなん？」

アリサ「結構ダメージが大きいみたい」

はやて「まいったな」

フェイト「そう言えばPマシンって余ってなかったっけ？」

アリサ「ええ。重機シリーズがね」

フェイト「使えない？」

アリサ「運転なら問題ないけど戦闘に使うのは難しいわよ？」

はやて「最悪それを借りないとあかんのやね」

手詰まりなはやて達だった。

第六話

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

アリス「ピカチュウ、どう？」

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウ」

まだ時間はかかる。

すずか「マキシマムライナーは？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

同時進行で進めてる。

ピカチュウは作業の進み具合を見ながら答えた。

アリス「最悪重機シリーズで出るわ」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

どこまで通用するか…

ピカチュウは不安そうにしていた。

アリス「ほら、林檎ジュースよ」

ピカチュウ「ピカ♪ぐびぐび♪」

ピカチュウは林檎ジュースを貰って作業に戻った。

アリサ「さて…」

するか「とにかく戻ろう。私達に出来そうな事はなさそうだから」

アリサ「そうね」

アリサとすずかはピカチュウベースを後にした。

ピカチュウ「ピカチュウ！ピカチュウ！」

ミニミニピカチュウ「チュウ〜！」

ピカチュウは逐一ミニミニピカチュウに指示を飛ばしていた。

ビー！ビー！

ピカチュウ「ピカチュウ!?!」

ピカチュウは急いで作戦指令室に向かった。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

はやて「残念な知らせや。巨大ガジェットが暴れとる」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

こちらが出れないのを見越してる！

はやて「Pマシン出せるか？」

ピカチュウ「ピ…」

ピカチュウは首を振った。

なのは「私達が何とかするよ」

フエイト「任せて」

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「私達も出るわ」

なのは「ありがとう」

なのは達は出動していった。

ピカチュウ「ピ…ピカ！」

するとピカチュウもピカチュウベースに急いで戻った。

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ミニミニピカチュウ「チュウ!?チュウ〜！」

何やらミニミニピカチュウに指示を出すと慌ただしくなった。

アリサ side

アリサ「とはいってもこのデカブツを相手にするのはちよっとキツいわね」

すずか「そうだね」

なのは「様子見で一発。デイバイン…バスター！」

バチバチ！

フェイト「AMFが積んでる」

アリサ「となると魔法は効かないわね」

アリサ達が手詰まりになっていると…

バラバラバラバラバラ！

すずか「何の音？」

ピカチュウ『ピカチュウ〜！』

巨大なヘリコプター、新たなPマシンの登場である。

アリサ「新しいPマシン!？」

フェイト「まだあったんだ」

ピカチュウ『ピカチュウ！』

任せて！

シュポ！

ピカチュウはミサイルポットからミサイルを連射した。

ドドン！ズズン

巨大ガジェットは後ずさりした。

ピカチュウ『ピカ〜！ピカチュウ！』

よーし！電撃合体2だ！

アリス「電撃合体2ですって!？」

ピカチュウ『ピカチュウ…』

まだ試験段階だけど…

すずか「危険だよ！」

ピカチュウ『ピカチュウ！』

やるツ気やない！

ピカチュウ『ピカチュウ〜！』

重機シリーズ発進！

ブオ〜！

重機シリーズが発進すると…

ピカチュウ『ピカチュウ！』

電撃合体2！

ガシャン！

ダンプカーが両足、シヨベルが右手、ミキサ―が左手、ヘリコプターが胴体に合体した。

ピカチュウ『ピカピ！ピカピツカー！』

完成！メガピツカー！

ガシャン！

メガピツカーは胸のヘリコプターのジャイロを外すと…

ピカチュウ『ピカチュウ！』

メガカッター！

巨大ガジェットに投げつけた。

ザシュ！

ピカチュウ『ピカ』

敵を切り裂いたジャイロをキャッチすると胸に填めた。

ピカチュウ『ピカチュウ!』

ダンプラツシュ!

メガピツカーがジャンプすると高速で連続の蹴りを続けた。

ピカチュウ『ピカ!?ピカチュウ!』

うえ!?ミキサーシールド!

ピチュン!

ピカチュウはミキサーの後部を展開するとシールドのように広げ
ビームを防いだ。

ピカチュウ『ピカ、ピカチュウ!』

よし、とどめだ!

メガピツカーはシヨベルにエネルギーを充填させると…

ピカチュウ『ピカチュウ!』

パワードナクツル!

ガシャン!

メガピツカーは巨大ガジェットを粉碎した。

第七話

アリサ「さあ、吐け」カツ!

ピカチュウ「ピカチュウく…」

つい出来心で…

ピカチュウは機動六課に戻ると尋問を受けていた。

アリサ「一体いつから作ってたのよ?」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

隠れてちよつとずつ。

すずか「何で隠れて作ってたの?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

それには訳があるの。

アリサ「どんな?」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

アレのパイロットは…

アリサ、すずか「パイロットは?」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

ボクかフェイトって決まってるの。

アリサ、すずか「ちよつと待った!」

ピカチュウ「ピカ?」

アリサ「何で限定なのよ!」

ピカチュウ「ピカチュウ」

もう専用機あるでしょ。

すずか「いいじゃんもう一つ位!」

ピカチュウ「ピカチュウ?」

予算だって無限じゃないんですよ?

アリサ「ようは予算があれば作るのね」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「はやて、予算出しなさい」

はやて「いきなり無理難題言うな!」

すずか「戦力を上げる為だよ」

ピカチュウ「ピカピ?」

本音は？

アリサ、すずか「ロボットが欲しい」

はやて「自腹で買え〜！」

キレルはやてだった。

ピカチュウ「ピカチュウ」

とりあえずフェイトにメガピツカーのパイロットを頼むよ。

フェイト「私？」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

免許、更新してるでしょ？

フェイト「一応」

ピカチュウ「ピカチュウ」

戦力は多い方がいいからね。

はやて「まあ、そやね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

じゃあ残りのPマシンを直してくるね。

アリサ「頼むわ」

ピカチュウはピカチュウベースに戻った。

はやて「全く、何処に予算隠しとるやろ」

アリサ「少なくとも六課の予算よりは持つてるんじゃない」

はやて「…否定出来へん」

アリサ「一度調べた方がいいのかしら？飼い主として」

すずか「いいんじゃない？ピカチュウにだって隠したい事の二つや二つあるだろうし」

アリサ「それもそうね」

なのは「意外とPマシンが隠してあったりして」

アリサ、すずか「……ちよつと査察してくる」

はやて「ウチも行こうつと♪」

アリサ達は隠してあるPマシンを、はやてはピカチュウの弱味を探しに向かった。

なのは「ちよつと!?!」

フェイト「待ってよ!」

慌ててなのは達とFW陣も追いかけた。

ジジジジ

ピカチュウ「ピカ〜…」

格納庫では急ピッチでPマシンの修理が行われていた。

アリサ「ピカチュウ〜」

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ？」

うん？どうしたの？

アリサ「吐け」

ピカチュウ「ピカ？」

何を？

アリサ「まだPマシン隠してあるでしょ？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

もうないよ！

すずか「早くバラした方が身のためだよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

濡れ衣だよ！

はやて「今なら怒らへんよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

無いつたら！

すずか「格納庫漁るよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

修理の邪魔！

アリサ「ピカチュウ？教えなさい。あるんでしょ」

ピカチュウ「…ピカピ！」

…ないよ！

アリサ、すずか「ギルティ！今、間があつた」

ピカチュウ「ピカチュウ!？」

それだけで!?

ピカチュウの言い分は信じてもらえなかった。

ピカチュウ「ピカチュウ！ピカチュウピカチュウ！」

なら探してみて！無かつたらロボット没収するからね！

アリサ、すずか「うん、やめよう」

はやて「諦めるの、はやっ！」

アリサ「ピカチュウを信じましょう」

はやて「さっきと意見が違うで！」

すずか「疑うなんてよくないよ」

はやて「お前もか！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

忙しいから終わりにして。

アリサ達は格納庫を後にして自室に戻った。

第八話

ピカチュウ「ピカ〜…ピカ♪」ジジジジ!

ピカチュウはやつとの思いで修理を終えた。

ピカチュウ「ピカチュウ〜?」

アリサいる〜?

アリサ「ん?どうしたの?」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

Pマシン直った〜。

アリサ「ありがとう♪いらっしやい」

ピカチュウ「ピカ♪」

ピカチュウはアリサの膝の上に乗ると…

アリサ「頑張ってくれたわね」

ブラシで毛繕いしてもらった。

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

ピカチュウは気持ちよさそうに目を細めた。

ビー!ビー!

ピカチュウ「ピカ!？」

アリサ「行くわよ!」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

アリサはピカチュウを連れて作戦指令室に向かった。

はやて「休暇中のFW陣から緊急連絡や。レリックとおぼしきケースと女の子を保護した。アリサちゃんとすずかちゃんはケースと女の子の保護に向かって欲しい」

アリサ「わかった」

アリサとすずかはへりで現場に向かった。

ピカチュウ「ピカく…」ポチポチ

ピカチュウも周囲の警戒に手を貸していた。

ピカチュウ「ピカ!？ピカチュウ!」

うん!?砲撃のチャージを確認!

アリサ『何ですって!?!』

ピカチュウ「ピカチュウ!」

着弾まで十秒!

アリサ『ピカチュウ!』

《《ヒート》》コテン

《《メタル》》

アリサ『変身!』

《《ヒート・メタル》》

アリサ『ええい!』

《《メタル! マキシマムドライブ!》》

アリサ『メタルブランディング!』

アリサは変身したと同時に外に出るとマキシマムドライブを放つて…

ズドン!

すずか『きやあ!?!』グラグラ

砲撃を相殺した。

アリサ『ロングアーチ!』

シャーリー「今、フェイト隊長が向かってます!」

フェイトが砲撃した犯人を追跡していた。

アリサ『……』

シャーリー「犯人追跡……ロストしました！」

アリサ『仕方ない。戻るわよ』

アリサは変身を解除すると帰還した。

ピカチュウ「ピカ〜…」ジジジジ!

アリサ「ピカチュウ〜?来たわよ」

ピカチュウ「ピカ」

すずか「私達に用事って何？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

《トライアル》

アリサ、すずか「あ〜!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

完成したの。

すずか「貰っていいよね!? 答えは聞いてない!」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

作品が違う!

アリサ「それで? 私も呼んだからにはあるんでしようね?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

エクストリーム「ピー」

エクストリームメモリが現れた。

アリサ「これでバッチリね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

安易に使わないでね。

すずか「どうして?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

一応切り札だから。

アリサ「そうね。わかったわ」

すずか「私も」

二人は納得するとピカチュウベースを後にした。

ピカチュウ「ピカ〜…」

そして二人が帰った後、ピカチュウがPコプターの調整、メンテをしていると…

ピリリリ♪

ピカチュウ「ピカピカ？」

アリサ『あ、ピカチュウ？悪いんだけどなのはの部屋まで来てくれる？』

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウは隊舎のなのはの部屋に向かった。

ピカチュウ「ピカチュウ〜？」

アリサ「はやかっ…」

？「行っっちゃだ〜！」

ピカチュウ「ピカ？」

アリサ「たわね。いらっしやい」

アリサはピカチュウを抱っこして部屋の中に戻った。すると中ではFW陣にすずか、はやて、フェイト、なのはが居り、なのはの足には保護された子共、ヴィヴィオが泣いて引っ付いていた。

アリス「何とか出来ない？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

ボクはベビーシッターじゃないよ。

ヴィヴィオ「……」じー

ピカチュウ「ピカ？」

ヴィヴィオ「……」ガシツ！

ピカチュウ「ピカチュウ!!？」

なのは「ピカチュウ、後はお願いね」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

なのは達はヴィヴィオの事をピカチュウに任せて出掛けた。

ヴィヴィオ「ふかふか〜♪」

ピカチュウ「チャ〜…」

ヴィヴィオに捕まってから数時間、ピカチュウはぐったりしていた。
た。

なのは「ただいま〜」

ヴィヴィオ「……」ガシツ

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

なのは「ピカチュウ!？」

なのはが帰ってくるやとすぐにヴィヴィオはなのはに抱きついた。
それをチャンスと思いピカチュウは逃げ出した。

第九話

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ひどいよ！

アリサ「悪かったわよ」

ピカチュウ「ピカ！」

もう！

ピカチュウはアリサに生け贄にされたことを怒っていた。

アリサ「それはそうとして…」

ピカチュウ「ピカ？」

うん？

アリサ「ピカチュウ、敵の本拠地わからない？」

ピカチュウ「ピカ…」

無理…

アリサ「そうよね。まあ後手に回るけど何とかしましょう」

ピカチュウ「ピカチュウ」

そうだね。

アリサ「さあ、ご飯にしましょう」

ピカチュウ「チャ〜♪」

アリサはピカチュウを連れて夕飯に向かった。

アリサ「ふっ！」

すずか「はっ！」

ピカチュウ「……」

次の日、アリサとすずかは組み手の訓練をしていた。

ピカチュウ「…ピカチュウ〜」

…そこまで〜。

アリサ「ふう」

アリサとすずかは組み手を終わると汗を拭いていた。

ピカチュウ「ピカ〜…ピカ!?!」サツ

ピカチュウは突如アリサの影に隠れた。

アリサ「どうしたのよ?」

ピカチュウ「ピ〜！」

し〜!

ヴィヴィオ「ママ〜♪」

アリサ「あ〜…納得」

コテン

するとヴィヴィオが転び、フェイトが抱き起こしていた。

アリサ「親バカね」

すずか「そうかな？」

フェイト「いいんです!」

ヴィヴィオ「ぐす?…:…」じ〜

ピカチュウ「ピカ〜…」

ピカチュウとヴィヴィオの視線が交わった。

ヴィヴィオ「フェイトママ…」

フェイト「任せて。ピカチュウ?」

ピカチュウ「チャ〜…」

ピカチュウはアリサの影に隠れたまま動かなかった。

ヴィヴィオ「ぐす」

フエイト「ピカチュウ？泣かせたらわかってるよね？」

ピカチュウ「ピカピク」

アリサく。

アリサ「ピカチュウにも苦手なものがあるんだから少しは自重しなさい」

フエイト「でも…」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウは逃げ出した。

フエイト「あ！ピカチュウく！」

この後、ピカチュウはピカチュウベースに閉じ籠った。

ピカチュウ「ピカチュウく」ジジジジ

ビー！ビー！

ピカチュウがピカチュウベースに閉じ籠っていると警報が鳴った。

「作戦指令室」

はやて「また巨大ガジェットや」

アリサ「任せなさい」

ピカチュウ「ピカ〜」

すずか「どうしたの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

今、マキシマムライナーは出せないの。

すずか「どうして!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

メンテナンス中。

アリサ「何とかするわよ」

はやて「頼むな」

アリサ「ピカチュウ、出るわよ」

ピカチュウ「ピカ！」

ピカチュウとアリサはPライナーで先行した。

ピカチュウ「ピカ〜!ピカチュウ〜!」

キキイ!

Pライナーが現場に着くとPマシンを発進させた。

アリサ『電撃合体!』

ガシャン!

アリサはPマシンを合体させると巨大ガジェットに立ち向かった。

ピカチュウ「ピカ〜…」ポチポチ

ピカチュウがPライナーで戦況を見ていると…

アリサ『くっ』

アリサが手こずっていた。

ピカチュウ「ピカチュウ…ピカ!ピカピ!」

アリサ『こんなときに何よ!』

ピカチュウ「ピカチュウ!」

超電撃合体だ!

アリサ『はあ!?!何よそれ!?!』

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウ」

メガピカチュウと重機シリーズが合体するの。

アリサ『アンタはそれをぶっつけ本番でやれと?』

ピカチュウ「ピカピカチュウ!」

アリサなら出来るよ!

アリサ『やってやろうじゃない!ピカチュウ!』

ピカチュウ「ピカチュウ!」

重機シリーズ発進!

ブオ〜!

アリサ『超電撃合体!』

アリサの掛け声と共にメガピカチュウの両手が外れ両足のモモに着いた。そして両手にはショベルとミキサーが着き足にはダンプの荷台が起き上がりそこにメガピカチュウが乗って完成した。

ピカチュウ「ピカピ!ピカピカチュウ!」

アリサ『完成!ギガピカチュウ!』

完成するとアリサは巨大ガジェットに立ち向かい、今度はパワーの関係で有利になっていた。

アリサ『とどめよ!パワードナクツル!』

グワシヤン！

ギガピカチュウは敵を粉碎した。

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

アリサ『戻るわよ』

アリサはPマシンと重機シリーズを元に戻すとPライナーに戻った。

第十話

アリサ「さあ、吐け」

ピカチュウ「ピカチュウ!？」

何でこうなるの!？」

機動六課に戻ると尋問が始まった。

アリサ「アンタは幾つ合体を隠してるの?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

別に隠してないよ。

アリサ「じゃあ何で言わなかったのよ」

すずか「まあまあ♪教えてくれるよね?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

敵に切り札を知られたくなかったの。

アリサ「でも出しちゃったじゃない……ピカチュウ?まだ隠してるわね?」

ピカチュウ「ピフュー」

アリサ「さっさと教えなさい」

ピカチュウ「ピカチュウ」

まだもう一つあるの。

アリサ「やっぱり」

ピカチュウ「ピカピ…」

その名は…

アリサ「その名は？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

テラピカチュウ。

アリサ「まんまね」

すずか「予想通りだね」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

封印する？

アリサ「駄目よ。貴重な戦力なんだから」

ピカチュウ「ピカ」

ですよね。

はやて「まあ戦力が上がるのは歓迎や」

ピカチュウ「ピカチュウ」

使わないといいけど。

アリサ「無理でしょうね」

ピカチュウ「ピカ〜…」

ちよつと不安なピカチュウだった。

アリサ「護衛任務？」

はやて「そや。大きい会議があるから中で護衛をしてほしいんや」

すずか「別にいいけど」

はやて「ありがとう。ただ、問題があるんよ」

アリサ「問題？」

はやて「デバイスが持ち込めんのや」

アリサ「つて事は…」

すずか「ドライバーも？」

はやて「そや」

アリサ「それでどうしろと?」

はやて「何とかならへん?」

すずか「生身でも多少は戦えるけど…」

はやて「お願いや」

アリサ「わかったわ」

アリサ達も護衛任務に行くことになった。

ピカチュウ「ピカピク」

アリサ「行ってくるわ」

今回はピカチュウも出動していた。アリサとすずかはピカチュウにドライバーを預けて中に向かった。

ピカチュウ「ピク…」

ヴィータ「どうした?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

危険な匂いがする。

ヴィータ「わかった…」

ヴィータはピカチュウの直感を信じた。すると…

オペレーター『ガジェットが攻めて来ました！迎撃して下さい！』

ヴィータ「チツ！やっぱり来たか！」

ルキノ『ヴィータ副隊長！謎のランクSがそちらに向かっています！』

ヴィータ「何!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ボクはアリサ達にデバイスを渡しに行くよ！

ヴィータ「わかった！お前達はここでガジェットの迎撃だ！」

FW陣「了解！」

ピカチュウ「ピカ」

スバル「お願いね」

ピカチュウはなのは達のデバイスも預かり建物に向かった。

ピカチュウ「ピカ〜…」

しかし建物はロックされて入れなかった。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウは別の入口を探した。

アリサ side

はやて「閉じ込められたか」

フェイト「ハッキングされるなんてね」

なのは「エレベーターもロックされてるし」

アリサ「そろそろね…」

すずか「アリサちゃん？」

ガタン！ガタガタ！

局員「ッ！」

すると突然、通風口が物音を発したので回りの局員が警戒した。

ガタン！ガタガタ！ガチャン！

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

アリサ「来たわね」

ピカチュウ「チャ〜♪」

アリサ「持ってきた？」

ピカチュウ「ピカ♪」

ピカチュウはデバイスとドライバーを差し出した。

すずか「アリサちゃん、ピカチュウが来るのわかったの？」

アリサ「当然でしょ」

はやて「流石やね」

アリサ「さて、どうする？」

はやて「ここはウチが引き受ける」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ボクは加勢に行くね。

アリサ「私とすずかも加勢に行くわ」

はやて「なのはちゃん達はFW陣と合流してや」

なのは「わかった」

なのは達は各々別れた。

第十一話

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「ピカチュウ？まだ気にしてるの？」

先日の会議から数日、管理局の大敗で終わった。しかも機動六課も施設を破壊されボロボロだった。局員は幸いにもピカチュウベースに避難したので無事だったがヴィヴィオだけは拐われてしまった。

ピカチュウ「ピ〜…」

アリサ「気にしないの。アンタは何でも出来る訳じゃないんだから」

ピカチュウ「チャ〜」

アリサに励まされピカチュウは元気になった。

アリサ「これからどうなると思う？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

最終戦力戦になると思う。

アリサ「テラピカチュウを出すつもりでいたほうがいいわね」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウもそのつもりでいた。

ピリリリ♪

アリサ「もしもし?…ええ、わかった」

電話を切るとピカチュウの方を向いた。

ピカチュウ「ピカ?」

アリサ「緊急会議をしたいから来てですって」

ピカチュウ「ピカ」

アリサとピカチュウはピカチュウベースに戻った。

はやて「さて、集まってもらったのは他でもない。やっとスカル
エツティの基地がわかった」

ピカチュウ「ピカピ?」

はやて「ダミーの可能性も低いそうや」

ビー! ビー!

ピカチュウ「ピカチュウ!」

ピカチュウはコンソールを出すと急いで警報の原因を調べた。

はやて「何事や！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

これを見て！

空間モニターを出すとそこには、ゆりかごが映っていた。

はやて「いかん！出動するで！」

ピカチュウ「ピカピ！ピカチュウ！」

待つて！街にも巨大ガジェットが出てるよ！

はやて「正に総力戦やな」

アリス「巨大ガジェットは任せなさい。私とすずかが抑える」

はやて「頼むわ。残りはスカルエツティの基地とゆりかごや！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ミニミニピカチュウ「チュウ〜！」

ピカチュウはミニミニピカチュウにPライナーを任せてピカチュウベースに残った。

ピカチュウ「ピカ〜！ピカチュウ〜！」

主砲〜！撃ちまくれ〜！

ピカチュウはピカチュウベースでゆりかごに攻撃していた。

はやて『ピカチュウ！もつとやったれ！』

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

悪乗りしたピカチュウはドンドンと撃ちまくっていた。

アリサ『くう〜！無駄に数が多い！』

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

頑張って〜！

すずか『限界があるよ！』

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

せめてスカルエツティの基地が無力化出来れば…

フェイト『こちら、ライトニング1。スカルエツティを逮捕しました。これより基地の無力化をします』

ピカチュウ「ピカチュウ！」

これで巨大ガジェットが停止するはず！

ほどなくして巨大ガジェットは停止した。

ピカチュウ「ピカ〜…」

ピカチュウはゆりかごの様子を見ていた。

ルキノ『ゆりかご目標地点まで、もう時間がありません!』

はやて『あかん!艦隊が間に合わん!』

ピカチュウ「ピカピ!」

はやて!

はやて『何や!こんなときに!』

ピカチュウ「ピカピピカチュウ!」

ゆりかごを破壊するよ!

はやて『出来るのか!』

ピカチュウ「ピカ」

多分。

はやて『試してくれ!』

ピカチュウ「ピカチュウ〜!」

シシユポポ♪シシユポポ♪

ピカチュウ「ピカチュウ!」

ピカチュウはPライナーに乗るとバトルピカチュウに変形した。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

超ライナーフォーメーション!!

ビルドアップしたPBロボが背中を向けると背中が開きバトルピカチュウがそこから中に入った。

ピカチュウ「ピカピ！ピカピピカチュウ！」

完成！スーパーPBロボ！

アリサ『まだそんな合体を残してたか！』

通信でアリサの叫び声がこだました。

ピカチュウ「ピカチュウ、ピカチュウ！」ポチポチ

ライナーノバア、スタンバイ！

ピカチュウ「ピカ〜ピ〜ピカ〜ピ〜。ピカチュウ〜！」

ピシャン！

ピカチュウが雨雲を呼ぶと雷が幾つもスーパーPBロボに落ちた。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

充電完了！

はやて『やったれ〜！』

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ライナーノバァ発射〜！

ズドン！ズドン！ズドン！ズドン！ズドン！ズドン！

Pライナーとマキシマムライナーの発進口から六発の砲弾が発射された。

カッ！

ズドン！！

ルキノ『ゆりかご……反応消失！吹き飛びました！』

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

ピカチュウは勝利の雄叫びを上げた。

第十二話

アリサ「さあ、吐け」ドン

ピカチュウ「ピカチュウ!？」

何で尋問されるの!?

ピカチュウはピカチュウベースの会議室で椅子に座らされ林檎を目の前に置かれた。

すずか「あんな合体残してるからだよ！」

アリサ「一番おいしい合体じゃない！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

自分達だって合体を経験してるでしょ！

アリサ「あんな合体聞いてなかったわよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ボクの専用機だもん！

アリサ、すずか「ズルい！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

わがまま〜！

フエイト「まーまー」

なのは「事件も無事に解決したんだし」

アリサ「仕方ないわね」

はやて「よっしや！ここはドーンと…」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

はやて「祝勝会や！」

アリサ「そんな予算あるの？」

はやて「割り勘に決まっとるやろ？」

はやて以外「セコイ！」

はやて「冗談や。ちゃんと用意してある。たーんと騒いでや」

はやては部下を連れてミッドチルダのお店に向かった。

はやて「では、勝利を祝って…」

アリサ達「かんぱーい♪」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」シヤリシヤリ♪

ピカチュウも特別に入れてもらった。

アリサ「凄い食べっぷりね」

スバル「ガツガツ！」

エリオ「ガツガツ！」

はやて「酒は飲めんがハイテンションでいくで！」

宴会は暫くの間続き…

はやて「さて、そろそろお勘定しよか。お姉さん、勘定お願いします」

店員「はい♪こちらになります！」

はやて「どれどれ〜…」ピシッ！

アリサ「ん？どうしたの？」

はやて「幼なじみメンバー集合」

はやて達は円陣を組んだ。

はやて「今、幾ら持つとる？」

すずか「何でそんな…はやてちゃん？幾らしたの？」

はやて「予算を余裕で越えとる」

なのは「持ってきてないよ!」

フェイト「オゴリだって言うから!」

はやて「どないしよ…」

アリサ「幾ら足りないのよ」

はやて「…一桁位」

アリサ「アホか!何を頼んだのよ!」

はやて「知らんがな!」

すずか「どうする?」

アリサ「ここは…」

はやて「皿洗い?」

アリサ「ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカチュウ?」

アリサに呼ばれてピカチュウが近付いて来た。

アリサ「支払いよろしく」

ピカチュウ「ピカピ!」

アリサ「貸しでいいから」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

ちやんと返してよ？

ピカチュウはクレジットカードを取り出した。

アリサ「支払いしてくるわ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

一括でね。

アリサが支払いに向かった。

はやて「助かった」

ほどなくしてアリサが戻って来ると皆揃って帰った。

ピカチュウ「ピカチュウ」

数週間後、ピカチュウとアリサ、すずかは地球への引っ越し作業をしていた。

アリサ「ピカチュウ、お願い」

ピカチュウ「ピカ〜」

ミニミニピカチュウ「チュウ〜！」

ミニミニピカチュウがアリサ達の荷物を運んでいた。

はやて「アリサちゃん、すずかちゃん。ホンマにありがとう」

アリサ「いいわよ」

すずか「友達だもん」

はやて「落ち着いたら顔出すわ」

アリサ「ええ。待ってるわ」

すずか「またね♪」

ピカチュウ「ピカ〜」

はやて「ピカチュウもありがとうな」

ピカチュウ「ピッピカチュウ♪」

アリサ達ははやて達に別れを告げて地球に戻り普通の日常を送った。

リターンズ 第一話

ピカチュウ「ピカ〜♪」

幾度かの世界を救ったピカチュウは天国で気ままな生活を送っていた。

神様『ピカチュウ。ピカチュウ』

ピカチュウ「ピカピ？」

神様？

神様『すみませんが私の所に来てくれますか？』

ピカチュウ「ピカチュウ」

わかった〜。

ピカチュウは神様の居る神殿に向かった。

ピカチュウ「ピカピ〜」

来たよ〜。

神様「よく来てくれました」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

どうしたの？

神様 「実は…」

ピカチュウ 「ピカピカチュウ？」

「どっかの世界が危機なの？」

神様 「はい…」

ピカチュウ 「ピカチュウ！」

任せてよ！

神様 「すみません、こちらの落ち度なのに」

ピカチュウ 「ピカピ」

気にしないで。

神様 「ありがとうございます」

ピカチュウ 「ピカチュウ…」

実はお願いがあるの…

神様 「何ですか？言つてごらんなさい」

ピカチュウ 「ピカチュウ」

神鉄が欲しいの。

神様「そんな事ですか。いいですよ、好きなだけ持つてきなさい」

ピカチュウ「ピカチュウ」

必要な分だけでいいの。

神様「そうですか。ならここで開発していきなさい。私が祝福を掛けてあげます

」

ピカチュウ「ピカ？」

いいの？

神様「そのくらい問題ありません」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

ありがとう♪

そして数日間、ピカチュウは開発を続けた。

ピカチュウ「……」ジジジジ!

ピカチュウ「ピッピカピッ♪」

神様「出来ましたか？」

ピカチュウ「ピカ♪」

ピカチュウの前にはドラゴン、獅子のロボットが並んでいた。

神様「では…」

神様が両手を伸ばすと光の粒子が飛び、ロボットに注ぎ込まれた。

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

ありがとう♪

神様「作ったのはこれだけですか？」

ピカチュウ「ピカピ」

外にもあるの。

神様「それにも祝福を掛けますか？」

ピカチュウ「ピカ。ピカチュウ」

ううん。十分だよ。

神様「そうですか？ならピカチュウ、そろそろ向かってくれますか？」

ピカチュウ「ピカ♪ピカチュウ」

ピカチュウは白いカードを取り出すとロボット達をカードにし
まった。

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウはジャケットを着ると準備万端と鳴いた。

神様「頼みましたよ」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

行つてきまーす♪

ピカチュウは新たな使命に向かった。

シユタ!

ピカチュウ「ピカ？」

ピカチュウは何処かの路地裏に転移した。

ピカチュウ「ピカチュウ」

取り合えずピカチュウは移動してみた。

アリサ「あくあく。残念」

デビット「仕方ないだろ？先に買われてしまったのは」

アリサ「そうなんだけどね」

ペットショップから出てきたアリサは父のデビットと仲良く歩いていた。

デビット「また気になる子が見つかるよ」

アリサ「うん♪」

アリサが嬉しそうにしていると…

ドン

アリサ「きゃあ!?!」

ピカチュウ「チャ〜…」

路地裏から出てきたピカチュウとぶつかった。

アリサ「何この子!?!可愛い♪」

ピカチュウ「チャ〜♪」

ピカチュウは頬擦りされてくすぐったそうにしていた。

デビット「見たこともない種類だな」

アリサ「パパ！私、この子を飼いたい！」

デビット「ふむ。野良みたいだし……いいだろう」

アリサ「ありがとう、パパ♪」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

ピカチュウもお礼を言ってみた。

アリサ「ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ？」

アリサ「決定！貴方はピカチュウよ！」

ピカチュウ「ピカ♪」

デビット「では、鮫島に迎えに来てもらおう」

デビットが電話をするとすぐに鮫島が車で迎えに来て帰宅した。

第二話

アリサ「ピカチュウ、こっちよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

アリサとピカチュウは庭を駆けて遊んでいた。

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

アリサ「ほら、来なさい」

ピカチュウはアリサに抱っこされた。

アリサ「さあ、そろそろご飯ね♪行きましょう」

アリサはピカチュウを連れて食堂に向かい食事をした。

アリサ「お風呂に入って寝ましょう」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

ピカチュウも洗ってもらい一緒に眠った。

アリサ「じゃあ、いい？私はこれから学校に行くけど大人しくしてるのよ？」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウは頷いて答えた。

アリサ「じゃあ、行ってきまーす」

ピカチュウ「ピカピくー!」

アリサは元気に学校に向かった。

アリサ「ってな事をしてたのよ」

なのは「へえく」

すずか「何て生き物なのかな?」

アリサ「写真見る?」

なのは、すずか「見る!」

アリサは二人に写真を見せた。

すずか「可愛い♪ジャケットなんかも可愛いね♪」

アリサ「最初から着てたのよ」

なのは「飼われてたのかな?」

アリサ「でも首輪をしてなかったわ」

すずか「それでピカチュウ?だっけ?」

アリサ「そうよ」

すずか「躰は大丈夫？」

アリサ「素直に言うこと聞くわよ？」

すずか「へえ、賢いんだね」

アリサ「…見に来る？」

なのは、すずか「行く！」

アリサ「決定ね」

アリサの家に集まる事になった。

キンコーン…

アリサ「授業ね」

アリサ達は授業に戻った。

アリサ「ただいま」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「わつと♪盛大なお出迎えね」

ピカチュウ「チャ〜♪」

アリサ「さあ、部屋に行きましょう。後で友達が来るから」

ピカチュウ「ピカ♪」

アリサは部屋に戻ると着替えをしてなのはとすずかを待った。

コンコン

鮫島「お嬢様、お友達がお見えになりました」

かちや

アリサ「ありがとう。いらっしやい、なのは、すずか」

なのは、すずか「お邪魔しま〜す♪」

アリサはなのは達を部屋に入れた。

すずか「あれ？アリサちゃん、ペットは？」

アリサ「そこに…あれ？居ないわ」

なのは「逃げちゃったのかな？」

アリサ「ピカチュウ〜？」

ピカチュウ「ピッピカ〜♪」

アリサ「きやあ！もう！隠れてたの？」

ピカチュウ「ピカ〜」

いや〜。

アリサ「さて、この子がピカチュウよ」

ピカチュウ「ピッピカチュウ♪」

ピカチュウは片手を上げて挨拶した。

なのは、すずか「可愛い♪」

ピカチュウ「チャ〜♪」

アリサ「いらっしやい」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

アリサが手を伸ばしたので飛びついた。

アリサ「よしよし♪」

なのは「凄いなついてるの！」

アリサ「芸くらい出来そうね…」

すずか「何か仕込んだの？」

アリサ「お手じゃつまらないわよね？そうね…ピカチュウ、おまわ

り」

ピカチュウ「ピカ!?」ガサゴソ

ピカチュウはベットの下に潜った。

アリサ「何してるの?」

ピカチュウ「ピカ!」

すずか「お巡りさん!」

ピカチュウは警官のコスプレをして出てきた。

アリサ「おまわり違いよ!」

なのは「予想を越えた芸なの」

ピカチュウ「ピカ♪」

アリサ達「照れてる!」

アリサ達はただ驚いていた。

アリサ「全く…ん?ピカチュウ?アンタ、ベットの下にそんなのがあるの?」

ピカチュウ「ピ!?ピフュー」

アリサ「……」ガサゴソ

アリサはベツトの下を漁った。

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ピカチュウは逃げ出した。

すずか「はい、大人しくしててね？」

ピカチュウ「チャ〜…」

すずかに捕まった。

アリサ「おつかしいわね？何もないわ」

なのは「じゃあ、何処にあつたのかな？」

アリサ「不思議ね」

ピカチュウ「ピ〜」

すずか「あ、ごめんね。今、下ろすから」

ピカチュウ「チャ〜」

ピカチュウはすずかから解放された。

アリサ「私もあんなの用意した覚えはないし」

ピカチュウ「……」だらだら

アリサ「じ〜」

ピカチュウ「……」だらだらだらだら！

アリサ「じー！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

アリサ「逃がすか〜！」

アリサはピカチュウを捕まえた。

アリサ「よし！ピカチュウ、もう一つ芸を見せなさい」

ピカチュウ「ピカ!?」

アリサはピカチュウを降ろすと…

アリサ「3、2、1、はい！」

ピカチュウ「ピカピ！」

変身！

カシヤン！

《エターナル》

ピカチュウは慌ててエターナルに変身した。

アリサ達「……はあ!？」

カシヤン

ピカチュウ「ピフュー」

ピカチュウは変身を解くと口笛で誤魔化し始めた。

アリサ達「……」

ピカチュウ「…ピカチュウ！」

ピカチュウは逃げ出した。

アリサ「逃がすか〜！」

アリサからは逃げられなかった。

アリサ「今のは何かしら？」

ピカチュウ「ピフュー♪」

アリサ「誤魔化せると思ってるの？」

ピカチュウ「ピカ！」

ピカチュウは頷いてみた。

アリサ「駄目に決まってるでしょ！」

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「さあ、何で仮面ライダーに変身出来るの？」

ピカチュウ「ピカピ！ピカチュウ！」

それは！ボクが仮面ライダーだから！

アリサ「言い方を変えるわ。何で変身道具を持つてるの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

作ったの。

アリサ「はあ!?作ったの!?!」

なのは「あのく…アリサちゃん？」

アリサ「ん？何よ」

なのは「何でピカチュウと会話が出るの？」

アリサ「あ、そう言えば…」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

何でだろう？

アリサ「まあ、それは些細な事よ。それより仮面ライダーよ！」

ピカチュウ「ピカチュウく…」

アリサ「私も変身したいわ」

ピカチュウ「ピカ！」

ピカチュウはバツテンを作った。

アリサ「ケチケチしないの！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「ん？理由が違う？」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「何がダメなのよ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

遊び道具じゃないから。

アリサ「何よ？悪と戦えとでもいうの？」

なのは「まさかく…」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウは頷いて答えた。

なのは「うそ!？」

アリサ「正義のヒロイン…いいいい」

アリサは暫しの間考えて…

アリサ「やってやろうじゃない！」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

飼主特権だよ？

ピカチュウはロストドライバーとジョーカーメモリを出した。

アリサ「ふふふ！これで私も仮面ライダーよ！」

なのは「いいな〜」

すずか「…はっ！出遅れた！」

ピカチュウ「ピカ？」

すずか「ピカチュウ？私も変身したいな？」

ピカチュウ「ピカピ」

バツテンを作った。

すずか「お願い、ね？」

すずかの素敵な笑顔に…

ピカチュウ「チャ〜…」ガサゴソ

ジャケットからロストドライバーとスカルメモリを出した。

「さすが「やった！」

なのは「いいな〜」チラッ

ピカチュウ「ピカチュウ」

品切れです。

アリサ「もうないですって」

なのは「にや!? 出遅れたの!」

そのままアリサ達は仮面ライダーの話で盛り上がった。

第三話

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

アリサ「ん？お散歩に行きたいの？」

ピカチュウ「ピ！」

アリサ「気をつけて行くのよ」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

行ってきまーす♪

ピカチュウは手を振ると歩き出した。

アリサ「……」

ピカチュウ「ピカ♪ピカ♪ピカチュウ〜♪」

ピカチュウはスパイダーショックの発信器を頼りにピカチュウベースを探していた。

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ〜♪」ピコリン♪

ザパーン！

どうやら今回もピカチュウベースは海の中らしい。

ピカチュウ「ピカ…」ドン

ピカチュウが帰ろうしたとき何かにぶつかった。

ピカチュウ「ピカ？」

ピカチュウが上を見上げると：

アリサ「ピカチュウ？」

アリサだった。

ピカチュウ「ピカピ!？」

アリサ!?

アリサ「ピカチュウ♪その手に着けてるのは何かしら？」

ピカチュウ「チャ〜…」

尋問タイムの始まりだった。

アリサ「全く…まだアイテムを隠してたのね」

ピカチュウ「ピカ〜…」

アリサ「ん」

ピカチュウ「ピカ？」

アリサ「寄越しなさい」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ダメに決まってるでしょ！

アリス「うう…こんなにもお願いしてるのに…」

アリスが後ろを向くと涙がこぼれた。

ピカチュウ「チャ〜…」

ピカチュウはガジェット一式を取り出した。

アリス「ありがとう♪」ポトツ

アリスが受けとると目薬が落ちた。

ピカチュウ「……」

アリス「…さ！帰りましょう！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

全部返せ〜！

アリスはそのまま全力で逃げ、ピカチュウは後を追いかけた。

ピカチュウ「ピカ〜…」

ある日、ピカチュウがアリサの部屋の中にかけられたハンモックで寝てると…

アリサ「ただいま〜」

すずか「お邪魔しま〜す」

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ〜」

あれ？おかえり〜。

アリサが帰って来た。すずかを伴って。

ピカチュウ「ピカチュウ？」

すずか「やだなく♪ピカチュウったら♪」

ピカチュウ「ピカピ〜」

やな予感〜。

すずか「ずるいなく♪アリサちゃんだけガジェット一式を貰えるなんて♪」

ピカチュウ「ピカ〜…」

やっぱり〜…

すずか「頂戴♪」

ピカチュウ「ピカ〜」

ダメ〜。

すずか「何で!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

ガジェットは有料制です。

すずか「ふふ! その答えは予測済みだよ!」

ピカチュウ「ピカピ!?!」

何だって!?!

すずか「クレジットカード♪」

ピカチュウ「チャ〜:」

見透かされていたピカチュウだった。

すずか「さあ!」

ピカチュウ「ピカチュウ〜:」

ピカチュウはパソコンを取り出すとクレジットカードを差し込む機械を繋げてクレジットカードを差し込んだ。

ピカチュウ「ピカチュウ?」

分割？

すずか「一括で」

ピカチュウ「ピカ〜」

わかった〜。

チャリン♪

ピカチュウは手続きを済ませた。

ピカチュウ「ピカ」

すずか「ありがとう♪」

ピカチュウはクレジットカードとガジェット一式を渡した。

すずか「わーい♪」

すずかは喜んで帰っていった。

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

アリサ「ん？ピカチュウ？また星を見てるの？」

ピカチュウ「ピカ…」キラリン♪

アリサ「流星群かしら？」

ピカチュウ「……」

ピカチュウはまもなく事件の始まりを確認した。

ピカチュウ「ピカ…」

ユーノ『助けてください！』

ピカチュウ「ピカ！」

次の日、ピカチュウが仮眠をとっていると念話が届いた。

ピカチュウ「ピカピ！」

アリサ！

アリサ「ん？どうしたの？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

仮面ライダーの出番だよ！

アリサ「ふーん……何ですって!？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

出動だよ！

アリサ「わかった！」

アリサとピカチュウは裏門からそつと抜け出した。

ピカチュウ「ピカ〜！」

アリサ「ハアハア…何処まで行くのよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

もうすぐだよ！

タツタツタツ！

なのは「アリサちゃん!？」

アリサ「なのは!？」

ピカチュウ「ピカピ！」

来るよ！

ジュエルシードの魔物が近寄って来ていた。

ピカチュウ「ピッ！」

チッ！

ピカチュウは舌打ちするとロストドライバーを出すが…

魔物「カツ！」

バチン！

魔力弾でロストドライバーを弾かれた。

ピカチュウ「チュウ〜！」

ピカチュウは近寄って来ていた魔物に電撃を喰らわせて距離を取らせた。

ピカチュウ「チャ〜…」

ロストドライバーを見ると壊れてしまっていた。

アリサ「出番ね！」

カシヤン

《ジョーカー》

アリサ「変身」

《ジョーカー》

アリサの姿が大人になると仮面ライダージョーカーになった。

アリサ「さあ、アンタの罪を数えなさい」

アリサは無意識にロストドライバーから転写された戦い方を使っ

ていた。

なのは「なのはも戦うの！」

なのはもユーノからデバイスを受けとり参加した。

ピカチュウ「……」

ピカチュウは黙って見守っていた。

アリサ「お仕舞いよー！」

《ジョーカー！マキシマムドライブ》

アリサ「ライダーキック！」

魔物「ぎやあく!?!」

アリサ「ヨシッ！」

アリサはジュエルシードを封印した。

なのは「アリサちゃん凄いの！」

アリサ「パーフェクト♪」

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

戻ろうよ〜。

アリサ「そうね。なのは、詳しい話は明日ね」

なのは「わかったの！」

アリサ達となのは達は別れると帰路についた。

第四話

すずか「ズルいよ〜！」

なのは「いや、その…」

アリサ「諦めなさい。居なかつたんだから」

アリサの部屋では昨日の話し合いがされていた。

ピカチュウ「チャ〜…」

そしてピカチュウはアリサの膝の上で寝ていた。

なのは「それで…」

ユーノ「ここからは僕が言うよ」

ユーノがなのはの前に陣取った。

ユーノ「皆さんにお願いがあります。皆さんの力を貸してください
！」

ユーノはジュエルシードを集める協力を頼んだ。

アリサ「OK、やるわ。このままじゃ街も危ないし」

すずか「私も！」

ユーノ「このお礼は必ずしますから」

ピカチュウ「ピカピ？」

ホントに？

アリサ「起きてたの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

今、起きたの。

アリサ「お礼は後で考えましょう」

ピカチュウ「ピカ」

ユーノ「ありがとうございます！」

なのは達はジュエルシードを探す事になった。

ピカチュウ「ピカチュウ」

次の日、ピカチュウはアリサが学校に行ってる間に海に来ていた。

ピカチュウ「ピカ」

《カメンライド・デイケイド》

ピカチュウ「……」

デイケイドになると海に潜った。一時間程潜ったピカチュウは…

ザパア！

ピカチュウ「ピカ〜♪」

カシヤン

海から上がると変身を解いた。

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

ピカチュウは袋を掲げて雄叫び？をあげた。袋の中身はご存知
ジュエルシード七つ。

ピカチュウ「ピカ〜…」

ピコリン！

ピカチュウはスパイダーショックにジュエルシードから出る特殊
な周波数を登録した。

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

そしてピカチュウは次のジュエルシードを探しに向かった。

なのは「あれ？ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ！」

なのは「何してるの？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

なのは「…何言ってるかわからないの」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウは手を振ってバイバイの合図をした。

なのは「バイバイ？」

ピカチュウ「ピカ♪」

ピカチュウは頷いて答えた。

なのは「気をつけるんだよ」

ピカチュウ「ピカピ」

ピカチュウはジュエルシード探しに戻った。

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

すずか「あれ？ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピ？ピカチュウ」

すずか「わっと♪」

飛びついてきたピカチュウを抱っこした。

すずか「何してたの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ジュエルシード探しに来た。

すずか「ふーん……ここ私の家だよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ここにあるよ！

すずか「探して見ようか？」

すずかはピカチュウとジュエルシードを探した。

ピカチュウ「ピ？ピカチュウ♪」

すずか「あつたの？」

ピカチュウ「ピ♪」

すずかにジュエルシードを見せた。

すずか「はい、渡して」

ピカチュウ「ピカ！」
プイッ

すずか「ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

これはボクのもの！

すずか「これはユーノ君のだよ？」

ピカチュウ「ピカ？」

ダメ？

すずか「ダメ」

ピカチュウ「ピッ」

チエッ。

ピカチュウはジュエルシードをすずかに預けた。

第五話

ピカチュウ「ピファチュウ♪」

数日後、ピカチュウは路地裏でジュエルシードを見つけたのでくわえて歩いていた。

フエイト「きやあ!？」

ピカチュウ「ピファ!？」

路地裏から出たらフエイトとぶつかりそうになった。

フエイト「危ないよ？」

ピカチュウ「ピファ！」

ピカチュウが頷くと…

フエイト「あ〜！」

フエイトはジュエルシードを見て声をあげた。

フエイト「ねえ？そのくわえてるの頂戴？」

ピカチュウ「ピファ！」　プイツ

フエイト「お願い」

ピカチュウ「ピファ」

ピカチュウが歩き出すと…

フエイト「……………」

フエイトがついて来た。

ピカチュウ「ピファ〜…」 チラツ

フエイト「……………」

ピカチュウ「ピファ！」

ピカチュウは逃げ出した。

フエイト「逃げないで？」

先回りされた。

ピカチュウ「ピファ〜…」

フエイト「お願い、頂戴」

ピカチュウ「ピファ〜…ピファ！」

ピカチュウはジュエルシードを差し出された手の上に乗せた。

フエイト「ありがとう♪」

ピコリン♪

ピカチュウ「ピカチュウ？」

スパイダーショックにジュエルシードの反応が出た。

フエイト「じゃあね」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

フエイト「え!？」

ピカチュウはフエイトの足に抱きつき帰るのを阻止した。

ピカチュウ「ピカ！」

ピカチュウは手を振ってついてきてと合図をした。

フエイト「ついてけばいいの？」

フエイトはピカチュウの後を追いかけた。

ピカチュウ「チャ〜…」

ピカチュウはスパイダーショックを見ながらフエイトを誘導した。

フエイト「何処までいくの?」

ピカチュウ「ピ〜…」キョロキョロ

ピカチュウが辺りを見回すと…

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

ジュエルシードを見つけたので掲げて雄叫びをあげた。

フエイト「ジュエルシード!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

ピカチュウはジュエルシードを拾うとジュエルシードをフエイトに差し出した。

フエイト「くれるの?」

ピカチュウ「ピカ」

フエイト「ありがとう♪」 ナデナデ

ピカチュウ「チャ〜♪」

フエイトはピカチュウの頭を撫でた。

フエイト「貴方は…」

ピカチュウ「ピカチュウ」

フエイト「ピカチュウ?」

ピカチュウ「ピカ」

フエイト「ピカチュウはジュエルシードがある場所がわかるの?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

わかるよ。

フエイト「……………」

ピカチュウ「…ピカッ」

…またねッ。

フエイト「ちよつと待ってね♪」ガシッ

ピカチュウ「ピッ…」

案の定捕まった。

フエイト「私に協力して欲しいの」

ピカチュウ「ピッ…」

フエイト「沢山餌をあげるから」

ピカチュウ「ピカチュウッ♪」

頑張るよッ♪

簡単に買収されるピカチュウだった。

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

ただいま〜♪

アリサ「おかえり。遅かったわね？何処まで行ってたの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ちよつとヤボ用。

アリサ「ヤボ用？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

大した事じゃないよ。

アリサ「そう。あまり変なことしないようにね」

ピカチュウ「ピカ〜」

アリサ「ジュエルシードを探しに行くけど来る？」

ピカチュウ「ピカピ〜」

寝てる〜。

アリサ「そう。ゆっくりしてなさい」

ピカチュウ「ピカチュウ」

いってらっしやい。

アリサはジュエルシードを探しに向かった。

ピカチュウ「ピファ〜…」

そしてピカチュウはお昼寝をして過ごした。

フェイト「おかしいな？来ない…」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

フェイト「きやわ!?!」

フェイトが路地裏で待っているとピカチュウが現れた。

フェイト「もう!びつくりしたよ?」

ピカチュウ「ピカ〜」

いや〜。

フェイト「早速探しに行こう」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

ピカチュウはフェイトを連れてジュエルシードを探しに向かった。

「フェイト「三つ目！」

ピカチュウ「ピカピク」

次く。

フェイトは順調にジュエルシードを手に入れた。

ピカチュウ「ピカチュウく…」

この辺にあるはずなんだけど…

フェイト「手分けして探そう」

ピカチュウとフェイトは別れて探し始めた。

ピカチュウ「ピく…ピ!?ピカチュウく♪」

アリサ、フェイト「ピカチュウ?え?」

ピカチュウを挟んでアリサ達とフェイトがやって来た。

ピカチュウ「チャく…」

やっばく…

なのは「あく!ジュエルシード!」

アリサ「ピカチュウ!寄越しなさい!」

フェイト「ピカチュウ!餌!」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

ピカチュウは真つ直ぐフェイトに向かった。

アリサ「ピカチュウ！桃！」

ききい！

ピカチュウ「ピカチュウ…」

ピカチュウは迷い始めた。

フェイト「ッ！」

なのは「待つの！」

二人はピカチュウを捕まえに近付いた。

フェイト「ゲット！」

アリサ「ピカチュウ！」

運動神経の差でフェイトがピカチュウを捕まえた。

フェイト「知り合い？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

飼い主。

フエイト「えつと…とりあえずジュエルシード頂戴」

ピカチュウ「ピカ」

なのは「なく！何渡してるの！」

ピカチュウ「ピカ！」

餌の為だ！

アリサ「アンタは！ん？」

ここで気付いた。アリサはピカチュウのスパイダーショックが起動してるのを。

アリサ「ピカチュウ？ちよつとスパイダーショックを見せなさい」

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ」

《スパイダー》

ピカチュウはスパイダーショックにメモリを入れるとアリサの下に向かわせた。

アリサ「ピカチュウ？この光点はジュエルシード？」

ピカチュウ「ピく…」

アリサ「もう一つ聞くわよ？私達は4つ。そこのアンタ！幾つ持つてる？」

フエイト「4つだけど…」

アリサ「光点は全部で【十五個】なのよね？」

ピカチュウ「……」

アリサ「ピカチュウ？アンタ、ジュエルシードを隠して持ってるわね？」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

ついにバレた…

アリサ「ピカチュウ…返して貰うわよ？」

フエイト「そうはいきません。ジュエルシードを貰う約束してますから。餌と引き換えに」

アリサ「アンタは何に釣られてるのよ！」

ピカチュウ「ピカッ」

いやッ。

アリサ「なら…」

力づくで…と言おうとした時…

クロノ「そこまでだ！」ダン！

クロノが現れた。

クロノ「こちらは時空管理局、執務官クロノ・ハラオウンだ」

フェイト、ユーノ「管理局！」バツ

フェイトは距離を取った。

クロノ「話を聞かせてもらおうか」

フェイト「ッ！」

フェイトはピカチュウを抱えたまま逃げた。

クロノ「ッ！」

なのは「ダメ！」

クロノがデバイスを向けるとなのはが止めた。

フェイト「ッ！」

フェイトは多重転移で逃げた。

アリサ「あの子は…」

アリサは頭をおさえた。

すずか「あ！アリサちゃん！スパイダーショックで追えない!?!」

アリサ「持ってかれたわ」

すずか「そっか…」

抜け目のないピカチュウだった。

第六話

フエイト「ふう…逃げ切れた」

ピカチュウ「ピ〜」カシヤン

ピカチュウはスパイダーショックを腕に戻した。

ピカチュウ「ピカチュウ」

今日はここまでだね。

フエイト「そうだね」

ピカチュウ「ピカピ〜」

またね〜。

フエイト「ちよつとまってね？」ガシツ

ピカチュウ「ピカチュウ？」

どうしたの？

フエイト「ジュエルシード、まだ持ってるよね？」

ピカチュウ「ピ、ピカチュウ」

も、持ってないの。

フエイト「うん、わかりやすい」

ピカチュウ「ピカピ〜！」

ピカチュウは逃げ出した。

フエイト「あ！ピカチュウ〜！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

また明日ね〜！

そのまま去って行った。

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

ただいま〜。

ピカチュウがアリサの邸に戻ると…

アリサ「帰ってきたわね♪」

ピカチュウ「チャ〜…」

戦いは終わってなかった。

アリサ「さあ、ジュエルシードを渡しなさい」

ピカチュウ「ピカ！」

やだ！

アリサ「それはユーノのよ」

ピカチュウ「ピカ！」

アリサ「餌抜きにするわよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

横暴だ〜！

アリサ「なら渡して」

ピカチュウ「ピカ！」

アリサ「仕方ない。今日は餌抜きよ」

ピカチュウ「ピ、ピ、ピカチュウ〜！」

ピカチュウは泣いて邸を出ていった。

アリサ「ピカチュウ!？」

アリサは止めようとしたが間に合わなかった。

ピカチュウ「ピカ〜…」ピコリン

ピンポーン♪

アルフ「あいよ?」

ピカチュウ「ピカチュウ〜!」スタコラサツサ!

アルフ「あ、こちら!」

ピカチュウ「ピカチュウ〜!」

フェイト「え!?!ピカチュウ!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ〜!」

フェイト〜!

フェイト「どうしたの?」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

餌頂戴!

フェイト「えつと…林檎でいい?」

ピカチュウ「ピカ」

フェイト「はい」

フェイトはテーブルの上にあった林檎をあげた。

アルフ「フエイト、なんだいコイツは？」

フエイト「えっと、ジュエルシードを探しに協力して貰ってるの」

アルフ「ふーん」

ピカチュウ「ピファ〜♪」 シャリシャリ♪

フエイト「でもどうしたの？急に餌を頂戴なんて」

ピカチュウ「ピカピピカチュウ！」

飼い主にジュエルシード渡さないなら餌抜きつて言われたから家出して来た。

フエイト「ジュエルシード、まだ持ってるの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

持ってるよ。

フエイト「頂戴」

ピカチュウ「ピカピ」

ダメ。

フエイト「お願い」

ピカチュウ「ピカ〜…」

フエイト「ピカチュウ」

ピカチュウ「チャ〜…」

ピカチュウは悩んでしまった。

フエイト「お願いピカチュウ。私にはどうしてもジュエルシールドが必要な」

ピカチュウ「ピ〜…ピカ」

ピカチュウはジュエルシールドが入った袋を渡した。

フエイト「ありがとう」

ピカチュウ「ピ〜」

フエイト「その代わり餌はちゃんとあげるから」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

約束だよ！

フエイト「うん！」

こうしてピカチュウはフエイトの所で居候する事になった。

第七話

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

あつたよ♪

フエイト「ありがとう♪」

ピカチュウが居候してから数日、フエイトは順調にジュエルシードを集めていた。

ピカチュウ「ピカチュウ？」

次を探す？

フエイト「うん、行こうか」

ピカチュウ「ピカピク」

こつちく。

ピカチュウは次のジュエルシードの所に案内し始めた。

なのは、フエイト「あ！」

すると次のジュエルシードがある場所では達と出会った。

アリサ「ピカチュウ！何してるの！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

餌の為にジュエルシードを探してるの！

アリサ「ジュエルシードが危険な物って知ってるでしょ！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

使い方次第だよ！

アリサ「そう、あくまでもその子の手伝いをするのね」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「なら力づくで連れて帰るわよ！」

《《ジョーカー》》

ピカチュウ「ピカ!？」

アリサ「変身！」

《《ジョーカー》》

アリサが変身すると…

ピカチュウ「ピカチュウ！」

《《カメンライド》》

アリサ「何ですって!？」

ピカチュウ「ピカピ！」

変身！

《《ディケイド》》

ピカチュウも変身した。

アリサ「何でディケイドなのよ！」

ピカチュウ「ピカピカチュウ！」

ボクはエターナルにしかねないなんて言ってないよ！

アリサ「上等！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ここに飼い主対ペットの喧嘩が始まった。

ピカチュウ「ピカチュウ」

《《カメンライド・クウガ》》

ピカチュウはクウガ・マイティフォームになるとアリサと殴りあい
を始めた。

アリサ「クッ！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

キーン!

するとピカチュウとアリサの戦いの余波でジュエルシードが暴走を始めた。

ピカチュウ「ピカ!?ピカチュウ!」

《ファイナルアタックライド・ク・ク・ク・クウガ!》

ピカチュウは即座にジュエルシードの暴走を抑えた。

クロノ「そこまでだ!」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

フェイト!

カシャン

フェイト「うん!」

フェイトは変身を解いたピカチュウを抱えて多重転移で逃げた。

フェイト「ピカチュウ?」

ピカチュウ「ピファ〜♪」

フエイトが呼ぶとピカチュウはジュエルシードをくわえて来た。

フエイト「これで十五個…」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

残りは回収されてる…

フエイト「奪うしかない…かな」

ピカチュウ「ピカチュウ」

それしかない。

フエイト「問題は…」

ピカチュウ「ピカ？」

フエイト「どうやって奪うかだね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

簡単に手に入れる方法があるよ。

フエイト「本当？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ジュエルシードを賭けて戦えばいいんだよ！

フエイト「なるほど」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

向こうが持つてるのは六個、こつちも六個賭ければ平等。

フエイト「どうやって相手に伝える？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ボクが行くよ。

フエイト「わかった。行ってくれる？」

ピカチュウ「ピカピク」

任せてく。

ピカチュウはアリサ達の所に向かった。

第八話

ピカチュウ「ピカピク！」

たのもく！

アリサ「道場破りか！」

すぐさまツツコミを繰り出すアリサだった。

ピカチュウ「ピ！」

アリサ「やっと帰ってきたわね」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ボクはメツセンジャーだよ。

アリサ「メツセンジャー？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

ジュエルシードを賭けて勝負しよう。

アリサ「ジュエルシードを？」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「いいわ。乗ってあげる」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

確かに伝えたよ〜！

ピカチュウは去って行った。

タタタタ

が、慌てて戻って来た。

ピカチュウ「ピカチュウ」

場所と日時を伝えるの忘れた。

アリサ「それで？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

明後日の朝六時に海辺の公園に。

アリサ「わかったわ」

ピカチュウ「ピカピ〜」

またね〜。

今度こそピカチュウは去って行った。

ピカチュウ「ピカチュウ」

両者揃ったね。

なのは「うん」

フエイト「……」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

賭けるジュエルシードを出してボクに預けて。

フエイト「わかった」

アリス「なのは」

なのは「わかったの」

ジュエルシードが十二個集まり、ピカチュウが預かった。

ピカチュウ「ピカ…」

ピシヤン!

ピカチュウ「チャ〜!?!」

突如落雷がピカチュウに落ちた。

ピカチュウ「ピカ〜!」

しかしピカチュウには効かなかった。

アリサ「ピカチュウ！大丈夫!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

大丈夫だよ！

フエイト「ピカチュウ、ジュエルシードは!?!」

ピカチュウ「ピカ?.....ピク！」

うえ?.....あく！」

見事にジュエルシードを盗られた。

ピカチュウ「ピカチュウく！」

取り返さないと！

アリサ「どうやって?」

ピカチュウ「ピカピカチュウく！」

犯人の所にカチコミだく！

すずか「わかるの?」

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウ」

ピカチュウベースを使うよ。

アリサ達「ピカチュウベース？」

ピカチュウ「……」

アリサ「……」

ピカチュウ「チャ〜」

アリサ「誤魔化されないわよ？」

ピカチュウ「チャ〜……」

すずか「ピカチュウベースって何？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ボクの秘密基地。

アリサ、すずか「秘密基地！」

アリサとすずかが食いついた。

アリサ「何で黙ってるのよ！秘密基地はロマンの塊じゃない！」

すずか「そうだよ！私達の仲間じゃない！」

ピカチュウ「……ピカピ？」

……本音は？

アリサ、すずか「使いたい」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ボクのだよ〜！

アリサ「さあ、サツサツと行くわよ」

ピカチュウ「ピカ〜」ポチ

ピカチュウがスタックフォンを操作するとピカチュウベースが海から出てきた。

アリサ、すずか「デカツ！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

さあ、乗って〜。

ピカチュウを先頭にアリサ達とフェイト達はピカチュウベースに乗り込んだ。

ピカチュウ「ピカチュウ」

次元転移するよ。

ピカチュウは早速、次元転移して向かった。

ピカチュウ「ピカ〜、ピカチュウ〜！」

アリサ「凄いわね」

ピカチュウ「ピカチュウ？ピカ〜！」

すずか「着いたの？」

モニターには時の庭園が写った。

フエイト「え!？」

ピカチュウ「ピカ〜！ピカチュウ〜！」

よーし！カチコミだ〜！

ピカチュウ達は転移装置で時の庭園に入った。

第九話

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

どけどけ〜！

ピカチュウはボルテツカで機械兵を壊しながら進んでいた。

アリサ「楽でいいわね…」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

バン！

ピカチュウはそのまま最奥の扉を蹴り開けた。

プレシア「随分うるさいネズミね」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ジュエルシードを返せ〜！

フェイト「母さん！どうしてこんなことを！」

なのは達「え？」

プレシア「貴女がいけないのよ？ジュエルシードが揃ったのにくだらない勝負に専念しようとしているから。さあ、フェイト。残りのジュエルシードを渡しなさい」

フエイト「ツ…」

フエイトは残りのジュエルシードを渡した。

プレシア「遂に揃ったわね。これでアルハザードに行ける」

フエイト「アルハザード？」

クロノ「それは幻の世界だ！」

するとクロノが追いついて来た。

プレシア「いえ！実在するのよ！次元の狭間に！」

プレシアはジュエルを発動させた。

ユーノ「暴走してる！このままだと次元震に…」

ゴゴゴゴ

ピカチュウ「ピカチュウ！」

そうはさせないよ！

《エターナル》

ピカチュウ「ピカピ！」

変身！

《エターナル》

ピカチュウはエターナルになると…

《エターナル！マキシマムドライブ》

バチバチ！

ジュエルシードの暴走を抑えた。

プレシア「な、何が!？」

暴走が止まりプレシアは狼狽えた。しかし…

ゴゴゴゴ

次元断層がおき始めた。

クロノ「マズイ！逃げるぞ！」

フェイト「母さん！」

プレシア「アハハハ！終わりよ！全て！」

プレシアを助けようとしたがフェイトはアルフに抱えられてその場を後にした。

クロノ「エイミイ！転送を！」

エイミイ「……」

クロノ「エイミイ？」

エイミイ「…ダメなの。次元層が乱れてて座標が固定出来ないの」

クロノ「なんだって!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

外に出るよ!

ピカチュウの掛け声でアリサ達は外に出た。

ピカチュウ「ピカチュウ〜!」

Pライナー!

シュシュポポ! シュシュポポ!

アリサ「何よあれは!」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

説明は後!

ピカチュウが乗り込むとアリサ達も乗り込んだ。

ピカチュウ「ピッピカチュウ!」

発進するよ!

シュシュポポ! シュシュポポ!

ピカチュウ達はPライナーに乗り時の庭園を脱出した。

クロノ「つまり君は集めていた理由を知らないんだな？」

フエイト「うん…」

ピカチュウ「ピカチュウ…」スリスリ

フエイト「ありがとう、ピカチュウ」

フエイトを元気づける為にピカチュウは体を擦りつけていた。

クロノ「すまないが、少しの間拘束させてもらう」

フエイト「わかった…」

ピカチュウ「チュウ〜！」

アリサ「ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

フエイトは無実だよ！

すずか「それを調べる為に少しの間拘束するんだよ？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ！」

寧ろジュエルシード集めに協力的だったよ！

アリサ「ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

拘束なんてさせないよ！

アリサ「聞き分けなさい」

ピカチュウ「ピカ！」

アリサ「ピカチュウ！」

ピカチュウ「チュウ〜！」

頑なにピカチュウは譲らなかった。

クロノ「そろそろ良いか？」

ピカチュウ「チュウ〜！」

クロノ「君も公務執行妨害で逮捕されたいのか？」

ピカチュウ「ピカ〜！」びりびり

アリサ「やめなさい、ピカチュウ！」

クロノ「仕方ない、ケージバインド」カシャン

ピカチュウ「ピカ!？」

ピカチュウは檻のバインドに閉じ込められた。

クロノ「暫くの間ここにいろ」

ピカチュウはフェイトと一緒に観察室に入れられた。

フェイト「……」

ピカチュウ「ピカ〜!」バンバンバン!

出せ〜!

アルフ「ほら、大人しくしな」

ピカチュウ「ピカ〜…」

ピカチュウはアルフに抱えられて大人しくした。

フェイト「……」

ピカチュウ「ピカ〜?」

フェイト「…大丈夫だよ」

フェイトはピカチュウを抱えると抱きしめた。

ピカチュウ「チャ〜♪」

アルフ「ありがとうよ」

ピカチュウ「チャ〜♪」

アルフにも撫でられてご満悦だった。

ピカチュウ「ピカチュウ？」

これからどうする？

フェイト「……」

ピカチュウ「ピカ〜？」

フェイト「……」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

よし、脱獄しよう！

アルフ「駄目に決まってるだろ」

ピカチュウ「チャ〜…」

フェイト「大丈夫、ピカチュウには罪がいかないようにするから」

ピカチュウ「ピカチュウ!？」

何言ってるの!？」

フェイト「これは私の問題。ピカチュウは何も知らない、いい？」

ピカチュウ「ピカ！」

やだ！

フエイト「実際ピカチュウは集めてた理由を知らないでしょ？」

ピカチュウ「ピカ〜…」

フエイト「わかった？」

ピカチュウ「ピカ〜！」

やだ〜！

フエイト「ピカチュウ」

ピカチュウ「チャ〜…」

フエイト「わかってね？」

ピカチュウ「チャ〜！」

フエイト「ありがとう、私の為に泣いてくれて」

ピカチュウ「ピカ〜！」

フエイト「よしよし」

ピカチュウはそのまま大人しくフエイトの膝の上で過ごした。

第十話

ピカチュウ「ピカ〜…チュウ〜…」

フェイト「ふふ♪」

アルフ「よく寝てる」

あれから数日、ピカチュウはフェイトの膝の上で過ごしては昼寝をしていた。

クロノ「失礼する」

するとクロノが入ってきた。

クロノ「君達の処遇が決まった」

アルフ「どうなるんだい？」

クロノ「無罪放免だ。ユーノが被害届を出さないと云ってるのでな」

アルフ「そうかい…」

クロノ「それとそこの黄色い…ピカチュウについてだが…」

フェイト「ピカチュウ？」

クロノ「飼い主に返還して欲しいそうだ」

フェイト「……」

アルフ「フェイト？」

フェイト「嫌だよ」

クロノ「なぜ？」

フェイト「餌をあげないような人にピカチュウを返したくない」

フェイトがピカチュウを抱き上げると…

ピカチュウ「ピカ〜？」

ピカチュウが寝惚けながら起きた。

フェイト「大丈夫、寝てていいよ」

ピカチュウ「チャ〜…」

クロノ「しかしだな…」

フェイト「絶対に嫌だ」

頑なにフェイトは拒否していた。

クロノ「…わかった」

クロノもこれ以上の説得は無理と判断して部屋を出た。

アリサ「返さないってどういう事よ！」

クロノ「落ち着きたまえ」

すずか「アリサちゃん、落ち着こう？」

なのは「クロノ君、どういう事？」

クロノ「フェイト・テスタロッサの言い分では餌をあげないような人に返したくないそうだ」

アリサ「うっ…」

心当たりがあるだけに反論出来なかった。

クロノ「管理局側もそれは動物虐待になると判断してフェイト・テスタロッサの主張を認めている」

アリサ「でも！飼い主は私よ！」

クロノ「聞いた話だが、ピカチュウは自分の意思で去ったそうだな？それだとピカチュウの意思と思われても仕方ない」

アリサ「うっ…」

クロノ「それにピカチュウ自身がフェイトから離れない為にこちらも強く引き離す事が出来ない」

アリサ「なら！こっちから迎えに行くわ！」

クロノ「民間人のアースラへの乗船は許可出来ない」

アリサ「クッ！」

なのは「クロノ君、どうにかならない？」

クロノ「釈放されるまで待つしかないな。我々が介入しているのはその時までだ」

すずか「釈放されるのは何時ですか？」

クロノ「明後日だ」

すずか「アリサちゃん、それまで待とう？」

アリサ「…わかったわよ」

アリサ達はフェイトの釈放を待つことにした。

フェイト「お世話になりました」

クロノ「以後気をつけるようにな」

フェイト「はい」

フエイトは無事に釈放され、クロノは転移して帰艦した。

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

外の空気だ〜。

フエイト「これからどうしようか？」

アリサ「やっと来たわね」

フエイト「え？」

フエイトが振り返るとアリサ達がやって来ていた。

アリサ「さあ、ピカチュウ。帰って来なさい」

ピカチュウ「ピカチュウ〜…」

フエイト「ダメ」

フエイトはピカチュウを抱えると守るようにしていた。

アリサ「どういうつもり？」

フエイト「餌をあげないような人にピカチュウは返せない」

アリサ「ピカチュウは私のペットよ？」

ピカチュウ「チャ〜…」オロオロ

ピカチュウは二人の間でオロオロしていた。

アリサ「どうあっても渡さないのね？」

フエイト「うん」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

喧嘩はやめて〜！

アリサ「なら、アンタはどうしたいのよ！」

ピカチュウ「チャ〜！」

ピカチュウは困って泣き出してしまった。

フエイト「よしよし。怖い飼い主さんだね」

アリサ「クツ！」

ピリリリ♪ピリリリ♪

ピカチュウ「ピカ？ピカピカ？」

あれ？もしもし？

神様『ピカチュウですか？』

ピカチュウ「ピカチュウ？」

神様、どうしたの？

神様『すいません!』

ピカチュウ「ピカチュウ!？」

どうしたの!？」

神様『また魔物が逃げ出しました』

ピカチュウ「ピカチュウ?」

倒せばいいの?

神様『すいませんがお願いします』

ピカチュウ「ピカチュウ!」

任せてよ!

ピカチュウは電話を切るとアリサ達に向かってバイバイの合図をした。

フエイト「ピカチュウ?」

ピカチュウ「ピカピカピカチュウ」

ボクはこれから使命がある。だからお別れだよ。

アリサ達「使命?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

みんな元気だね。

ピカチュウが去ろうとすると…

フエイト「で？何処に行くの？」

フエイトとアルフがついてきた。

ピカチュウ「ピカ!?」

ついてくるの!?

フエイト「ピカチュウには恩返ししなきゃ」

アリサ「で？何処に行くの？」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

アリサ達まで!?

アリサ「当然でしょ。私は飼い主よ？」

ピカチュウ「ピカチュウ!ピカピカチュウ!」

何言ってるの!危険な事なんだよ!

アリサ「どのくらいよ?」

ピカチュウ「ピカチュウく…」

魔物の強さによるけど…

アリサ「どれくらいだとヤバイのよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

ヤツ位強いと手に余る…

アリサ「ヤツ？つて誰よ？」

ピカチュウ「ピカピカ…ピカチュウ！」

ヤツは強かった…あの配管工め！

アリサ「赤と緑の!？」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

それは置いといて…

ピカチュウは一度ピカチュウベースに向かうことにして、アリサ達とフェイト達もピカチュウについていった。

第十一話

ピカチュウ「ピカチュウく…」ポチポチポチポチ

ピカチュウは世界中で異変が起きてないか確認していた。

アリサ「しかし凄いわね、この基地」

ピカチュウ「ピカく…ピカチュウ!？」

うくん…これは!？」

すると海上を飛ぶ魔物を発見した。

ピカチュウ「ピカチュウく！」

見つけたく！」

アリサ「何よあれは！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ボクはアレを倒さないといけないんだ。

フェイト「行くの？」

ピカチュウ「ピカ」

フェイト「私も行くよ。微力でも力になるよ」

ピカチュウ「ピカ〜…ピカチュウ」

う〜ん…わかった。

アリサ「私も！」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

空中戦だよ？

アリサ「…何とかしなさい」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

無茶ぶりだよ〜！

アリサ「じゃあアンタはどうやって戦うのよ？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

ジェットバスターに乗って。

アリサ「……」

ピカチュウ「……ピカチュウ」

……そう言う事で。

アリサ「ちよつと待ちなさい」

ピカチュウ「ピ、ピカ？」

アリサ「ジェットバスターって何？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ボクの支援ツールの一つ。

アリサ「ふーん…一つ？」

ピカチュウ「ピカ〜！」

アリサ「お待ち！」ギユム！

ピカチュウ「チャ〜！」

アリサはピカチュウの尻尾を踏んだ。

アリサ「あ、ごめん」

フエイト「よしよし。酷い飼い主さんだね〜」

アリサ「クツ！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

とりあえず行くよ。

ピカチュウは甲板に出た。

ピカチュウ「ピカチュウ」

バリアジャケットを。

フェイト「うん！」

フェイトはバリアジャケットを着ると…

ピカチュウ「ピカ。ピッピカチュウ〜！」

よし。ジェットバスター〜！

キラッ！

ピカチュウが空に向かって叫ぶと空から巨大な砲身が付いた
ジェット機がやって来た。

ピカチュウ「ピカチュウ」

行ってくるよ。

アリサ「変身！」

《ジョーカー》

アリサは変身するとピカチュウを抱えてジェットバスターの上に
飛び乗った。

ピカチュウ「ピカチュウ!？」

何してるの!？

アリサ「私も戦うの！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

引き返すよ！

フエイト「連れて行ってあげたら？」

ピカチュウ「ピカ!?」

思わぬ所から支援が出た。

フエイト「魔物を倒した方がピカチュウの飼い主」

アリサ「その勝負乗った！」

ピカチュウ「チャ〜…」

大丈夫かな〜…

アルフ「ん？見えた！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

アリサ「突撃なさい！」

ピカチュウ「ピッピカチュウ〜！」

ピカチュウはジェットバスターを突撃させた。

アリサ「でや！」バキッ！

アリサはジャンプすると魔物を殴り、ピカチュウが先回りしてアリサをキヤツチした。

シュー…

すると魔物の姿が消えた。

ピカチュウ「ピカ!？」

ピカチュウはキョロキョロして探すが姿はなかった。

ピカチュウ「ピカチュウ…」

呆気なさ過ぎる…

フエイト「元から弱かったとか？」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

まさか…

アルフ「実は偽者だったりして」

ピカチュウ「ピカ!ピカチュウ!」

そうか!ピカチュウベースに戻るよ!

ピカチュウ達は急いでピカチュウベースに戻った。

第十二話

ピカチュウ「ピカチュウ…」ポチポチポチポチ

ピカチュウは再び情報を集めていた。

ピカチュウ「ピカ…」

しかし魔物は見つからなかった。

ピリリリ♪ピリリリ♪

ピカチュウ「ピカピカ？」

神様「ピカチュウですか？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

神様「よく、魔物を倒してくれました」

ピカチュウ「ピカ!?ピカチュウ!?」

うえ!?あの弱いのが!?

神様「弱かったですか？」

ピカチュウ「ピカ！」

神様「おかしいですね、少しこちらでも調べて見ます」

ピカチュウ「ピカチュウ」

お願いします。

ピカチュウは電話を切るとアリサ達の方を向いた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

とりあえずこの件は保留で。

フエイト「じゃあどうやって飼い主を決める？」

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「そう言えばアンタ達は何処に住むのよ？」

フエイト、アルフ「あ…」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

ピカチュウベースに住む？

アリサ「ピカチュウはどうするのよ？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

二人の保護者としてピカチュウベースに。

アリサ「却下。なら、家に来なさい。パパに話してあげる」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

いいの？大変だよ？

アリサ「ほっとけないでしょ」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

ありがとう〜♪

アリサ「わ!?!ちよつと！くすぐったいわよ！」

こうしてフェイトとアルフはアリサの家にお世話になることになった。

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

フェイト「ピカチュウ〜♪」

ピカチュウ「チャ〜♪」

アリサ「ピカチュウ〜♪」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

ピカチュウは呼ばれた方に駆けては近寄りを繰り返して遊んでいた。

ピリリリ♪ピリリリ♪

ピカチュウ「ピカピカ？」

神様『ピカチュウ、この間の魔物が弱かった件についてなんですが』

ピカチュウ「ピカチュウ？」

何かわかった？

神様『どうやら、アレは分身体のようです。本体が別に居るはずですよ』

ピカチュウ「ピカチュウ？」

現れたら倒せばいいの？

神様『そうしてください』

ピカチュウ「ピカチュウ！」

任せてよ！

神様『お願いします』

ピカチュウ「ピカピカ」

またね

ピカチュウは電話を切るとアリサ達とじゃれだした。

アリサ「ピカチュウ〜？ピカチュウ〜」

ピカチュウ「ピ〜カ〜チュ〜ウ〜！」

アリサ「よしよし。フエイトは？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

お風呂に入ってるよ。

アリサ「そう。あの子どもこの生活に慣れたみたいね」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「私達も後で入って寝るわよ」

ピカチュウ「ピカ♪」

こうしてアリサは新たな家族と共に穏やかに過ごした。

リターンズ2

第一話

からん、ころん、からんからん、ころん

ピカチュウ「ピカチュウ」

やあ、人間の皆さん。

スパーン！

ピカチュウ「ピツカ〜!？」

アリサ「何、人の部屋に入って来た途端ボケてるのよ」

ピカチュウ「ピカ〜…」

ちえ…

アリサ「何よそのゲタ…まさか」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ちやんとりモコンだよ。

アリサ「技術力の無駄使いよ！」

ピカチュウ「ピカ〜…」

作ったのにく…

アリサ「何で妖怪なのよ」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

妖怪だけに何か用かい？

スッパーン！

ピカチュウ「ピカ!?」

先程より強かった。

アリサ「全く、こっちは宿題で急がしいの」

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ」

ちえ、フェイトに見せてくる。

アリサ「やめなさい！止まらなくなるでしょ！」

ピカチュウ「ピカチュウく…」

せっかく作ったのにく…

アリサ「少し大人しくしてなさい。相手してあげるから」

ピカチュウ「ピカく」

少しの間、ピカチュウは大人しく待っていた。

なのは「そんなことがあったんだ」

アリサ「突っ込むのも大変よ」

ピカチュウ「ピカチュウ／＼／」

アリサ「照れるな！」

すずか「でもゲタじやなきや意味ないネタだよね」

アリサ「ゲタじやなきや欲しいわね」

なのは「リモコン靴？」

アリサ「…ないわね」

ピンと来なかったらしい。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

フェイト「ふっ！はっ！」

かこん！かこん！

フェイトはピカチュウが飛ばしたりリモコンゲタを棒で防いでいた。

ピカチュウ「ピカ？」

フエイト「使えると思うよ」

ピカチュウ「ピツカ〜♪」

アリサ「フエイトはピカチュウにダダ甘いけどね…」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

アリサ「仮面ライダーは飽きたの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

そんなことないよ。

アリサ「じゃあなんでリモコンゲタなんて作ったのよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

暇潰し。

アリサ「そんな理由でポンポン作るな！」

ピカチュウ「チャ〜…」

なのは「そう言えば仮面ライダーで思い出したんだけど」

アリサ「何かあるの？」

なのは「Wやアクセルは？」

アリサ、すずか「……」チラッ

ピカチュウ「……」サッ

フエイト「どうしたの？」

アリサ「ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピ、ピカチュウ？」

アリサ「持つてるんでしょ？」

ピカチュウ「ピフユ〜♪」

すずか「素直に言わないと……」

ピカチュウ「ピカ？」

すずか「♪」にこ♪チヨキン！

ピカチュウ「チャ〜……」

すずかがハサミを持つとピカチュウは若干内股で下がった。

アリサ「さあ、出なさい」

ピカチュウ「ピカ〜……」

ピカチュウはWドライバーとアクセルドライバーを出した。

アリサ、すずか「貰った〜！」

なのは「にや〜！出遅れたの！」

アリサ「ん？メモリは？」

ピカチュウ「ピカチュウ〜…」

ピカチュウはメタルメモリ、トリガーメモリとアクセルメモリ、エンジンメモリをアリサとすずかに渡した。

アリサ「それで？私の相棒は？」

なのは「はい！」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウはバツテンを作った。

なのは「なんで!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

星の本棚を持ってないから。

アリサ「星の本棚？」

すずか「じゃあ変身出来ないの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

《サイクロン》

アリサ「まさか…アンタは持ってるの？」

すずか「星の本棚を…」

ピカチュウ「ピカチュウ」

持ってるよ。

ピシヤーン！

アリサ達の背後に雷が落ちたように見えた。

アリサ「何で今まで黙ってたのよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

聞かれなかったから。

アリサ「私達は見れないの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

見れるよ。

アリサ「どうやって？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ボクと手を繋げば。

アリサ「早速行くわよ」

すずか「私も」

なのは「なのはも！」

フエイト「勿論私も」

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ」

さあ、検索を始めよう。

ピカチュウ達は星の本棚に入った。

第二話

ピカチュウ「ピカチュウ」

目を開けて。

アリサ達「うわ〜♪」

アリサ達が目を開けると辺り一面本棚だらけだった。

ピカチュウ「ピカチュウ、ピカチュウ、ピカチュウ」

すると一冊の本が手もとに残った。

アリサ「何の本よ？」

ピカチュウ「ピカチュウ、ピカチュウ…」

高町なのは、最後におねしょ…

なのは「きやく〜！待つの！ダメなの！危険なの！」

なのはは本を取り上げた。

ピカチュウ「ピ！」

チツ！

なのは「デリカシーがないの！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

さあ戻ろう。

なのは「反省してないの！」

ピカチュウ達は星の本棚から出た。

ピカチュウ「チャ〜！」

なのは「星の本棚…なんて危険なの」

アリサ「おおげさね」

なのは「ならアリサちゃん、見せられる？」

アリサ「……さ、お茶の続きにしましょう」

なのは「逃げたの！」

なのはの文句は聞き流されお茶の続きになった。

アリサ「本当にこの子は何でもありね」

ピカチュウ「ピファ〜♪」シャリシャリ

すずか「ロボットとかも持ってそうだよね」

ピカチュウ「ピフォピフォ！」

アリサ、すずか「……」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

食後の散歩に行つてきまーす♪

アリサ「ちよつと待ちなさい」

ピカチュウ「チャ〜…」

逃げられなかった。

すずか「持つてるの？ロボット」

ピカチュウ「ピカ」

うん。

すずか「どんな？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

合体するの。

アリサ、すずか「合体！」

ピカチュウ「ピカ」

じゃ。

アリサ「まだ話は終わってないわよ」

「すずか「何処にあるの？」」

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウ」

ピカチュウベースにあるよ。

アリサ、すずか「よし、行こう！」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

ボクのお散歩は？

アリサ「海までに変更よ」

ピカチュウ「チャ〜…」

はい…

ピカチュウを連れてアリサ達はピカチュウベースに向かった。

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

アリサ達はピカチュウベースにやって来ると艦橋のモニターでPマシンの見ていた。

アリサ「仮面ライダーときて今度は戦隊ものね」

すずか「乗りたいな？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ダメです。

アリサ「どうしてよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

免許を持ってないから。

アリサ「あんなマシンの免許を何処で取るのよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ここのゲーセンで。

アリサ、すずか「よし、行こう！」

ピカチュウ「ピカ〜カ〜」

あ〜れ〜。

ピカチュウはアリサに抱えられてゲーセンに向かった。

アリサ「それで？どれよ？」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウが指し示した方を見るとシミュレータが二つあった。

すずか「もう一つは？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

二号ロボットの。

アリサ、すずか「……」バツ！

アリサはPマシン、すずかはマキシマムライナーのシミュレータに互いに乗り込んだ。

なのは「速いの！」

フェイト「どうしたの？二人とも」

興味のないフェイトにはわからなかった。

なのは「ピカチュウ？他にないの？」

ピカチュウ「ピカ〜…」

ないの〜…

なのは「そっか」

とりあえずピカチュウ達はアリサ達が飽きるのを待った。

ピカチュウ「ピファ〜」

フェイト「よしよし」

ピカチュウはフェイトの膝の上で寝ていた。

なのは「終わらないね」

フェイト「うん」

なのはとフェイトが雑談していると…

アリサ「難しいわね」

すずか「流石ロボット」

アリサとすずかがシミュレータから出てきた。

なのは「終わったの？」

アリサ「休憩よ」

すずか「中々面白いよ」

アリサ「暫くは通いね」

ピカチュウ「ピファ〜」

アリサ達は暫くピカチュウベースに通う事になった。

第三話

フエイト「ピカチュウ〜？」

ピカチュウ「ピカ？」

フエイトはピカチュウを探していた。

フエイト「お散歩の時間だよ」

アルフ「準備しな」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

ピカチュウは準備するとフエイト達と散歩？に出掛けた。

ピカチュウ「ピカ♪ピカ♪ピカチュウ〜♪」

ピカチュウは楽しそうに歩いていた。

フエイト「ん？」

はやて「ん〜！…困ったな〜」

散歩をしていると、車椅子のタイヤが溝にはまって動けないはやてがいた。

ピカチュウ「ピカ！」

ピカチュウは車椅子を押すと溝からはやてを脱出させた。

フエイト「偉い偉い」

ピカチュウ「チャ〜♪」

はやて「おおきに。助かったわ〜♪」

フエイト「どういたしまして」

はやて「可愛いワンコやね、後…なんて生き物？」

フエイト「ネズミだよ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

はやて「デカ！ネズミ、デカいな！」

フエイト「そうなのかな？」

ピカチュウ「ピカ〜？」

はやて「でも、かわええなく〜♪おいで〜♪」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

ピカチュウははやての膝の上で撫でられていた。

はやて「そや、ウチは八神はやていいます」

フエイト「フエイト。フエイト・テスタロッサです」

はやて「フエイトちゃんか〜」

ピカチュウ「チャ〜♪」

フェイトと雑談しながらはやてはピカチュウをモフモフしていた。

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

フェイト「あ、うん。そろそろ行こうか」

はやて「おっと、ごめんな？何処かお出掛けの途中やった？」

フェイト「お散歩の途中っていうかピカチュウのお小遣い稼ぎ？」

はやて「ピカチュウのお小遣い稼ぎ？」

フェイト「えつと、どう説明したらいいか…見に来る？すぐそこなんだけど」

はやて「うん！見させてもらおうわ」

フェイトははやての車椅子を押して駅の広場までやって来た。

ピカチュウ「ピカ！」

するとピカチュウは蓋のない缶を置くとポケットを漁り出した。

はやて「何が始まるん？」

フェイト「大道芸っていうやつ」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

するとピカチュウは三つのボールを取り出すとジャグリングを始めた。

はやて「すご!」

ピカチュウ「ピカピク」

客「お!今日もやってるね!」

ピカチュウが大道芸を始めるとお客さんが寄ってきた。

ピカチュウ「ピカ!」

するとピカチュウはボールを二つ増やした。

おく!

歓声も上がった。

ピカチュウ「ピカチュウく」

ノってきたピカチュウはバク宙など加えていき、盛り上げた。

ピカチュウ「ピカチュウく」

ピカチュウは芸を終えると缶を持ちおひねりを待った。

チャリン♪チャリン♪チャリン♪チャリン♪チャリン♪カサツ♪
チャリン♪チャリン♪

中にはお札を入れてくる人もいた。

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

ピカチュウはお客さん一人一人に手を振って見送った。

はやて「あんなに稼いでどうするん？」

フェイト「ピカチュウのお小遣いだから使い道知らないんだ」

はやて「ただのネズミやないんやね」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

ただいま♪

フェイト「お帰り。どうだった？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

バツチリだよ！

フェイト「じゃあ帰ろうか」

ピカチュウ「ピカチュウ」

はやて「途中まで一緒に帰ろう？」

フェイト「うん」

フェイトとはやては途中まで一緒に帰り別れた。

第四話

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

チャリン♪チャリン♪

アリサ「で？そんなに稼いでどうするのよ？」

ピカチュウ「……」

アリサ「まさか…無計画？」

ピカチュウ「…ピカ？」

…えへ？

アリサ「計画がないなら目立つ事をしないの！」

ピカチュウ「チャ…」

こっぴどく叱られた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

ふう、バレずに済んだ。

どうやらピカチュウは何かの目的でお金を稼いでるようだった。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

目標額までもう少し！

ピカチュウは誰もいない廊下で一人いきこんでいた。

からんころん♪

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピンポーン♪

はやて『はい？』

ピカチュウ「ピカチュウ」

はやて『お！ピカチュウやね！入っておいで♪』

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

からんころん♪

ピカチュウは玄関を開けて中に入っで行った。

はやて「いらっしやい」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ヴィータ「よお、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカピ♪」

シグナム「良く来た。……」勝負するか？」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

負けないよ〜！

ピカチュウとシグナムは庭に出ると剣の稽古を始めた。

シグナム「……ふう、今日も引き分けか」

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

やっぱり強いね〜。

シグナム「何を言う。紙一重で避けておいて」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

そこは慣れだよ！

シグナム「なるほど、自然体で避けてるのか」

はやて「シグナム、ピカチュウ〜♪オヤツやで」

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

ピカチュウはスタコラサツサとオヤツに飛びついた。

ピカチュウ「ピファ〜♪」シャリシャリ♪

はやて「美味しいか？」

ピカチュウ「ピカ♪」

はやて「そら、良かった」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

今日はお出掛けしないの？

はやて「お出掛け？せえへんよ。買い置きもあるし」

ピカチュウ「ピ♪」

ピカチュウはそのまま楽しく過ごして帰った。

アリサ「はあ？襲われた？何よなのは？恨みでも買ったの？」

なのは「売ってないもん！」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

今なら三割引？

なのは「売ってないもん！て言うか元値幾らなの！」

ピカチュウ「……ピカ？」

……えへ？

なのは「誤魔化されないもん！」

ピカチュウ「ピッ！」

チツ！

なのは「舌打ちしたの！」

アリサ「ほら、なのはで遊ばないの」

ピカチュウ「ピカ〜」

すずか「何で襲われたのかな？」

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

知らず知らず恨みを買ったの。

なのは「なのは、無実なの」

ピカチュウ「ピカチュウ」

犯罪者は皆そう言う。

なのは「犯罪者じゃないの！」

ピカチュウ「ピカ？」

なのは「誤魔化されないもん！」

ピカチュウ「ピッ！」

なのは「また舌打ちしたの！」

アリサ「なのはで遊ばないの」

ピカチュウ「チャ〜」

アリサに注意されやめた。

ピカチュウ「ピカピ〜」

アリサ〜。

アリサ「ん？何？」

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

帰ろうよ〜。

アリサ「後ちよつとでクリアだから待ちなさい」

すずか「もうちよつと待っててね？」

ピカチュウ「チャ〜…」

連日、ピカチュウベースに通うのを付き合わされているピカチュウだった。

ピカチュウ「ピカ〜…」

ピカチュウは散歩に行けないので退屈していた。

ピカチュウ「ピ〜…」

ピカチュウがふて寝していると…

パンパカパーン♪×2

アリス、すずか「やった〜!」

アリス達がゲームをクリアした。

アリス「ピカチュウ、やったわよ!」

ピカチュウ「ピ〜…ピカチュウ」

へえ〜…良かったね。

アリス「何ふてくされてるのよ?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ボクのお散歩が犠牲になったけどね。

すずか「その…怒ってる?」

ピカチュウ「ピカピク」

別に。

アリサ「わかったわよ。今度好きなところに連れて行ってあげるわよ」

ピカチュウ「ピカピ？」

本当に？

アリサ「ええ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

それで手をうつよ。

こうしてピカチュウは好きな場所へのお散歩を勝ち取った。

第五話

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

アリサ、フエイト「ピカチュウ〜！」

お散歩でピクニックに来ているピカチュウ一行、ピカチュウはハイテンションで山を登っていた。

すずか「元気だね♪」

なのは「ペース速いの！」

ピカチュウ「ピカピカピカ〜♪」

ピカチュウはそこら辺を駆けずり回っていた。

アリサ「ちよつと後悔してるわ。こんなにストレス溜まったのね」

フエイト「ダメだよ？」

アリサ「悪かったわよ」

アリサは付いていきながら反省していた。

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ〜♪」

山道を登ること暫し、やっと頂上が見えてきた。

アリサ「登って来たわね♪」

なのは「やっと着いたの…」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

すずか「元気いっぱいだね」

ピカチュウは元気に走り回っていた。

アリサ「ほら、ピカチュウ？ご飯にするわよ」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

ピカチュウはご飯に飛びついた。

アリサ「ピクニックつてのもいいわね」

ピカチュウ「ピファ♪」シヤリシヤリ♪

フエイト「美味しい？」

ピカチュウ「ピカ♪」

ピカチュウは美味しそうにご飯を食べると…

ピカチュウ「ピカ…チャ…」

日向ぼっこを始めた。

アリサ「疲れたのかしら？」

すずか「元気に走り回ってたもんね」

フエイト「♪」

フエイトは嬉しそうにピカチュウを撫でていた。

ピカチュウ「チャ〜♪」

ピカチュウは暢気にアクビをしていた。

アリサ「ま、たまにはいいでしょ」

アリサ達も穏やかに過ごした。

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

フエイト「待ってよ、ピカチュウ」

ある日、ピカチュウとフエイトが散歩をしていると…

はやて「お！ピカチュウや」

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ〜♪」

はやて達と出会った。

ヴィータ「そつちも散歩か？」

フェイト「うん」

ピカチュウ「ピカ〜♪」

ピカチュウははやてにモフモフされていた。

ピカチュウ「ピカ〜…ピカチュウ！」

ピカチュウは満足したのかはやての膝の上から降りた。

はやて「ほな、またね」

フェイト「うん、またね」

はやて達と別れたピカチュウとフェイトは散歩に戻った。

ピカチュウ「……」スタコラサツサ

その日の夜、ピカチュウはアリサの邸を抜け出した。

シグナム「ページ数はどれくらいだ？」

シャマル「半分って所かしら」

ヴィータ「うし！後半分！」

ザファイラ「だがどうする？管理局が出てきたとなると簡単にはいかぬ」

シグナム「それは…誰だ！」きい

シグナムが提案しようとするすると集まっていたビルの屋上の戸が開いた。

ピカチュウ「…」

ヴィータ「ピカチュウ？何してんだ？こんな所で」

ピカチュウ「ピカチュウ」

提案しにきたの。

ヴィータ「提案？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

皆が集めるて魔力について。

ヴィータ「…何で知ってる？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

こつそり調べてたから。

ヴィータ「何時から知ってた…」

ピカチュウ「ピカチュウ」

最初から。

ヴィータ「なら、邪魔するな」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

むしろ協力するよ。

ヴィータ「協力だ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ボクの魔力をあげるよ。

ヴィータ「ピカチュウの？」

ピカチュウ「ピカ」

ヴィータ「シヤマル…」

シヤマル「はい、ちよつと検査させてね」

シヤマルが魔力検査すると…

シヤマル「うそ…」

シグナム「どうした？」

シヤマル「この子…魔力がとても高い…計測出来ないくらいに」

シグナム「そんな馬鹿な。なら何故探知魔法に引っ掛からない？」

シヤマル「わからないわ」

ピカチュウ「ピカ？」

ヴィータ「本当にいいのか？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

まだダメ。

ヴィータ「何でだよ!？」

すぐ目の前にある魔力の塊を見逃す事はしたくないヴィータだった。

ピカチュウ「ピカチュウ…」

ピカチュウは闇の書が完成すると暴走して管制人格と戦う事を教えた。

ヴィータ「何だ、ソイツをぶつ叩けばいいんだろ？」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

戦力が足りないの…

シグナム「それほど強いのか？」

ピカチュウ「ピカ」

シャマル「わかったわ。皆、言う通りにしましょ」

ザフィーラ「うむ、万全にしよう」

ヴィータ「…わかった」

ヴィータ達は明日に備えて家に戻り、ピカチュウも戻った。

第六話

ピカチュウ「ピカチュウ！ピカピ！」

フエイト「…うん、わかった。手伝うよ」

アルフ「アタシもな」

ピカチュウ「ピカチュウ」

これで戦力はよし。

フエイト「じゃあ、明日に備えて寝よ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウもフエイトと一緒に眠った。

フエイト「お待たせしました」

ヴィータ「おう」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

皆、覚悟はいい？

ヴィータ「出来てるよ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

シヤマル、お願い。

シヤマル「収集開始」

ピカチュウ「ピ、ピカッ…」

フエイト「ピカチュウ、大丈夫？」

フエイトの膝の上で頑張って耐えてるピカチュウだった。

闇の書「…コンプリート。闇の書、起動します」

はやて「…」

ヴィータ「はやて！」

気絶したはやてが転移してくると闇の書と融合した。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

皆、来るよ！

闇の意思「また…目覚めてしまった」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

皆、いくよ！

ガキイン!

フェイト「ツ！なら、プラズマランサー！」

ズドン！

闇の意思「はあ！」

守護騎士とフェイトが頑張ってるなか、ピカチュウも参戦しようとしていたが…

シャマル「駄目よ。まだ回復中よ」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

大人しく回復に専念してきた。

ヴィータ「ぶっ飛べ！」

ガキイン！

闇の意思「……………」

ヴィータ「かてえ…」

ピカチュウ「ピカ…」

シャマル「よし、いいわよ。無理しちや駄目よ?」

ピカチュウ「ピカ！ピッピカチュウー！」

うん！ジェットバスター！

キラッ

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウはジェットバスターに飛び乗ると…

ピカチュウ「ピカピ！」

《エターナル》

変身！

《エターナル》

エターナルに変身した。

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ガキーン！

ピカチュウはナイフで斬りかかっては離れを繰り返していた。

ピカチュウ「ピカチュウ〜…」

せめて動きが止められれば…

フエイト「止められれば？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ジェットバスターの砲撃で倒せるのに。

フエイト「どのくらい？」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

十秒くらい…

フエイト「わかった。任せて」

ピカチュウ「ピカピ？」

お願いしていい？

フエイト「うん」

ピカチュウ「ピカ〜！ピカチュウ〜！」

よし！バスターモード！

ジェットバスターは羽を畳むとバスターモードになった。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ターゲットロック！

フエイト「バインド！」

ガシッ！

ピカチュウ「ピッピカ！チュウ〜！」

バスター砲！ファイヤー！

闇の意思「ッ！」

ズドン！

闇の意思はバインドで拘束されて砲撃をまともに受けた。

ピカチュウ「ピカ!？」

どう!？

はやて『イタタタ：なんやの？人が気持ちよく寝とるのに』

ピカチュウ「ピカチュウ！」

意識が戻った！

フェイト「ピカチュウ、次は！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

もう一発！

ズドン!!

闇の意思が怯んでる隙にピカチュウはもう一発叩きこんだ。

はやて「お、落ちる〜!？」

シグナム「主！」

シグナムが駆けつけキャッチした。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

離脱するよ！

ピカチュウ達は闇の書のバグを残し離脱した。

はやて「一体どういう状況？」

ピカチュウ「ピカピカ」

ピカチュウは現状について話した。

はやて「なるほどなく…何やフェイトちゃんまで巻き込んでしまつたみたいやし、ごめんな？」

フェイト「気にしないで」

ヴィータ「それで？あの黒いのはどうすんだ？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ブツ飛ばす！

シャマル「どうやって？」

ピカチュウ「ピカ…」

それは…

バグ「ギャオ〜！」

はやて「デカツ！怪獣やん！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

Pライナー！

シユシユポポ！シユシユポポ！

はやて「SLデカツ！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ピカチュウはPライナーに乗り込むと…

ピカチュウ『ピカチュウ！』

ライナーフォーメーション！

ガツシヤン！

ピカチュウ『ピカピカチュウ！』

バトルピカチュウ！

バトルピカチュウがバグと対峙すると…

ピカチュウ『ピカチュウ〜!』

バトルが始まった。

はやて「ウチは夢を見てるんやろか?」

フエイト「現実だよ?」

ピカチュウ『ピカチュウ〜!』

ドカバキドカバキ!

海上では激しい戦いが繰り広げられていた。

ピカチュウ『ピカピカ〜!』

くらえ、電撃の嵐を!

バトルピカチュウが両手を突き出すと…

ピカチュウ『ピカチュウ〜!』

ライトニングストーム!

バチバチバチバチ!パキイン!

放たれた電撃の嵐で闇の書のバグはコアを破壊され崩壊した。

ピカチュウ『ピッピカチュウ!』

ピカチュウは勝利の雄叫びを上げてバトルピカチュウをピカチュウベースに戻した。

第七話

クロノ「で？どういう訳だ？この間の戦闘は」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

フエイト「大したことじゃないよ？」

クロノ「大事だ！何だあれは！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

フエイト「闇の書のバグ？」

クロノ「ロストロギアだぞ！」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

フエイト「倒しちゃったよ？」

クロノ「危険な物とは思わなかったのか！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

フエイト「アレ位どうってことない？」

クロノ「ツ〜！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

フエイト「それに闇の書はもうない？」

クロノ「どう言うことだ？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

フエイト「バグを取り除いたから本来の姿に戻った？」

クロノ「本来の姿に？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

フエイト「夜天の書？」

クロノ「せめて詳しいデータがあれば…」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

フエイト「一応あるけど？」

クロノ「……渡してくれるか？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウはクロノにディスクを渡した。

ピカチュウ「ピカチュウ」

フエイト「返さなくてもいいって」

クロノ「いいのか？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

フエイト「色々してもらってるお礼だっ」

クロノ「なら、ありがたく貰っておく」

ピカチュウ「ピカチュウ」

フエイト「もし足りないデータがあったら言っ」

クロノ「わかった」

クロノはディスクを持って帰艦した。

ピカチュウ「ピカチュウ!?!」

アリサ「さあ、ピカチュウ? 言い残す事はある?」

すずか「酷いな? 私達に黙ってロボットを出すなんて」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

だっってボクのだもん!

アリサ「アタシは飼い主よ?」

すずか「友達だよね？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

それ関係ないじゃん！

アリサ「そう…あくまでも無罪を主張するのね」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

もともとから無罪だよ！

すずか「友達を裏切った罪は重いよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

理不尽だ〜！

アリサ「うう…私達はこんなに心を痛めてるのに…」

すずか「ピカチュウは関係ないっていうんだ…」

二人が背後を向くと涙が零れた。

ピカチュウ「…ピカチュウ」

これはなに？

ピカチュウが二人の手を確認すると目薬があつた。

アリサ、すずか「…チツ！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

舌打ちした〜！

アリサ「とにかく〜！私達も乗せなさい！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ダメに決まってるでしょ！

すずか「シミュレータ飽きたんだもん！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

それが本音か〜！

ピカチュウの叫びがピカチュウベースに響き渡った。

全く！

フエイト「まあまあ〜」

アリサ「ケチ…」

ピカチュウ「ピカピ？」

何か言った？

アリサ「別に」

ピカチュウ「ピカ…」

「悩みが付きないピカチュウだった。

ピカチュウ「ピカ…」

ビー！ビー！ビー！

ピカチュウ「ピカチュウ!?」

するとピカチュウベースの警報が鳴り響いた。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウは急いで艦橋に戻った。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウは急いで警報の原因を調べた。

フエイト「何事？」

ピカチュウ「ピカ!?ピカチュウ！」

うえ!?! 大変だ!

すずか「どうしたの!?!」

ピカチュウ「ピカピピカチュウ!」

隕石群が地球に向かってる!

アリサ「何ですって!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

これが落ちたら…

フエイト「落ちたら?」

ピカチュウ「ピカピピカチュウ」

街は壊滅だよ。

アリサ「ピカチュウ、何とかしなさい!」

ピカチュウ「ピカピ!?!ピカチュウ!」

ボクが!?!軍隊の仕事だよ!

アリサ「ピカチュウベースが警報を鳴らす程の隕石群を地球の組織
に対処出来るの?」

ピカチュウ「チャ…」

もつともな意見にピカチュウは項垂れた。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

よし、わかった！

ピカチュウは席に着くと…

ピカチュウ「ピカピ！ピカチュウ！」

ビルドアップ！PBロボ！

ピカチュウベースが変形すると…

ピカチュウ「ピカチュウ！」

PBロボ、浮上！

PBロボは空を登り宇宙空間に出た。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

全砲門開け！

ミニミニピカチュウ「チュウ〜！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

全弾発射〜！

PBロボは一斉射撃で隕石群を吹き飛ばした。

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

アリサ「このチートネズミは…」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

アリサ「私達の出番がないじゃない！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

最初からないよ！

アリサ「ここはピンチになってロボットを総出で出動する場面よ！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

知らないよ！

アリサ「私の活躍が〜！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

さ、軍隊にバレル前に帰ろ。

ピカチュウ達は海鳴市に戻った。

第八話

ピカチュウ「チャ〜…」

ある日、ピカチュウがお昼寝していると…

アリサ、すずか「ピカチュウ〜!？」

ピカチュウ「ピカ？」

アリサとすずかが慌ててやって来た。

アリサ「これ見て！」

ピカチュウ「ピカ〜？」

アリサは新聞を見せてきた。

すずか「ここに写ってるのピカチュウベースだよね？」

新聞には宇宙で隕石群を破壊してるPBロボが写っていた。

ピカチュウ「ピカ〜…」

それか〜…。

アリサ「何？アンタ知ってたの？」

ピカチュウ「ピカピカピカチュウ」

今朝、新聞を見たからね。

アリサ「なら軍隊が血眼になって探しているのは？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

知ってるよ。

すずか「このままじゃ私達の秘密基地が見つかったちゃうよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ボクのだよ！

アリサ「いいじゃない、減るもんじゃないし」

ピカチュウ「ピカピ！」

減るよ！

すずか「所有権は後にしてどうするか考えなきゃ！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

あげないよ！

アリサ「そうね、このままだといずれ見つかるわよね」

ピカチュウ「ピカピ!？」

無視!?

すずか「やっぱり別の場所に隠す?」

アリサ「どうやって?」

すずか「……」チラツ

ピカチュウ「ピカチュウ」

もう別の場所に移動してあるよ。

アリサ、すずか「いつの間に!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ」

新聞に載る前から。

アリサ「教えておきなさいよ!」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

入り浸るでしょ!」

アリサ「いいじゃない!」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ダメなものはダメ。

すずか「ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ？」

すずか「本当にダメなの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

学業優先。

すずか「学業真面目だよ？」

ピカチュウ「…ピッ！」

アリサ、すずか「舌打ちした！」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

暫く騒動が治まるまでダメ。

アリサ「わかったわよ」

アリサとすずかもようやくやく諦めた。

ピカチュウ「ピカチュウ♪」フアサ

ピカチュウが邸の廊下を歩いていると…

「アリサ「あら、ピカ〜チュウ〜!?!」

アリサがピカチュウを見つけると変な呼び方になった。

ピカチュウ「ピカピ?」

どうしたの?

アリサ「何よ、そのマント!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ブラザーマント。

アリサ「何でブラザーマントなんて持ってるのよ!」

ピカチュウ「ピカピ…ピカチュウ…」

それはね…ボクはM78…

スパン!

ピカチュウ「ピカ〜!?!」

アリサ「誰がボケろと言ったかしら?」

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「それで何でそんなの付けてるの?」

ピカチュウ「ピカピピカチュウ」

ピカチュウベースに入る為の鍵にしたの。

アリサ「何で鍵なんてかけるのよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

入り浸るからでしょ！

アリサ「いいじゃない！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

よくないよ！

アリサ「減るもんじゃないじゃない！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

アレはボクのだよ！

アリサ「いいじゃない！ね？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

アリサ「ケチケチしないの！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ケチじゃない！

アリサ「仕方ない。ほら、これでどう?」

アリサはどこからともなく林檎を出した。

ピカチュウ「ピカチュウ!」

釣られないよ!

アリサ「…チツ!」

ピカチュウ「ピカチュウ〜!」

舌打ちした〜!

アリサ「なら、これでどう?」

今度は梨を出した。

ピカチュウ「ピカ!」

アリサ「これでもダメなの?」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「仕方ない。これでどうよ」

桃を取り出した。

ピカチュウ「ピ、ピカ」

ちよつと揺らいだ。

アリサ「ほらほら、もう一つ付けるわよ」

ピカチュウ「ピカ〜!？」

揺らぎまくった。

アリサ「とどめよ！」

アリサは更に桃を出した。

ピカチュウ「チャ〜…」

ピカチュウは桃を受け取ると負けを認めた。

アリサ「さあ、ブラザーマントを寄越しなさい」

ピカチュウ「ピカ〜…」ガサゴソ

ピカチュウは腕輪を渡した。

アリサ「ありがとう。で？どうやってマントにするの？」カシヤン

ピカチュウ「ピカチュウ」

念じれば展開されるよ。

アリサ「ん」フアサ

アリサが念じるとマントが展開された。

アリサ「ぴったりね」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

サイズの自動調整してるからね。

アリサ「便利な機能ね」

ピカチュウ「ピカ」

でしょ。

アリサ「これでピカチュウベースに堂々と入れるわね」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「ん？マントを付けてるって事はピカチュウ？ピカチュウベースに行こうとしてたの？」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「何かあったの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

暇潰し。

アリサ「なら、一緒に来なさい。散歩に行くわよ」

ピカチュウ「ピカ♪」バサツ…カシヤン

アリサ「…何今の!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ブラザーマンツの収納機能。

アリサ「こう?」バサツ…カシヤン

ピカチュウ「ピカチュウ?」

出来たでしょ?

アリサ「ええ。さあ、行くわよ」

ピカチュウ「ピカピく♪」

アリサはピカチュウを連れて散歩に出掛けた。

第九話

すずか「ズルイ！」

アリサ「別にいいでしょ」

ピカチュウ「ピカチュウ〜…」

ある日、アリサとすずかがお茶会をしてるとブラザーマンントの事が話しになった。

すずか「私も欲しい！」

ピカチュウ「ピフア〜♪」

ピカチュウは暢気にアクビをしていた。

すずか「む〜！」

ピカチュウ「ピ、ピカ？」

ここですずかに睨まれてる事にピカチュウは気付いた。

すずか「ねえピカチュウ？不公平は良くないと思うの」

ピカチュウ「ピカ」

すずか「なら、分かるよね？」

ピカチュウ「ピカピ！」

ピカチュウはバツテンを作った。

すずか「どうして!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリスと取引してるから。

すずか「何が欲しいのかな？」

ピカチュウ「ピカ〜」

う〜ん。

すずか「林檎？梨？桃？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

全部！

すずか「もしもしファリン？今から言うのを用意してくれる？」

すずかは用意してみせた。

アリス「ちよつと、甘やかさないでよ」

すずか「取引だもん♪」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

すずか「じゃあ、はい♪」

すずかは手を差し出した。

ピカチュウ「ピカ？」

すずか「ブラザーマント、頂戴」

ピカチュウ「ピカピカチュウ！」

まだ林檎とか貰ってないよ！

すずか「後で必ずあげるから、ね？」

ピカチュウ「ピカ！」

ダメ！

すずか「うう…」

すずかはよよよと泣き真似を始めた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

ひっかからないよ。

すずか「…チツ！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

舌打ちした〜！

すずか「…コホン。ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ？」

すずか「頂戴♪」

ピカチュウ「ピカチュウ!？」

無かったことにした!？」

すずか「どうしたの？さっきから変だよ？」

ピカチュウ「ピカピク！」

誰のせいだ〜！

すずか「いいでしょ？」

ピカチュウ「ピカ！」

すずか「どうしたらくれる？」

ピカチュウ「ピカ〜…ピカピカチュウ」

えっとね…今から言うのを出来るならいいよ。

すずか「何かな？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

五年後、【魔法少女リリカルすずか♪】ってフリフリのドレスを着てやるならいいよ。

すずか「それくらい！やるよ！」

アリサ「……」

アリサはやっちゃった。みたいな表情をしていた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

ここにサインを。

すずか「♪」

ピカチュウ「…ピカ！」

ちゃんとサインされたのでピカチュウはすずかにブラザーマントを渡した。

すずか「やった♪」

ピカチュウ「ピ、ピ、ピ」

アリサ「ピカチュウ、悪い顔してるわよ」

ピカチュウ「ピカ!？」

違う意味でピカチュウもニヤけていた。

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」からん、ころん

フエイト「ピカチュウ?」

ピカチュウ「ピカ?」

フエイト「何処に向かっているの?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

商店街。

フエイト「じゃあ、もう少しだね」

ピカチュウ「ピカピ〜♪」からん、ころん

ピカチュウはフエイトをある露店まで案内した。

店主「お?ちっこいの、また来たのか」

ピカチュウ「ピカ!」

店主「そつちの子は飼い主かい?」

ピカチュウ「ピカ!」

フエイト「どうも」

ピカチュウ「ピカ〜…ピカチュウ〜♪」

店主「またそのアクセサリーを見ているのか？」

ピカチュウ「ピカピ！ピカチュウ」ガサゴソ

ピカチュウは貯金箱を店主に差し出した。

店主「どうしたんだ？これ？」

フエイト「えっと、そのお金はピカチュウ自身が大道芸で稼いだお金です」

店主「どれ…」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

フエイト「そのアクセサリー買うのに足りませんか？」

店主「…残りは取っときな」

店主は中からお札を二枚、二千円を抜きピカチュウにアクセサリーを渡した。

ピカチュウ「ピカチュウ？」

フエイト「もつとするのでは？」

店主「頑張った褒美だ」

ピカチュウ「ピッピカチュウ♪」

フエイト「ありがとうございます」

店主「これも持ってけ。気に入ってたろ」

ピカチュウ「ピ〜♪」

ピカチュウは別のアクセサリも貰い…

ピカチュウ「ピカピ〜！」

店主「おう。またこい」

露店を後にした。

ピカチュウ「ピカピ〜♪」

アリサ「わつと。どうしたのよ急に？」

ピカチュウ「ピカピ〜！ピカチュウ！」

アリサ！プレゼント！

アリサ「プレゼント？」

ピカチュウはアリサにアクセサリを見せた。

アリサ「綺麗♪ありがとう、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

フエイトにも。

フエイト「私にもくれるの？ありがとう♪」

ピカチュウ「チャ〜♪」

二人に撫でてもらい楽しく過ごした。

リターンズ3

第一話

ピカチュウ「ピカチュウく…」

ある日、ピカチュウが庭でお昼寝をしていると…

シン

神様「ピカチュウ。ピカチュウ？起きてください」

ピカチュウ「ピカく？ピカ!?ピカチュウ！」

うくん？うえ!?神様！

神様「久しぶりですね、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

どうしたの？

神様「ピカチュウ、急ですが天国に戻ってくれますか？」

ピカチュウ「ピカ？ピカチュウ？」

えっ？魔物倒してないよ？

神様「…大変残念ですが今のピカチュウでは魔物に勝てません」

ピカチュウ「ピカ〜…」

神様「戻ってくれますね」

ピカチュウ「ピカピカチュウ？」

アリサ達はどうかなの？

神様「あの世界は…魔物と一緒に滅んでもらいます」

ピカチュウ「ピカ!?ピカチュウ！」

そんな!?!ボクがなんとかするよ!

神様「どうやってですか？」

ピカチュウ「ピカ〜…」

神様「…一っだけ助ける方法があります」

ピカチュウ「ピカピ！」

ホント!

神様「ピカチュウがこれを食べれば強くなれます」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

黄金の林檎?

神様「神獣の実です」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

神獣の実？

神様「そうです。食べた獣を神獣に進化させる実です」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

神様が渋るって事は副作用があるんでしょう？

神様「とてつもない痛みが…」

ピカチュウ「ピカチュウ」

なんだ〜食べるよ〜。

神様「耐えられますか？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

アリサ達の為だもん。

神様「…わかりました。頑張って耐えてください」

ピカチュウ「ピカ！」シャリシャリ！

ピカチュウは一気に黄金の林檎を食べた。

ピカチュウ「ピカ!?チャ〜…」

ピカチュウは痛みが出るとうずくまって耐えた。

ピカチュウ「チャ〜…」

ピカチュウは必死に耐えた。アリサ達を守る為に。

神様「頑張りなさい、ピカチュウ」

ピカチュウ「チャ〜！」

そしてどれくらいの時間が過ぎたか痛みが引いた。

ピカチュウ「チャ〜…ピカ？ピッピカチュウ！」

神様「どうやら乗りきったようですね」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

体が軽い？

神様「貴方はもう普通のネズミポケモンではありません」

ピカチュウ「ピカ」

神様「さあ、戻りなさい。そして頼みましたよ」

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

ピカチュウは元気に挨拶して天国を後にした。

ピカチュウ「ピカ〜…」

そしてピカチュウが天国から戻ってきて数日、異変は特になかった。

ピカチュウ「ピカチュウ〜…」

やっぱり今の内かな〜…

アリサ「何が？」

ピカチュウ「ピカチュウピカチュウピカチュウピカチュウ」

ピカチュウベースのパワーアップパーツの合体。

アリサ、すずか「合体！」

ピカチュウ「ピ？ピカチュウ！」

え？しまった！

ピカチュウは逃げようとしたが…

アリサ「さあ、ピカチュウ？ゆっくり語りましょう？」

すずか「林檎は沢山あるからね？」

ピカチュウ「チャ〜…」

一番聞かれてはいけない人物に聞かれたばやきだった。

アリサ「それで？パワーアップパーツは何処にあるの？」

すずか「ドッキングだね！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

宇宙だよ。

アリサ、すずか「よし！行こう！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

勝手に決めないで！

アリサ「まさかとは思うけど一匹でいい思いしようなんて考えてないわよね？」

すずか「私達の仲間じゃない」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ダメだよ！

アリサ「いいじゃない滅るもんじゃないし」

すずか「ね？ね？いいでしょ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

遊びじゃないの。

アリサ「何よ、私達の意味が不真面目とでも？」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「なんですって！」グリグリ！

ピカチュウ「ピくかくチュくウく!?」

ピカチュウはこめかみを押さえながらふらふらしていた。

すずか「よしよし。酷い飼い主だね」

ピカチュウ「ズズ、ピカピく」(T|T)

すずかく。

アリサ「何よ！それ！」

すずか「よしよし」「ニャ♪」

アリサ「あゝ！すずか！点数稼ぎは卑怯よ！」

すずか「酷い！アリサちゃん、私がそんなことするように見えるの
！」

よよよ、と崩れるすずか。

アリサ「ええ」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

いじめちゃダメだよ！

アリサ「なく！アンタまで！」

ピカチュウ「ピカピカチュウ！」

ボクは弱いものの味方だよ！

アリサ「何よそれ！私がか弱くないとでも！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

胸に手を当てて。

アリサ「……」

ピカチュウ「ピカチュウ」

沈黙が答えだよ。

アリサ「クツ！」

ピカチュウ「ピ、ピカチュウ」

フ、虚しい勝利だ。

すずか「じゃあ行こうか？」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

行かないよ？

すずか「ええ〜！どうして！」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

演技に気付かないとでも？

すずか「うう…」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

それにフエイト達が居ないし。

アリサ「もしもし、フエイト？すぐに来て」

すずか「もしもし、なのはちゃん？すぐにアリサちゃん家まで来てくれるかな？」

ピカチュウ「ピカ〜!？」

何してるの〜!?

アリサ「これで全員ね」

ピカチュウ「ピカピカ？」

はやては？

アリサ、すすか「あ…」

度外視されていたはやてだった。

第二話

はやて「ええんや…一人は慣れとるから…」

アリサ「悪かったてば」

すずか「忘れてた訳じゃないんだよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ボクは覚えてたよ。

はやて「ピカチュウ〜！」

ピカチュウ「ピカピ〜！」

はやて〜！

ヒシッ！

一人と一匹は抱きあつた。

アリサ「さあ、ピカチュウ？全員揃つたわよ」

ピカチュウ「ピカチュウ〜…」

わかつたよ〜…

ピカチュウ達はピカチュウベースに乗り込んだ。

ピカチュウ「ピカピ！ピカチュウ！」

ビルドアップ！PBロボ！

海底でピカチュウベースが変形すると…

ピカチュウ「ピカチュウ！」

PBロボ、浮上！

PBロボが浮上した。

ピカチュウ「ピカピく！ピカチュウく…」

さらばく！地球よく…

アリサ「……」スツ

ピカチュウ「ピカ？」

アリサ「フツ！」スパン！

アリサはゴルフのフォームでピカチュウを叩いた。

ピカチュウ「チャく!?!」

ピカチュウは痛みで転げ回った。

アリサ「ボケてる暇があつたら急ぎなさい」

ピカチュウ「ピカく」

ピカチュウはさっさと大気圏を突破した。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

アリサ「それで？パワーアップパーツは何処にあるの？」

ピカチュウ「ピカ〜」ポチポチポチ

ピカチュウが端末を操作すると…

シユン

アリサ達「…デカっ！」

船首がピカチュウの顔になった船が姿を現した。

ピカチュウ「ピカチュウ」

ドッキング開始。

PBロボはパワーアップパーツの後ろの方にドッキングして管制塔となった。

ピカチュウ「ピカピ！ピカピピカチュウ！」

完成！バトルシツプピカチュウ！

アリサ「ちよつと、衝撃が小さいわよ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

パーツに負担はかけられないからね。

すずか「あ、なるほど」

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ」

さあ、地球に別れを告げて。

アリサ達「えっ!？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

宇宙への旅立ちだよ！

アリサ達「いやいやいや！行かないよ！」

ピカチュウ「…ピ！」

アリサ「舌打ちしたわね！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

地球に戻るよ。

ピカチュウ達は転移装置で地球に戻った。

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「お茶会も久し振りね」

すずか「そうだね」

なのは「色々あったからね」

フエイト「しばらくは平和だといいな」

はやて「そうそう面倒事はないやろ？」

ピカチュウ「ピフア〜…」

アリサ達が暢気にしていると…

ヒュ〜…

ピカチュウ「ピカ？」

ズン！

魔物「ぎゃおー！」

街に魔物が飛来した。

なのは「大変なの！」

はやて「急がんと！」

なのははやてが結界を張ろうとしたが…

なのは「結界が張れないの！」

はやて「何でや!？」

フエイト「とにかく何とかしないと!ピカチュウ！」

ピカチュウ「ピカチュウく！」

行つてきまーす!

アリサ「ちよつと待った！」

ピカチュウ「ピカ…ピカ？」

転…なに？

アリサ「ふ、ふ、ふ。遂に出番が来たわね！」

すずか「特訓の成果見せるとき！」

アリサ、すずか「ピカチュウ！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

転送!

ピカチュウ達はバトルシップピカチュウに転送され…

ピカチュウ「ピカチュウ！」

発進!

ドキュン！ドキュン！ドキュン！ドキュン！ドキュン！ドキュン！ドキュン！ドキュン！

Pライナーとマキシマムライナーを発進させた。

ピカチュウ「ピカ〜！ピカチュウ〜！」

キキイ！

アリサ『Pマシン！出るわよ！』

アリサはPマシンを発進させると…

アリサ『電撃合体！』

すずか『ライナー変形！』

ズン！ズン！

メガピカチュウとマキシマムファイターが魔物の前に立ちはだかった。

ピカチュウ「ピカ」カン！

ピカチュウはゴングを鳴らした。それと同時にアリサ達も魔物に立ち向かった。

しばらく見守っていると…

アリサ『でいやあ！』

魔物「ぎやおー…」

魔物が倒された。

ピカチュウ「ピカ!?ピカチュウ!?!」

うそ!?!ボクの出番は!?!

アリサ『…えへ?』

ピカチュウ「ピカチュウ〜!」

アリサ達は帰艦した。

第三話

ピカチュウ「ピフア〜…」

次の日、ピカチュウが日向ぼっこしてると…

アリサ、すずか「ピカチュウ〜!?!」

ピカチュウ「ピフア?!」

アリサ「大変な事になってるわよ!」

アリサは新聞を広げた。

ピカチュウ「ピカ〜?」

新聞を見ると昨日の魔物のとの戦いでロボットは日本の新兵器か!?!と書かれていた。

ピカチュウ「ピカチュウ?!」

ほっというて平気でしょ?

アリサ「大丈夫かしら?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

見つける事も出来ないよ。

すずか「なら、安心かな」

ピカチュウ「ピフア〜…」

じゃあ、寝るね〜…

ピカチュウは昼寝に戻った。

ピカチュウ「ピカチュウ〜…ピカ〜！」ぐしやぐしや！ポイツ！

アリサ「ピカチュウ？って何これ!？」

アリサがピカチュウの部屋に訪れると紙くずがアチラコチラに捨ててあった。

すずか「ピカチュウ？ちゃんとゴミ箱に捨てようね?。」

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「何を書いているのよ?。」

アリサが紙くずを広げると…

アリサ、すずか「ロボット!?!設計図!?!」

ピカチュウ「ピカ〜…」

うん…

アリサ「黙ってるなんて水くさい」

すずか「相談してくれれば何時でもものるのに！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

しないよ。

アリサ「何だよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

乗りたがるでしょ。

アリサ、すずか「ギクツ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

納得したでしょ。

アリサ「いいじゃない！少しくらい」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ボクの楽しみなの。

すずか「お願い、ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ〜」

ダメ〜。

アリサ「お・ね・が・い♪」

ピカチュウ「ピカピ…」

寒気が…

アリサ「どういう意味よ！」グリグリ！

ピカチュウ「ピカ〜!?!」

すずか「いじめちゃダメだよ！」

ピカチュウ「ピカピ〜」(T|T)

すずか〜。

すずか「ほら、泣かないの」

ピカチュウ「ズズ…ピカチュウ！」

泣かないよ！

アリサ「末っ子か！」

ピカチュウ「ピカ？」

えへ？

アリサ「誤魔化すな！」

ピカチュウ「ピカ、ピカピカピカチュウ」

さあ、続きをやるから出てって。

アリサ「やっぱり五つの車が合体よ」

すずか「ここは五つの獣が合体だよ」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

勝手に決めないで〜！

アリサ達はそのまま居座った。

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

キュイーン！トンテンカンテン！トンテンカンテン！

アリサ「どきどき」

すずか「わくわく」

ピカチュウ「ピカ…」

かり…

アリサ、すずか「ネタ的にストロップ！」

ピカチュウ「…ピツ！」

アリサ、すずか「舌打ち!？」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

なんでいるの？

アリサ「酷いじゃない。新型を作るなら教えてよ」

すずか「そうだよ、水くさい」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

何でわかったの？

アリサ、すずか「ロマンへの情熱で」

ピカチュウ「ピカピ」

便利だね。

アリサ「それで？何型？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

教えてあげないよ！

ミニミニピカチュウ「チュウ！」ジャン♪

アリサ「古いわ！」

すずか「設計図見せて？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

極秘です。

すずか「サービスするよ？」

ピカチュウ「ピカ…ピカピピピ…」

げへ…ゲへへへ…

スパン！

アリサ「ネタが下品よ」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

愛が痛い〜！

アリサ「しっかり受け止めなさい」

ピカチュウ「ピカ〜」

はーい。

アリサ「それで？何型？」

ピカチュウ「ピカピ」

車だよ。

アリサ「当たりよ！」

すずか「うう…」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

乗せないよ？

アリサ「なんで!？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

AIを積む予定だから。

アリサ、すずか「AI!？」

ピカチュウ「ピカ？」

アリサ、すずか「サポートロボット！」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

守備範囲広いね…

アリサ「それで？完成はいつなの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

同時進行だからまだかかる。

アリサ「ふーん…同時進行？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

アリサ「逃がすか！」ギユム！

ピカチュウ「チャ〜!？」

アリサはピカチュウの尻尾を踏んだ。

アリサ「あ、ごめん」

ピカチュウ「チャ〜…」フーフー

すずか「大丈夫？」

ピカチュウ「ピカピ〜」(T|T)

すずか「よしよし。私の胸で泣いていいんだよ」

ピカチュウ「ピカピ〜！」

すずか〜！

アリサ「何よ！私が悪いみたいじゃない！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

尻尾踏まれた。

アリス「うっ…」

すずか「それで？同時進行ってのは？」

ピカチュウ「ズズ、ピカチュウ」

別のマシンも作ってるの。

アリス、すずか「別のマシン!？」

ピカチュウ「ピカ」

アリス「銀河ね！銀河なのね！」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

そう言う訳じゃ…

アリス「すずか！見に行くわよ！」

すずか「うん！」

別の格納庫に行く…

キューーン！トンテンカンテン！トンテンカンテン！

開発中だった。

ピカチュウ「ピカチュウ」

出来ても明後日くらいかな？

すずか「楽しみだね♪」

アリサ「試運転の時は呼びなさいよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

わかったよ…

ピカチュウは諦める事にした。

第四話

ピカチュウ「ピッピカピ〜！」

アリサ「きゃあ!？」

アリサが勉強していると、ピカチュウが部屋に飛び込んできた。

アリサ「ビツクリするじゃない」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

完成したよ！

アリサ「もしもし、すずか？すぐに来なさい。ロボットが出来たわよ」

ピカチュウ「ピカチュウ!？」

行動が速い!？」

ピンポーン♪

アリサ「来たわね」

ピカチュウ「ピカピカチュウ!？」

人間辞めてるよ!？」

アリサ「病めてるのよ」

ピカチュウ「ピカピカチュウ〜！」

上手いこと言ったつもりか〜！

アリサ「さあ、行くわよ」

ピカチュウ「ピカ〜！」

無視か〜！

アリサはすずかを迎えるとバトルシップピカチュウに向かった。

アリサ「それで？ロボットは？」

ピカチュウ「ピカチュウ」ポチポチポチ

ピカチュウが端末を操作するとモニターに新しいPマシンが映った。

すずか「車が五台に飛行機が五台？」

ピカチュウ「ピカチュウ、ピカチュウ」

PレーサーとPジェットター。

アリサ「フムフム。ん？輸送機は？」

ピカチュウ「ピ？ピカチュウ」

え？転送でいいじゃん。

アリサ、すずか「ロマンがわかってない！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜!?!」

このあと延々とロマンについて語られた。

アリサ「…わかったの？ 輸送機は必要なの」

ピカチュウ「ピカ〜…」

でも〜…

アリサ「ピカチュウ？ これを見なさい」

アリサは五円玉を紐で吊るしてピカチュウの目前に垂らした。

アリサ「ゆつくり見なさい。ピカチュウは輸送機が作りたくなつてくるわ」

五円玉を揺らしてアリサはピカチュウに暗示をかけた。

ピカチュウ「ピカ〜…」

アリサ「ほら、作りたくなつてきたでしょ？」

ピカチュウ「ピカチュウ〜…」

そんな気がしてきた〜…

アリサ「さあ、作るのよ」

ピカチュウ「ピカ！ピカチュウ！」

うん！作るよ！

スタコラサツサ！

ピカチュウは早速設計図を書きに向かった。

すずか「アリサちゃん…」

アリサ「何よ？」

すずか「ナイス！」

アリサ「ふふん♪当然でしょ♪」

ちよつと黒い二人だった。

ピカチュウ「ピカチュウ…」φ(∴)

ピカチュウは懸命に設計図を書いていた。

アリサ「どう？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

出来たよ！

アリサ「どれどれ」

アリサはピカチュウが書いた設計図を見た。

アリサ「早速作りなさい」

ピカチュウ「ピカ！」

ピカチュウはバトルシップピカチュウに向かった。

キューーン！トンテンカンテン！トンテンカンテン！

ピカチュウは三日で作り上げた。更に月日がながれて中学生になったアリサ達にちよつとした話があった。

アリサ「管理局に入らないかですって？」

なのは「そうなの」

すずか「…ロボットは渡さないよ？」

はやて「いややなく。うちの目的がロボットみたいやん」

アリサ「違うの？」

なのは、はやて「うっ…」

アリサ「ドライバーだって渡さないわよ」

なのは「でもく…」

なのはとはやてはアリサ達が管理局から武力的に危険視されている事を伝えた。

アリサ「だから自分達の物にしようっての？都合が良すぎするわ」

はやて「これもアリサちゃんとすずかちゃんの為なんよ」

アリサ「それはつまりピカチュウを売れって事でしょ？はやて？ア
ンタには出来るの？家族を売るってことを」

はやて「それは…」

アリサ「とにかく私達の答えはNOよ」

そして事件は起きた。

ピカチュウ「ピカチュウ…」

なのは「……………」

はやて「……………」

なのは達がバリアジャケットを纏ってやって来た。

アリサ「…こうなるのね」

すずか「なのはちゃん…はやてちゃん…」

フエイト「ピカチュウは渡さないよ」

なのは「アリスちゃんとすずかちゃんの為だからピカチュウを連れてくよ」

はやて「堪忍な」

アリス「そう…」

アリス達がドライバーを手にするが…

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウがそれを制した。

ピカチュウ「ピカチュウ」

ボクがやるよ。

アリス「…ごめん」

アリス達が戦いにくい事を感じとりピカチュウが前に出た。

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ボルテッカー！

シュン！

なのは「速い！」

ゲシッ！ゲシッ！

はやて「クッ!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウの高速の攻撃になのはとはやては何も出来なかった。

なのは「負けられないの…」

はやて「アリサちゃん達を次元犯罪者にしたくないんや…」

倒れたなのは達も意地で立ち上がろうとしていた。

ピカチュウ「…ピカピ」

…アリサ。

アリサ「どうしたの？」

ピカチュウ「ピカピピカチュウ」

ボクがこれ以上いるのは迷惑をかけるみたい。

アリサ「アンタは気にしなくていいの！」

ピカチュウ「ピカピピカチュウ」

ボクは遠くでアリサの幸せを願ってるよ。

アリサ「何を言ってるのよ！」

ピカチュウ「ピカピ、ピカチュウ」

アリサ、さよなら。

スタコラサツサ！

ピカチュウはその場から走って消えた。

アリサ「ピカチュウ〜！」

すずか「ピカチュウ〜！」

しかし戻って来ることはなかった。

なのは「アリサ…ちゃん」

アリサ「……」

《ジョーカー》

アリサ「変身…」

《ジョーカー》

アリサはジョーカーに変身すると…

アリサ「なのは、はやて。アンタ達の罪を数えなさい」

そこからは一方的な暴力だった。

「さすが「アリサちゃん！落ち着いて！」

アリサ「……」

《ジョーカー！マキシマムドライブ！》

アリサ「ライダー…キック！」

アリサはなのはとはやてを蹴り飛ばした。

アリサ「消えなさい。顔も見たくないわ」

アリサは変身を解くと邸に戻って行った。

第五話

アリサ「……」

翌日からアリサはなのはとはやてには近寄らなかつた。

すずか「アリサちゃん……」

アリサ「帰るわよ、すずか。フエイト」

アリサ達は一度帰宅するともう一度集まった。

すずか「アリサちゃん、集まったけど……」

アリサ「ピカチュウを探すわよ」

フエイト「どうやって?」

アリサ「これよ」

アリサはスパイダーショックを見せた。

アリサ「これでピカチュウのスパイダーショックの電波を拾って探すの」

すずか「なるほど」

アリサ「早速探すわよ」

アリサはスパイダーショックを弄りピカチュウのスパイダー

ショックの電波を拾った。

アリサ「ここは…山の方ね」

すずか「よし！行こう！」

フエイト「ピカチュウを連れ戻そう！」

アリサ達は山の方に向かった。

アリサ「ハアハア…」

すずか「居ないね…」

フエイト「うん…あ！あれ！」

フエイトが指差した方にブルーシートで作られたテントがあった。

アリサ「逃げられないようにそっと近付くわよ」

アリサ達がテントに近付くと泣き声が聞こえてきた。

ピカチュウ「ピカ…ピカ…ピカピク…ピカチュウ…」

えぐ…えぐ…アリサ…寂しいよ…

ピカチュウは一匹で寂しさをこらえていた。

アリサ「だったら帰ってきなさい」

ピカチュウ「ピカピ!？」

アリサ!?

アリサはピカチュウが逃げられないように背後から抱き上げた。

アリサ「心配したのよ」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

ボクがいたら…

アリサ「辛いときは頼っていいのよ」

アリサはソツと抱きしめた。

ピカチュウ「ピカピク！」

アリサ…!

ピカチュウはただひたすらに泣いた。アリサの胸で甘えながら。

ピカチュウ「ピフア〜♪」

すずか「アリサちゃん…なのはちゃん達はどうするの?」

アリサ「許す気はないわ」

フエイト「管理局を敵にまわすの？」

アリサ「じゃあフエイト？ピカチュウを引き渡せるの？」

フエイト「無理」

アリサ「でしょ。なら答えは一つよ」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

本当にいいの？

アリサ「アンタはドーンと構えてなさい」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

わかったよ！

そして数日後…

アリサ「何しに来たのかしら？」

フエイト「ピカチュウなら渡さないよ？せつかく連れ戻したんだから」

なのは「お願い、アリサちゃん」

はやて「アリサちゃん達の為なんよ」

夜、なのは達が再びやって来た。

ピカチュウ「ピカピク…」

アリス…

アリス「大丈夫よ。私が守るから」

なのは「どうしてもダメなの？」

アリス「ピカチュウは私の家族よ。渡すわけないでしょ」

はやて「わかるけど…このままやとアリスちゃん達が…」

アリス「大切なものを守れないで見捨てるくらいなら、私が悪を背負うわ」

ピカチュウ「ピカピク♪」

フェイト「さあ、どうするの？」

クロノ「こうさせてもらう」

突如クロノが現れるとケージバインドでアリスとフェイトを閉じ込めた。

アリス「しまった！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ボルテツ拳！

ガシヤン！

アリサ「何今の!？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ボクの新必殺技だよ！

ピカチュウはボルテツ拳で檻のバインドを破壊した。

ピカチュウ「ピカチュウ！」ポチ

今度はこっちの番だよ！

バチバチバチ！

なのは「え!？」

はやて「デバイスが!？」

クロノ「停止しただと!？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

アリサ「アンタ達のデバイスは無効化させてもらったわ」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

アリサ「転移も出来ないから諦めなさい」

フェイト「諦めて投降して」

クロノ「こんなこととして許されると思ってるのか！」

アリサ「アンタ達は今無許可で人の敷地に入って武器を持って脅してきたのよ？それを忘れてもらったら困るわね」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

アリサ「投降しなさい。そうすれば…」

クロノ「するわけないだろ！」

アリサ「ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ！」ポチ

シュン！

フェイト「何処に転移したの？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

バトルシップピカチュウの牢屋。

アリサ「後は時空管理局の動きしだいね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「交渉は任せなさい」

アリサ達は邸に戻って行った。

第六話

数日後…

ピンポーン♪

鮫島「お嬢様、お客様です」

アリサ「応接室に通して」

鮫島「かしこまりました」

アリサ「すずか、フェイト。行くわよ」

来ていたすずかも連れてアリサは応接室に向かった。

ガチャ

アリサ「お待ちせしました」

リンデイ「いえ」

アリサはソファに座ると話を切り出した。

アリサ「さて、ご用件は？言つときますけどなのは達を解放するつもりはありません」

リンデイ「何故ですか？」

アリサ「無抵抗の人間に武器を構えて来る人間を解放しろと？」

リンデイ「その事に関しては…」

アリサ「謝罪すれば済むと思ってるなら舐められたものね」

リンデイ「……」

アリサ「こっちは危うく家族を引き離される所だったんですよ？」

リンデイ「では、どうしろと？」

アリサ「なのは達は達はデバイスを取り上げて未開の惑星に追放します」

リンデイ「そんなことが許されると思ってるのですか！」バン！

アリサ「では、自分達を襲ってきた相手を解放しろと？また襲われるかも知れないのに？」

リンデイ「それは…」

アリサ「言つとききますけど話が出来ただけでも御の字と思ってください。本来なら話をする余地すらないんですから」

リンデイ「では、何故話を？」

アリサ「アンタ達の出方を見たのよ。もう少し大人しく言うことを聞くかと思ってたんだけどね。子供と思って甘くみたわね」

リンデイ「……」

リンディは悔しそうにして部屋を出ていった。

ピカチュウ「ピカチュウ」

ご飯の時間だよ。

なのは「ピカチュウ！ここから出して！」

はやて「出しいや！」

クロノ「出すんだ！」

フェイト「少しは反省したら？」

懲りていない三人にフェイトは呆れながら話しかけた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

フェイト「三人の処遇が決まったよ」

なのは「ど、どうなるの？」

フェイト「未開の惑星に追放だって」

クロノ「なんだと!？」

はやて「そんな!?!」

フェイト「最後の食事になるからちやんと食べてね?」

フェイトは食事を配るとピカチュウと共に去った。

ゴォー!

なのは「待って〜!」

はやて「置いてかんといて〜!」

なのは達は未開の惑星に連れて来られるとバトルシップピカチュウから降ろされて惑星に残された。

なのは「どうしよう…」

はやて「こんなことになるなんて…」

クロノ「とにかく食糧の確保が先決だ」

なのは達を木ノ実など探すが…

なのは「高い…」

木の上の方にあるため採れなかった。

はやて「どないしょ…」

クロノ「せめて休める場所だけでも確保しよう」

なのは達は近くで洞窟を見つけ休んだ。そして三日後…

なのは「お腹空いたね…」

はやて「そやね…」

クロノ「…」

今日も食糧探しをしていると…

モクモクモク

なのは「あ！煙なの！」

はやて「誰が居るん!?!」

クロノ「行ってみよう！」

なのは達が煙の下に向かうと…

ピカチュウ「ピカチュウ♪」パタパタ

ピカチュウが魚を焼いていた。

なのは、はやて「ピカチュウ!?!」

ピカチュウ「ピ？ピッピカチュウ！」

なのは「何してるの!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

キャンプだよ。

はやて「…じゅるり」

ピカチュウ「ピ？ピカチュウ？」

ん？お腹空いてるの？

なのは、はやて「うん！」

ピカチュウ「ピカチュウ…ピカチュウ」

仕方ないなく…食べていいよ。

ピカチュウは二匹の魚を焼いてなのは達にあげた。

なのは、はやて「ムシヤムシヤ！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

こっちは木ノ実のジュースだよ。

なのは、はやて「ゴクゴク！」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

まだ食べる？

なのは「いいの？」

はやて「ウチ等の事を許してくれるんか？アリサちゃんど引き離そうとしたのに」

ピカチュウ「ピカチュウ」パタパタ

反省してるからね。

ピカチュウは追加で魚を焼いていた。

なのは「クロノ君？」

ピカチュウ「ピカピ、ピカチュウ」

無駄だよ、魔法は発動出来ないよ。

はやて「クロノ君!?!何をしようと…」

クロノ「君達こそわかってるのか！ソイツは危険視されている動物だぞ！」

ピカチュウ「ピカチュウ？ピカチュウ」

ボクが嫌ならどっか行けば？迎えも宛にしないことだね。

なのは「ピカチュウの迎えは？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

一週間後だよ。

なのは「クロノ君、謝ろ？」

クロノ「嫌だ。ボク達は正しい」

ピカチュウ「ピカチュウ？ピカチュウ？」

なのはとはやてはどうする？ソイツに付いてく？

なのは「それは…」

ピカチュウ「ピカチュウ。ピカピカチュウ」

これが最後だよ。ソイツに付いて行けばボクが助ける事はもう無いよ。

なのは「クロノ君、ごめん。私は地球に帰りたい」

はやて「うちもや。家族に会いたい」

クロノ「クツ…」

クロノは一人去っていった。

ピカチュウ「ピカチュウ」

焼けたよ。

なのは、はやて「ムシヤムシヤ」

ピカチュウ「ピカチュウ」トンテンカンテン

ピカチュウはなのは達が食べてる間に新しいテントを立てた。

はやて「うう…ピカチュウ…ありがとな?これで安心して寝れる」

ピカチュウ「ピカチュウ…」ゴソゴソ

なのは「何してるの?」

ピカチュウ「ピカ?ピツ…カツ…チュウ!」ドン!

ピカチュウはリュックサックからドラム缶を出した。

なのは、はやて「ドラム缶!」

ピカチュウ「ピカ」ザパア

ピカチュウは八分目まで水を入れると…

ピカチュウ「ピカチュウ」カチカチ!

火をつけてお風呂を沸かした。

なのは「お風呂!」

ピカチュウ「ピカチュウ?」

入りたいでしょ?

なのは、はやて「うん！」

ピカチュウ「ピカチュウ」ガサゴソ

ピカチュウは石鹼やらシャンプー等を出した。

なのは、はやて「ふ〜♪」

久しぶりの風呂になのはとはやては満足した。

ピカチュウ「ピカピ〜」

なのは「寝袋!?!」

はやて「うう…至れり尽くせりや」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ゆっくり寝てね。

なのは達は寝袋に入って休んだ。

第七話

ピカチュウ「ピカ〜…ピ〜…」

なのは「ピカチュウ、ピカチュウ？朝だよ？」

ピカチュウ「ピカ？チャ〜…」

ピカチュウは起きると伸び〜！ツとした。

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ」

さあ、朝御飯を探そう。

はやて「お〜！」

なのは達はピカチュウと共に朝御飯を探しに向かった。

なのは「あ！木ノ実だよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」スタコラサツサ！

任せて〜！

ピカチュウは木を登ると…

ピカチュウ「ピカピ〜」

落とすよ〜。

はやて「よっ！ほっ！」

なのは達はピカチュウが落とすと木ノ実を袋に摘めていった。

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

次は魚だね〜。

はやて「どうやって獲るん？」

ピカチュウ「ピカ…」ポチャン…バチ！

ピカチュウは尻尾を水面に浸けて電気を流した。すると電気で仮死状態になった魚が浮いてきた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウは魚を集めるとテントがある場所に戻った。

ピカチュウ「ピカチュウ〜」テキパキ

ピカチュウは魚の腸などを処理すると焼き始めた。

はやて「なのはちゃん…」

なのは「なに？」

はやて「ウチ等ピカチュウが居らんかったら死んでたとちゃう？」

なのは「多分」

ピカチュウ「ピカピく♪」

炊けたよく♪

はやて「白米やて!？」

ピカチュウ「ピカチュウく」

味噌汁付きだよく。

なのは「お醤油まで…懐かしいの」

未開の惑星に来て四日、なのは達は日本の料理を懐かしんだ。

はやて「うう…もう食べれへんと思ってた」

なのは「良かったよ…」

なのは達は味を噛み締めた。そして迎えがやって来た日…

なのは「うう…良かった…帰れる」

はやて「ホンマやね…」

バトルシップピカチュウに乗った。

ピカチュウ「ピカチュウく」

バトルシップピカチュウは地球に向けて発進した。

なのは「ねえピカチュウ?」

ピカチュウ「ピカ？」

なのは「クロノ君はどうなったの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

文字通り追放だよ。

はやて「助けないん？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

チャンスはあげたよ。

なのは「そうだね…」

なのは達は現実の厳しさを知った。

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

地球に向けて出発〜！

ピカチュウは地球に舵をとった。

ピカチュウ「ピカピ〜♪」

アリサ「♪」

アリサ「お帰り」

なのは、はやて「アリサちゃん」

アリサ「何？」

なのは、はやて「ごめんなさい！」

二人は頭を下げた。

アリサ「自分の罪を数えたのね」

なのは「うん…」

はやて「ウチ等がバカだった…」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

許してあげて！

アリサ「アンタはそれでいいの？」

ピカチュウ「ピカ！」

アリサ「ピカチュウが許すなら私がとやかくいう必要はないわ」

なのは「ごめんね」

はやて「ホンマにごめんな」

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

気にしてないよ！

アリサ「いい子ね♪」

ピカチュウ「チャ〜♪」

ピカチュウは頭を撫でられアリサは久しぶりになのは達とお茶会をした。

ピカチュウ「ピカチュウ〜」φ(∴)

アリサ「ピカチュウ〜。おやつよ〜！」

ピカチュウ「ピカ！チャ〜！」

ピカチュウは自分の部屋を出るとアリサの下に向かった。

ピカチュウ「ピカピ〜♪」

オヤツ〜♪

アリサ「はい、梨よ」

ピカチュウ「ピフア〜♪」シヤリシヤリ♪

すずか「今日も元気一杯だね♪」

アリサ「で？ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピフア？」

アリサ「何を作ってるの？」

ピカチュウ「ピフオ！ピフオ！ピカチュウ！」

けほ！けほ！何も作ってないよ！

アリサ「嘘ね。アンタが部屋を出てこないのが証拠よ」

ピカチュウ「チャ〜…」

すずか「……」にこにこ♪

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「素直に吐けばオヤツが増えるわよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

釣られないよ！

アリサ「やっぱり作ってるんじゃない」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

しまった!?

アリサ「さあ、ピカチュウの部屋に行くわよ」

ピカチュウ「チャク…」

ピカチュウの部屋にアリサ達は向かった。

アリサ「さて、これね?これは…牛?」

ピカチュウ「ピカチュウ!」

猛烈王だよ!

すずか「モウ繋がり?」

ピカチュウ「ピカ!」

バレた!?

アリサ「アンタが安直なのよ。で?AI?パイロット?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

パイロットだよ。

アリサ「アタシよね?」

すずか「私だよね?」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ボクのだよ！

アリサ、すずか「ズルイ！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ボクのお小遣いだもん！

アリサ「そんなにあげて……ピカチュウ？アンタ幾ら隠し持ってるの？」

ピカチュウ「ピカ!?ピフユ♪」

すずか「素直に教えてね？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

教えないよ！

アリサ「まあ、些細な事ね。ピカチュウ？私の分は？」

すずか「あ、私のも」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

予算は？

アリサ、すずか「予算!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ。ピカピカチュウ」

そうです。予算がないと作れません。

アリサ、すずか「えへ？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

お散歩に行つてきます。

アリサ「ちよつと！」

すずか「ここは騙されてくれる場面だよ！」

ピカチュウ「ピカピ！」

嫌だよ！

アリサ「いいじゃない！」

すずか「お願い！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

予算ください！

アリサ「いいじゃない！持ってるんでしょ」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ボクのお小遣いだよ！

すずか「じゃあローンで」

ピカチュウ「ピカチュウ」

出来るの？

すずか「…ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカピ」

嫌だ。

すずか「うう…」

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ」

さあ、オヤツも食べたし続きをやろう。

ピカチュウは次のページを捲った。

アリサ、すずか「別のロボット!？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

激烈王だよ。

アリサ、すずか「頂戴！」

ピカチュウ「ピカピ！」

やだよ！

アリサ「うう…ひどい…」

よよよ…と泣き崩れた。

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「ピカチュウは私の事が嫌いなのね…」

ピカチュウ「ピカ!?ピカチュウ！」

うえ!?そんな事ないよ!

アリサ「だってロボットをくれないじゃない」

ピカチュウ「ピカチュウ〜…ピカチュウ」

わかったよ〜…あげるよ。

アリサ「だからピカチュウ好きよ♪」

ピカチュウ「チャ〜♪」

アリサに頬擦りされて喜んだ。

すずか「うう…ピカチュウは私の事が嫌いなんだね…」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

同じ手は通用しないよ！

すずか「…チツ！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

舌打ちした〜！

すずか「不公平だよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜…」

つて言われても〜…

すずか「欲しいよ〜！」

ピカチュウ「ピカピ〜」

アリサ〜。

アリサ「カンパしてもらったら？」

すずか「幾ら!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ♪」チャリン♪

ピカチュウは何処からか貯金箱を出した。

すずか「毎月資金援助するよ！」チャリン♪

ピカチュウ「ピカピ〜♪」

まいど〜♪

アリサ「資金援助するとなんか特典でもあるの？」

アリサが気になった事を聞いてみた。

ピカチュウ「ピカチュウ」

完全な専用機になるよ。

アリサ「私も資金援助するわ」チャリン♪

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

完全なという響きに釣られるアリサだった。

第八話

猛烈王「モオ〜！」

ピカチュウ「ピカピカ〜！」

ある日、猛烈王の試験動作をしていた。

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ」

よし、異常なし。

ピカチュウは試験動作を終えてアリサの邸に戻った。

アリサ、すずか「何で呼んでくれないの！」

ピカチュウ「チャ〜…」

試験をしたことを話したら怒られた。

アリサ「自分だけいい思いするなんて！」

すずか「そんな子に育て上げた覚えはないよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

育てられてないよ！

アリサ、すずか「…チツ！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

舌打ちした〜！

アリサ「こほん、それで？激烈王は？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

もうちよつとで完成だよ。

アリサ、すずか「わーい♪……む！」バチ！

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「すずか？激烈王は私のよ？」

すずか「何言ってるのかな？私のだよ！」

ピカチュウ「ピカ〜…」

あの〜…

アリサ、すずか「ピカチュウは黙ってて！」

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「激烈王は私のよ！」

すずか「私の！」

ピカチュウ「……」ソロ〜

アリサ「ピカチュウ、ハッキリ言ってあげなさい」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

言っつていいの？

アリサ、すずか「うん！」

ピカチュウ「ピカ…」

これは…

アリサ、すずか「これは？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサのです。

アリサ「よし！」

すずか「そんな…」

すずかは手をついて絶望した。

ピカチュウ「ピカチュウ？」

すずかのももう少しで出来るよ？

すずか「先に言っつてよ！」

立ち直った。

ピカチュウ「ピカチュウ」

聞かれなかったもん。

すずか「屁理屈だ！」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

嫌ならあげないよ？

すずか「嫌だなくピカチュウ♪冗談でしょ♪」

ピカチュウ「ピカピ」

全く。

ピカチュウは作業に戻った。

ピカチュウ「ピカ〜…チャ〜…」

ピカチュウがお昼寝していると…

アリサ「ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカ〜？」

寝惚けながらピカチュウが起きた。

アリサ「お客様よ」

ピカチュウ「ピカピカ？」

ボクに？

アリサ「時空管理局よ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

お昼寝。

アリサ「お願い、しつこいから早く終わらせて欲しいの」

ピカチュウ「ピカチュウ」

わかったよ。

ピカチュウは応接室にアリサと一緒に向かった。

アリサ「失礼します」

アリサが応接室に入るとリンデイがやって来ていた。

アリサ「いい加減にしませんか？こちらは教えるつもりはありません」

リンデイ「お願いします。執務官の…クロノの居場所を教えてくださいませんか？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「危険な人物の居場所を教えるだけでも？反省もしない人物を？」

リンデイ「私が責任もって抑えます！」

アリサ「どうやって信用しろと？」

リンデイ「それは…」

ピカチュウ「ピカピ、ピカチュウ？」

アリサ、教えても無駄だよ？

アリサ「ん？どういうこと？」

ピカチュウ「ピカチュウ、ピカチュウ」

管理局の船では、到底着けない距離だもん。

アリサ「具体的には？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

光年先だよ。

アリサ「残念ですが迎えに行く事は不可能ですね」

リンデイ「どうしてですか？」

アリサ「迎えに行けるのはピカチュウだけですから」

リンディ「そんな…」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

アリサ「ハア？助けに行くかですって？」

リンディ「ッ！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

交換条件付きで。

アリサ「交換条件？」

リンディ「何でしょうか!？」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

動物虐待賠償を請求するよ。

アリサ「虐待賠償？」

リンディ「つまりお金で解決してくれるんですか？」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウは頷いた。

リンディ「わかりました。従います」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

アリサ「管理局は執務官に幾ら出しますか？個人じゃないので」

リンデイ「管理局…ですか」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「たった一人を救うために管理局は幾ら出しますか？」

リンデイ「それは…」

アリサの問いにリンデイは黙った。

アリサ「沈黙が答えね」

リンデイ「お願いします！個人で支払います！幾らかかっても！」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

アリサ「その言葉に嘘偽りないですね？」

リンデイ「はい！」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「賠償額は？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

一千万。

アリサ「一千万ね」

リンデイ「わかりました。従います」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ「お金を用意出来次第連れて行きます」

リンデイ「はい」

リンデイはお金を用意しに戻った。

第九話

アリサ「…ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカ？」

アリサ「私にも舵を…」

ピカチュウ「ピカ」

ダメ。

すずか「ケチ」

なのは「まあまあ」

はやて「怒らんといて」

程なくして以前来た未開の惑星に着いた。早速レーダーを頼りにクロノを探すと直ぐに見つかり、リンデイが迎えに行った。

ピカチュウ「ピカチュウ」

しばらくしてクロノは回収され地球に戻った。

ピカチュウ「ピカチュウ」ポチポチ

アリサ「ピカチュウ？」

そして翌日、アリサがピカチュウの部屋を覗くとピカチュウがパソ

コンで打ち込みをしていた。

アリサ「何してるの?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

激烈王の最終調整

アリサ「熱烈王は?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

終わってる

アリサ「激烈王の最終調整はどれくらい?」

ピカチュウ「ピカチュウ」ポチポチ…ピコリン

出来た

アリサ「もしもし、すずか?熱烈王が完成したわよ」

ピカチュウ「ピカ!」

ピンポーン

ピカチュウ「ピカチュウ!」

この間より早いよ!

すずか「時空を超えて参上!」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

人間辞めてるよ〜！

アリサ「病めてるのよ」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

前にもやった〜！

アリサ「とにかく行くわよ」

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

アリサとすずかはバトルシップピカチュウに転移した。

アリサ「あ〜♪獅子ね！」

すずか「こっちはホークだよ♪」

アリサ「早速乗るわよ♪」

すずか「うん♪」

ピカチュウ「……」

アリサ、すずか「……どうやって乗るの!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ?」

認められないと乗せてくれないよ？

アリサ、すずか「認められる？」

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

試練だよく♪

アリサ、すずか「余計な物を！」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

諦める？

アリサ、すずか「誰が！」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

それでこそ飼い主だよ！

アリサ「それで？試練は何？」

ピカチュウ「ピカピ、ピカチュウ」

すずか、君はこれだよ。

《トライアル》

すずか「あく！トライアルメモリ!？」

ピカチュウ「ピカピ、ピカチュウ」

アリサはこっちだよ。

エクストリームメモリ「ピー」

アリサ「そっちのパワーアップが必要ななの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

アリサ、すずか「わかった！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウは二人にメモリを渡すと…

アリサ「ピカチュウ！」

《サイクロン》コテン

《ジョーカー》

《アクセル》

アリサ「変身！」

すずか「変、身！」

二人が変身するとアリサに異変が起きた。

バチバチ！

アリサ「クツ!? きやあく!?!」

アリサは変身が解けてしまった。

ピカチュウ「ピカチュウ」

すずか、トライアルメモリを。

すずか「さあ、思い切り…振りきるよ!」

《トリアル》

《ピツ…ピツ…ピツ…!》

バチバチ!

すずか「え!?! きやあく!?!」

すずかも変身が解けてしまった。

アリサ「どうということ?」

ピカチュウ「ピカチュウ、ピカチュウ」

これがパワーアップの試練だよ、この出力に耐えられなければ激烈
王達にも乗れないよ。

アリサ「やったろうじゃない!」

ピカチュウ「ピカチュウ?」

それが辛い試練でも？

すずか「乗りきってみせる！」

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ」

うん、付き合うよ。

こうしてアリサとすずかは試練を始め、日々を過ごした。

リターンズ4

第一話

アリサ「ふっ！」

すずか「ハッ！」

ビシッ！バシッ！

試練が始まって数年、アリサ達は日々を充実に過ごしていた。そんなある日…

なのは、はやて「こんにちは〜」

アリサ「ん？もうそんな時間ね。久しぶり、なのは、はやて」

この数年でなのは、はやては時空管理局に入った。なのはは管理局の体制見直しさせるために、はやては守護騎士達の罪を償う為に。

すずか「ふう♪それでどうしたの？」

なのは「あれ？フェイトちゃんは？」

アリサ「フェイトならピカチュウの散歩に行ってるわよ。もうじき…」

ピカチュウ「ピカピ〜♪」

アリサ「帰ってきたみたいね」

フエイト「ただいま」

はやて「メンツが揃ったな」

アリサ「それで？話つて？」

はやて「アリサちゃん達に事件解決の協力を依頼したいんや」

アリサ達「協力？」

はやて「とてつもない事件が起き始めてるんや」

アリサ「私達は一般人よ」

はやて「わかつとる。本来頼むのも間違ってるのな。それでも頼みたいんや」

アリサ「どうする？」

すずか「うくん」

フエイト「私はアリサに任せるよ」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

鍛えるには丁度いいかも？

アリサ「それもそうね」

すずか「実戦で覚醒だね！」

はやて「いや、あのな？もう少し真面目に…」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

この二人にそれを求めるのは間違ってるよ。

はやて「それもそやね…」

こうしてアリサ達はミッドチルダに一年間だけ向かう事になった。

ピカチュウ「ピカピカチュウ〜！」

やって来ました機動六課〜！

アリサ「ここね」

アリサ、すずか、フェイトは早速受付に向かうと…

アリサ「八神はやてを呼んで頂戴。アリサ・バニングスよ」

受付「は、はい！」

アリサの迫力に思わず従う受付だった。

はやて「いらっ、しゃい〜♪」

ピカチュウ「ピカ！」

三点!

はやて「厳しいな!」

ピカチュウ「ピカチュウ!」(?^?)

当然!

すずか「あれ?なのはちゃんは?」

はやて「新人の訓練しとるよ」

アリサ「そう。訓練室かなにか?」

はやて「裏に訓練所があるんよ。目立つからわかるよ」

アリサ「行ってみるわ」

アリサ達は裏の訓練所に向かった。

アリサ「あれね。ピカチュウ、派手にやってきなさい」

ピカチュウ「ピカチュウ!」スタコラサツサ!

ピカチュウは訓練所に殴り込みをかけた。

ピカチュウ「ピカ!チュウ〜!」

なのは「ッ！」バチ！

なのははピカチュウの鳴き声が聞こえたと同時にシールドを張った。

スバル「な、なに!？」

ティアナ「ッ！」ドンドン！

ピカチュウ「ピカ！」

ピカチュウがなのはに攻撃した瞬間、ティアナはピカチュウに向けて魔力弾を放った。

なのは「デイバイーン、バスター！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ボルテッカー！

ズドン！

エリオ「なのはさん！」

なのは「……………」

ピカチュウ「……………」

キャロ「相討ち?！」

一人と一匹が立っているとやがて…

ピカチュウ「ピカピく♪」

なのはく♪

なのは「久しぶり、ピカチュウ♪」

スバル達「…ええ!？」

なのは「また、アリサちゃんのイタズラ？」

ピカチュウ「ピカ！」

なのは「もう？ダメだよ？ピカチュウの事を知らない子達がいるんだから」

ピカチュウ「ピカく」

はーい。

アリサ「どうやら、鈍ってないみたいね」

なのは「あ、アリサちゃん。イタズラは程ほどにね？」

アリサ「アレでやられるようなら…」

なのは「や、やられるようなら？」

アリサ「もう一度私達と山籠りよ」

なのは「嫌だよ！死にたくないよ！」

すずか「鈍ってなかったし、いいんじゃない？」

アリサ「そうね」

なのは「ホッ」

スバル「あの、なのはさん？この人達は？」

なのは「今回の民間特別協力者だよ」

ティアナ「特別ですか？」

なのは「そうだよ。皆の訓練の先生でもあるし」

エリオ「この人達がですか？」

アリサ「まあ見た目で判断してるうちは駄目ね」

エリオ「ッ！」

なのは「アリサちゃん達、暇？」

アリサ「ええ」

フェイト「大丈夫だよ」

なのは「スバル、ティアナ」

スバル、ティアナ「はい！」

なのは「早速、訓練してもらおうか？」

スバル、ティアナ「えっ!？」

アリサ「相手は？」

なのは「勉強がてらアリサちゃんとピカチュウに」

アリサ「なら、やるわよ」

なのは「手加減してよ？」

スバル「お願いします！」

ティアナ「お願い…します」

アリサ「ピカチュウ！」カシヤン

ピカチュウ「ピカ！」

《サイクロン》コテン

《ジョーカー》

アリサ「変身！」

《サイクロン・ジョーカー》

スバル「半分!？」

ティアナ「バリアジャケット？」

アリサ「さあ、来なさい」

スバル「うお〜！」

アリサ「格闘型ね」

スバル「せい！やあ！」

アリサ「しかもパワー型。なら…」

《《ヒート》》

《《ヒート・ジョーカー》》

アリサ「パワー型なら…」パシッ

スバル「嘘!？」

アリサ「一撃を大事になさい」ズドン！

アリサが殴るとスバルは飛んでいった。

ティアナ「スバル！」バンバン！

アリサ「で、こっちは遠距離射撃型ね」

《《ルナ》》

《《トリガー》》

《ルナ・トリガー》

アリサ「ふっ！」バンバン！

ティアナ「また変わった!？」バンバン

ティアナはアリサが撃った弾を相殺しようとしたが…

クイツ！

ティアナ「弾道が曲がった!？」

ティアナの弾が当たる瞬間、アリサの弾はティアナの弾を避けて…

ティアナ「しまっ…」

ドン！

ティアナに命中した。

なのは「はい！そこまで」

アリサ「ふう」カシヤン

スバル「イタタ…」

ティアナ「…」

なのは「ね？見た目で判断すると危ないでしょ？」

スバル、ティアナ「はい…」

なのは「次はエリオだね」

エリオ「はい！」

なのは「すずかちゃん、お願い」

すずか「うん。変、身！」

《アクセル》

エリオ「……」

すずか「こないならこっちから行くよ？」

ガキイン！ガキイン！

エリオ「速い!?重い！」

すずか「呆けてたら怪我するよ？」

エリオ「しまった!？」

ガキイン！

エリオはストラダーダを弾き飛ばされた。

なのは「はい、そこまで」

なのはが終了の声をかけるとスバル達は集まった。

なのは「はい、じゃあわかったと思うけど見た目で判断してるのがわかった？」

スバル達「はい…」

なのは「これから直していこうね？」

スバル達「はい！」

ヴィータ「よう」

シグナム「久しいな」

するとヴィータ達もやって来た。

なのは「もう二人とも早く来てくれればいいのに」

ヴィータ「基礎ならなのはだろ？」

なのは「そうだけど」

アリサ「それで？私達はどうすればいいの？」

なのは「あ、うん。アリサちゃん達にフォワード陣に戦いかたの応用を教えて欲しいの」

アリサ「なるほど。なら…私はその格闘型の子と射撃型の子ね」

アリサ達は訓練相手を決めた。

第二話

アリサ「さて、まずは…ティアアナだっけ？」

ティアナ「はい！」

アリサ「射撃型の様だけど銃の使い方は我流ね？」

ティアナ「はい…」

アリサ「それが悪いとは言っていないわよ？」

ティアナ「そうなんですか？」

アリサ「魔法はイメージ。それはわかる？」

ティアナ「はい」

アリサ「私の弾もイメージで撃っているの。何が違うと思う？」

ティアナ「経験ですか？」

アリサ「それもあるけど、一番の違いはイメージ力の違いね」

ティアナ「イメージ力ですか？」

アリサ「そう。私の弾のイメージは常に最良のイメージをしてコントロールしてるの」

ティアナ「最良のイメージ？」

アリサ「例えば弾を撃った後、相手が撃ったらどうする？」

ティアナ「えっと…」

アリサ「普通はそこでイメージを終えちゃうわよね？」

ティアナ「はい」

アリサ「でも私は弾が避けるイメージを続けてるの。しかも相手に当たるイメージを忘れずにね」

ティアナ「そこまでしてるんですか？」

アリサ「連射型なら必要ないと思うけど違うでしょ？」

ティアナ「はい」

アリサ「だからティアナはイメージと魔力コントロールを鍛えるわよ」

ティアナ「魔力コントロールですか？」

アリサ「そうよ。一撃を確実に当ててなおかつ一撃で倒せるくらい
のね」

ティアナ「わかりました！」

アリサ「じゃあまずはこれね」

アリサは粘土を出した。

ティアナ「これは？」

アリサ「ティアナはこれで形を整えて猫を作ってご覧なさい」

ティアナ「猫を？」

アリサ「イメージしやすいものが他にあるなら他にしてもいいわよ」

ティアナ「猫で」

ティアナは早速、猫を作り始めた。

アリサ「次はスバルね」

スバル「はい！」

アリサ「アンタは命中率をあげるわよ」

スバル「命中率ですか？」

アリサ「そう。どんな攻撃も当たらなければ意味はないわ」

スバル「はい…」

アリサ「だから確実に当てれるように集中力を鍛えるわよ」

スバル「はい！」

その頃、ピカチュウは…

ピカチュウ「ピカチュウ〜…」

ピカチュウは悩んでいた。アリサ達は強くなろうとしているのに自分は今のままでいいのか?と。

ピカチュウ「ピカチュウ〜…」

神様に相談したいな〜…

ピカチュウが悩んでいると…

シン!

ピカチュウ「ピカ!？」

神様「久しいぶりですね、ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカピ〜！」

神様〜!

神様「私に相談があるようですが?」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

もっと強くなりたいの!

神様「もつとですか?神獣の実はもうあげれませんよ」

ピカチュウ「ピカチュウ!ピカチュウ！」

違うの！技術的になの！

神様 「技術的にですか？」

ピカチュウ 「ピカ」

神様 「それで私とどのような関係が？」

ピカチュウ 「ピカピカチュウ？」

漫画の世界って実現する？

神様 「ええ、してますよ」

ピカチュウ 「ピカチュウピカチュウ」

二つの世界から二人、に教わりたいの。

神様 「誰ですか？」

ピカチュウ 「ピカチュウ、ピカピ」

悟空と剣心。

神様 「…二人とも天国に居ますね。会いに行きますか？」

ピカチュウ 「ピカ！」

うん！

神様「修行をつけて貰えるかは自分で交渉しなさい。これも修行の一つです」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

わかったよ！

ピカチュウは早速、天国に向かった。そして天国の時間で二年…

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

神様〜！

神様「久しぶりですね」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

修行が終わったよ！

神様「どうでしたか？」

ピカチュウ「ピカ！ピカチュウピカチュウピカチュウピカチュウ！」

うん！飛天御剣流と悟空の武術を教わってきたよ！

神様「良かったですね。さあ、現界に戻りなさい」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ありがとう〜！

ピカチュウはアリスの下に戻って行った。

第三話

ピカチュウ「ピカチュウ♪」

アリサ「ピカチュウ!？」

ピカチュウ「ピカピ♪」

アリサ「一週間も何処に行ってたの！」

ピカチュウ「チャ♪!？」

こっぴどく叱られた。

アリサ「で？何処に行ってたの？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

修行だよ！

アリサ「アンタがこれ以上チートになってどうするの」

ピカチュウ「チャ♪…」

アリサ「まあいいわ。とにかく六課にいなさい」

ピカチュウ「ピカ。ピカチュウ♪」

うん。ちよつと作り物してるね♪。

アリサ「自重しなさいよ」

ピカチュウ「ピカ！ピカ！」カン！カン！

フエイト「ピカチュウ？」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

フエイト？

フエイト「何か作ってるの？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

逆刃刀

フエイト「逆刃刀？」

ピカチュウ「ピカピ」

完成

ピカチュウは自分のサイズの逆刃刀を完成させた。

フエイト「侍だね！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ピカチュウは早速訓練所に向かうが…

ビー！ビー！

警報がなった。

はやて『教会本部より連絡や。リニアレールがガジェットに襲われてコントロールを乗っ取られた。レリックが積まれてる為に襲われた可能性が高い。いきなりハードな出撃や、皆行けるか?』

フオワード陣「はい!」

アリサ「私達も出るわ」

はやて『お願いや。なら、機動六課!出撃!』

なのは達「了解!」

ピカチュウ「ピカピ!」

なのは達がへりに乗り込むと…

ピカチュウ「ピッピカチュウ!」

ジェットバスター!

キラッ!

なのは達はへりで飛んでいき、ピカチュウはジェットバスターに乗って行った。

ピカチュウ「ピカチュウ!」

ピカチュウは一足先に現場に着くと…

ピカチュウ「ピカチュウ〜！ピカピ〜！」

飛天御剣流〜！龍槌閃！

スタツ！

ピカチュウ「ピカチュウ〜！ピカピ〜！」

飛天御剣流〜！土龍閃！

ジェットバスターから飛び降りガジェットを瞬く間に倒した。

ピカチュウ「…ピカ？ピカチュウ？」

…アレ？ガジェットは？

タタタタ！

アリサ「このチートネズミ〜！」スーパーン！

ピカチュウ「ピチュ〜！」

列車の上を走ってきたアリサに叩かれた。

アリサ「アンタ一匹で解決しているんじゃないの！」

ピカチュウ「チャ〜!!？」

それはもうこっぴどく叱られた。

はやて「まあ、解決して良かったわ」

アリサ「全く」

ピカチュウ「ピカピク！」

許して〜！

なのは「けどピカチュウが刀を使っているの初めてみたよ」

アリサ「私もよ」

ピカチュウ「ピフユ〜♪」

すずか「自重しないとダメだよ？」

ピカチュウ「ピカピク」(T|T)

すずか〜。

すずかの優しさにピカチュウは涙した。

すずか「私の強さは泣けるよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

感動を返せ〜！

ネタに走るすずかだった。

フェイト「とりあえずピカチュウは出撃は控えた方がいいね」

アリサ達「意義なし！」

ピカチュウ「ピカチュウく…」

ピカチュウは猛省することになった。

ピカチュウ「ピカチュウく」

出撃から数日後、ピカチュウはフェイトのデバイスを強化していた。

シグナム「見つけたぞ！」

ピカチュウ「ピカ？」

シグナム「ピカチュウ！私と勝負しろ！」

ピカチュウ「ピカピ？」

なんで？

シグナム「あの剣筋、戦ってみたい」

ピカチュウ「ピカピく」

忙しい。

シグナム「いつ暇になるのだ？」

ピカチュウ「ピカ〜…」カチカチ

ピカチュウはスケジュールを見ると空き時間を探した。

シグナム「どうだ？」

ピカチュウ「ピカ〜…ピカチュウ」

う〜ん…明日のお昼位なら。

シグナム「なら、頼めるか？」

ピカチュウ「ピカ！」

そして次の日、ピカチュウはシグナムと戦いシミュレータをボロボロにしてなのはに怒られた。

第四話

ピカチュウ「ピカチュウ♪」ジジジジ

すずか「ピカチュウ〜?」

ピカチュウ「ピカ!?ピカピカ!」

やば!?どうしよう!?

ピカチュウは部屋で作業をしているとすずかがやって来た。

すずか「ん?入るよ?」カシユ

ピカチュウ「ピカ〜…」

すずかが部屋に入ると…

すずか「何これ?…メモリ!」カチ

《ソード》

ピカチュウ「チャ〜…」ソロ〜…」

ガシツ!

すずか「ピカチュウ♪これは何かな?」

ピカチュウ「ピ、ピカチュウ」

お、オリジナルメモリ。

すずか「いやだなく♪隠れてこんな作ってるなんて♪」

ピカチュウ「ピカ〜…」

すずか「はい！出して。他にもあるでしょ？」

ピカチュウ「ピフユ〜♪」

すずか「ニコ♪」チョコキン♪

ピカチュウ「チャ〜…」

ピカチュウは内股で後ずさった。

すずか「ほら♪」

ピカチュウ「ピカ〜…」

《アイス》

《ライトニング》

《ガイア》

《シャイニング》

《ダークネス》

《ランス》

《トマーホーク》

《サムライソード》

《ウィップ》

《マシンガン》

《バスター》

すずか「こんなに隠してるなんて！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

秘密兵器。

すずか「私達には教えるべきだよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

欲しがるでしょ？

すずか「うっ」

ピカチュウ「ピカチュウ」ガチャン

ピカチュウはトランクにメモリをしまった。

すずか「ええ〜!?なんでしまうの!?!」

ピカチュウ「ピカチュウ」カチ

《ブースター》

すずか「何それ？」

ピカチュウ「ピカピカチュウピカチュウ」

原作とは違うけどアクセルブースターになるメモリだよ。

すずか「本当!？」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

欲しい？

すずか「うん！」

ピカチュウ「ピカピカチュウ」

試練を乗り越えて黙ってたらこれもあげる。

すずか「約束だよ！」

ピカチュウ「ピカ！」

すずか「ちよつと特訓してくる」

この日からすずかの訓練は二倍になった。

ピカチュウ「ピカチュウ」

そして話を誤魔化せた事に安堵した。

ピカチュウ「チャ〜…」

それから何度か出撃があつたがピカチュウは待機で過ごしていた。

アリサ「何不満そうな声を出してるのよ」

ピカチュウ「ピカチュウ〜」

ボクの無双が〜。

アリサ「自重しなさい」

ピカチュウ「ピカピ〜」

ダメなの〜。

アリサ「何が？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

好奇心の塊だから。

アリサ「それを自重しなさいって言ってるの!」

ピカチュウ「ピカ〜」

はーい。

アリサ「さて、休日だけはどうする？」

ピカチュウ「ピカピく♪」

アリサ「はいはい♪甘えたいのね」

ピカチュウが甘えて過ごして居ると…

キャロ『こちら、フオワード04！緊急事態につき現場報告します
！』

キャロから全体通信が来た。

ピカチュウ「ピカチュウく！」

アリサ「大人しくしてなさい」

ピカチュウは先行出来ないようにへりに乗せられた。

アリサ「しかし、レリックを持った女の子ね」

すずか「怪しき抜群だね」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ「ピカチュウ？後で調べてくれる？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

現場に着くとアリサ達は辺りを警戒していた。

シヤマル「うん、バイタルも安定してるわ。アリサちゃん、運んでくれる？」

アリサ「はい」

アリサは女の子を抱えてへりに乗った。

ピカチュウ「ピカ！」ポチポチポチポチ！

その間、ピカチュウは索敵を忘れなかった。

ピカチュウ「ピカ〜…ピカ！ピカ！ピカチュウ！」

う〜ん…あ！砲撃のチャージを確認！

アリサ「チツ！」

ピカチュウ「ピカ！」

《《ヒート》》コネン

《《メタル》》

アリサ「変身！」

《《ヒート・メタル》》

アリサは変身するとへりの翼に乗り…

《メタル！マキシマムドライブ！》

アリサ「メタルブランディング！」

ズトン！

すずか「ツ！」ガタガタガタ！

アリサ「ロングアーチ！」

ルキノ『高町隊長とテスタロッサ隊員が確保に向かっています！』

アリサ「……」

ルキノ『犯人……ロスト！索敵します！』

アリサ「逃げられたわね」カシヤン

アリサはへりの中に戻った。

第五話

アリサ「……」

ピカチュウ「…ピカ」

アリサ「どうだった？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

観覧に制限が掛かってたよ。

アリサ「尚更怪しいわね」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

女の子は？

アリサ「今、なのはが様子を見に行ってるわ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

様子見だね。

アリサ「そうね」

アリサとピカチュウはなのはが帰還するのを待つことにした。

ピカチュウ「ピカ♪ピカ♪ピカチュウ♪」

アリサと別れて気ままに散歩をしているピカチュウだった。

ピリリリ♪ピリリリ♪

ピカチュウ「ピカピカ？」

アリサ『ピカチュウ？なのはの部屋に来てくれる？』

ピカチュウ「ピカ〜」

ピカチュウはなのはの部屋に向かった。

ピカチュウ「ピカ〜？」

カシユ

アリサ「来たわね」

ピカチュウ「ピカ…」

女の子「いっっちゃやだ〜！」

ピカチュウ「ピカ」

じゃ。

アリサ「さあ、頼むわよ」

ピカチュウ「ピカピカ〜!？」

連れ去られた。

女の子「いつちややだ〜！」

なのは「お願い、ヴィヴィオ？」

ヴィヴィオ「やだ〜！」

アリサ「この調子なのよ。お願い出来ない？これから会議なのよ」

ピカチュウ「ピカ〜…ピカチュウ」

ハア〜…わかったよ。

ピカチュウはアリサから離れると…

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

ヴィヴィオ「ふえ？」

なのは「ヴィヴィオ？この子はピカチュウ。アリサお姉さんのペットだよ」

ピカチュウ「チャ〜♪」

なのは「ほら、一緒に留守番しよって言ってるよ」

ヴィヴィオ「う〜…」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

なのは「ほら、ね？」

ヴィヴィオ「…うん」

ヴィヴィオはピカチュウを抱っこした。

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

ヴィヴィオ「待て〜♪」

なのは達は安心して出掛け、ピカチュウはアリサ達が帰ってくるまでヴィヴィオと遊んだ。

ピカチュウ「ピカチュウ〜♪」

アリサ「フツ！」

すずか「セイツ！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

まだまだだね。

アリサ「ふう。これでも大分マシになったと思うんだけどね」

すずか「ピカチュウが言うなら間違いないよ」

ピカチュウ「ピカチュウ」

後少しだね。

アリサ 「冗談抜きでパワーアップは必要ね」

すずか 「戦力が心持たないしね」

ピカチュウ 「ピカチュウ」

だからボクも修行したの。

アリサ 「何の？」

ピカチュウ 「ピカチュウ、ピカチュウ」

剣術と武術。

すずか 「ピカチュウが剣術？」

ピカチュウ 「ピカチュウ」

ネズミは何でも出来ないよ。

アリサ 「何処のネズミを目指してるのよ」

ピカチュウ 「ピカチュウ」

遊…

すずか 「ストップだね」

アリサ 「危険な匂いしかないわ」

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「冗談抜きにして早めにパワーアップしましょ
すずか「そうだね」

なのは「十分強いよ？」

アリサ、すずか「ロマンが足りない！」

なのは「アハハ…」

ヴィヴィオ「ママ〜♪」

コテン

ピカチュウ「ピ〜…」

あ〜…

ヴィヴィオ「ふえ〜…」

なのは「ヴィヴィオ〜！ママはここだから頑張っておいで〜」

ヴィヴィオ「ママ〜…」

しかしヴィヴィオは転んで立てなかった。

ピカチュウ「ピカチュウ」

ヴィヴィオ「ふえ〜…？」

ピカチュウ「ピツカツピツ！ピツカツピツ！ピツカツピツカツピツカツピツ！」

なのは「ほら♪ピカチュウも応援してるよ」

ヴィヴィオ「うゝ…」

ヴィヴィオは立ち上がりなのはに再び駆け寄った。

なのは「頑張ったね」

ヴィヴィオ「うん！」

ピカチュウ「ピカゝ」

ヴィヴィオ「……」じゝ！

ピカチュウ「ピ、ピカチュウ？」

ヴィヴィオ「なのはママ」

なのは「なに？」

ヴィヴィオ「ピカチュウ欲しいの」

なのは「え!?!それは…無理かな」

ヴィヴィオ「なんで？」

なのは「ピカチュウはアリサお姉さんのペットだから」

ピカチュウ「ピカ」

ピカチュウも頷いた。

ヴィヴィオ「うゝ…」

そして再びヴィヴィオは泣きそうになった。

なのは「また今度遊んでもらおう?」

ヴィヴィオ「うゝ…うん」

なのは「ホッ」

「ちょっと危険な立場のなのはだった。

第六話

ピカチュウ「ピカチュウ…」

アリサ「すずか？覚悟はいい？」

すずか「私も引けないから」

ピカチュウ「ピカピ〜！」

やめて〜！

アリサ「ピカチュウ？これは戦争なのよ？」

すずか「そう…メモリを賭けた大勝負なんだよ！」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ボクのだよ〜！

アリサ「飼い主よ？」

すずか「友達だよ？」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

何時もやってる〜！

アリサ「マンネリね…」

ピカチュウ「ピカチュウ」

諦めて。

アリサ「嫌」

すずか「無理」

ピカチュウ「ピカチュウ」

わかった。

アリサ「わかってくれた？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

ボクに勝てたらいいよ。

アリサ「な!?!卑怯よ!」

すずか「勝てないのを良いことに!」

ピカチュウ「ピ、ピカチュウ」

フ、所詮その程度。

カチン

アリサ「やったろうじやない!」

すずか「今日こそ!」

《ジョーカー》

《スカル》

《エターナル》

アリサ、すずか「変身」

ピカチュウ「ピカピ」

変身。

アリサ「さあ、ピカチュウ」

すずか「貴方の罪を」

アリサ、すずか「数えなさい」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

数えきれるか〜！

ここに飼い主達対ペットのメモリを賭けた大勝負が始まった。結果は…

はやて「どうすんねん！こんなに壊して！」

アリサ「反省してるわ」

すずか「後悔はしてない！」

はやて「後悔しろ〜！」

訓練所を大破させてしまった。

ピカチュウ「ピカチュウ〜…」

なんでボクが〜…

トンテンカンテン！トンテンカンテン！

ミニミニピカチュウ「チュウ〜！」

次の日、ピカチュウは訓練所の修理をしていた。

はやて「予算をこつち持ちただけでもありがたいと思ひ」

ピカチュウ「ピカ〜」

はーい。

はやて「…ピカチュウ」

ピカチュウ「ピカチュウ？」

はやて「万が一を考えてバトルシップピカチュウが出撃出来る用意だけしといてくれるか？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

極秘でやつとくよ。

はやて「ありがとう。嫌な予感がするんよ」

ピカチュウ「ピカピ」

ボクも。

ビー！ビー！ビー！

はやて「警報やて!？」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

はやてとピカチュウは作戦指令室に向かった。

なのは「八神部隊長」

はやて「何事や！」

ルキノ「モニターに出します！」

モニターが写ると巨大なガジェットが映し出された。

なのは「大きい…」

はやて「なんちゅうもんを街中に…」

ルキノ「小型ガジェットも多数出ています！」

はやて「あんなデカブツ…」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ボクに任せて！

はやて「なるべくならジョーカーは切りたくなかったんやけどな」

アリサ「とにかく出撃よ」

アリサ達ははやてを残し現場に出撃していった。

アリサ、すずか「私だよね！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

二人とも違うけど。

アリサ「まさか…」

すずか「ピカチュウだけじゃないよね？」

ピカチュウ「ピカ…」ポチポチポチ

ピカチュウはスタックフォンを出すと…

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

プレッシャー発進！

ビー！ビー！ビー！

バトルシップピカチュウで警報が鳴るとプレッカーが発進して大気圏を突入していった。

アリサ、すずか「せつかくの出番が！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

こんなときにネタに走らないで。

アリサ、すずか「…チツ！」

なのは「舌打ち!？」

ピカチュウ「ピカ！」

来た！

ゴオー！キキイ！

ピカチュウ「ピッピカチュウ〜！」

スクランブルモード！

ビー！

プレッカーがスクランブルモードになるとお腹のマークが車を映し出した。

ブオンブオン！

五台の車が一齐に発進すると合体してPレーサーになった。

バキバキ！

アリサ「パワー型ね」

ピカチュウ「ピカ」

ズズン！

すずか「もう一体!?!」

ピカチュウ「ピッピカチュウ〜!」

Pレッカー！

ビー！

今度は飛行機のマークが映し出された。

ブン！ブン！

飛行機が発進して合体するとPジェットターになってもう一体に向かった。

すずか「こっちはスピード型だね」

ピカチュウ「ピカ」

アリサ達は巨大ガジェットをPレーサー達に任せて自分達は小型

ガジェットを破壊した。

第七話

ピカチュウ「ピカチュウ…」

ヴィヴィオ「やだ〜!」

なのは「ごめんね?お仕事だからピカチュウは連れてかなきゃ行けないの」

ヴィヴィオ「う〜…」

ピカチュウ「チャ〜…」

なのは「帰ってくるまで我慢してね?」

ヴィヴィオ「うん…」

なのは「ありがとう」

なのは達は管理局地上本部警備に向かった。

ピカチュウ「チャ〜…」

アリサ「どうしたの?」

ピカチュウ「ピカチュウ」

嫌な予感がするよ。

アリサ「…気をつけるわ」

すずか「……」

ピカチュウ「チャ〜…ピカ！」

ピカチュウが索敵をしているとレーダーに敵が映った。

ピカチュウ「ピカチュウ！」

来たよ！

アリサ「ツ！行くわよ」

アリサ達はガジェット軍団に立ち向かった。

ピカチュウ「チャ〜…」

ピカチュウは壊された機動六課を眺めていた。

はやて「ピカチュウ？」

ピカチュウ「チャ〜…」

すずか「ピカチュウのせいじゃないよ？」

ピカチュウ「ピカ〜…」

でも〜…

フエイト「皆の責任だよ。陽動に引っ掛かったのは」

なのは「そうだよ。ピカチュウのおかげで地上本部には傷ひとつつかなかったんだから」

ピカチュウ「ピカチュウ…」

ヴィヴィオが…

なのは「大丈夫。必ず助け出すから」

アリサ「だからアンタも頑張りなさい」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

ピカチュウは頭を撫でられ元気を取り戻した。

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

戦争だ〜！

はやて「…ちよつと元気になりすぎやない？」

アリサ「まあ、いいんじゃない？」

ピカチュウ「ピカ！ピカチュウ〜！」

よし！カチコミだ〜！

アリサ「ちよつと待ちなさい！」

ピカチュウ「ピカ〜ピカ?」

行く…なに?

アリサ「アンタ…敵の本拠地分かるの?」

ピカチュウ「ピカ!」(?…?)

アリサ達「先に言え!」

ピカチュウ「チャ〜!?!」

緊急対策会議が開かれた。

はやて「一気に行くで〜!」

アリサ達「了解」

アリサ「ピカチュウ!」

ピカチュウ「ピカ!」

《サイクロン》コテン

《ジョーカー》

アリサ「変身」

《アクセル》

すずか「変、身!」

《サイクロン・ジョーカー》

《アクセル》

はやて「うじゃうじゃやな…」

スカルエツティの本拠地に辿り着くと小型ガジェットに包囲された。

アリサ「アンタ達は先に行きなさい」

すずか「ここは私達が引き受けるよ」

なのは「この数を二人で!?無茶だよ!」

アリサ「アンタはヴィヴィオを救いに来たんでしょ?なら迷わないの」

フェイト「二人とも、無事で」

アリサ「なら、道を作るわ」

《ヒート》

《トリガー》

《ヒート・トリガー》

《トリガー!マキシマムドライブ!》

アリサ「トリガー！エクスプロージョン！」

ドドドドド！

アリサ「行きなさい！」

なのは達はアリサの作った道を通って基地内部に向かった。

《サイクロン・ジョーカー》

アリサ「さあ、アンタ達の罪を数えなさい」

すずか「行くよ！」

ドドドドド！

無数にいるガジェットにアリサ達は突っ込んだ。

第八話

アリサ「ハアハア…すずか？まだ戦える？」

すずか「ハアハア…勿論」

アリサ「後は…」

すずか「この大きい…」

アリサ「二体のデカブツのみ」

ピカチュウ『ピカピ』

アリサ。

アリサ「何よ、こんなとき？」

ピカチュウ『ピカピピカチュウ』

計算上、奴の方が上だよ。

アリサ「なら」

エクストリーム「ピッ」

アリサ「さあ、試練を試す時よ！」

《エクストリーム》

すずか「なら、私も」

《トライアル》

すずか「全て…振り切るよ！」

《ピッ・ピッ・ピッー！》

二人はパワーアップを成功させた。

アリサ・ピカチュウ「プリズムビツカー『ピカチュウ』」

アリサ「ハア〜！」

すずか「やあ〜！」

ゲシゲシゲシ！

アリサは剣で、すずかは高速の蹴りで攻撃していた。

ピカチュウ『ピカチュウ』

アリサ「とどめよ！」

《サイクロン！マキシマムドライブ！》

《ヒート！マキシマムドライブ！》

《ルナ！マキシマムドライブ！》

《ジョーカー！マキシマムドライブ！》

はやてだけが戻ってきた。

アリサ、すずか「なに〜!？」

ピカチュウ「ピカピ、ピカチュウ」

だから、出番がないの。

アリサ「激烈王の出番が…」

すずか「熱烈王の出番が…」

ピカチュウ「ピカチュウ」

仕方がないでしょ。

なのは「平和が一番だよ？」

アリサ、すずか「ロマンが足りない！」

はやて「と言っても犯人逮捕したしな」

ピカチュウ「…ピカチュウ？」

…釈放？

なのは「しないからね？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

わかってるよ。

はやて「まあ、犯人逮捕出来たしここは…」

スバル「ここは？」

はやて「バーンと祝勝会や！」

なのは達「おっ！」パチパチ

ピカチュウ「ピカピカピカチュウ？」

六課壊れたのに予算余ってるの？

はやて「あゝ…」

ピカチュウ「ピカチュウゝ…ピカピカピツカゝ♪」

仕方ないなゝ…クレジットカードゝ♪

はやて「奢ってくれるん!？」

ピカチュウ「ピカ」(?ゝ?)

はやて「ありがとう♪ピカチュウゝ!」スリスリ

ピカチュウ「チャゝ♪」

こうしてピカチュウの奢りのもと宴会が始まった。

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ノってるかーい！

はやて「イエーイ！」

アリサ「あの一人と一匹、シラフよね？」

すずか「うん…多分」

ピカチュウ「ピカ〜！」／（＾o＾）／

アリサ「はいはい、楽しんでるわよ」

ピカチュウ「チュウ〜！」

スバル「イエーイ♪」

なのは「増えたね」

フェイト「そうだね」

ピカチュウ「ピカチュウ〜！」

ノってるかーい！

なのは、フェイト「い、イエーイ…」

ピカチュウ「ピカピ〜！」

小さい〜！

なのは、フエイト「イエーイ！」

アリサ「調子に乗らないの」

ピカチュウ「ピカチュウく…」

わかったよく…

宴会は朝まで続いた。

アリサ「さて、荷物はこれで全部ね」

ピカチュウ「ピカチュウ」

明日、出発だね。

アリサ「短い間だけど楽しかったわね？」

ピカチュウ「ピカ♪」

アリサ「地球に帰ったら…」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

平和が一番！

アリサ「そうね」ナデナデ

ピカチュウ「チャ〜♪」

ピカチュウは撫でられご満悦だった。

アリサ「いつまでも…ね♪」

そうしてピカチュウとアリサ達は穏やかに過ぎし送った。